

## 第 2 部

### 研究活動のあゆみ

民國三十三年三月二十三日，在臺南市，有命案發生。據報，死者為臺南市某商號之經理人，年約四十餘歲，姓張名某。其死因係因爭執而遭毆打致死。兇手為該商號之辦事員，姓李名某。案發後，經當地警署派員偵查，並由臺南地方法院檢察處派員偵辦。經調查後，李某供認不諱，認罪無諱。法院審理後，認其罪大惡極，依法處以死刑。此項判決，引起社會各界之廣泛討論，認為法律應嚴正執法，以儆效尤。

命案(刑案)一覽

民國三十三年四月五日，在臺南市，有命案發生。死者為某工廠之工人，年約三十餘歲，姓陳名某。其死因係因工作糾紛而遭毆打致死。兇手為該工廠之班長，姓王名某。案發後，經當地警署派員偵查，並由臺南地方法院檢察處派員偵辦。經調查後，王某供認不諱，認罪無諱。法院審理後，認其罪大惡極，依法處以死刑。此項判決，引起社會各界之廣泛討論，認為法律應嚴正執法，以儆效尤。

命案(刑案)一覽

民國三十三年五月十日，在臺南市，有命案發生。死者為某學校之教職員，年約五十餘歲，姓林名某。其死因係因感情糾紛而遭毆打致死。兇手為該教職員之配偶，姓黃名某。案發後，經當地警署派員偵查，並由臺南地方法院檢察處派員偵辦。經調查後，黃某供認不諱，認罪無諱。法院審理後，認其罪大惡極，依法處以死刑。此項判決，引起社會各界之廣泛討論，認為法律應嚴正執法，以儆效尤。

命案(刑案)一覽

民國三十三年六月十五日，在臺南市，有命案發生。死者為某機關之公務員，年約四十餘歲，姓吳名某。其死因係因職務糾紛而遭毆打致死。兇手為該公務員之同事，姓趙名某。案發後，經當地警署派員偵查，並由臺南地方法院檢察處派員偵辦。經調查後，趙某供認不諱，認罪無諱。法院審理後，認其罪大惡極，依法處以死刑。此項判決，引起社會各界之廣泛討論，認為法律應嚴正執法，以儆效尤。

命案(刑案)一覽

民國三十三年七月二十日，在臺南市，有命案發生。死者為某商號之經理人，年約三十餘歲，姓孫名某。其死因係因爭執而遭毆打致死。兇手為該商號之辦事員，姓周名某。案發後，經當地警署派員偵查，並由臺南地方法院檢察處派員偵辦。經調查後，周某供認不諱，認罪無諱。法院審理後，認其罪大惡極，依法處以死刑。此項判決，引起社會各界之廣泛討論，認為法律應嚴正執法，以儆效尤。

命案(刑案)一覽

民國三十三年八月二十五日，在臺南市，有命案發生。死者為某工廠之工人，年約四十餘歲，姓鄭名某。其死因係因工作糾紛而遭毆打致死。兇手為該工廠之班長，姓李名某。案發後，經當地警署派員偵查，並由臺南地方法院檢察處派員偵辦。經調查後，李某供認不諱，認罪無諱。法院審理後，認其罪大惡極，依法處以死刑。此項判決，引起社會各界之廣泛討論，認為法律應嚴正執法，以儆效尤。

命案(刑案)一覽

民國三十三年九月三十日，在臺南市，有命案發生。死者為某機關之公務員，年約五十餘歲，姓張名某。其死因係因職務糾紛而遭毆打致死。兇手為該公務員之同事，姓王名某。案發後，經當地警署派員偵查，並由臺南地方法院檢察處派員偵辦。經調查後，王某供認不諱，認罪無諱。法院審理後，認其罪大惡極，依法處以死刑。此項判決，引起社會各界之廣泛討論，認為法律應嚴正執法，以儆效尤。

命案(刑案)一覽

民國三十三年十月十五日，在臺南市，有命案發生。死者為某商號之經理人，年約四十餘歲，姓陳名某。其死因係因爭執而遭毆打致死。兇手為該商號之辦事員，姓李名某。案發後，經當地警署派員偵查，並由臺南地方法院檢察處派員偵辦。經調查後，李某供認不諱，認罪無諱。法院審理後，認其罪大惡極，依法處以死刑。此項判決，引起社會各界之廣泛討論，認為法律應嚴正執法，以儆效尤。

命案(刑案)一覽

# I 本校の使命と研究

## § 1 本校の使命

本校は大阪教育大学に附属する中学校ならびに高等学校で、教育基本法および学校教育法に基づいて、一般普通教育ならびに高等普通教育を行なうとともに、下記の各項を特別の任務としている。

1. 大学と一体となって、教育の理論および現場の教育の実際に関する科学研究を行なう。(研究学校)
2. 教育研究の結果一応到達した最善の理論を実験・実施して、広く教育界の参与に供する。(実証学校)
3. 大学学生の実習を行なう。(実習学校)
4. 現職教員の再教育の一端を担う。(現職教育学校)

現在の教員養成大学の附属学校の使命は、戦前の師範学校の附属学校の使命と簡単に比較することはできないが、戦後は、教員養成が各大学で行なわれ、教育職員免許法に規定するところの科目および単位を履修しておれば、免許状取得の資格が与えられるようになった。また、一般の公私立学校の教育実践ならびに教育研究のための組織が確立し、研究が年ごとに盛んになるとともに、各学校の施設・設備もしだいに充実してきた。

このようなことから、最近、地域や学校によっては、附属学校の使命が微妙に変化しつつあるところもあるようだが、本校においては、創立以来、20年ないし30年にわたって変わるところなく、上記の使命のもとに、全教官がその達成に努力してきた。

改めて述べるまでもないことだが、大学の行なう、附属学校の教育実践を対象とする実験的・実証的研究に協力するとともに、附属学校においても、大学と協議のうえ、研究課題を設定し、意欲的に研究に取り組むことが使命とされている。そして、この研究成果は、研究会の開催、「研究集録」の刊行等を通じて、地域の学校に公開することになっている。また、教育関係の情報・資料を収集・整理・保存することによって、地域の教育センターとしての役割を果たし、現職教育の機会と場を提供することをめざしている。

教員養成大学の附属学校である以上、通常の学校教育活動のほか、教育実習校としての使命を有していることは、言うまでもない。

(参考) 国立学校設置法施行規則——附属学校は、その附属学校が附属する国立大学又は学部における児童、生徒又は幼児の教育又は保育に関する研究に協力し、及び当該国立大学又は学部の計画に従い学生の教育実習の実施に当たるものとする。

## § 2 本校の研究

本校の使命を大別すると、通常の学校教育を行なう使命、研究校としての使命、教育実習校としての使命の3つになるが、ここでは、研究に関することについて述べることにしたい。

## 1. 大学の研究への協力

大学の研究に協力し、実験・実証の場を絶えず提供している。そのおもなものを挙げると、

体力の発育・発達追跡調査

体育学教室 佐々木美雄・辻野昭ら

昭和42年から44年にいたる3年間の、附属天王寺小学校4年・5年・6年生を対象にしての調査を受けて、同一生徒の中学1年・2年・3年についての調査である。昭和45年から47年にいたるこの本校生徒を対象とする研究は、附属小学校と連絡入試を行なっている本校においてこそ成り立つ研究であって、注目すべきものである。身長・体重の移り変わりから、5分間走の発達にいたるまで、体育の発育・発達についての、全般的な調査である。本校の風間建夫も研究に参加している。

プログラム学習に関する研究

心理学教室 松浦宏

松浦によって昭和38年から継続的に行なわれているものであり、中学生を対象に、数次にわたって調査されている。「誤反応の学習効果について」「KCRの方法とその効果について」「部分的強化とその効果について」などに分かれている。

中学生検尿時の微量タンパクの検出について

保健学教室 上林久雄

中学1年生を対象に昭和48年5月・7月・9月・11月の4回にわたって、保健調査と尿の検査が行なわれた。

高校生を対象とした調査も、上林をはじめ、多くの大学教官によって行なわれている。

## 2. 大学教官との共同研究（『大学紀要』に発表の分、下記の連名のうち、前者は本校教官で、後者は大学教官である。）

昭和38年 大阪学芸大学紀要 C教育科学

「高等学校における微分方程式指導の改革」

本間俊宏・中村正弘

昭和39年 大阪学芸大学紀要 C教育科学

「高等学校における微分方程式指導の改革」(第2報)

本間俊宏・中村正弘

昭和40年 大阪学芸大学紀要 C教育科学

「高等学校における微分方程式指導の改革」(第3報)

本間俊宏・中村正弘

昭和41年 大阪学芸大学紀要 C教育科学

「中学校社会科歴史分野と高校日本史との関連について」(第2報)

——教科書に見られる人物の取扱いを中心に——

西田光男・酒井忠雄

昭和42年 大阪教育大学紀要 教科教育

「中学校社会科歴史分野と高校日本史との関連について」(第3報)

——幼・小・中・高の歴史認識の形成(その1)——

西田光男・酒井忠雄

昭和43年 大阪教育大学紀要 教科教育

「中学校社会科歴史分野と高校日本史との関連について」(第4報)

——幼・小・中・高の歴史認識の形成(その2)——

西田光男・酒井忠雄

「理科教育の革新」(第1報)

林寿夫・近藤精一・田中敏隆

昭和44年 大阪教育大学紀要 教科教育

「理科教育の革新」(第2報)

林寿夫・近藤精一・田中敏隆

昭和45年 大阪教育大学紀要 教科教育

「理科教育の革新」(第3報) 林寿夫・近藤精一・田中敏隆

——定量的実験と考察を中心とする科学教育の研究——

昭和46年 大阪教育大学紀要 教科教育

「理科教育の革新」(第4報)

——物質概念の発達段階——

林寿夫・近藤精一・田中敏隆

昭和47年 大阪教育大学紀要 教科教育

「理科教育の革新」(第5報)

——熱および物質概念のカリキュラム——

林寿夫・井野口弘治・近藤精一・田中敏隆

昭和48年 大阪教育大学紀要 教科教育

「理科教育の革新」(第6報)

——力学概念の発達段階——

林寿夫・井野口弘治・近藤精一・田中敏隆

昭和49年 大阪教育大学紀要 教科教育

「理科教育の革新」(第7報)

——力学概念のカリキュラム——

林寿夫・井野口弘治・近藤精一・田中敏隆

### 3. 共同研究組織

本校の教官が大学の教官と一体となって研究を進めるための組織を、教科としてもっているものの主なものには、次のようなものがある。

(これらの会では、大学の教官・附属の教官・旧教官をもって構成されている場合がそのほとんどである)

#### ○大阪教育大学国語教育研究会

昭和30年に設立され、国語教育の理論と実践について研究する会。事務局は、1年ずつ、天王寺附属・池田附属・平野附属で持ちまわることになっている。

#### ○大阪教育大学社会科研究会

昭和38年に設立。各学期2～3回研究会を持ち、学習内容の系統化、生徒の認識の発達について研究している。事務局は大学。

#### ○大阪教育大学数学会

大正13年に設立。教科の理論はもとより、教材の研究・指導法の開拓にも力を注ぎ、年1回対外的な研究会を持っている。

#### ○大阪教育大学英語教育研究会

昭和43年に設立。英語教育について、理論と実際の両面から研究する会で、月1回例会を持っている。本校に事務局を置く。

#### ○大阪教育大学学内体育協議会

昭和47年に設立。授業研究をとおして、体育科教科教育のより一層の研修、充実をはかる会。年3回、附属校持ちまわりで協議会を開いている。事務局を本校体育研究室に置く。

#### ○大阪教育大学技術科懇談会

技術科が職業科と呼ばれた時代から引き継がれてきた研究会で、本校教官が常にそ

の代表幹事となり、研究会・講演会等を開いている。

#### 4. 教育研究発表会

本校では、昭和23年12月12日開催の教育研究発表会を第1回とし、それ以後、校舎建築のために開けなかった昭和24年・29年・31年・32年・33年・34年を除いて、毎年必ず1回教育研究発表会を開いてきた。これは全国附属学校、大阪府下公私立中・高等学校を対象とするもので、各教科や領域の研究授業、研究発表・提案・研究協議会・講演会等を持っている。

この教育研究発表会のテーマを見ると、戦後教育界で「ガイダンス」なることばが流行語のようになり、これが重視されたときには、「ガイダンスと単元学習」（昭和22年）をその研究会のテーマとし、生徒の個性の伸長が強く叫ばれたときには、「個人を育てる活動」（昭和28年）をテーマにし、6・3・3制についての論議が盛んに起こったときには「中・高6カ年一貫教育」（昭和35年）をそのテーマにしている。

各教科の発表内容にしても、教科書教材の限界について叫ばれ、体力と体格や、基礎学力の充実について論議されたときには、「表現教材開発の意義と可能性」（昭和42年美術科）や「体力の養成と学習指導」（昭和43年保健体育科）「中学校段階における読解指導」（昭和44年英語科）について発表してきた。指導要領の改定が打ち出され、学習内容の精選が大きき問題になってきたときには、「中学校の新しい指導内容について」（昭和45年数学科）「新指導要領における書くこと」（昭和46年国語科）「新指導要領の問題点」（昭和46年社会科）を取りあげて発表してきた。

このように、昭和50年までに23回にわたって行なわれた教育研究発表会では、あるときには、そのときどきの教育界の問題点を先取りし、またあるときには、現場の疑問に答え、さらにはまた、今後のあるべき姿を求めてきた。本校では、「理学的論理の組み立てについて。特に中・高化学分野からみて」（昭和50年理科）に見られるように、中・高6カ年一貫教育を基本にすえて、各領域・各教科・各分野の研究を進めてきたことも特筆されるべきことと言えるであろう。

#### 5. 『研究紀要』・『研究集録』

本校では、昭和23年から30年まで（その間29年を除く）「ガイダンス並に単元学習」「指導のための調査」に見られるように、各教科の枠を越えて、1つの大テーマのもとに全教官が力を結集して、『研究紀要』を7回に及んで出している。B6判で、200ページにも及ぶものである。

昭和32年からは、『研究紀要』を改め、中・高合同で『研究集録』を出し、昭和50年までに16回発行している。各個人の研究もあれば、数人の共同研究の成果もある。教科に関するもの、図書館教育や生徒指導に関するものなど、いろいろな分野・角度の研究を集めている。そして、この『研究集録』は、発行するたびに、全国の附属学校・府下公私立中・高等学校に配布するのを原則としている。

#### 6. 全国国立大学附属学校連盟研究会

全国国立大学附属学校連盟が昭和24年に創設されて以来、その校園長研修会・教頭研修会には、ほとんど毎回出席し、研究発表をしたり、提案をしたり、地区のまとめをしたりして、大いに貢献してきた。

そのおもなものだけをここに紹介してみると、毎年、近畿地区にある各附属学校の意

見をもとに、附属学校のあり方について研究し、昭和40年度以降は、附属学校にとって非常に大切な附属学校設置基準のとりまとめに力を尽くしてきた。昭和45年には、近畿附属学校連盟の十年史を編集して、近畿地区附属学校連盟の基礎を確固たるものにし、昭和48年には、高等学校の教育課程の改定に関して具申もしてきた。また、昭和45年の教頭研修会における「教科教育学樹立のために」のテーマでの発表や昭和49年の校園長会における「本校における中・高6カ年一貫教育について」と題する発表は、附属学校の今後のあり方を示すものとして注目を集めた。

昭和29年には高等学校部会ができていた。この部会は研究協議に重点が置かれ附属高等学校の東京地区校と地方校とが交互に輪番制で開催校となっているものだが、本校は、教科の部会だけでなく、生活指導部会あるいは特別部会で毎年研究発表をして今日に至っている。教科以外の発表について少し述べてみると、「生徒の学校生活の実態分析」(昭和46年)、「6カ年一貫教育について」(昭和49年)、「自治会行事のある断面—100K徒歩を通して—」(昭和49年)「クラブ活動の現状分析と検討」(昭和50年)などは、記憶に新しいところ。昭和41年10月21日・22日の両日には、本校を会場として研究会が開かれ、数学会、社会部会、生活指導部会において、その発表をするとともに、お世話をしてきた。

#### 7. 近畿附属学校連盟研究部会

全国を9地区に分けた中の1つにあたる近畿地区には、近畿附属学校連盟という組織があるが、その第1回の研究総会を、昭和34年5月10日にこの天王寺で開いている。幼・小・中・高の学校ごとに教科に分かれ、全員参加のもとに、指導要領についての研究協議を行なった。

昭和36年度からは、幼小部会・中高部会・特別部会の3つの部会に分かれ、そのそれぞれが、11、12、3の分科会から構成されるという分科会組織で研究が行なわれるようになってきた。中高部会について言うと、国語・社会・数学・理科・音楽・美術・保健・技術家庭男子・技術家庭女子・英語・特活・道徳の分科会に分かれ、会場は、分科会ごとに附属学校持ちまわりということで研究が行なわれるようになり、今日まで続いている。本校もちろん、会場校として、また研究発表校として、それぞれの部会で活躍してきた。

#### 8. 教科教育研究センター

本校校舎建設第12期工事(昭和42年10月30日竣工)では、広々とした図書館、新しい機器を入れた視聴覚室、実験・実習のしやすい地学教室・技術教室、学習環境に工夫をこらした音楽室・美術室などの誕生をみたわけであるが、特に教科教育研究センターなる部屋の生まれたことは、特筆すべきことであろう。

教員養成の実をあげるには、大学学部の充実をはかるとともに、その一環として、教育実習・教科教育法研究の実践の場としての附属学校の充実もきわめて重要なことである。かかる観点から、教育実習および教科教育法研究の現代化のための部屋が、新しい機械を導入して、「教科教育研究センター」という名のもとに登場したのである。

施設の概要は次の通り。

(1) TV受像機……センター2台(23型)、観察室4台(19型)、外部放送、I. T. V.、スライド、投影装置などの受像

- (2) V. T. R.……機械室1台、映像・音声の記録
- (3) スライド投影機・投影装置……センター教卓組込代替1台、スライドのTV投影自動送り可能
- (4) テープレコーダー……機械室1台
- (5) ワイヤレスマイク……センター1台
- (6) I. T. V. カメラ……センター2台(固定式、ズーム式)、移動式(ズーム)1台
- (7) 調整台……機械室1台、モニターTV、ミキシング、ワイプ、アナマイク、応答装置
- (8) 附属設備機械……オーバーヘッドプロジェクター1台、電動暗幕、映写スクリーン

教育実習生に対する指導授業のときはもちろんのこと、教育実習生の実地授業、さらには、大学の教科教育法の講義の時間などに広く利用されている。実習生が授業をふり返り、反省し、再構成するのにまたとない役割を果たしているし、本校教官が望ましい授業過程や基本過程を探求するのにも、なくてはならない施設となっている。

#### 9. 現職教育の場

本校の研究成果を大阪府下の各学校に公開したり、大阪府下の先生方に研究の場を提供したりするのは、本校の使命の一つである。したがって、本校の小講堂・会議室等は、たびたび各種の研究会に利用されているが、現在定期的に府下の先生方に研究の場を提供しているもので、大きなものには、大阪児童美術研究会がある。

昭和21年、当時の大阪学芸大学の高妻己子雄等が中心となって創設された研究会であり、現在の西日本教育美術連盟ができる母体となり、全国図画工作美術教育研究大会の中心ともなっているもので、本校の美術教室を提供して、会員である現場の先生方に実技指導を行なっている。またこの会(6部会)の中の1部会(120名)の、月1回の定例会場にもなっている。

昭和47年10月には、第21回全国国語教育研究協議会が本校で、昭和50年8月には、本校に事務局を置いて、日本数学教育学会第57回全国大会が開催されている。昭和50年度には、大阪府理化研究会、中学理科指導資料研究会の、定期的な研究の場にもなっている。

#### 10. 本校教官個人の研究

本校では、毎年、各教科、各領域ごとに研究テーマを設定するとともに、各個人においても研究テーマを定め、研究部に提出することになっている。そして、原則として、少なくとも4年に1回は、その成果を本校の『研究集録』に発表し、広く批判を仰ぐことになっている。

また各個人は、自主的にそれぞれの教科、専門に関する研究会にはいり、研究にいそんでいる。それは「全国国語教育研究協議会」「日本国語教育学会」「日本地理学会」「歴史地理教育協議会」「日本数学教育学会」「学校数学研究会」「大阪府理化研究会」「日本地学教育学会」……など、枚挙にいとまがない。

海外研修についても、学校としても奨励しているし、それぞれの教官も進んで参加し、そこで得た広い知識、深い考え方を、それぞれの研究に生かすようにしている。



現在までに海外研修に参加したものは、次の通り。

新堂庄二	36年9月～37年3月	アメリカ・ピッツバーグ大学	英語教授法研究
山崎俊郎	40年7月～8月	西ヨーロッパ8カ国	地理巡検
澤田義一	40年7月～8月	アメリカ・ヨーロッパ	教育事情視察
田中義真	40年7月～8月	アメリカ・ヨーロッパ	教育事情視察
岡田博	41年7月～9月	東ヨーロッパ・チェコ	世界美術教育会議
安井司	41年7月～8月	ヨーロッパ各国	教育事情視察
佐崎良雄	41年7月～8月	ヨーロッパ各国	教育事情視察
山崎俊郎	41年7月～8月	アメリカ・カナダ	地理巡検
田村啓	41年9月～42年3月	アメリカテキサス大学	英語教授法研究
瀬川俊一	43年9月～44年3月	アメリカ・テキサス大学	英語教授法研究
富田健治	45年7月～8月	沖縄・台湾	地理巡検
樋口忠彦	45年7月～9月	アメリカ・ベルシンヴァニヤ大学	英語教授法研究
富田健治	46年7月～8月	シンガポール・タイ	地理巡検
澤田義一	46年9月～10月	ソ連・北欧・フランス・アメリカ	教育事情視察
山口格郎	47年7月～8月	フランス・イギリス・イタリア	英語学研究
福原公雄	47年7月～8月	フランス・スイス・イタリア	教育事情視察
浅野浅春	48年8月～9月	ソ連・フランス・ドイツ	地質研究
今倉大	48年7月～9月	イギリス・ウスター大学	英語教授法研究
木下士郎	48年7月～8月	フランス・スイス・イタリア	教育事情視察
奥啓一	49年7月～8月	イギリス・フランス・スイス	英語教授法研究
武田和生	49年7月～8月	フランス・イギリス・スイス	教育事情視察
上野久男	49年7月～8月	フランス・イギリス・スイス	教育事情視察
松宮哲夫	49年8月～9月	西ドイツ・デンマーク	数学教育の研究
樋口忠彦	50年7月～8月	スウェーデン・デンマーク	世界の子供の研究
千種基弘	50年7月～8月	アメリカ・カナダ	英語教授法研究
辻退一	50年7月～8月	イギリス・フランス・スイス	地質調査
中田孟邦	50年10月～11月	アメリカ・ブルガリア・タイ	教育事情視察
桜井寛	50年12月～51年1月	タイ・インド	教育事情視察

いま、日本の学校教育は1つの曲がり角に来ていると、よく言われる。社会における学校教育の役割の問題、教育の機会均等の問題、個人の能力と適正の問題、学校制度の問題等、現在ほど多くの問題をかかえている時期は、過去においてなかったであろう。

教員養成大学・学部の附属学校のあり方にしても、昭和44年の教育職員養成審議会の建議に見られるように、教育研究のあり方や教育実習の問題、大学と附属学校の関係の問題など、新しい角度から採りあげられつつある。今まで、附属学校の位置づけが法的にあいまいであった点も、教育関係学部附属学校設置基準の制定により明確になり、附属学校の果たす役割・使命が大きくクローズ・アップされてきたのも、周知のとおりである。

この機にあたり、先輩諸氏が、たえず研鑽をつまれ、残してこられた足跡を振り返り、これを今後の研究の大きなかたきとして、新しい第1歩を踏み出すことは、意義のあること

であり、またわたしたちの使命でもある。戦後の恵まれない環境の中で、しかも少人数の教官をもって、生徒指導にあたるとともに研究にいそしみ、今日の中高一貫体制の基盤を築かれた先輩諸氏の、教育への使命感、研究に捧げられた情熱は、いかばかりであったろうか。

わたしたちは附属学校の使命を深く理解し、中・高一貫教育のあるべき姿を求めて、いま新しい前進を開始しなければならない。それぞれの地域に教育研究所が設立され、教育研究の組織が生まれ、また、公・私立のそれぞれの学校の設備、研究組織が日々に充実しつつある今日、今まで以上に広い視野と深い洞察力をもち、社会の発展と学校教育のあり方を展望し、中・高教官が心を1つにして、日夜研究に励みたいものである。

河村 徳治  
木下 士郎

## II 研究活動の概観

### § 1. はじめに

国立大学附属学校は学校教育法に規定された任務のほかに、研究実証学校・教育実習校・地方教育への協力と指導を行なう使命を荷っている。

したがって本校における研究活動も上記の使命に基づいて進められ、研究活動の中心は毎年行なう教育研究発表会である。研究部が推進役となり各教科の研究テーマに基づいて研究の成果を発表している。国語・社会・数学・理科・英語は2年に1回、その他の教科は4年に1回、研究発表をすることが原則となっている。また教科外については研究部が中心となって研究テーマを決め、部会を設けて研究が進められている。紙上発表の場としては毎年各教育機関に配布されている「研究集録」があり、個人研究・共同研究が掲載されている。このほか全国国立大学附属連盟高等学校部会教育研究大会、近畿国立大学附属学校連盟研究例会に参加し、それぞれの分野において発表が行なわれている。創立20周年、30周年を迎えるにあたって今日までの活動の概観を記録し、その歩みをふりかえってみよう。

### § 2. 教育研究発表会

本校創立以来、学校一丸となって1年後に1つのテーマを決めて、全教官がその研究にあたってきた。昭和31年4月1日をもって、大阪学芸大学に附属高等学校が設置され、中・高一貫した教育体制のもとに研究が続けられることになった。日本における中等教育はいかにあるべきかという大きな視点をふまえつつ、各教科が持つ研究テーマのもとに昭和32年以降、研究が継続されその成果を広く世にとうべく研究発表会が行なわれ今日に至る。

#### 昭和23年度

第1回教育研究発表会〔ガイダンスと単元学習〕(国語・社会・数学・理科)

講演：「ガイダンス」について (C.I.E.) アンダーソン

「新教育とガイダンスの技術」(附属中学校) 後藤与一

#### 昭和24年度

第2回教育研究発表会〔ガイダンス組織と実践〕(国語・社会・数学・理科・保健体育・職業・英語)

- 発表：1. わが校の教育  
2. (イ) わが校のカリキュラム  
(ロ) わが校のコア・カリキュラム  
3. 特別教育活動  
4. 測定と行動観察  
5. 生活指導要録について  
6. ケース・スタディー

講演： 「ガイダンスの組織と実践」(文部省) 小見山榮一

#### 昭和25年度

第3回教育研究発表会 [ガイダンス計画の立案と展開] (国語・社会・数学・理科・職業家庭・保健体育・図画工作・英語)

- 発表： 1. 本校における教育全体計画とガイダンスとの関係  
2. 本校における中心学習  
3. 生徒指導要録について  
4. 職業指導の望ましいありかた  
5. 本校における生徒会活動について

講演： 「近代学校の教育計画」

——ガイダンス・プログラムの編成法—— 倉沢 剛

#### 昭和26年度

第4回教育研究発表会 [中学校教育全体計画とその実践] (国語・社会・数学・理科・音楽・図画工作・保健体育・職業家庭・英語)

- 発表： 1. 本校の教育課程について 3. 本校の放送教育について  
2. 本校の生徒補導について 4. グループ・ガイダンスの方法  
パネル・ディスカッション： 教育課程と道德教育

講演： 「中学校における道德教育」(文部省) 太田周夫

#### 昭和27年度

第5回教育研究発表会 [各教科の指導実践] (国語・社会・数学・理科・音楽・図画工作・保健体育・職業家庭・英語)

- 発表： 1. わが校の教育運営 3. わが校のカリキュラム地図  
2. 雙学校に於ける言語指導 4. 学級経営の側面 ホームルーム・タイムの指導

パネル・ディスカッション： 「独立後の教育の在り方」

講演： 「憲法の発展性」(国立国会図書館) 金森徳次郎

#### 昭和28年度

第6回教育研究発表会 [個人を育てる教育] (国語・社会・数学・理科・保健体育・図画工作・職業家庭・英語)

- 発表： 1. 本校の教育全体計画と個人を育てる教育 3. 指導のための教育調査  
2. 個人差の合理的評価と生徒補導 4. 学校放送の諸問題について

講演： 「民主主義の教育」(日本育英会) 前田多門

#### 昭和30年度

第7回教育研究発表会 [中・高6カ年一貫教育] (国語・社会・数学・理科・音楽・図画工作・保健体育・職業家庭・英語)

- 発表： 1. 本校教育全体計画と個人を育てる教育 4. ホーム・ルームにおける個人  
2. 指導のための調査の意義と実際 指導の1例  
3. 家庭学習の状態調査とその指導 5. 読書指導の基礎

講演： 「生活指導と教育評価」について (大阪学芸大学) 後藤与一

「観る眼から育てる手へ」 (大阪市教育研究所) 白井 勇

## 昭和35年度

第8回教育研究発表会〔中・高6カ年一貫教育〕(国語・社会・数学・理科・音楽  
・図画工作・保健体育・職業家庭・英語)

発表：1. 中・高一貫教育の現状  
2. 本校研究の歩みと生活指導

講演：「中・高教育の問題点」(大阪学芸大学) 芝野庄太郎  
「特別講演」(文部大臣) 松田竹千代

## 昭和36年度

第9回教育研究発表会〔学習内容の検討〕(社会・理科・保健体育)

社会科：歴史学習を中心として

理科：実験指導を中心として

保健体育科：柔道の学習内容をどのように指導するか

## 昭和37年度

第10回教育研究発表会〔学習内容の検討〕(国語・社会・数学・英語)

国語科：読解指導について

社会科：政経社学習の内容検討

数学科：中学校における論証の限界・二次関数・ベクトル指導についての実験  
新指導要領と数学教育の現代化

英語科：授業の能率的なすすめ方

## 昭和38年度

第11回 教育研究発表会〔学習内容の検討〕(社会・音楽・美術)

社会科：倫理・社会分野について

音楽科：創作学習を中心とした中学校音楽教育の諸問題

美術科：構想画指導のあり方

## 昭和39年度

第12回 教育研究発表会〔学習内容の検討〕(国語・社会・数学・理科・英語)

国語科：説明的な文章の読解 漢文構造の問題点

社会科：地誌学習の問題点

数学科：図形の論証指導について

理科：物質とエネルギーの交代

英語科：中3・高1の関連——語法を中心として——

## 昭和40年度

第13回 教育研究発表会〔学習内容の検討〕(社会・理科・美術)

社会科：基本的事項の取扱いについて

理科：発達段階に応ずる理科の学習指導

美術科：単色木版画の効果的な指導

## 昭和41年度

第14回 教育研究発表会〔学習内容の検討〕(国語・保健体育・英語)

国語科：中学校高学年の古典入門について

保健体育科：陸上競技の指導について

英語科：表現指導上の問題点

#### 昭和42年度

第15回 教育研究発表会〔学習内容の検討〕(社会・理科・美術)

社会科：中学校における政経社学習の諸問題

理科：物質の化学構造の指導について

美術科：表現教材開発の意義と可能性について

#### 昭和43年度

第16回 教育研究発表会〔学習内容の検討〕(国語・社会・数学・保健体育・技術・英語)

国語科：長文の読解をめぐる

社会科：政経社学習の諸問題

数学科：数概念の指導について

保健体育科：体力養成と学習指導

技術科：交流理論の取上げ方について

英語科：読解指導

#### 昭和44年度

第17回 教育研究発表会〔学習内容の検討〕(社会・理科・美術)

社会科：学習と生徒の社会的問題意識との結合

理科：探究の過程を重視するには

美術科：中・高における表現教材(描画、デザイン・色彩)の系譜

#### 昭和45年度

第18回 教育研究発表会〔学習内容の検討〕(数学・英語・保健体育)

数学科：高等学校の新指導要領の問題点

英語科：読解指導について

保健体育科：体力と学習指導

#### 昭和46年度

第19回 教育研究発表会〔学習内容の検討〕(国語・社会・理科・音楽)

国語科：新指導要領における書くこと(書写)の指導

社会科：高等学校新指導要領の問題点

理科：生態系の研究指導

音楽科：音楽科教育における創造性への試み

#### 昭和47年度

第20回 教育研究発表会〔学習内容の検討〕(数学・英語・技術家庭)

数学科：高校新指導要領の問題点・その2

——新数学1の内容の取扱いについて——

英語科：Writingの指導について

技術・家庭科：(男子向き)木材加工の取り扱い方

(女子向き)技術・家庭科指導における問題点

#### 昭和48年度

第21回 教育研究発表会〔学習内容の検討〕(国語・理科・保健体育)

国語科：古典指導における問題点

理科：力学の指導について ——中・高の関連を中心に——

保健体育科：効果的な学習指導

#### 昭和49年度

第22回 教育研究発表会 [学習内容の検討] (社会・数学・英語・美術)

社会科：中・高社会科の再検討 ——第1回 地理的分野——

数学科：教材の精選 ——数1の内容について——

英語科：話し方の指導 (中学校)

教室におけるリーダーの扱い方について (高等学校)

美術科：中学生の美意識と造形性について

#### 昭和50年度

第23回 教育研究発表会 [学習内容の検討] (国語・理科・音楽)

国語科：小説教材の指導

理科：理学的論理のくみ立てについて (中・高、化学分野から見て)

音楽科：基礎領域における一考察とその発展性 (歌唱)

### § 3. 全国国立大学附属学校連盟高校部会教育研究大会

全国国立大学附属学校連盟高校部会 (略称全付連高校部会) は、昭和29年5月26日成立。当初は大学入試問題の検討、理科部会、生活指導部会による研究発表会を行っていたが、昭和34年より、毎年、教育研究大会として、附属校以外に、一般公・私立の高校にも研究を公開し、参加を求めることに決定し、昭和41年度は大阪学芸大学附属高等学校に於て第8回大会を開催し、毎回、生活指導部会、及び2教科を中心として発表してきた。次に第1回教育研究大会以来の本校教官による発表を記載する。

昭和34年度 (於東大附高)

第1回全付連高校部会教育研究大会 (生活指導)

昭和35年度 (於奈良女子大附高)

第2回全付連高校部会教育研究大会 (社会)

社会：中・高社会科の学習内容の問題点

昭和36年度 (於東京教育大駒場高校)

第3回全付連高校部会教育研究大会 (英語)

英語：誤答調査に見る指導の問題点

昭和37年度 (於金沢大附高)

第4回全付連高校部会教育研究大会 (保健体育・英語)

保健体育科：精神衛生面より見た受験期における高校生の生活調査

英語：Context による文意の正しい理解

昭和38年度 (於東京学芸大附高)

第5回全付連高校部会教育研究大会 (理科・保健体育)

理科：エネルギー交代

保健体育科：精神衛生面より見た受験期における高校生の実態

- 昭和39年度 (於広島大附高)
- 第6回全附連高校部会教育研究大会 (国語・理科)
- 国語：現代国語「文学教材」についての一問題
- 理科：理科学習指導の問題点
- 昭和40年度 (於お茶の水女子大附高)
- 第7回全附連高校部会教育研究大会 (国語・数学)
- 国語：読解指導の一問題点
- 数学：論証指導——集合と論理の指導について——  
——集合代数と論理——
- 昭和41年度 (於大阪教育大附高)
- 第8回全附連高校部会教育研究大会 (社会・数学・生活指導)
- ※10月21日～22日 本校にて研究会を開催
- 社会：倫社2年間の歩み
- 数学：論理指導に関する実験と問題点
- 生活指導：ホーム・ルーム活動と集団合宿訓練
- 昭和42年度 (於東京教育大附高)
- 第9回全附連高校部会教育研究大会 (社会・英語・生活指導)
- 社会：歴史学習の問題点 ——思考力を高めるために——
- 英語：多読との関連における精読指導  
高校英語における多読指導——問題点と実験報告
- 生活指導：ホーム・ルーム活動と合宿訓練
- 昭和43年度 (於京都教育大附高)
- 第10回全附連高校部会教育研究大会 (保健体育・美術・英語・生活指導)
- 保健体育：体力養成と学習指導
- 美術：高一の段階における描画指導上の興味づけについて
- 英語：精読指導の問題点 ——特に予習指導の面から——
- 生活指導：教科活動・特別教育活動・学校行事の有機的結合
- 昭和44年度 (於東大附高)
- 第11回全附連高校部会教育研究大会 (理科・保健体育・美術・生活指導)
- 理科：探究の過程を重視するには  
——地学下層分野において——
- 保健体育：高校生の修学旅行における疲労の一考察
- 美術：教材開発への提案
- 生活指導：ホーム・ルーム活動の分析  
——本校12期生の成長の記録——
- 昭和45年度 (於広島大附属福山高)
- 第12回全附連高校部会教育研究大会 (理科・生活指導)
- 理科：探究の過程を重視するには  
——地学上層・気象において——
- 生活指導：クラブ活動の現状分析と検討



昭和46年度 (於東京教育大附属駒場高)

第13回全附属高校部会教育研究大会 (音楽、生活指導)

音楽：音楽1における諸問題

生活指導：生徒の学生生活の実態分析

昭和47年度 (於名古屋大附高)

第14回全附属高校部会教育研究大会 (社 会)

社会：附高生の社会意識と授業

昭和48年度 (於東京学芸大附高)

第15回全附属高校部会教育研究大会 (英 語)

英語：高一教科書にあらわれた Idiomatic Expression の指導上の問題点

昭和49年度 (於奈良女子大附高)

第16回全附属高校部会教育研究大会 (保健体育・英語・生活指導・附属校のあり方)

保健体育：バレーボールの効果的指導 ——意欲的にとりくませるための——

英語：教室におけるリーダーの扱いについて

生活指導：自治会行事のある断面 ——100km徒歩を通して——

附属のあり方：6カ年一貫教育について ——本校における一貫教育の実状——

昭和50年度 (於お茶の水女子大附高)

第17回全附属高校部会教育研究大会 (理科・保健体育・生活指導)

理科：中・高の関連について

保健体育：倒立の一考察

生活指導：クラブ活動の現状分析と検討 ——その2——

#### § 4. 教科研究テーマ

本校においては、毎年度各教科ごとに研究テーマを設定し研究にとりくんでいる。過去数年各教科でとりあげた研究テーマを記載し、そのあゆみをふりかえってみたいと思う。

昭和44年度 教科研究主題

国 語 科 読解指導

社 会 科 政経社学習の検討

数 学 科 基本概念の形成について

理 科 理科教育における中・高の関連

保健体育科 体力と学習指導

音 楽 科 心を培う音楽教育

美 術 科 教材の開発について

技術家庭科 機械教材・被服分野の系統化

英 語 科 読解指導

昭和45年度 教科研究主題

国 語 科 読解指導について

社 会 科 44年度までの総まとめ

数 学 科 中等教育における数概念の研究

理 科 理科教育における中・高の関連

保健体育科	効果的な学習指導法
音楽科	心を培う音楽教育
美術科	教材開発
技術家庭科	機械教材の系統化、転移力を高める被服指導
英語科	読解指導

昭和46年度 教科研究主題

国語科	読解指導
社会科	高等学校新指導要領の問題点検討
数学科	中等教育における数概念の指導について
理科	中・高6カ年を通じた理科指導について
保健体育科	体力と学習指導
音楽科	器楽指導における一考察
美術科	教材開発
技術家庭科	教材、教具の精選
英語科	読解指導

昭和47年度 教科研究主題

国語科	読解指導
社会科	中・高一貫教育における社会科教育の内容の検討
数学科	新指導要領の取り扱いについて
理科	本校の理科教育の再検討
保健体育科	体力と学習指導
音楽科	創造性について
美術科	発達段階と表現内容の相関について
技術家庭科	教材、教具の研究
英語科	「書き方」の指導

昭和48年度 教科研究主題

国語科	書くことの指導
社会科	中・高一貫教育における社会科教育の内容の検討
数学科	数概念の指導について
理科	中・高理科の各分野の関連と系統性
保健体育科	体力と学習指導
音楽科	音楽教育における創造性の指導について
美術科	教材の開発
技術家庭科	教材、教具の研究
英語科	読解の指導

昭和49年度 教科研究主題

国語科	読解指導
社会科	中・高社会科教育の再検討
数学科	中・高数学教育の内容検討
理科	六カ年一貫の理科指導

保健体育科	生徒の意欲を高める授業研究
音楽科	創造性への試み
美術科	教材の開発
技術家庭科	視聴覚機器を利用しての学習の個別化
英語科	Writing の指導について

#### 昭和50年度 教科研究主題

国語科	読解指導
社会科	中高社会科教育の再検討
数学科	教材の精選
理科	中・高6カ年一貫における理科教材の整理
保健体育科	意欲的にとりくませるための学習指導
音楽科	創造性への試み
美術科	教材の開発
技術家庭科	視聴覚機器を利用しての学習の個別化
英語科	読解指導、Speaking の指導

#### 昭和51年度 教科研究主題

国語科	読解指導
社会科	中高社会科教育の再検討
数学科	数学科教材の精選について
理科	中高理科教材の再検討
保健体育科	体育の授業研究
音楽科	教材研究
美術科	教材の開発
技術家庭科	教材の精選（学習内容の検討）
英語科	読解指導、Speaking 指導

## § 5. 研究刊行物

本校の研究刊行物としては、『研究紀要』と『研究集録』がある。『研究紀要』は、昭和22年4月1日に附属天王寺中学校が創立されて以来、昭和31年4月1日に附属高等学校天王寺校舎が創立されるまでの期間に、附属中学校が単独で発行したものであり、すべて、共同研究によるもので、第1集から第7集まで数えられる。

『研究集録』は、昭和31年以後、附属中学校と附属高等学校とが合同して発行しているもので、昭和33年1月に第1集が発行されている。内容は、個々の教官の多方面にわたる体験や研究の成果がもりこまれている。これまでに発行した『研究紀要』、『研究集録』の目録を綴り今後の研究発展の一助としたい。

### 1. 『研究紀要』

#### 第1集 昭和23年12月10日発行

- ガイダンス並びに単元学習
- 第1章 中学校の教育計画
- 第2章 ガイダンス

#### 第3章 キュムラティブ・レコード

(新学籍簿)

#### 第4章 学業テスト

#### 第5章 ケース・スタディ

- 第6章 ホーム・ルーム・システム
- 第7章 学校自治会の運営
- 第8章 (1)国語単元学習の理論と実際  
(2)習字教育の新構想と足あと
- 第9章 社会科単元学習の形式的段階
- 第10章 アメリカに於ける数学科単元学習
- 第11章 数学科単元学習の理想と実際

## 第2集 昭和25年2月11日発行

### ガイダンスの組織と実践

#### 前篇 ガイダンスの組織と実際

- 第1章 ガイダンスにおけるカリキュラム
- 第2章 生徒指導要録と新学籍簿
- 第3章 ガイダンスにおける基礎的な調査統計
- 第4章 ガイダンスにおけるアチーブメント・テストの意義
- 第5章 ケース・スタディ
- 第6章 コア・カリキュラム・アクティビティ

#### 第7章 視覚教育への提唱

#### 第8章 学校新聞についての諸問題

### 後篇 教科学習指導

- 第1章 国語科の指導
- 第2章 社会科の指導
- 第3章 数学科単元学習の反省と指導の留意点
- 第4章 合唱指導について
- 第5章 保健体育の指導
- 第6章 英語科学習展開の実際
- 第7章 職業家庭科の運営
- 第8章 本校コア・カリキュラムの構成

## 第3集 昭和25年12月1日発行

### ガイダンス計画の立案と展開

- 第1章 一般学力テスト構成における妥当性の問題 (第1報告)

- 第2章 本校における教育全体計画とガイダンス

- 第3章 ガイダンスのための資料

- 第4章 本校生徒の欲求と興味

- 第5章 中心課程における予備調査の跡

- 第6章 本校における中心課程について

- 第7章 本校における生徒会活動について

- 第8章 本校におけるクラブ活動の歩みと今後の問題

- 第9章 ホーム・ルーム・ガイダンスの計画

- 第10章 グループ・ガイダンスとセルフ・ガイダンス

- 第11章 本校における教育指導

- 第12章 本校における健康指導

- 第13章 本校における職業指導

- 第14章 本校における人格指導

- 第15章 本校における校外生活と余暇指導

- 第16章 本校における躰教育の実際

- 第17章 家庭より見た女子のガイダンス

- 第18章 新しい音楽教育

## 第4集 昭和26年10月31日発行

### 教育全体計画と実践

- 第1章 我が校の教育概要

- 第2章 日常課程

- 第3章 中心課程

- 第4章 基礎課程

- 第5章 各科における道德教育

## 第5集 昭和27年7月発行

### 独立後の教育の在り方とその実践

#### 第1分冊

#### 音楽科 音楽教育の諸問題

1. 音楽教育の検討

2. 単元について

3. 実践の跡

4. 解決すべき諸問題

5. 実態調査を見て

#### 保健体育科 体育指導上の諸問題と柔道指

#### 導の実際

1. 本校における体育年間計画の作製と利用について
2. 体育のクラス管理についての諸問題
3. 府下体育の実態調査
4. 柔道指導の実態

#### 図工科・図画

1. 中学生図画の分類
2. 考えてつくる絵と中学生心理
3. 考えてつくる絵の内容
4. 考えてつくる絵の分類
5. 考えてつくる絵の価値
6. 考えてつくる絵の不足点
7. 考えてつくる絵の指導法  
    工作
1. 図工科の工作面について
2. 我が校の実践事項

#### 第2分冊

#### 社会科

1. 社会科の再検討
2. 単元展開例
3. 社会科学習の資料
4. グループ学習とその限界
5. 現場学習の指導
6. 生徒の研究と発表の指導
7. 家庭に於ける社会科学習の指導
8. 社会科の評価
9. 社会科クラブの指導
10. これからの日本史指導の本道

#### 職業家庭科

1. 職業科指導の内容
2. わが校の指導目標と単元一覧
3. 各学年における指導上の留意点と単元展開例
4. わが校の職業科の施設概要
5. 職業科教育の実態と振興策
6. 施設（女子調理室）
7. カリキュラムの修正（女子コース）

8. 教科書及び参考書
9. 調理実習指導の実際
10. 被服実習指導の実際

#### 第3分冊

#### 数学科

1. 数学科学習指導において考慮されつつある問題
2. 数学科指導上の問題に関する実験的考察
3. 調査の上から単元学習の問題

#### 理科

1. 生活学習を主とする理科単元学習指導上の問題
2. 理科学習指導の方法と単元の展開例
3. 生物素材のとり方と生物暦について

#### 第4分冊

#### 国語科

1. 国語科学習はどのように進めたらよいか
2. 国語科習字の取扱いについて
3. 如何にして文法学習に興味を持たせるか
4. 図書の取扱い—学校図書館の諸問題

#### 英語科

#### 私の英語科授業

#### 第6集 昭和28年11月10日発行

#### 個人を育てる教育

#### 第1章 個人を育てる教育

#### 第2章 個人を育てる生活指導

#### 第3章 個人を育てる学習指導

#### 第4章 特殊な生徒の指導の実際

#### 第7集 昭和30年10月26日発行

#### 指導のための調査

#### 第1章 指導のための調査

#### 第2章 生活指導のための調査

#### 第3章 学習指導のための調査

## 2. 『研究集録』

### 第1集 昭和32年度(昭和33年1月発行)

- 中・高一貫6カ年教育について……………沢田 義一
- 国語科
- 志賀直哉の作品に就いて……………田中 義真
- 子供を描いた作品を中心として—
- 社会科
- 山村の生活……………山崎 俊郎
- 吉野川上流の集落—
- 近郊農業における蔬菜栽培の変遷について……………安井 司
- 大阪南部を中心とした—
- 数学科
- 数学科学習指導上の問題に関する実験的考察……………川野 太喜男
- 理科
- 本校における理科施設の拡充について……………佐崎 良雄
- 音楽科
- 変声期の中学生の音楽教育の一端……………久米 てる子
- 技術家庭科
- 家庭科教育における男女共学の成果……………上村 佐智子
- 美術科
- 中学生の写生における線描について……………木村 茂
- ★本校生徒の悩みに対する一考察……………新堂庄二・重松卓未
- ★中学生の古典指導について……………中 邑 元子
- ★高校生の読書実態の調査にあたって……………高岡輝夫・久島惟行
- ★ParadoxとPuzzle……………福原 公雄
- ★中学生と睡眠についての調査……………辻江 正夫
- ★走力と練習効果……………保田 喬
- ★日本語「が」「は」について……………野村 英太郎
- ★ミス・スベリングとその指導……………田村 啓
- ★印は中間報告または計画

### 第2集 昭和34年度(昭和35年3月発行)

- 国語科
- 読書調査……………高岡輝夫・久島惟行
- 質問紙法の検討—
- 社会科
- 地誌学習の問題点……………安井 司
- 瀬戸内地域を中心として—
- 数学科
- パラドックスとパズル……………福原 公雄
- 保健体育科

中学生と睡眠について……………	辻 江 正 夫
走力と練習効果（Ⅱ）……………	保 田 喬

英語科

ON JAPANESE SOUNDS ……………	Eitaro Nomura
MIS-SPELLING AND HOW TO CONSIDER	

ITS COUNTERPLAN ……………	Hiraku Tamura
高校リーダーにおける「前置詞」の用法……………	重松卓未・山口格郎
昭和34年度中学校高等学校合同研究会の歩み……………	岡 森 博 和
各科教官研究題目	

第3集 昭和35年度（昭和36年6月発行）

社会科

学校図書館の源流……………	高 岡 輝 夫
鉄道輸送における近代化の問題……………	山 崎 俊 郎
社会科学習内容の具体化……………	安 井 司
—農業生産を例とした地誌学習の問題点—	

数学科

中学校における関数指導についての一考察……………	笹 田 昭 三
—高校新入生の学力実態を中心として—	
中学校・高等学校6カ年一貫の数学教育……………	岡 森 博 和
—代数的教材について—	

理 科

新学習指導要領に準拠した理科教育の発達段階に対する配慮	
……………	佐 崎 良 雄
—中・高一貫教育における物理教材の指導について—	
6カ年一貫教育における理科（化学）教材の指導について	
……………	武 田 和 生

音楽科

変声期における音楽教育の一端 鑑賞指導……………	久 米 てる子
--------------------------	---------

美術科

描画不振時代（思春期の美術）をいかに指導するか……………	萩 原 直
------------------------------	-------

保健体育科

陸上競技のスタート反応に関する一考察……………	保 田 喬
-------------------------	-------

英語科

高校英語リーダーに見られる語法……………	重松卓未・山口格郎
----------------------	-----------

第4集 昭和36年度（昭和37年6月発行）

国語科

中学校学習指導要領における書写指導……………	上 野 久 男
------------------------	---------

社会科

地誌学習の問題点……………	安 井 司
学校図書館の原流……………	高 岡 輝 夫

数学科

- 中学生における論証の限界についての一考察……………福原公雄  
高校新指導要領における新教材についての一実験……………岡田義郎

保健体育科

- 運動傷害特に骨折・脱臼などについて……………辻江正夫

技術家庭科

- 本校の家庭事情と家庭教育について……………上村佐智子

英語科

- 誤答調査に見る指導の問題点……………重松卓未・山口格郎

第5集 昭和37年度(昭和38年6月発行)

社会科

- 明治38年における非講和運動についての一考察……………西田光男  
地誌学習の問題点……………安井司

—大陸に近い九州を例として—

- 中・高校生における地図指導について—その1(展望)—

……………山崎俊郎

数学科

- ベクトル指導についての実験報告……………岡田義郎・笹田昭三

音楽科

- 中学校における創作学習について……………久米てる子  
中学校の音楽科カリキュラム表……………久米てる子・浜井三重子

保健体育科

- 精神衛生面より見た受験期における高校生の実態(中間報告)

……………上林久雄・保田喬

英語科

- Contextによる文章の正しい理解……………重松卓未・山口格郎  
イエスベルセン「格論」……………宮畑一郎

—The System of Grammarより—

- 本校の学校行事等の目標……………研究部学校行事等部会

第6集 昭和38年度(昭和39年7月発行)

社会科

- 学校図書館の源流(3)……………高岡輝夫

数学科

- プログラム学習の良い指導形態についての一実験……………福原公雄

理科

- エネルギー交代の指導……………芳賀和夫

英語科

- イエスベルセン「論理と文法」……………宮畑一郎

- Prepositions (1)……………野村英太郎

保健体育科



精神衛生面より見た受験期における高校生の実態（第2報）

.....上林久雄・保田 喬

第7集 昭和39年度（昭和40年6月発行）

教育実習の問題点について.....田 中 義 真  
国語科

発問によってできる読みの姿勢（その1）.....木 下 士 郎

現代国語読解指導.....久 島 惟 行

—文学教材についての一問題—

社会科

明治初期における西洋思想の受容の研究（未完）.....河 井 真

地誌学習の問題点（第5報）.....安 井 司

—巨大都市東京の悩みとその変貌—

理 科

物理生徒実験指導の一考察（中間発表）.....武 田 和 生

高等学校理科生物における「遺伝子」の扱い.....芳 賀 和 夫

—B S C Sを利用して分子生物学的に—

英語科

Prepositions (2).....野 村 英 太 郎

イエスベルセン「文法教授法」.....宮 畑 一 郎

美術科

版画指導の問題点.....岡 田 博

—単色木版画制作における版造形のあり方について—

第8集 昭和40年度（昭和41年6月発行）

国語科

発問によってできる読みの姿勢（その2）.....木 下 士 郎

読解指導の一問題点.....野 井 登

—読点意識の調査およびその考察—

社会科

地誌学習の問題点（第6報）.....安 井 司

—中京地域を中心とした2、3の問題—

数学科

中学校における確率指導.....松 宮 哲 夫

—その実践報告—

高校における集合代数と論理の指導について.....岡 森 博 和

理 科

光の回折像の分析.....武 田 和 生

—物理生徒実験指導の一考察（その2）—

第9集 昭和41年度（昭和42年6月発行）

国語科

魯迅と「進化論」及び「ニーチェ思想」.....片 山 智 行

—「原魯迅」というべきものと文学について(2)—

社会科

- 地誌学習の問題点(第7報)……………安井 司  
—中京工業地帯をめぐる2、3を問題—

数学科

- 中学校における集合指導について……………松宮 哲夫  
—集合指導の展開および中学生の集合に対する認識の実践研究—

理科

- 理科学習指導における指導計画について……………佐崎 良雄  
—理科学習指導案の作成—

美術科

- 単色木版画の教材としての特色と望ましい指導のあり方…岡田 博

保健体育科

- 中学生における「走力と練習効果」Ⅲ……………保田 喬

英語科

- 英語学習の問題点(第1報)……………瀬川俊一・樋口忠彦  
—家庭学習の望ましいあり方への一つの試み—  
Rainにおけるモームの創作態度とその効果的表現……………周 藤 康 生  
—対照表現と反覆表現について—  
高校英語における多読指導……………伊達寿廣・山口格郎  
—問題点と実験報告—

第10集 昭和42年度(昭和43年6月発行)

社会科

- 地誌学習の問題点(第8報)……………安井 司  
—淀川の治水と利水(その1)—

- 中学校における政治学習の実践……………西田 光 男

数学科

- 教材の分析について(その1)……………福原 公 雄  
—良い数学の授業のために—

- ブール代数の実験指導……………横田 稔 良

技術家庭科

- ラジオ教材についての一考察……………渡 辺 優

英語科

- 英語学習の問題点(第2報)……………樋口 忠 彦  
—英語科における進級生徒の問題点について—

- 多読との関連における精読指導……………山口格郎・伊達寿廣

IMPRESSIONS OF THE UNITED STATES OF AMERICA(1)

……………Shun'ichi SEGAWA

—A Report by a Japanese to the U.S. Office of Education—

第11集 昭和43年度(昭和44年7月発行)

社会科

- 地誌学習の問題点(第9報)……………安井 司  
—淀川水系の治水と利水(その2)—

数学科

- 数概念の指導について……………松宮 哲夫  
—数概念に対する中・高校生の理解と認識—

理科

- 物質の化学構造の指導について……………林 寿夫  
—中学校化学学習における化学式の指導について(その1)—  
波動の指導について……………武田 和生  
—物理生徒実験の指導(その3)—

美術科

- 美術科の教材の開発について……………岡田 博

保健体育科

- 高校生の修学旅行における疲労の一考察……………上林久雄・矢田節彦

英語科

- 高一教科書における分詞の用法……………千種基弘  
高校における英語精読指導の問題点……………下長利一  
Oral Approach 再考……………樋口忠彦・瀬川俊一  
A Minimal Professional Reference Library for Teachers of  
Secondary School English—1968……………瀬川俊一  
英語暗唱大会覚え書き……………瀬川俊一  
—その計画から運営まで—

第12集 昭和44年度(昭和45年7月発行)

国語科

- 中国小説史の一視点……………片山智行  
—想像力と現実及び作者と民衆との関係について—

社会科

- 地誌学習の問題点(第10報)……………安井 司  
—淀川の治水と利水(その3)—

理科

- 物質の化学構造の指導について(Ⅲ)……………林 寿夫  
—中学校化学における反応速度よりみた物質概念の形成について—  
中学校理科学習についての考察(その1)……………辻 退一  
—測定値の処理と誤差の指導について—  
電磁気の指導について……………武田 和生  
—物理生徒実験の指導(その4)—  
探究の過程を重視するには……………浅野浅春・武田和生・辻 退一  
—地学下層分野において—

美術科

美術科における教材の開発について（その2）	岡田 博
保健体育科	
現代っ子（中学生）の運動会意識	保田 喬
英語科	
高校英語と英詩	山口 格郎
英語グループ学習の実際	千種 基弘
第13集 昭和45年度（昭和46年7月発行）	
社会科	
近・現代史学習の実践（第1報）	西田 光男
—近・現代史学習をめぐる諸問題—	
数学科	
中学校における確率・統計の指導についての実験的研究	松宮 哲夫
—とくに統計的仮説検定の指導について—	
高等学校における行列の指導について	平林 宏朗
—2次、3次の行列を中心として—	
理科	
大阪周辺で得られる土壌性総翅類	芳賀 和夫
探求の過程を重視するには（そのⅡ）	浅野 浅春・辻 退一
保健体育科	
教室のガス・ストーブ暖房と二酸化炭素	保田 喬
英語科	
読解指導についての一試論	樋口 忠彦・今倉 大・田村 啓
—英語学習の問題点（第4報）—	
授業の実際	山口 格郎
—高校英詩教材、etc.—	
第14集 昭和46年度（昭和47年6月発行）	
国語科	
基礎からの作文指導	木下 士郎
—学級作文ノートによる3年間をふり返って—	
課題学習と長文読解	石川 承紀
数学科	
中学校における計算機の指導の記録	福原 公雄
—タイガー計算機およびセイコーS-301を使用して—	
中学校における確率の指導についての実験的研究	松宮 哲夫
—とくに確率概念の認識について—	
理科	
枯れ葉・枯れ枝に生息する総翅類	芳賀 和夫
英語科	
言語活動を中心としたWRITINGの指導（その1）	樋口 忠彦・今倉 大
—英語学習の問題点（第5報）—	

英語を「読む」ということ……………下長利一・山口格郎  
—高校英語教室の実際(その1)—

日・英語の表現比較……………千種基弘  
—「ビルマの竖琴」とその英訳から—

昭和22年より昭和46年までの研究紀要及び研究集録総目録・索引

**第15集 昭和47年度(昭和48年5月発行)**

数学科

数学教育におけるシステム・アナリシスに関する実践研究  
……………中田孟邦・松宮哲夫

高等学校新指導要領による代数的構造の取り扱いについて  
—中学校との関連において—  
……………平林宏朗

保健体育科

陸上競技における授業の研究……………風間建夫・西浜士朗  
短距離走についての実験指導……………風間建夫

技術家庭科

視聴覚機器を利用した学習の個別化(第1報)……………中村 潔  
—技術家庭科への導入—

**第16集 昭和48年度(昭和49年5月発行)**

数学科

中学校における確率指導についての考察……………松宮哲夫  
—中学生の確率概念に対する認識に基づいて—

ベクトルの指導について……………網 脩三

理科

物理指導の一考察……………武田和生  
—生徒の自主活動を中心とした実験の指導について—

英語科

高一教科書にあらわれたIdiomatic Expressionsの指導上の問題点  
……………奥 啓一・田村 啓

日・英語の表現比較……………千種基弘  
—日本文学とその英訳から—

英語教育研究の方向……………今倉 大・樋口忠彦

**第17集 昭和49年度(昭和50年5月発行)**

教育論……………横田稔良  
—高校普通教育に携わる—数学教師から—

国語科

中国の詩の受容をめぐって……………峰地 右太郎

美術科

美意識の基底をさぐる……………河村 徳治

保健体育科

## § 6. 研究部会

本校では研究部が中心になって、いくつかの部会を設け、全教官がそれぞれの部会に属し、研究活動にあたるシステムをとり、部会の運営についてはつぎのようなことがきめられている。

○研究部会の運営は原則として中・高別個にする。ただし必要に応じて合同の部会をもつことができる。

[中学校]

- (1) 決められたテーマのもとに全教官はいずれかの部会にはいる。
- (2) 各研究部会は研究テーマにもとづいて研究にあたる。
- (3) 各部会の活動について全体の集会で報告する。

[高等学校]

- (1) 校務分掌の各部はその責任において研究テーマに応じて研究を行なう。
- (2) 研究テーマによっては全教官による共同研究とすることもある。
- (3) 研究部は全体の研究活動の調整をはかる。

今までに設置された部会名の主なるものとしてつぎのようなものがあげられる。

「H・R活動」 「道徳・学級活動」 「特別教育活動」 「学校行事等」  
「教育研究」 「教育実習」 「同和教育」 「学力評価」 「教育工学」  
「生徒指導」 「教育課程」 「附属学校諸問題」

## § 7. む す び

思うに本校の研究活動の歩みには2つの大きな流れがみられる。その一つは創立当初から昭和30年までの学校をあげてとり組まれた「ガイダンス」を中心とする教育研究と、附属高等学校設立から今日に至るまでの中・高一貫した教育はいかにあるべきかをふまえて各教科が中心になってとり組んできた「学習内容・指導法の検討」の2つの流れがある。

創立以来昭和30年までの研究においては真の民主主義教育は個人の自主性に立脚した個性の尊重の教育であった。終始ガイダンスの研究を続け、ホーム・ルーム、特別教育活動の指導、ケース・スタディ、キユムラティブ・レコード（テストング、行動記述や逸話記録の観察）等がガイダンス事務の研究実践にその重点を置いて指導のための調査を行ない、個人差の実態を把握しつつ、個人を育てる教育を実践してきたのである。一方昭和31年以降は高等学校の併設に伴い過去の研究の歩みを進めるとともに、中・高一貫した教育体制を組織化し発展させる観点から各教科別に教育課程の中学校・高等学校の関連を研究し、日本における中等教育はいかにあるべきかという大きな視点をふまえて今日に至っている。

これらの研究活動の歩みは終始、個人を育てることを念頭におき、その実態をつかみ、生徒個人のもつ能力・特性を最大限に発展させるには指導はいかにあるべきかの研究・検討の実践であったといえよう。今日、教育の多様化にともない教育制度の検討・学習内容

の精選などが論議されているなかで、我が校が教育の現代化にいかに対処していくかは重要な課題である。これらの課題にとり組むにあたっては従来の研究の成果をふまえ着実な日常の教育実践のなかでとり組んでいくことこそ研究実証校として進むべき道であると考えられる。

桜井 寛  
田村 啓  
西田 光男  
渡辺 一保





### III 各教科の研究活動

#### 国 語

##### はじめに

附中、附高でそれぞれ創立30年ないし30年を迎えるに当り、教科の国語は一体どんなに国語教育を実践し、またどんな問題について、どのような研究活動をしてきたかなど、この際それらの資料を蒐集し、整理して正確な記録をとどめることは、記録を永く保存するのみならずそれらの資料にもとづき、わが校の国語教育がどのような過程を経て向上、発展してきたかを理解するとともに、今後の国語教育をいかように進めるべきかについて探求し、将来を展望する上に意義あることと思われる。

次に附属学校としては、その使命の一つとして実験実証する立場からその研究の成果を公開發表する任務をもっている。したがってわが校では、創立当初からこの見地より

I) ①研究発表会を開催、もしくは②紙上発表として『研究紀要』、『研究集録』などにそのあとをとどめてきた。さて研究発表の場としてどんなところがあるだろう。①校内発表 ②学部との共同発表 ③近附連 ④全附連等の附属学校共同の研究会 ⑤大阪府国語教育研究会 ⑥全国国語教育学会等その範囲はかなり広いものとなっている。

II) 国語教育の実践活動としては、読書指導に力を入れ、また中高一貫教育の特色ある国語教育として、(a) カリキュラムの作成 (b) 古典教育の指導の工夫などの点にユニークなものがある。

III) なお、附属学校の任務には、いま一つ重要な使命として教員養成機関としてその一環を荷負い、教育実習生の指導にあたらなければならない。国語科教育法の研究と実践は、教員養成大学学部と附属の共同の任務であるが、学生の指導の上からも、また国語教育を充実発展させるためにも今後の重要な課題である。

IV) 創立以来の国語教育の動向は、いわゆる民主的教育こと「新教育」の国語教育の問題解明の歩みでもある。即ち、その内容は日本の国語改革を基盤とするものであり、国語教育の目的においても、方法においても大きな変革をもたらしたものである。したがって、教科書の扱い方も、その教材も変わってきたのである。その問題の概要を例挙すれば次の通りである。①漢字の整理制限 ②現代かなづかいの制定 ③送りがなの改訂 ④ローマ字の使用などこれら国語表記の問題を始めとして ⑤単元学習の採用 ⑥言語教育としての国語教育 ⑦語法の問題 ⑧書写の位置づけ ⑨古典と現代国語の扱い ⑩生活用語としての国語の効果的な使用 ⑪文化遺産の伝承とその創造の立場からの国語教育等その内容は実に多様であり、教育の目的達成の上に重要なものである。

このような多種の重要課題について、順次とりあげ、継続研究し、実践活動を通じて、戦後の民主的教育殊に新しい国語科教育を鋭意探究、開拓してきたことについて以下その概略を章を立て段をおって資料に忠実に記述するものである。このことは、単に創立30年・20周年を記念する営みにとどまらず、今後の附属学校の国語教育の、向上発展に成果をもたらすことは勿論、わが国国語教育の発展に資するところがあれば、望外の幸せというものではあるまいか。どうか大方のご叱正とご教示を賜わらんことをここにお願いして擧筆する次第である。

## § 1. 教育研究発表会

研究発表会の内容を年度順に、いくらかの補足説明を加えながら摘記してみることにする。一つには国語科という教科のもつ性格もあるのだろうけれども、意外なほどの鮮明さでもって、時代の動向とそれに対応する教科の主体性、あるいはまたその主体性の描く20年・30年の軌跡を見ることになるだろう。

### 昭和23年

公開学習1 「シナリオの研究と創作」(中学2年) 成田重明

映画シナリオ『砂丘』についてその構成とト書きの効果を考える。

公開学習2 「シナリオの研究と創作」(中学2年) 沢田義一

映画シナリオ『砂丘』を紙芝居に表現し、演出してみることによって理解を生きたものに高める。

(注:ほかに「協議」と呼ばれる日程が組まれてあり、公開学習と研究会参加者との間で、討論と批評を通して問題の裾野を広げ、深まりを求める総括の作業があったことは言うまでもない。

また、初期においては講演会は教科として持つのではなくて研究発表会全体として持っていた。煩を厭わずここに一括して摘録しておくことにすると、

昭和23年 「ガイダンスについて」(C I E) アンダーソン

「新教育とガイダンスの技術」(附中) 後藤与一

昭和24年 (文部省) 小見山栄一

昭和25年 「近代学校の教育計画」 倉沢剛

昭和26年 「中学校における道德教育」(文部省) 太田周夫

昭和27年 「憲法の発展性」(国会図書館) 金森徳次郎

昭和28年 「民主主義の教育」(日本育英会) 前田多門

昭和30年 「観る眼から育てる手へ」(大阪市) 白井勇)

### 昭和24年

公開学習1 「実用文の研究」(中学3年) 沢田義一

各種の実用文の用途と特徴をつかみ、宣伝文・案内文・説明文を作る。

公開学習2 「漢字仮名交り文(調和体)」(中学2年) 成田重明

平仮名を修練し連綿に習熟する。和歌の散らしを美的に書く力を養う。

公開学習3 「劇とシナリオ」(中学2年) 齊藤敏彦

せりふやしぐさの表現を工夫し、稽古をする。舞台装置を考える。

公開学習4 「脚本のよみと演出」(中学1年) 安井司

齊田喬「リヤカー」について脚本の研究をし、その構成を考える。

公開学習5「実用文の研究」(中学3年) 沢田義一

模範的な数種の実用文例について鑑賞し、実用文の理解を深める。

#### 昭和25年

公開学習1「はがきはどうかけばよいか」(中学1年) 成田重明

年賀状の必要と意義をつかむ。年賀状の書式についての資料を集める。

公開学習2「現代文学の研究」(中学1年) 沢田義一

志賀直哉「かくれんぼ」と芥川龍之介「みかん」をめぐって。

調査研究(大阪府中学校教育実態調査のうち、国語科実態調査・調査項目のみ)

1. 簡易文字と新かなづかいの使用について
2. 学習形態について
3. 図書  
の設備について
4. 国語教科書はどんなものを使っておられますか
5. 単元  
学習の採否について
6. 国語科をCore-curriculumの中心課程としていますか
7. 評価の方法は
8. その他国語学習上の困難な諸問題について
9. 国文法  
について
10. 習字教育について

(注:この調査研究、ないし実態調査は、以下に引きつづいて見られる通り数年間にわたって継続的に全教科にわたっておこなわれている。ここでは調査項目のみをかかげ、調査票の回収率とか調査項目にあらわれた数字などはすべて省略した。低い回収率に終始したけれども、あらかじめ府下の全域にわたって調査票を配布し、その集計結果を研究発表会に向けて報告するという、学校草創期におけるそれは正統的な営為的努力の跡であった。)

#### 昭和26年

公開学習「古典の味わい方」(中学3年) 成田重明

芭蕉『奥の細道』のうち、平泉・立石寺を読んでその特色を調べる。

#### 昭和27年

学習公開「文学の味わい方」(中学3年) 沢田義一

芥川龍之介「ある日の馬琴」をめぐり、創作の苦しみと、その苦しみを乗り越えた輝かしい精神的な勝利について考える。

調査研究(大阪府中学校教育実態調査のうち、国語科実態調査)

1. 現在使用しておられる教科書は
2. 学習にあたって
3. ローマ字教  
育について
4. 国文法について
5. 習字教育について
6. 図書館教  
育について

#### 昭和28年

学習公開1「詩の作り方と味わい方」(中学2年) 田中義真

友達の作品について、それを批評することと鑑賞することの仕方を学ぶ。

あわせて自分の意見と感想を正しく表現し、伝えることを学ぶ。

学習公開2「調和体で好きな詩を散らし書きにする」(中学2年) 中邑元子

好きな詩を毛筆で一字一字書き、詩をさらに深く汲みとる。

調査研究(大阪府中学校教育実態調査のうち、国語科実態調査)

1. 特別の学級編成(同学年における能力別学級編成、学年を解体して能力別編  
成、志望別学級編成、できない生徒のための特別学級を編成)
2. 普通(自

然学級・混合学級)での個別指導(グルーピングによる特別指導、問答法・講義法等に個人差を考慮、一斉指導によらない個人学習、学習の割当をかえる)

3. 課外指導(できる生徒を特別指導する、できない生徒を特別指導する、能力別による補習授業)——以上の実施に関する自己評価

#### 昭和30年

学習指導公開「文学の味わい方」(中学1年) 田中義真

志賀直哉「小僧の神様」——主題がしっかりつかめているかどうか。

ガイダンスのための調査として「読書診断一覧表」(8項目)

#### 昭和31年～昭和34年

高校創設準備のために一時的に研究発表会は中断された。

#### 昭和35年

学習指導公開1「図書館に行つて」(中学1年) 上野久男

図書館利用の知識を習得させる——日本十進分類表

学習指導公開2「北山の春——源氏物語」(高校3年) 久島惟行

古典における自然と人生との融合の関係について。

調査研究(大阪府中学校教育実態調査のうち、国語科実態調査)

1. 文法について(時間を特設されていますか、時間を特設する必要を感じられますか、文法の学習内容についてどうお考えですか)
2. 作文について(回数、学年の重点、テキストを必要と思われませんか、作文指導上の困難について、文集・文芸雑誌を発行していますか)
3. 古文のとりあつかいとそのための導入について(古文の指導はいつから始められていますか、古文指導の導入のための教材について、古文指導のための特別のテキストを必要と思いませんか)
4. 習字について(時間を特設していますか、硬筆と毛筆のどちらに重点をおいていますか、習字指導の上での困難について、生徒の興味の盛り上げについて)
5. 副読本について(使用中の副読本を必要と思いませんか、副読本を使用している上での困難)
6. その他

#### 昭和37年

学習指導公開1「清兵衛とひょうたん」(中学2年) 上野久男

清兵衛を中心とする人物の行動や心理などの表現について考える。

学習指導公開2「文章の流れ」(中学3年) 野井登

樋口一葉「蓮の香」をめぐって——擬古文体という文語体の美。

講演「読解の諸問題」(東京教育大学) 石井庄司

#### 昭和39年

研究授業1「生活とことば」(中学2年) 木下士郎

野本菊雄「方言と共通語」をめぐって——方言についての正しい認識をもつ。

研究授業2「孔子と論語」(高校1年) 片山智行

「論語」にあらわれた孔子の思想をどの程度まで消化できるか。

研究協議「漢文構造の問題点」 片山智行

漢文という外国語と訓読法という訳読法との間に生起する諸問題。

講演「漢字とところどころ——国語教育における漢字の諸問題」（東京大学）藤堂明保

#### 昭和41年

研究授業1「古典——昔の文学に親しむ」（中学2年）上野久男

『宇治拾遺物語』より「そら寝」をめぐって——古典の中の人物の心理が現代人の中にもあることを知り、古典への興味を持たせる。

研究授業2「中学生の古典入門」（中学3年）野井登

『今昔物語』より「馬盗人」をめぐって——武将の精神や生活態度をわからせ、作者の目と心を理解させ、題材の位置を知らせる。

研究協議「中学校高学年の古典入門について」

講演「翻訳と解釈」（甲南大学）寿岳文章

#### 昭和43年

研究授業1「くもの糸」（中学1年）木下士郎

登場人物の行動から発展させて、人間の生き方について考える。

研究授業2「羅生門」（高校1年）石川承紀

グループ討論の結果を発表し、その内容を全員で考えなおす。その中で文章の構成と主題とを把握する。

研究協議「物語文の読解指導における感想の書かせ方と使い方」上野久男

#### 昭和46年

研究主題「新指導要領における書くこと（書写）の指導」

研究授業「いろいろな表紙」（中学1年）上野久男

文字の大きさや配置による表現効果を考える。場に合う効果的な表現。

研究発表「書写に興味・関心をもって学習させるには」上野久男

講演「中学校における書写教育」（大阪教育大学）杉岡正美

#### 昭和48年

研究主題「古典指導における問題点」

授業「古今和歌集」（高校2年）久島惟行

担当の生徒（9のグループの中から生徒の話し合いで毎時間の担当者を決めている）が調べてきた事柄を発表し、それをめぐって『古今和歌集』の歌風についての理解と親しみを深める。

協議1「古典（短歌）に対する中学生の意識について」久下正己

古典（短歌）に対する中学生の反応と問題点

協議2「古典（漢文）指導における問題点」峰地右太郎

中国の詩を受容することと、参加してゆくこととの二つの側面について。

講演「古典の世界」（大阪大学）田中裕

#### 昭和50年

授業1「坊ちゃん」（中学2年）上野久男

読書のあり方を反省させ、深く読書する態度を身につけさせる。

授業2「それから」（高校2年）石川承紀

グループ学習（1学級を6グループに分けて）による長文読解。

提案1「魯迅『故郷』を中心として」久下正己

「学習の手引き、を用いた指導をめぐるの問題点。」

提案2「小説の解釈と鑑賞」篠原修

川端康成『掌小説』を用いて。

講演「日本近代文芸の諸問題」（関西学院大学）水谷昭夫

## § 2. 研究紀要・研究集録

「研究紀要」は昭和23年から昭和30年の間の附属中学校教官の共同研究によるものであり「研究集録」は中学校・高等学校が合同して発行しているものである。

### 「研究紀要」

「国語単元学習の理論と実際」……………昭和23年・第1集

興味——必要性。動機化とその実際。

「習字教育の新構想と足あと」

硬筆・毛筆書方（目あて、学習の機会、指導の態度、諸問題）

「国語科の指導」……………昭和25年・第2集

国語科の評価。習字学習指導随想。

「国語科学習指導要領の改訂と日々の学習指導の実際」……………昭和26年・第4集

「国語科学習指導の中に道徳をどのようにとり扱っていけばよいか」

「国語科学習はどのように進められたらよいか」……………昭和27年・等5集

単元学習の必要性。効果のあがる学習。単元学習の進め方。

「国語科習字の取扱いについて」

必要性。実用主義と芸術主義。大字主義と細字主義。個性尊重。鑑賞。書字技能

「如何にして文法学習に興味を持たせるか」

文法学習の2、3の問題。興味に向かう指導の実践。

「図書の取扱——学校図書館の諸問題」

国語学習指導と図書資料。図書館の現状。図書の選択・整理。図書館教育と国語

「文法のきらいな子を好きな子にするために」……………昭和28年・第6集

「読書指導のための調査」……………昭和30年・第7集

「漢字の書写力と習字学習との関係における個人差」

「文学指導のための調査」

「研究集録」 中学校、高等学校教官の別は執筆者名の後に(中)(高)で示す。

「志賀直哉の作品に就いて——子供を描いた作品を中心として」

田中義真(中)……………昭和33年・第1集

邦文学作家中、教科書への採録数が最も多いこと。それらが直哉の初期のものであること。その時期に子供の素材が集中していること。そのわけと描き方。世界観  
「中学生の古典指導について」

中邑元子(中)……………昭和33年・第1集

古典、特にその語法への抵抗の大きさから来る困難。その指導法。

「高校生の読書実態の調査にあたって」

- 高岡輝夫・久島惟行(高)……………昭和33年・第1集  
質問紙法の欠陥是正の試み。個人の読書特性把握の方法。  
「読書調査——質問紙法の検討——」
- 高岡輝夫・久島惟行(高)……………昭和35年・第2集  
第1集の方法による調査結果の報告と問題点の検討。  
「中学校学習指導要領における書写指導」
- 上野久男(中)……………昭和37年・第4集  
指導要領にそって、聞く・話す・書く(作文)と関連づけた指導法の検討。  
「発問によってできる読みの姿勢(その1)」
- 木下士郎(中)……………昭和40年・第7集  
指導者の発問によって、文章の要旨のまとめ方が大きく左右されるということ  
を裏づけた実践報告——説明的文章を用いる。  
「現代国語読解指導——文学教材についての1問題」
- 久島惟行(高)……………昭和40年・第7集  
教科書採録の長篇1部分による読解への疑問。教室内及びそれを越えた場での指  
導によって全篇を学ぶ方法。  
「発問によってできる読みの姿勢(その2)」
- 木下士郎(中)……………昭和41年・第8集  
第7集の方法を更に発展させ、指導者の発問を多くするのに比例して生徒の文章  
把握の姿勢の左右される度が増して来るといふ実践報告。  
「読解指導の1問題点——読点意識の調査およびその考察」
- 野井 登(高)……………昭和41年・第8集  
読む時と書く時の読点に対する意識の差。読点意識の不十分な様子の調査結果報  
告。読解指導法の手がかり。  
「魯迅と進化論およびニーチェ思想——原魯迅というべきものと文学について」
- 片山智行(高)……………昭和42年・第9集  
その初期の姿からうかがわれる文学者魯迅の根元。進化論とニーチェ思想との関  
連。  
「中国小説史の1視点——想像力と現実、および作家と民衆との関係について」
- 片山智行(高)……………昭和45年・第12集  
過去の中国において、文学の各ジャンルのうち小説が置かれていた地位。小説作  
品が生み出された根因と状況。  
「基礎からの作文指導——学級作文ノートによる年間をふり返って——」
- 木下士郎(中)……………昭和47年・第14集  
短作文・行事作文による指導への疑問。毎日1人ずつ作文して行く学級作文ノ  
ートの実践報告。  
「課題学習と長文読解」
- 石川承紀(高)……………昭和47年・第14集  
長篇小説を1ヶ月以上に亘って継続して教材とし、生徒のグループ討議を基調と  
して、それに課題学習を加味した方法の実践報告と問題点の検討。

「中国の詩の受容について」

峰地右太郎(高)……………昭和50年・第17集

俳詩(特に各務支考)と漢詩との関係。生徒による漢詩の自由な翻訳。日本語の詩の流れの1側面。

### § 3. 近附連国語部会における研究活動の概要

近畿地区国立大学附属学校連盟(略称 近附連)では、かねてから相互の協力によって教育研究をすすめていたが、昭和35年度より、教科別分科会を中心に研究活動を進めることにした。

中・高等学校国語分科会(以下 中高国語部会と呼ぶ)においては、当初国語科の当面する諸問題の中から主題を定めては協議していたが、いずれの問題の討議も、授業の実態を離れては、真に有力な解決となり得ないことを痛感し、昭和36年度よりは、特に授業を中心とする共同研究に焦点をしばって行うこととした。本校教官も、この部会に積極的に参加し、他の附属校教官との意見交換や共同研究を通じて研究の成課を上げたことは多大である。

そこで、年代順に近附連国語部会のあゆみと、その中での本校教官の参加の概況をまとめることにする。

#### 1. 第1回中学校国語科学習指導研究協議会(昭和36年度)

昭和36年12月7日(木)京都学芸大学附属京都中学校において、近付連中・高国語部会主催の第1回中学校国語科学習指導研究協議会が開催された。当日は京都府を中心に近畿地区大会県下の中学校から数百名の参加者を得た。

まず、午前中に京都中学校の1年生から3年生までの全9学級の生徒を対象として、各附属校から、各1、2名の教官が第1時限第2時限に分かれて、授業を公開した。

本校からは久島惟行が中学校3年生を対象に「旅の歌」と題して、古典短歌を身近なものに感じ、親しみを持たせることを主眼とした授業を行った。時あたかも本校における中・高一貫教育の確立2年めにあたり、り、本校の中学3年生に対して、どのような古典教材をどのように指導していくかを

検討していた時期でもあり、他校の国語科教育はもとより、本校の国語科教育にも大いに役立つ研究授業でもあった。また、上野久男が中学校2年生を対象に作文の共同批正の授業を行なった。共同批正をとおして、各自の自己批正の着眼点を見つけ出させることをねらった授業であった。

午後は6つの分科会(作文・話し聞く・文法・説明的文章・文学的文章・詩歌)に分かれて研究協議会をもった。

本校からは、沢田義一が作文分科会の司会者として、田中義真・野井登の2名が説明的文章分科会の司会者および提案者として参加した。

当日の内容は研究協議会便覧、分科会のまとめ、および後述の「国語の授業」に詳細





に残されている。

## 2. 授業研究を中心とした研修期（昭和37年度・昭和38年度）

第1回の対外的研究協議会の後、昭和37年度から昭和38年度にかけての2年間は授業研究に重点をおいて内面的充実を主眼とした研究を積み重ねた。

まず、事前に当番校を中心に授業主題を決定し、加盟各校に連絡をする。連絡を受けた加盟各校では、教官個人別あるいは学校別に当番校と同様に独自に授業計画を立て、可能なかぎりにおいて、自校で実地に授業をし、その問題点を整理しておいて、集会当日にそれを持ち寄った。

集会当日は、当番校において、その主題にあたる授業を公開し、参会者が分担して授業記録をとり、公開授業の後、各参会者のたててきた授業計画や、実地授業の結果と当日の公開授業の実際とを討議の資料として授業研究会を持ち、記録をとった。

その第1回は、昭和37年6月4日、大阪学芸大学附属平野中学校において、壺井栄の小説「坂道」の指導をめぐる、研究会を開いた。授業者は附属平野中学校の故山中健吉であった。この授業の記録と当日の研究討議の内容のまとめは本校が担当した。

第2回は、同年11月28日、神戸大学附属明石中学校において催された。主題は、「古典」で「孔子のことば」がその題材であった。授業者は附属明石中学校の藤田清子であった。

第3回は、昭和38年5月28日、奈良女子大学文学部附属高等学校中学校で、「詩歌」を主題として、室生犀星の「せみごろ」を題材として、行なわれた。授業者は同校の井田康子であった。

第4回は、同年9月17日、滋賀大学学芸学部附属中学校において、「作文」を主題として行なわれた。授業者は、同校の山本稔であった。

このような積み重ねの共同研究の結果をまとめて、昭和39年3月には、近附連中高国語部会の手で、『国語の授業』(A4版240ページ)という著書がいづみ書房から出版された。

本校からは、第1回研究協議会における久島惟行の「旅の歌」の指導案と指導後の感想、と上野久男の「最近感じたこと」(作文の共同批評)の指道案と留意点、および、論説の授業研究「知識と常識」が掲載されている。

そして、翌昭和39年度には、第2回の対外的な研究協議会を開こうという機運が熟してきた。

## 3. 第2回中学校国語科学習指導研究協議会（昭和39年度）

昭和39年5月14日(木) 前回同様京都学芸大学附属京都中学校において、第2回中学校国語科学習指導研究協議会が開催された。

当日は、理解・鑑賞分科会と表現分科会にわかれ、第1時限には7つの学級において公開学習を行ない、さらに、第2時限には、理解・鑑賞と表現の2つの会場に分かれて、各実験授業を行なった。

その際、理解・鑑賞分科会では、本校の木下士郎が「文学教材における主題把握の方法」というテーマをもって、壺井栄の「かきの木のある家」を題材とした実験授業を



同校講堂で行なった。この授業にあたって、指導者の考えたことは、

- ① 三読主義が形式化していることに対する疑問
- ② 長文をどこで区切るかの問題
- ③ できるだけ各自の姿勢で読ませるということ
- ④ 教師が与える問題のあとを追うのではなく、文脈にそってその展開をいろいろ考えて行くこと。
- ⑤ 最後に感想を書かせるというのではなく、途中の感想をたいせつにすること。
- ⑥ 読解から作文への道

などであった。

#### 4. 聞くこと・話すことの指導を中心とした研修期（昭和40年度～昭和43年度）

聞くこと・話すことの学習指導については、戦後その重要性がさげばれていたが、それとはうらはらに、聞くこと・話すことを研究課題として真正面から取り組んでいる学校は小なかった。そこで、近付連中高国語部会では、昭和40年から授業研究、合評会等を毎年数回にわたって開いた。また、その間、昭和40年12月には、京都学芸大学の岸田武夫から、昭和41年11月には、東京教育大学の石井匠司からそれぞれ示唆を受けた。また、昭和41年8月には比良山上の比良ロッジで合宿も行ない、研修を続けた。そして、昭和43年10月、その研修の結果をまとめた『聞くこと・話すことの学習指導法』(B5判128ページ)という冊子が発行された。

本校はその理論篇、第6章「話すことと書くこととの関連」を担当執筆した。

#### 5. 昭和44年度以降

昭和44年以降は教科別研究活動もさることながら、目の生徒への日々の指導をよりたいせつにしなければならないこと、直面する諸問題が各校によって独自であったことなどから、近付連中高国語部会としての活動は以前に比べれば、控えめにしなければならなかった。

けれどもども、以下年度を追って列記するが、毎年1回は部会を開き研究を積み重ねている。

昭和44年度は京都教大附属桃山中学校において、昭和44年11月27日研究会をもった。京都教育大学附属京都中学校の藤田久男が「形」(菊池寛)の授業を公開し、その後、この教材をめぐる、各校の指導案等を交換して話し合いが行なわれた。

昭和45年度は昭和45年10月21に、大阪教育大学附属池田中学校において、同校の井手手葆が「平泉」(奥の細道)の授業を行ない、その後、中・高における古典指導について研究協議会がもたれた。

昭和46年度は奈良女子大学文学部附属高等学校中学校が当番校であった。10月27日奈良市内の青葉荘において会合をもち、作文教育をめぐる研究協議を行なった。その後、東大寺の大仏殿・戒壇院などの特別見学の案内も受けることができた。

昭和47年度は大阪教育大学附属平野中学校において、同校青木弘が安西冬衛の現代詩



の授業を行なった。その後、現代詩の指導について協議会が行なわれた。

昭和48年度は奈良教育大学附属中学校が当番校で、12月7日に、奈良の猿沢荘において、中・高一貫の国語教育の指導体制などについての研究協議会が行なわれた。

昭和49年度は、和歌山大学教育学部附属中学校が当番校として、丹羽ジュン子の「屋根の上のサワン」(井伏鱒二)の授業研究の発表等を行なった。

昭和50年度は、滋賀大学教育学部附属中学校で昭和50年10月2日(木)板谷和彦が「少年の日の思い出」(ヘルマン=ヘッセ)の授業を行なった。当日はインシデントプロセスによる教材研究を行なった。当日の日程説明、研究方法の説明のあと、授業を参観し、途中、参観者の半数が退室し、グループに別れて、全体の指導計画と本時の指導過程を共同作成した。その後、作成した指導案を交換して研究協議した。

これらのいずれの会合にも、本校から何名かが交替で出席し、それぞれ積極的に意見を述べあい、研修を積み重ねて今日に至ったのである。

以上、近附連国語部会のあゆみを中心に、その中での本校教官の活動をふり返ってみたが、本校国語科の研究活動に大きな影響を与えている近付連中高国語部会の存在をあらためて認識させられた次第である。

#### § 4. 全附連・大阪教育大学・教員養成学部等の国語教育研究会について

ここまでは、本校教官が開催・発表・参加してきた研究会・研究発表・論文等について述べて来たが、ここではまだ触れていない項目について述べておきたい。

##### 1. 全附連教育研究大会

(昭和39年11月) 発表題「文学教材についての一問題」(現代国語) 久島惟行

主旨“現代語を読むこと、話すこと、書くこと”をより高めるためには、“現代国語という新しい分野において具体的に”どう工夫すればよいか。小説の分野における指針をさぐる。

内容 ① 形態に応じて読む——長編と短編という形態の違いに応じた読み方

② 教科書から離れた指導について——ダイジェスト的な読みを排除する。

③ 読み方の方法——時間、教材、カリキュラム等の問題

(昭和40年10月) 発表題「読解指導の一問題点」

副題「読点意識の調査およびその考察」 野井 登

主旨 読点のうち方の問題

① 文の構成意識を育てるための条件の一つとして

② 書きことばでは読点の有無や位置が文の成分の関係に密接につながり、また表現効果を左右することがある。

この2点を自覚させ、理解し、表現する工夫をさせる言語意識を育てたい。

指導の体系を樹立するためには、

① 文および文章自体についての研究

② 生徒の理解・表現力の実態調査

この2点を考えなければならない。

内容 ① 読む場合と書く場合における意識について(調査)

② 読点のつけ方の理解度調査

③ 読解指導との関係および今後の問題点

(昭和45年10月) 発表題「課題学習による長文読解」

石川承紀

主旨 ① 長文読解の実践

主旨 長編小説と短編小説はまったく質的に違った方法によって構成されたものであるから、それを教材化する場合、質的に違った方法を積極的にとりたい。

⑦ 書名 「夜間飛行」(S. 41) から「人間の土地」(S. 44)

⑧ 教材の選択 生徒の希望するものの中から選ぶ

⑨ 授業の方法 時期・方法・時間について

⑩ 初期の課題についての反省

② 今後の課題

資料⑦ 課題例 「それから」「人間の土地」

⑧ 生徒の解答例「それから」について

## 2. 大阪教育(学芸)大学国語研究会

これは、大阪教育(学芸)大学の、大学・附属校の国語科教官が、国語教育の理論と実践のために創り育ててきた研究会である。天王寺・池田・平野の3分校が順番に、附属校が中心となって、原則として毎年開催してきたものである。小学校・中学校・高等学校・大学と、それぞれ指導・研究の対象の異なる教官が一堂に集まり、研究授業・研究発表を軸として、国語教育全体を見通す研究を続けてきた。昭和31年来残っている記録のなかで主なものを下に挙げる。

昭和32年11月 平野中にて「古田拓先生を囲んで」

昭和33年1月 池田附小にて研究会

同 12月 天王寺にて「遠藤嘉基先生を迎えて」

34年6月 第1回国語研究会(第1回・第2回国語研究会は対外的な発表を含む)

35年12月 池田附中にて研究会

36年6月 平野附中にて研究会

39年6月 等2回国語研究会

47年6月 国語研究会(平野・別記)

48年9月 国語研究会(天王寺・別記)

研究会の具体的内容の一例を下に挙げる。

### ○ 大阪教育大学国語研究会

昭和48年9月20日(木)

於 大阪教育大学附属天王寺小学校

日程

#### 1. 授業参観

「詩・生んだ女の子」授業者 天王寺附小 津崎義一

#### 2. 授業参観

「走れメロス」授業者 天王寺附小 奥野忠昭

#### 3. 研究発表

「古典(和歌)に対する中学生の意識について」発表者 天王寺附中

## 4. 研究協議会 一発表に関連して一

司会 天王寺附中 木下士郎

また、この研究会を1つの母体として、「第43回全国大学国語教育学会・第21回全国国語教育研究協議会大阪大会」が、天王寺附小・附中高を会場として開催され、会員は会場の準備等を担当し、会場校として大会の成功に貢献した。以下に大会の日程等を略記する。

## ○第21回全国国語教育研究協議会大阪大会

(昭和46年10月) 国語部会

研究課題 「自主的・主体的学習と教材」

- 発表題 ① 現代国語における教材の条件 ② 生徒が望む「現国」教材  
 ③ 教材の価値について ④ 詩教材の扱い方  
 ⑤ 通読教材の問題点

(研究主題) 「ひとりひとりの国語学力をいかに伸ばすか」

幼稚園部会 「幼児の発達段階をふまえた言語指導」

会場 大阪府職業訓練センター

小学校部会 「ひとりひとりの国語学力を育てるにはどうすればよいか」

会場 大阪教育大学附属天王寺小学校

中学校部会 「ひとりひとりの国語の能力を伸ばすにはどうすればよいか」

高校部会 「国語教育の原点を求めて」

中・高会場 大阪教育大学附属天王寺中・高等学校

大会は、大阪府下の各学校の協力を得て、多くのすぐれた発表、授業、報告がなされた。本校でも、会場準備等をする以外に、上野久男が書写の「字配り」の授業を行なった。

## 3. 「教員養成学部教官研究集会国語教育部会」の研究

昭和38年から3箇年間、全国大学の教員養成学部国語科教官の研究集会が開催され、大学としては、東京学芸大学・大阪学芸大学・広島大学教育学部・茨城大学教育学部と文部省の共催という形で研究が進められた。本学・附属校も研究発表や論文執筆に積極的に参加した。この会への本校教官の参加の概要のみを下に挙げる。

昭和38年9月 上記の国語教育部会、研究会。

(研究発表、提案)

国語科における教育実習生の指導について 木下士郎

大学国語教育に対する要望 田中義真

昭和40年9月

(研究発表、提案)

説明的文章の指導について 木下士郎

書写の指導について 上野久男

古典教材の指導について 野井 登

文学作品の指導について 久島惟行

また、これらの研究は「国語科教育の研究」「国語科 教育実習生指導の手引き」の

2冊にまとめられ、上野久男・木下士郎・野井登・久島惟行が執筆にも参加し大きな成果を収めた。

#### 4. その他の研究発表等

本校での研究をもととして、対外的研究発表も多くなされたが、そのなかのいくつかを下に挙げる。

昭和36年9月 国語教育研究協議会 一近畿・中国・四国地区一

○作文に表われた表現上の一問題 野井 登

昭和38和11月 全国大学国語教育学会

○研究授業 「読書と人生」 上野久男

(この記録は同学会の研究紀要「国語科研究」から近附連の「国語の授業」に転載された。)

昭和41年8月 広島大学教育学部国語教育学会

○中学校高学年の古典入門 一実践中間報告一 野井 登

昭和48年8月 広島大学教育学部国語教育学会

○読解指導から作文指導へ 一創作的文章を書かせる一 石川承紀

昭和43年10月 日本国語教育学会

○研究授業 「走れ 澄田千穂」 木下士郎

昭和43年11月 大阪市教育研究会第2ブロック国語科研究会

○研究授業 「小鳥と少年たち」

○(研究発表)「中学校における国語の授業」 木下士郎

昭和50年8月 全国高等学校国語科指導研究会

○「長文読解とイメージの学習」 石川承紀

#### 5. 大阪教育大学国語教育学会

##### ○ 大阪教育大学国語教育学会

昭和39年6月発足以来、本学大学・附属校の教官がリーダーとなり、今日に至るまで国語国文学・国語教育学の研究発表・研究授業等が行なわれてきた。昭和49年には、詩人・小野十三郎の講演を聞くなど盛大な会となり、本校からも中学教官を中心として、会の発展に尽力してきた。

### § 5. 実践活動とそのまとめ

#### 1. 読書指導

読書指導——これは国語科教育の中の一つの重要な部分であり柱である。したがって、読書指導をどうすればよいかということは、国語科を担当するものにとって、真剣に考えねばならない課題である。我々のとってきた方法と、そこからまとめあげることできたものを次に記しておこう。

##### (1) 図書館利用の一斉自由読書

定期的に、あるいはその他必要なときに生徒に図書室で読書をさせる。さいわい、本校は図書館の施設及び蔵書とも比較的充実しており、授業に生徒を図書館まで引率し、一斉読書させることができる。あわせて図書館利用上の必要事項も指導することになっている。また、こういった機会を契機として、生徒達もその後の図書館利用へと発展させている。

(2) 『読書の手引』 昭和45年

高校では、図書部・国語科が協同し、生徒へのアンケート・教官からの推薦などをもとにして、推薦図書一覧を毎年作っていたが、それらを総括し、精選して1冊の冊子にまとめた。高校生を対象とし、高校3年間に読むべき本を掲げており、ゆくゆくは、本校卒業生が、最低線共通の読書基盤をもつことをねらいとしている。

(3) 『読書感想文』集 第1集(昭38)～第13集(昭50)

中学校では、図書部・国語科が協賛して、毎年、夏期休暇中に読書感想文を一編まとめることを生徒に課している。そのために、各教科から学年ごとに、休暇中に読むべき本を推薦してもらい、それらを課題図書としている。できあがった感想文は、それぞれの本を推した教官が評価し、最終的には国語科教官が合議し、学年ごとに優秀作を選び冊子とし、昭和38年以来まとめてきた。最大の特徴は、やはり国語科にとどまらず全教官が読書指導にあたっているということであろう。

(4) 国語科所有生徒用図書

図書館蔵書とは別に、国語科で独自に、授業に関連するものを置いている。1種類につき、50冊ずつ用意し、教室での一斉読書に利用したり、要望に応じて貸し出ししたりして読書の幅を広げるよう指導している。現在置いている書物名を次に列記しておく。

今西祐行『肥後の石工』(実業の日本社)、松田道雄『君たちの天分を生かそう』(筑摩書房)、サン・テグジュペリ(内藤濯訳)『星の王子さま』(岩波少年文庫)、有島武郎『一房のぶどう 他七編』(角川文庫)、北杜夫『ドクトルマンボウ昆虫記』(学研)、小海永二編『こころの詩集』(学研)、菊池寛『父帰る・恩讐の彼方に 他七編』(旺文社文庫)、松岡洋子『キュリー夫人』(旺文社文庫)、小泉八雲・新美南吉・木下順二・宮沢賢治『耳なし芳一・うた時計・夕鶴・銀河鉄道の夜』(学研)

2. 中・高の一貫した古典指導——『中学生の古典入門』 昭和39年

昭和31年、附高設置後、中学・高校の一貫した指導体制が確立していく中で生まれたのが、附属中・高等学校国語研究会編『中学生の古典入門』であった。「はしがき」に、本書は“主として3年生を対象とし、古典への方向づけを円滑ならしめる意図”をもつもので、1週1時間、およそ35時間で学習できるように配慮し、明治時代の作品を、とくに重視し、教材は易から難へと配列した、とあるごとく、まったく本校独自のものであり、画期的なものであった。また、実際の活用においても、中・高の教官が協力して指導にあっている。

3. 教育実習生の指導

本校の指命に、教育実習生の指導がある。そのための様々な試みがあるが、それらのうちから国語科に関係のあるものを次に列記しておく。

○『表記法——当用漢字の字体について——』 野井 登編



当用漢字 1,850 字のうち、とくに「書き誤りがちな当用漢字」の字体を整理し、説明したもの。

- 「教育実習の手びき・国語の授業」 大阪教育大学附属中学校国語科編  
実習生の国語科学習指導案、授業記録を集め冊子としたもの。国語科の授業及び進め方の実際を知る実習生用のテキスト。
- 「教育実習国語科指導計画」  
大阪教育大学附属天王寺中学校編「教育実習各教科指導計画」所収  
実習期間5週間の各週の指導計画についてまとめたもの。
- 「表記法」 大阪教育大学附属天王寺中学校編「教育学習指導講話集」初版所収  
国語表記のルールについて、当用漢字・送りがなのつけかた・現代かなづかいの要領についてまとめたもの。
- 「国語科教育」 大阪教育大学附属天王寺中学校編「教育実習指導講話集」3版所収  
国語科教育の特性について、国語科のねらい・国語科の指導・国語科教育の動向などの面から述べたもの。

国語科における20年～30年の研究の歩みをふり返ってみたが、枚数の関係で ①毎年行なっている対外的な教育研究発表会 ②研究紀要・研究集録 ③近附連国語部会 ④全附連・大阪教育大学・教員養成学部等の研究集会 ⑤数個の実践活動についてしか、述べることができなかつたのを残念に思う。

わたしたちは、単に、何年何月にこんな研究授業をした、あんな研究協議をしたという事実、現象だけにとらわれることなく、たとえば「図書館に行つて」（昭和35年）や「中学生の古典入門」（昭和41年）というテーマにしても、なぜそのときに、それがとり上げられたか、また、それがどのように積み上げられていったかなどについて、たいせつにしていきたいと思う。そして、常に、今後のあるべき姿を求め、中・高国語科教官が一致協力して研鑽を重ねていきたいと考える。



# 社 会

## § 1. 教育研究発表会活動のあゆみと概観

本校では、創立以来、昭和30年度まで一貫してガイダンスの研究を続け、“個人を育てる教育”の実践に努力をはらった。1年度に1つのテーマをもうけ、全教官が一丸となって研究にあたった。このような研究体制のもとで社会科の研究もすすめられ、教育研究発表会を通じて、成果を発表した。社会科専任教官としては、創立時の佐野敏夫（昭和30年度離任）のほかに、昭和24年度には桑原宏道（25年度離任）安井司（45年度離任）27年度には高岡輝夫（46年度離任）28年度には山崎俊郎（42年度離任）36年度には西田光男、38年度には河井真（42年度離任）42年度には高木正喬、43年度には津崎幸博（48年度離任）富田健治、44年度には田原悠紀男、47年度には岩城一郎、49年度には場本功、50年度には白土芳人が着任した。

### 昭和23年度 第1回教育研究発表会

主題 ガイダンス並びに単元学習

授業 佐野敏夫「工業」（単元「近代工業はどのように発展し、社会の状態や活動に、どんな影響を与えて来たか。」）（中2）

発表 社会科指導上の諸問題

### 昭和24年度 第2回教育研究発表会

主題 ガイダンスの組織と実践

授業 佐野敏夫「通信機関の発達」（単元「交通機関の発達」）（中2）

成田重明「個人はどんなにして社会生活に適合するか。」（単元「個人と集団生活」）（中3）

協議 単元学習の展開例

### 昭和25年度 第3回教育研究発表会

主題 ガイダンス計画の立案と展開

授業 佐野敏夫「民主主義の本質」（単元「民主主義の大道を歩もう。」）（中3）

安井 司「現代の都市の生活」（単元「都市と農村」）（中1）

桑原宏道「工業的発展にはどんな条件が必要だろうか。」（単元「近代工業の発展と現状」）（中2）

協議 社会科の実態調査の結果について

### 昭和26年度 第4回教育研究発表会

主題 中学校教育の全体計画と実践

授業 佐野敏夫「関東地方の自然と生活」（単元「わが国土はわれわれにどんな生活の舞台を与えているか。」）（中1）

協議 講師 八田英次（大阪市教委）

昭和27年度 第5回教育研究発表会（昭和27年7月3日）

主題 独立後の教育の在り方とその実践

授業 安井 司「郷土の自然環境と生活はどんなつながりをもっているか。」

（単元「日本の自然と生活」）

協議 講師 松田 正（大阪市教委）

昭和28年度 第6回教育研究発表会（昭和28年11月13日）

主題 個人を育てる教育活動

授業 高岡輝夫「明治維新によって生活はどのように変わったか」（単元「明治維新によって生活はどのように変わったか。」（単元「明治維新はどのように行われたか。」）（中3）

協議 講師 八田英次（大阪市教委）

昭和29年度 第7回教育研究発表会（昭和30年10月26日）

主題 個人を育てる教育

授業 山崎俊郎「身分制度はどのように行われたか。」（単元「封建制度の確立」）（中2）

協議 生徒の趣味と社会の欲求

講師 八田英次（大阪市教委）

位野木寿一（大阪学芸大学）

戦後日本の新しい教育は、今までの戦前、戦時中の画一的全体主義的な教育をうちやぶるため、社会的民主的な人間を育てる教育に性急のあまり、個々の生徒の個性を尊重し、個性をいかす配慮がたりなかった点がみられる。

本校においては、社会的民主的な人間をそだてるとともに、個人の自主性に立脚した個性尊重の教育、すなわち、個人を育てる教育の必要性を痛感し研究と実践にとりくんだ。その研究と実践は、ガイダンスの研究よりはじめられ、ついで個々の生徒の特性、実態を知るための技術、特別教育活動の指導法、教科学習におけるカリキュラムの構成へと進展した。その後、研究実践は、中学校教育の全体計画の構成とその計画にもとづいた指導の実施、各教科における生徒の個性および諸能力の開発の方法や指導のための調査の研究へと発展した。このような学校ぐるみの研究体制のなかで社会科としての研究のとりくみがなされた。そのとりくみを一口でいえば、個人を育てる教育において社会科が受け持たねばならない役割は、個人主義の正しい姿を理解させ、自主的な実践力を養うことであると考えた。実際の指導においては、単元学習の展開のなかで個人学習の段階を重視し、個人差に応じた指導をおこなった。このような指導をおこなうことによって、生徒に分担責任を遂行し、全体への協力をはたしたというよろこびをあげあわせるとともに、生徒が自己の問題と真剣にとりくみ解決していくことが大切であるという単元学習のねらいをも達成しようとするものであった。

第5回教育研究発表会では、従来の社会科教育に対する再検討をおこない、グループ学習、教科書の取扱い、現場学習、生徒の研究と発表、家庭における社会科学習の指導、評価、クラブの指導、日本史教育などについて積極的な提案をおこなった。地理教育についても一般社会科からきりはなし日本史とおなじように社会科地理として取扱うことを主張し、具体的な授業構成プランをうちだしている。そこには、敗戦直後のアメリカ教育直輸入の臭味を洗いおとし、日本的社會科を建設しなければならないという熱意と「日本的」

という声にかくれて社会科のもつ進歩的な性格が見失われてはならないという立場がうかがわれる。

昭和35年度 第8回教育研究発表会

研究主題 中・高通しての学習指導の問題について

(1)研究授業 I 東京を中心とした交通機関 中1 山崎 俊郎

II インドの農村生活の変貌 高2 安井 司

(2)研究協議 中・高社会科の学習内容の検討(授業の反省と協議)

指導講師(大阪市教委) 八田 英次

〃 (大阪学芸大学) 位野木寿一

昭和36年度 第9回教育研究発表会

研究主題 社会科学学習内容の検討—歴史学習を中心として—

(1)研究授業 I ヨーロッパの封建制度 中2 山崎 俊郎

II インド文明のおこり 高1 高岡 輝夫

(2)研究協議 I 授業の反省と協議(年表、資料の活用、世界史の取り扱いに関する諸問題)

指導講師(大阪府教委) 杉本 恒男

司 会 安井 司

II 鎌倉・室町時代の取扱い

発表者(夕陽丘中学校) 西田 光男

学習指導における歴史意識の形成

発表者 高岡 輝夫

指導講師(大阪市教委) 八田 英次

〃 (大阪府教育研究所) 三宅 長兵衛

司 会(豊崎中学校) 佐野 敏夫

(3)講演 I 世界史教材の取り扱い方

講師(大阪学芸大学) 北山 康夫

II 時代の特色をどうとらえるか

講師(大阪学芸大学) 舟ヶ崎正孝

昭和37年度 第10回教育研究発表会

研究主題 社会科学学習内容の検討—政経社学習を中心として—

(1)研究授業 I 選挙権の拡大と選挙制度 中3 西田 光男

II 選挙と政治意識 高1 山崎 俊郎

(2)研究協議 I 政経社学習の諸問題(授業の反省と協議)

社会科地理と政経社の関連 安井 司

小・中・高校生にみられる政治意識について

高岡 輝夫

指導講師(大阪市教委) 佐野 敏夫

〃 (大阪府教委) 杉本 恒男

〃 (大阪学芸大学) 村田 迪雄

II 現代社会における諸問題と社会科教育

指導講師 (大阪学芸大学) 村田 迪雄  
 指導講師 (朝日新聞大阪本社) 熊本 忠良  
 " (大阪学芸大学) 村田 迪雄  
 " (大阪学芸大学) 酒井 忠雄  
 司 会 (大阪学芸大学附属高等学校池田校舎)  
 村野 実  
 三木 敏

- 昭和38年度 第11回教育研究発表会  
 研究主題 社会科学習内容の検討——倫理・社会分野について——  
 (1)研究授業 I 古代ギリシアの思想 (ソクラテス、プラトン)  
 高2 河井 真  
 II 人生の幸福 高2 高岡 輝夫  
 (2)研究協議 I 授業の反省と提案  
 人生観・世界観の取扱いについて 河井 真  
 学習指導計画について 高岡 輝夫  
 倫理・社会の教科書分析 西田 光男  
 司会 安井 司  
 II 倫理・社会学習上の問題点  
 指導講師 (大阪学芸大学) 村田 迪雄  
 司 会 山崎 俊郎
- 昭和39年度 第12回教育研究発表会  
 研究主題 社会科学習内容の検討——地理分野について——  
 (1)研究授業 I 瀬戸内海をはさむ中国・四国地方 中1 山崎 俊郎  
 II アジアの自然と生活 中1 安井 司  
 (2)研究協議 地誌学習の問題点 安井 司  
 指導講師 (大阪学芸大学) 位野木寿一  
 " (大阪府教委) 山田 静也  
 " (大阪市教委) 佐野 敏夫  
 司 会 (高津中学校) 磯 高材
- 昭和40年度 第13回教育研究発表会  
 研究主題 社会科学習内容の検討——歴史分野について——  
 (1)研究授業 I 鎌倉幕府の衰退 中2 西田 光男  
 II 鎌倉幕府の衰退 高1 高岡 輝夫  
 (2)研究協議 基本的事項の取扱いについて  
 鎌倉文化の取扱いについて 高岡 輝夫  
 戦後日本の取扱いについて 西田 光男  
 指導講師 (大阪市教委) 佐野 敏夫  
 " (大阪学芸大学) 舟ヶ崎正孝  
 (3)講演 室町時代の社会と文化  
 講 師 (京都大学) 柴田 実
- 昭和42年度 第15回教育研究発表会

研究主題	中学校における政経社学習の諸問題		
(1)研究授業	I 世論と政治	高 1	高木 正喬
	II わが国の両院制	中 3	安井 司
(2)研究協議	I 授業の反省と提案		
	中学校における政治学習の実践		西田 光男
	II 中学校における政経学習の諸問題		
	指導講師 (大阪府教委)		木下 良裕
	” (神戸大学)		和田 鶴藏
	” (大阪教育大学)		土居 靖美
	司 会		河井 真
昭和43年度	第16回教育研究発表会		
研究主題	政経社学習の諸問題		
(1)研究授業	選挙	中 3	高岡 輝夫
(2)研究協議	I 授業の反省と提案		
	本時教材の取扱い		西田 光男
	II 政経社学習の諸問題		
	指導講師 (大阪府教委)		杉本 恒男
	” (大阪市教委)		清田 一夫
	” (神戸大学)		和田 鶴藏
	” (大阪教育大学)		土居 靖美
	” (大阪教育大学)		歡喜 隆司
	司 会		安井 司
昭和44年度	第17回教育研究発表会		
研究主題	学習と生徒の社会的問題意識との結合		
(1)研究授業	裁判のしくみ	中 3	富田 健治
(2)研究協議	I 授業の反省と提案		
	学習と生徒の社会的問題意識との結合		西田 光男
	II 生徒は政経社の学習内容をどのように日常生活にかかしているか		
	指導講師 (文部省)		梶 哲夫
	” (大阪府教委)		杉本 恒男
	” (神戸大学)		和田 鶴藏
	” (大阪教育大学)		歡喜 隆司
	司 会		津崎 幸博
昭和46年度	第19回教育研究発表会		
研究主題	高等学校新指導要領の問題点		
(1)研究協議	I 高等学校新指導要領の問題点		
	II 中学校の新指導要領について		富田 健治
	III 倫理・社会、政治・経済の問題点		津崎 幸博
	IV 地理の問題点		田原悠紀男
	V 日本史の問題点		高岡 輝夫

	VI 世界史の問題点	高木 正喬
	指導講師 (大阪教育大学)	歎喜 隆司
	司 会	西田 光男
(2)講 演	高等学校新指導要領について	
	講 師 (大阪教育大学)	歎喜 隆司
昭和49年度	第22回教育研究発表会	
研究主題	中・高社会科の再検討——第1回 地理的分野——	
(1)研究授業	I ヨーロッパの農業	中2 富田 健治
	II ヨーロッパの農業	高1 田原悠紀男
(2)研究協議	I 地理分野における中・高社会科の再検討	
	II 地理的思考力について	
	III 中高における世界地誌学習について	
	指導講師 (大阪教育大学)	松田 信
	指導講師 (大阪教育大学)	酒井 忠雄
	司 会	高木 正喬
(3)講 演	地理学の一動向	
	——地理教育との関連を求めて——	
	講 師 (大阪教育大学)	松田 信

本校社会科教室は、昭和35年以降、中・高共同して教育研究発表を行なってきた。研究主題は発表毎に、「中・高通しての学習指導の問題について」「社会科学学習内容の検討」「中学校における政経社学習の諸問題」「政経社学習の諸問題」「学習と生徒の社会的問題意識との結合」そして「中高社会科の再検討」と種々な表題を使用しているが、その発表内容は中高6ヶ年一貫教育体制確立の方針にそって研究したものであった。その概要を一口で表現する事は困難であるが、敢えて述べるとすれば次の如くなる。中高一貫教育を目差す他の学校などでしばしばみられるものに、中高社会科学学習の内容は他教科と異なり、一見すると内容の重複が目立つが、その重複を排するためか、中1には地理分野、中2・3には歴史分野、高1には「現代社会」(政経社分野のことか?)、高2・3には歴史・地理分野から2科目選択、と言うような例もあるが、そのような例は地域の公立校での実情と余りに遊離してしまい、実証学校としての本校使命を果せないと考え、本校の姿勢としては、地域公立校と同様のカリキュラムで教授する立場に立ち、学習内容の検討と中・高学習内容の連関は如何にあるべきかについて試行錯誤を重ねながら、研究を続けてきた。

中高社会科学学習の内容検討とその連関について考える時、生徒の発達段階に適切な教授内容とは何か、またその教授法は如何にあるべきか、等が明らかにされねばならないが、この事は言うは易く行なうは難しである。その理由の一つには、教授者が生徒の発達段階を正しく把握できるかどうか、と云う事がある。例えば、昭和42年度から44年度にかけて、中高の政経社学習は如何にあるべきか、の研究をした際、各教官が1年間の教授計画案(配当時間を含む)をそれぞれ作り、どのような点を特に留意すべきかを提案・協議した事がある。その結果は次のような興味深い結果であった。中学校教官(専攻は地理・歴史各1

名の2名)の場合は、重要学習事項である制度・法律等の内容説明に重点を置く教授案であるに対して、高校教官(専攻は地理・哲学各1名、歴史2名の4名)の場合は、中学校教官同様の事項を取り上げながら、それらの成立過程に重点を置いた全く異なる教授案がそろって出てきて、その時の研究室には全員の笑い声がひろがった事があった。この事は教官が日常的に接する生徒の発達段階をどのように認識しているかを無意識なうちに示した興味深い事例である。

昭和35年以降の研究活動を概観した時、昭和40年度を境にその活動に変化をみる。昭和40年度までの活動では、中学校専任、高等学校専任となっても、授業の面では、中学の専任教官が高校生に、高校の専任教官が中学生に、1年間の授業を行なってきた。これは本校の設立趣旨にそった授業体制確立を模索した1つの試みであった。こうした例は私学等で中高一貫教育を志向しているところでは行なわれており、授業のみならず、担任制も持ち上りにしている例もある。また同じ中高一貫教育体制の学校で、6ヶ年を2・2・2に分けて、教科担任、ホーム・ルーム担任を3分して分担しているところもある。それぞれ、生徒の発達段階に即したより良き制度として志向されているのであろう。しかし、本校ではホーム・ルーム担任をも持ち上げるシステムを志向しなかった結果、社会科教室においても、昭和41年度以降、教科担任の面でも中高専任制を明確にした。その時は、生徒の発達段階を認識するためには、単に教科活動を通して把握する事は困難であり、生徒の教科外活動と日常的に接する中で得られるものもこれまた大きいためであった。そしてまた、本校が地域公立校の実情と遊離しない実証学校たらしめた必然的結果でもあった。

昭和44年から47年度にかけて社会科教室は大巾な人事異動を経験した。そうした中で、従来のものと異なる研究方法を模索する事となり、研究活動は若干停滞した。昭和49年度から再開した教育研究発表会からの研究活動は、基本的には従来の中高社会科の学習内容の検討とその連関性を研究するものである。そしてその研究方法は、研究発表会の発表という得てして発表のための発表になりがちであるが、そうした事に陥らないようにするために、次のようにしている。従来通り、各教官が日常行なっている授業を相互に参観し合って、相互批判を重ねる事。また、各教官が日常行なってきた授業の年間計画案とその授業ノートを相互に突き合せて、中学の教官が中学生の発達段階をどう扱っているか、また高校の教官は高校生をどう扱っているか、を明らかにして相互理解を深め、本校の使命である中高社会科の学習内容の検討とその連関性を追求し、より良い内容を提示せんとしている。

学習内容の検討と云うと、いわゆる「教材の精選」の問題が出てくるので、最後に、その事について若干述べてみたい。中高一貫教育と云うものを考える時、社会科という教科を担当する者ほど困惑する者は無いのではなかろうか。「明治維新」とか「日本国憲法」という学習事項を小中高の生徒は3度も耳にするのである。生徒にすれば、「あっ、またか」という事になり、小学生の時は社会科が好きであったのに、中高と進級するにつれて、社会科が嫌いになる例を耳にする度に社会科教師として考え込まざるを得ない。そのためか他校においては「教材の精選」すなわち学習事項の重複を避ける事と考えて、年間授業計画案を立案している所もあるようである。しかし本校では、実証学校と教育実習校という立場から、中学生にとっての「明治維新」はどのような内容で、どのようにそれを教えるか、そして、高校生に対してはどのような「明治維新」をどのように教えるべきか、

を従来通り研究し続けるつもりである。その事を「教材の精選」と見なして、今後も、地理、歴史、政経社各分野について研究成果を蓄積していくつもりである。

## § 2. 全国国立大学附属高校研究大会における研究発表

第2回全附連大会 S 35. 11. 4 於 奈良女子大学附高

研究主題 中・高社会科の学習内容の問題点 発表者 高岡 輝夫

発表要旨 中・高歴史分野の学習内容を比較すると、学習事項が重複している為に生徒は「同じもの」を二度学習しているように考え、学習意欲を失いがちである。その点を克服し、学習意欲を持たせ、歴史への関心を深めさせる為には、どのような視点にたち、また質的相違を持たせた授業をしたら良いか、その試案を、「エジプト文明とメソポタミア文明」および「信長・秀吉による国内統一」という二つの分野を例にして、中・高の両授業内容を提示し発表した。

第8回全附連大会 S 41. 10. 21~22 於 本校

研究主題 「倫理・社会」2年間の歩み 発表者 河井 真

発表要旨 昭和38年度以降の新指導要領において、「倫理・社会」が独立した分野になり、各校この分野をどのように扱ったら良いか暗中模索の状況だった、と云って良いであろう。そのような状態にあったため、河井が本校で行なった授業内容を敢えて報告する事によって、この新分野のあり方を検討せんとしたものである。(1)人間性の理解、(2)人生観・世界観、の2章は講義という授業形式をとり、(3)現代社会と人間関係、の章は生徒の発表という授業形式をとった実践報告を行ない、生徒の「思考力をたかめる」ためには教材資料はどの程度準備したか等を中心にした日常の授業の反省を報告した。

第9回全附連大会 S 42. 10. 27~28 於 東京教育大附高(大塚)

研究主題 歴史学習の問題点——思考力をたかめるために——

発表者 高岡 輝夫

発表要旨 本発表は第2回大会での発表を継続したものである。小・中・高の生徒は「同じもの」を三度耳にする訳だが、どの程度知識として身につけているかを調査して、その具体像を明らかにして、授業に役立てようとした。そして、日本史、世界史、政経・倫社を担当した経験をふまえて、実践した「鎌倉時代」の日本史・世界史の授業記録を提示し、社会科の各分野の関連と融合について検討したものを発表した。

第14回全附連大会 S 47. 10. 27~28 於 名古屋大学附高

研究主題 附高生の社会意識と授業 発表者 高木 正喬

発表要旨 昭和42年度から44年度にかけて本校社会科教室が行なった政経分野の内容検討の研究を踏えて、歴史分野の授業においても積極的に時事問題を取り上げて、それを歴史的背景などから解説する事が生徒の思考力を高める事になるのではないか、と報告。報告資料として、中1から高1までの生徒の夏期休暇中に考えた時事問題に関するアンケート調査の整理結果を提示した。

## § 3. 近畿附属連盟における活動

近附連中高社会科部会は、昭和34年に第1回の研究会がもたれて以来、毎年、当番校を中心として開かれている。以下の研究テーマは本校が担当した研究会のものである。



- 昭和34年度 5月10日  
 研究主題 地理的分野の再検討
- 昭和38年度 5月13日  
 研究主題 社会科における政経社の取扱い。
- 昭和43年度 (小中高合同) (1)6月11日 (2)10月29日  
 (1)研究主題 社会科の本質と改訂をめぐる諸問題  
 講師(名古屋大学) 重松 鷹泰
- (2)野外実習 堺・泉北臨海工業地帯

#### § 4. 文部省主催の講座及び『大阪教育大学紀要』における研究発表

- (1)文部省主催 中学校高等学校社会科歴史講座 S 40, 11. 4~12  
 於 国立教育会館

発表 各時代における文化の指導は、どのようであったらよいか  
 「鎌倉時代の文化」

資料 国際情勢を背景にした近代日本の指導は、どのようであったらよいか  
 「明治維新とその国際環境」

発表及び資料提出 高岡 輝夫

#### (2)『大阪学芸大学紀要』

昭和40年 (C『教育科学』第6号) 「ゴルギアス篇482C-486D考」 河井 真

昭和41年 (C『教育科学』第7号) 「中学校社会科歴史分野と高校日本史との関連について(第1報)」 西田 光男

昭和42年 (C『教育科学』第8号) 「中学校社会科歴史分野と高校日本史との関連について(第2報) —教科書に見られる人物の取扱いを中心に—」 酒井 忠雄・西田 光男

昭和43年 (『教科教育』第1号) 「中学校社会科歴史分野と高校日本史との関連について(第3報) —幼・小・中・高の歴史意識の形成(その1)」 酒井 忠雄・西田 光男

昭和44年 (『教科教育』第2号) 「中学校社会科歴史分野と高校日本史との関連について(第4報) —幼・小・中・高・大学の歴史認識の形成(その2)」

酒井 忠雄・西田 光男

黒田 伊彦・山内 篤



(教育研究発表会の授業風景)



(昭和50年12月 中2の野外実習風景)

# 数 学

## § 1. 数学科の人事異動

昭和22年4月1日、大阪第一師範学校男子部に、附属天王寺中学校が創設された。発足当初は、数学科の専任教諭は少なく、他教科との兼任で担当していたものである。昭和31年4月1日に、附属高等学校天王寺校舎が設置されて、数学科教諭の数も次第にふえ、昭和50年度現在では8名になっている。

本校教諭で、数学科を専任で担当したもの、および、担当しているものは、次の通りである。

氏 名	着任年月	離任年月	備 考
阪 倉 清太郎	22年7月	27年3月	大阪市教育委員会へ転出
齊 藤 敏 彦	24年4月	25年3月	本学附属天王寺小学校へ転出
福 原 公 雄	26年4月	48年8月	堺市教育委員会へ転出
川 野 太喜男	27年4月	33年3月	大阪市立古市小学校へ転出
笹 田 昭 三	33年4月	42年3月	鳥取大学へ転出
岡 森 博 和	33年5月	43年3月	大阪教育大学へ転出
岡 田 義 郎	35年4月	42年3月	甲子園大学へ転出
松 宮 哲 夫	37年4月		現職
的 場 克 嘉	38年4月	39年3月	大阪府立北野高等学校へ転出
横 田 稔 良	39年4月		現職
本 間 俊 宏	41年4月		現職
越 智 治 躬	42年4月		現職
平 林 宏 朗	43年4月		現職
網 脩 三	43年4月		現職
中 田 孟 邦	47年4月		現職
乾 東 雄	50年4月		現職

本校教諭で、他教科との兼任で数学科を担当したものは、次の通りである。

横 山 隆 吉	22年4月	27年3月	22～26年度担当 理 大阪府立清水谷高へ
佐 崎 良 雄	23年4月	44年3月	23～30年度担当 理 大阪市教育委員会へ
安 井 司	24年4月	46年3月	24年度担当 社 大阪市教育委員会へ
辻 江 正 夫	27年4月	38年3月	33年度担当 体 大阪市教育委員会へ

非常勤講師で数学科を担当したものは、次の通りである。( ) 内は担当年度を示す。

宮川 武 (23?)	本多義勝 (25)	正田孝彦 (31~47)	薬師寺春雄 (32)
城山義光 (34~35)	松井徳次 (34)	奥山晃弘 (35~37)	大山 豪 (36)
新谷 提 (38~39)	的場克嘉 (39)	両部 実 (42)	寺田 幹治 (42)
安井義和 (42~43)	乾 東雄 (46)	峰 節子 (48)	益田 端代 (49)

## § 2. 数学科の研究活動

本校における数学科の研究活動について詳細に論ずることは、紙幅の許さないことなので、次の1~7の項目について、目録を綴るにとどめたいと思う。今回は、過去30年間の資料を可能な限り収集することに重点をおき、他日、それらの資料によって、本校数学科教育の歴史を編纂するのに備えたいと思う。



### 1. 本校主催教育研究発表会

数学科は、本校創立以来、教育研究発表会として、昭和50年までに14回開催した。附属高校設置の昭和31年までに7回、それ以後も7回である。以下、そのテーマを掲げる。

第1回教育研究発表会 (昭和23年12月10日) (数学科第1回)

主題 ガイダンス並びに単元学習

授業 佐崎良雄「長さ・重さの単位 (単元「衣服」)」 (中1)

発表 佐崎良雄「数学単元学習の指導」

第2回教育研究発表会 (昭和25年2月3日) (数学科第2回)

主題 ガイダンスの組織と実践

授業 斉藤敏彦「測定した結果について我々はどうのように考えればよいか (測定)」 (中2)

本多義勝「校舎の高さを測ろう (測定)」 (中3)

協議 単元学習の展開例

第3回教育研究発表会 (昭和25年12月1日) (数学科第3回)

主題 ガイダンス計画の立案と展開

授業 佐崎良雄「測量と三角法の数学的研究 (図形と数学)」

協議 単元学習の反省

第4回教育研究発表会 (昭和26年10月31日) (数学科第4回)

主題 中学校教育の全体計画と実践

授業 佐崎良雄「いろいろのスポーツに使用されている運動場や道具について研究しよう (私たちのスポーツ)」 (中1)

協議 講師 小橋弥八 (大阪市教委)

第5回教育研究発表会 (昭和27年7月3日) (数学科第5回)

主題 独立後の教育の在り方とその実践

- 授業 佐崎良雄「美しい形を作る要素にはどんなものがあるか  
(形と私たち)」(中3)
- 協議 講師 阪倉清太郎(大阪府教委)
- 第6回教育研究発表会(昭和28年11月13日) (数学科第6回)
- 主題 個人を育てる教育活動
- 授業 福原公雄「東京への旅(交通機関)」(中1)  
川野太喜男「相似な図形(合同と相似)」(中2)
- 協議 講師 小橋弥八(大阪府教委)
- 第7回教育研究発表会(昭和30年10月26日) (数学科第7回)
- 主題 個人を育てる教育
- 授業 福原公雄「リンク(円と運動)」(中3)
- 協議 調査に基づく数学指導——論証の可能性——  
講師 上林弥四郎(大阪府立大学) 阪倉清太郎(大阪府教委)
- 第8回教育研究発表会(昭和35年6月27日) (数学科第8回)
- 主題 中・高通しての学習指導の問題について
- 授業 岡田義郎「判別式(二次方程式)」(高1)  
岡森博和「不等式と領域(函数とグラフ)」(高1)
- 協議 高等学校新入生の学力上の弱点について(中学校より高等  
学校への要望・高等学校より中学校への要望)  
講師 高橋陸男(本学) 立川正男(大阪府教委)
- 第10回教育研究発表会(昭和37年6月28日) (数学科第9回)
- 主題 新指導要領について
- 授業 岡田義郎「ベクトルの内積(ベクトル)」(高2)
- 発表 福原公雄「中学校における論証の限界」  
藤岡 豊(池田校舎)「二次関数の取扱い」  
岡田義郎・笹田昭三「ベクトル指導についての実験報告」  
岡森博和「新指導要領と数学教育の現代化」
- 講演 奥川光太郎(京都大学)「新教材に関して——ベクトル——」
- 協議 講師 奥川光太郎(京都大学) 高橋陸男(本学)
- 第12回教育研究発表会(昭和39年11月19日) (数学科第10回)
- 主題 図形における論証指導について
- 授業 福原公雄「2つの三角形の辺と角の大小関係(三角形の辺  
と角の大小関係)」(中2)
- 発表 松宮哲夫「図形における一般化・特殊化の段階指導」  
福原公雄「図形論証の指導方法についての問題点と対策」  
笹田昭三「生徒の論理的思考」
- 講演 黒崎 達「論証指導の方法の改善について」
- 協議 図形における論証指導について  
講師 井上良治(大阪府教委) 花井七郎(本学) 黒崎 達(本学)

第16回教育研究発表会（昭和43年10月17日） （数学科第11回）

- 主題 教材分析について  
授業 福原公雄「一次関数（一次関数とグラフ）」（中2）  
発表 福原公雄「教材分析の方法について」  
松宮哲夫「数概念の指導について」  
講演 阿部浩一「教材分析の観点について」  
協議 教材分析について  
講師 瀬戸川寛（大阪府教委） 阿部浩一（本学） 岡森博和（本学）

第18回教育研究発表会（昭和45年10月22日） （数学科第12回）

- 主題 高等学校の新指導要領の問題点  
発表 松宮哲夫「中学校の新しい指導内容について」  
網 脩三「高等学校における代数・幾何の問題点」  
本間俊宏「高等学校における解析の問題点」  
越智治躬「高等学校における確率・統計の問題点」  
横田稔良「高等学校における集合・論理の問題点」  
講演 高橋陸男（本学）「新指導要領について」  
協議 高等学校指導要領の問題点  
講師 高橋陸男（本学） 司会 平林宏朗

第20回教育研究発表会（昭和47年11月16日） （数学科第13回）

- 主題 高校新指導要領の問題点・その2  
——新数学Ⅰの内容の取扱いについて——  
発表 平林宏朗「数と式」 網 脩三「ベクトル」  
本間俊宏「写像」 越智治躬「確率」  
講演 高橋陸男「高校数学の内容とその取扱いについて」  
協議 新数学Ⅰの内容の取扱いについて  
講師 高橋陸男（本学） 三輪辰郎（本学） 司会 横田稔良

第22回教育研究発表会（昭和49年11月12日） （数学科第14回）

- 主題 教材の精選——数Ⅰの内容について——  
授業 平林宏朗「剰余系（数と式）」（高1）  
提案 数学科共同研究  
横田稔良「精選の観点」 本間俊宏「具体的提案」  
講演 黒崎 達「学校数学の体系に関する一私見」  
協議 生徒の実態に合った数学教育はどうあるべきか  
講師 黒崎 達（本学） 岡森博和（本学） 司会 越智治躬  
（なお、講師予定者 笹田昭三（鳥取大）は、当日欠席した）

（付記）第14回教育研究発表会で、数学科は発表する順番になっていたが、本校において第8回高等学校教育研究大会（全附連）（昭和41. 10. 21～22）を開催したため、それを以て、数学科の発表会に替えた。



第22回教育研究発表会（昭和49. 11. 12）

## 2. 大阪教育大学数学会主催算数・数学科教育研究発表会

大阪教育大学数学会の中学校部会は、新制中学校の発足した昭和22年に創設された。数学科教育研究発表会は、昭和22年6月21日に第1回を開催して以来、昭和50年までに、29回開催している。以下、本校教官による研究授業と研究発表を摘録したい。ただし、昭和22～28年、30～31年の9回分の内容は不明なので省略する。なお、以下の回数は、昭和3年の第1回算術教授講習会から数えての通し番号にした。

### 第30回（昭和29年4月27～28日）

主題 学習指導の問題

授業 福原公雄「分数と小数（数学と生活）」（中1）

発表 佐崎良雄「能力差と学習指導」

### 第33回（昭和32年6月28日）

主題 学習指導の問題点

発表 福原公雄「図形の論証について」

### 第34回（昭和33年9月17日）

主題 数学科学習指導要領改訂案と学習指導

授業 福原公雄「接線と弦とのなす角（円）」（中2）

### 第35回（昭和34年9月23日）

主題 数学科教材の系統的な発展体系

発表 福原公雄「計量および図形」

### 第36回（昭和35年5月24日）

主題 改訂指導要領における指導の留意点

——主として図形教材について——

発表 福原公雄「パズルとパラドックス」

### 第37回（昭和36年5月18日）

主題 新教材の指導法ならびに取扱いの程度

授業 岡田義郎「対頂角（証明の方法）」（中2）

発表 笹田昭三「高等学校指導要領改訂と中学校教材との関連」

### 第38回（昭和37年5月10日）

主題 新教材の指導

発表 笹田昭三「関数指導について」

- 第39回（昭和38年5月10日）  
主題 関数教材の指導  
発表 松宮哲夫「二次関数の指導」  
発表 岡森博和「関数指導における中高の関連」
- 第40回（昭和39年5月27日）  
主題 代数教材取扱いの新しい試み  
授業 松宮哲夫「一次方程式の解き方（一次方程式）」（中2）  
発表 的場克嘉「関数の指導——対応概念を中心として——」
- 第41回（昭和40年5月25日）  
主題 指導しにくい図形教材の扱い方  
授業 福原公雄「三角形の内心（三角形の三心）」（中2）
- 第42回（昭和41年7月4日）  
主題 中学校における数学教育の現代化  
授業 松宮哲夫「部分集合（集合）」（中1）  
発表 松宮哲夫「確率の指導について」  
岡森博和「集合と論理の指導について」
- 第43回（昭和42年5月18日）  
主題 数学教育の現代化について  
授業 松宮哲夫「連立不等式（一次不等式）」（中2）  
発表 松宮哲夫「中学校における集合指導について」  
横田稔良「論理に関する調査・実験・問題点について」
- 第44回（昭和43年5月23日）  
主題 数学教育の現代化について  
授業 福原公雄「相対度数の安定性（確率）」（中3）  
発表 松宮哲夫「集合の観点よりみた代数教材の指導について」
- 第45回（昭和44年5月22日）  
主題 改訂指導要領の問題点  
発表 福原公雄「関数の領域における問題点」  
越智治躬「確率・統計の領域における問題点」
- 第46回（昭和45年6月25日）  
主題 改訂指導要領における新教材の取扱い方  
授業 福原公雄「単元・逆元（演算）」（中3）  
発表 松宮哲夫「位相的な見方の指導」  
平林宏朗「数の構造」
- 第47回（昭和46年6月24日）  
主題 新教材指導上の問題点  
授業 福原公雄「計算機（タイガー計算機）」（中3）  
発表 松宮哲夫「数・式指導上の問題点」  
本間俊宏「中高関連領域における指導上の問題点」



第48回（昭和47年6月22日）

主題 新教材の指導

授業 中田孟邦「 $\{a + b\sqrt{2} \mid a, b \text{は有理数}\}$  のしくみ」

第49回（昭和48年6月21日）

主題 新教材の指導の問題点

授業 中田孟邦「確率の意味（確率）」（中2）

発表 松宮哲夫「確率の指導について」

第50回（昭和49年6月20日）

主題 教材の精選をめざして——内容の程度と系統——

授業 松宮哲夫「具体的事象の中に関数を見出す指導」（中3）

中田孟邦「関数の適応化の指導」（中3）

発表 松宮哲夫・中田孟邦「関数教材の精選について」

第51回（昭和50年6月26日）

主題 教材の精選について

授業 乾 東雄「対応と関数」（中1）

発表 松宮哲夫・中田孟邦ほか

「教材の精選——中学校における関数教育のあり方——」

（付記）大阪教育大学数学会のことについては、「大阪教育大学数学会五十年のあゆみ」

（大阪教育大学数学教室『数学教育研究』第4号、1974年）を参照されたい。



昭和49年 大阪教育大学数学会第50回算数・数学科研究発表会

大阪教育大学数学会



昭和39年 第40回大会 (天王寺)



昭和41年 第42回大会 (平野)



昭和48年 第49回大会 (天王寺)



昭和45年 第46回大会 (天王寺)



昭和50年 第51回大会 (平野)

### 3. 校内研究授業および研究発表

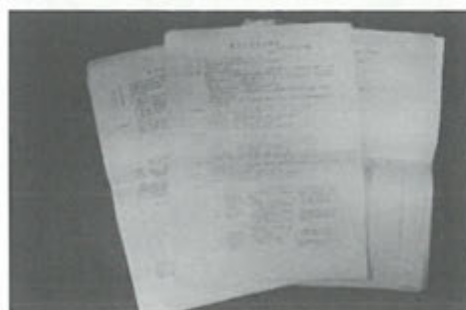
本校では、前記1～2の対外研究発表会の他に、校内で内輪に相互の研鑽を目的として校内研究授業または研究発表会を開いている。昭和43年頃までは、本校に赴任した教官が新任研究授業と称して、全教官参観のもとに授業を行ない、そのあと、1人につき、2～3時間をかけて厳しい反省会を行なったものである。その後、新任研究授業は廃され、その代わり、各科が自主的に、課題をもった研究授業または研究発表を、年に少なくとも1回行なうことになった。

学習指導案は、保存がなかなか難しく、多くは散逸しているが、保管されている分のみを、次に掲げることにする。なお、本校教官のうち、他校へ行って研究授業を行なった場合もあるが、それは、すべて省略することにした。

- ① 佐崎良雄「二等辺三角形の性質（平面図形の性質）」（中2）（昭和31. 6. 7）
- ② 松宮哲夫「文章題（数と計算）」（中1）（昭和37. 5. 15）
- ③ 松宮哲夫「三角形の角（平行線と角）」（中2）（昭和37. 6. 20）
- ④ 的場克嘉「数式」（高1）（昭和38. 5. 7）
- ⑤ 横田稔良「無限等比級数（数列と級数）」（高2）（昭和39. 6. 9）
- ⑥ 的場克嘉「集合」（高1）（昭和39. 9. 16）
- ⑦ 松宮哲夫「二次方程式と因数分解（二次方程式）」（中3）（昭和39. 10. 13）
- ⑧ 本間俊宏「領域における関数の最大最小について（二次不等式と領域）」（高1）（昭和41. 10. 17）
- ⑨ 平林宏朗「式の集合と代数系」（高1）（昭和43. 6. 5）
- ⑩ 網 脩三「不等式と領域」（高1）（昭和43. 10. 22）
- ⑪ 本間俊宏「確率実験・画鋸投げのまとめ（確率）」（高2）（昭和45. 1. 22）
- ⑫ 福原公雄「電子計算機のループについて（計算機）」（中3）（昭和46. 3. 5）
- ⑬ 松宮哲夫「一次関数（一次関数）」（中2）（昭和46. 9. 16）
- ⑭ 松宮哲夫「剰余系（数の集合と計算）」（中2）（昭和46. 11. 10）
- ⑮ 越智治躬「対数計算（対数）」（高1）（昭和46. 11. 17）
- ⑯ 網 脩三「ベクトルの定義（ベクトル）」（高2）（昭和46. 11. 17）



授業風景（統計）



数学科学習指導案

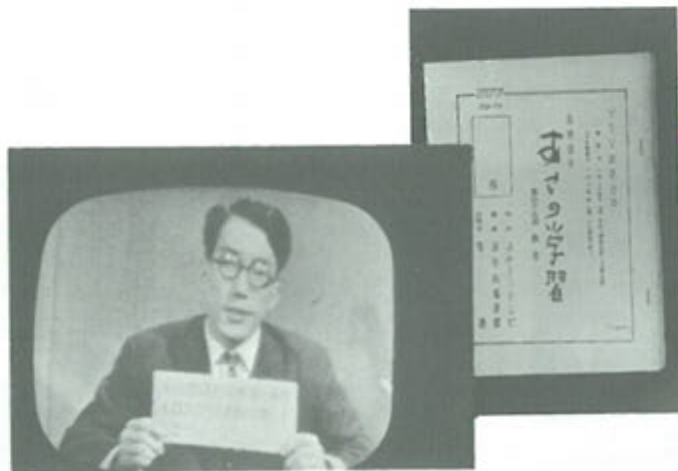
#### 4. 近畿附属連盟数学科分科会（中高部会）

近附連研究部会は、昭和34年度に発足して以来、17年を経過した。数学科分科会では、指導要領の問題点についての意見を文部省に提案したり、テーマを設定して協議会を開催した年もあったが、各校の研究概要の報告と情報交換や講演が近年の内容となっている。詳しい記録は他日を期することにして、ここでは、開催年月日、当番校、参加人数、内容を記録することにとどめたい。

34年度 (34. 5. 10. 日)	天王寺附中高	全員	協議「新指導要領の問題点」
35年度 (35. 5. 22. 日)	明石附中	17名	協議「数学教育の問題点」
36年度 (36. 9. 29. 金)	滋賀大附中		協議「図形指導の問題点」
37年度 (37. 6. 14. 木, 11. 6. 火)	奈女大附		授業、協議、11月は研究発表会
38年度 (38. 11. 8. 金)	平野附中	20名	協議「図形指導、現代化」
39年度 (40. 1. 20. 水)	奈学大附中	20名	研究発表会6篇、松宮も発表
40年度 (41. 2. 11. 金)	和大附中		協議「現代化」、発表4篇
41年度 (41. 11. 11. 金)	滋賀大附中	21名	授業、提案、協議、見学
42年度 (43. 3. 29. 金)	明石附中	18名	討議、報告、見学
43年度 (44. 2. 12. 水)	住吉附中	37名	講演、見学（小中高合同）
44年度 (44. 12. 5. 金)	天王寺附中高	24名	報告、協議「新教材」、見学
45年度 (45. 12. 9. 水)	京都附中	24名	授業、協議、報告
46年度 (46. 11. 12. 金)	桃山附中	17名	授業、協議、報告
47年度 (47. 11. 10. 金)	池田附中高	22名	発表（計算機）、協議、報告
48年度 (48. 12. 12. 水)	奈女大附中高	32名	発表、協議「教育課程」など
49年度 (49. 11. 15. 金)	平野附中高	21名	授業、発表、講演
50年度 (50. 12. 12. 金)	奈教大附中	26名	報告、講演

（付記）昭和39・40年度の両

年に、近附連全体として、『あさの学習』（進学指導連盟発行）を、毎月発刊し、また、日曜日毎にテレビ放送（読売テレビ YTV 10 ch AM8:45~9:15、名古屋テレビ NTV 11 ch AM8:45~9:15）を行なった。数学科は、延べ16回出演したが、本校教官が担当したのは、次の5回である。



近附連『あさの学習』（昭和39. 8）

松宮哲夫「平行四辺形」（39. 8. 9）、「三角比」（40. 1. 24）

福原公雄「比と比例ほか」（40. 8. 8）、「関数とグラフほか」（40. 11. 14）

「関数とグラフほか」（40. 12. 12）

## 5. 全国附属連盟数学会 (高校部会)

全附連高校部会の第1回全国高等学校研究大会(東大附高)が開かれたのは、昭和34年11月6～7日であった。以来、50年度まで17回を数えているが、数学会のあったのは、34、35、40、41、46、47年度の6回である。

このうち、本校で発表したテーマを次に掲げる。



全附連 (昭和41. 10. 天王寺)

### ① 岡森博和「論証指導——集合と論理の指導について——」

第7回全附連 (お茶の水女子大附高) (昭和40. 10. 22)

### ② 横田稔良「論理性に関する調査・実験・問題提起」

第8回全附連 (本学天王寺校舎) (昭和41. 10. 22)

## 6. 学会での報告

日本数学教育学会、数学教育学会、その他の研究集会において、本校教員が報告したものを摘録する。ここでは、地区的な研究集会や、講師として派遣されて行なった講演などの類は、一切省略した。なお、学会でのシンポジウムやパネルディスカッションは、本来ならば省くべきかも知れないが、それぞれの時期に、どんなことが問題にされたかの1つの記録として書き加えることにした。

### ① 阪倉清太郎「数学科学習指導の反省」

第31回日数教 (大阪) 大会 (昭和24. 7. 29)

### ② 岡森博和：シンポジウム「数学教育現代化のための具体的提案」

数学教育学会秋季年会 (名古屋大学) (昭和37. 10. 14)

### ③ 岡森博和「高校における集合指導の考察」

数学教育学会春季年会 (京都大学) (昭和38. 5. 26)

### ④ 松宮哲夫「図形の論証における発展的指導——特に一般化指導の場合——」

第45回日数教 (広島) 大会 (昭和38. 8. 9)

### ⑤ 福原雄雄「新しい指導法 (プログラム学習) について」

教員養成学部教員研究集会数学会 (大阪学芸大学) (昭和38. 9. 26)

### ⑥ 福原雄雄「プログラム学習のよい形態についての一つの試み」

教員養成学部教員研究集会数学会 (大阪学芸大学) (昭和39. 9. 29)

### ⑦ 松宮哲夫：パネルディスカッション「小中高一貫した教育課程——数学教育現代化の観点から見て——」

数学教育学会春季年会 (京都大学) (昭和40. 5. 21)

### ⑧ 岡森博和・松宮哲夫：パネルディスカッション「集合の基本的取扱いについて——小中高——」

教員養成学部教員研究集会 (大阪学芸大学) (昭和40. 9. 28)

### ⑨ 松宮哲夫「中学校における集合指導について」

教員養成学部教員研究集会数学会 (大阪学芸大学) (昭和40. 9. 29)

- ⑩ 岡森博和「高校における集合と論理の指導について」  
教員養成学部教官研究集会数学部会（大阪学芸大学）（昭和40. 9. 29）
- ⑪ 松宮哲夫「中学校における集合指導の問題点」  
第7回数実研（東京）大会（昭和41. 1. 4）
- ⑫ 松宮哲夫「中学校における確率の導入について」  
数学教育学会春季年会（京都大学）（昭和41. 5. 20）
- ⑬ 松宮哲夫「確率の指導について」  
第8回数実研（兵庫）大会（昭和41. 8. 2）
- ⑭ 本間俊宏「高等学校における微分方程式指導の改革」  
第48回日数教（神戸）大会（昭和41. 8. 4）
- ⑮ 松宮哲夫ほか「数学教育の現代化に関する実践的研究——集合に関する実験研究、  
集合の理解状態と集合指導による教育効果を発達段階および能力群別にみる——」  
第1回日数教論文発表会（東京教育大学）（昭和41. 12. 19）
- ⑯ 松宮哲夫：座談会「学習指導要領改訂に望む」  
『理数』編集部（42年4～5月号掲載）（昭和42. 1. 29）
- ⑰ 松宮哲夫ほか（学数研）「確率・統計に関する指導についての実践的研究（その1）」  
第50回日数教（東京）大会（昭和43. 8. 6）
- ⑱ 松宮哲夫ほか（学数研）「中学校における確率・統計の指導についての実験的研究  
（その2）」  
第3回日数教論文発表会（大阪教育大学）（昭和43. 10. 28）
- ⑲ 松宮哲夫「数概念の指導について——数概念に対する生徒の認識という視点より——」  
第3回日数教論文発表会（大阪教育大学）（昭和43. 10. 29）
- ⑳ 本間俊宏「高等学校における微分方程式指導の改革」  
第3回日数教論文発表会（大阪教育大学）（昭和43. 10. 29）
- ㉑ 松宮哲夫ほか（学数研）「確率・統計に関する指導についての実践的研究（その3）」  
第51回日数教（熊本）大会（昭和44. 8. 5）
- ㉒ 松宮哲夫「数概念の発達からみた数学教育の問題」  
第14回数実研（大阪）大会（昭和44. 8. 9）
- ㉓ 本間俊宏ほか「関数についての認識調査」  
第14回数実研（大阪）大会（昭和44. 8. 9）
- ㉔ 松宮哲夫ほか（学数研）「確率・統計に関する指導についての実践的研究（その4）」  
第52回日数教（水戸）大会（昭和45. 8. 6）
- ㉕ 越智治躬ほか（学数研）「確率・統計の問題点について」  
第52回日数教（水戸）大会（昭和45. 8. 6）
- ㉖ 松宮哲夫ほか「システム・デザインに関する指導について（その1）」  
第53回日数教（東京）大会（昭和46. 8. 6）
- ㉗ 本間俊宏「対数計算の指導」  
第18回数実研（広島）大会（昭和46. 8. 8）

- ⑳ 松宮哲夫ほか(学数研)「システム・アナリシスに関する指導について(その2)」  
第6回日数教論文発表会(大阪教育大学) (昭和46. 10. 31)
- ㉑ 松宮哲夫・中田孟邦ほか(学数研)「システム・アナリシスに関する指導について  
(その3)」  
第54回日数教(宮城)大会 (昭和47. 8. 5)
- ㉒ 本間俊宏:シンポジウム「変換の教育について」  
数学教育学会秋季年会(京都大学) (昭和47. 10. 15)
- ㉓ 松宮哲夫・中田孟邦ほか(学数研)「数学教育のシステム化に関する実践的研究(そ  
の1)——関数関係について(その1)——」  
第55回日数教(徳島)大会 (昭和48. 8. 5)
- ㉔ 松宮哲夫:シンポジウム「現代化の功罪」  
数学教育学会秋季年会(岡山大学) (昭和48. 10. 14)
- ㉕ 松宮哲夫・中田孟邦・福原公雄ほか(学数研)「数学教育のシステム化に関する実践  
的研究(その2)——(1)関数教材の指導実践  
(2)関数的見方・考え方の指導——」  
第56回日数教(東京)大会 (昭和49. 8. 5)
- ㉖ 本間俊宏「論理の指導」  
第24回数実研(三重)大会 (昭和49. 8. 9)
- ㉗ 中田孟邦・本間俊宏:シンポジウム「指導法の現代化とは何か」  
数学教育学会秋季年会(京都大学) (昭和49. 10. 13)
- ㉘ 松宮哲夫:シンポジウム「やる気を起させる数学教育——関数・図形を中心に——」  
数学教育学会春季年会(大阪大学) (昭和50. 4. 5)
- ㉙ 附属天王寺中・高校 数学科(平林、越智、網、横田、本間、松宮、中田、乾)  
「教材内容の精選について」  
第57回日数教(大阪)大会 (昭和50. 8. 4)
- ㉚ 松宮哲夫・中田孟邦・岡森博和ほか「中学校における関数教育」  
第57回日数教(大阪)大会 (昭和50. 8. 5)
- ㉛ 松宮哲夫・中田孟邦・福原公雄ほか(学数研)  
「数学教育のシステム化に関する実践的研究(その3)——関数的な見方  
・考え方の指導——」  
第57回日数教(大阪)大会 (昭和50. 8. 5)
- ㉜ 本間俊宏・岡森博和ほか「高等学校における論理教育」  
第57回日数教(大阪)大会 (昭和50. 8. 5)
- ㉝ 松宮哲夫:シンポジウム「教育課程改訂に望む」  
数学教育学会秋季年会(東京大学) (昭和50. 10. 1)

(付記) 上記の目録のうち、学数研とあるのは、大阪学校数学研究会(昭和13年創設、  
代表は上林弥四郎)の略称であり、共同研究であることを意味する。



研究発表要項

## 7. 研究論文・著書等

本校教官が、本校在任期間に著述した論文および著書のうち、資料の保管されている分について摘録する。

論文の発表機関は、主として、『研究紀要』(本校)、『研究集録』(本校)、『大阪教育大学紀要』、『数学教育研究』(大阪教育大学数学教室)、『日本数学教育学会誌・数学教育』(日本数学教育学会)、『数学教育学論究』(日本数学教育学会)、『研究紀要』(数学教育学会)、『算数と数学』(教育総合研究所)、『教育科学・数学教育』(明治図書)、『月刊すうがく』(数学教育実践研究会)などである。

以下、年代順に、テーマ・書名・機関誌名・紀要番号、発表・刊行年月日を記す。



研究発表要項

- ① 阪倉清太郎「アメリカに於ける数学科単元学習」 本校『研究紀要』第1集  
pp.150～172 (昭和23. 12. 10)
- ② 佐崎良雄「数学科単元学習の理想と実際」 本校『研究紀要』第1集  
pp.173～195 (昭和23. 12. 10)
- ③ 阪倉清太郎「数学科単元学習の反省と指導の留意点」、本校『研究紀要』第2集  
pp.160～166 (昭和25. 1. )
- ④ 阪倉清太郎・佐崎良雄・福原公雄「数科学習指導要領の改訂」 本校『研究紀要』  
第4集 pp.90～97 (昭和26. 10. 31)

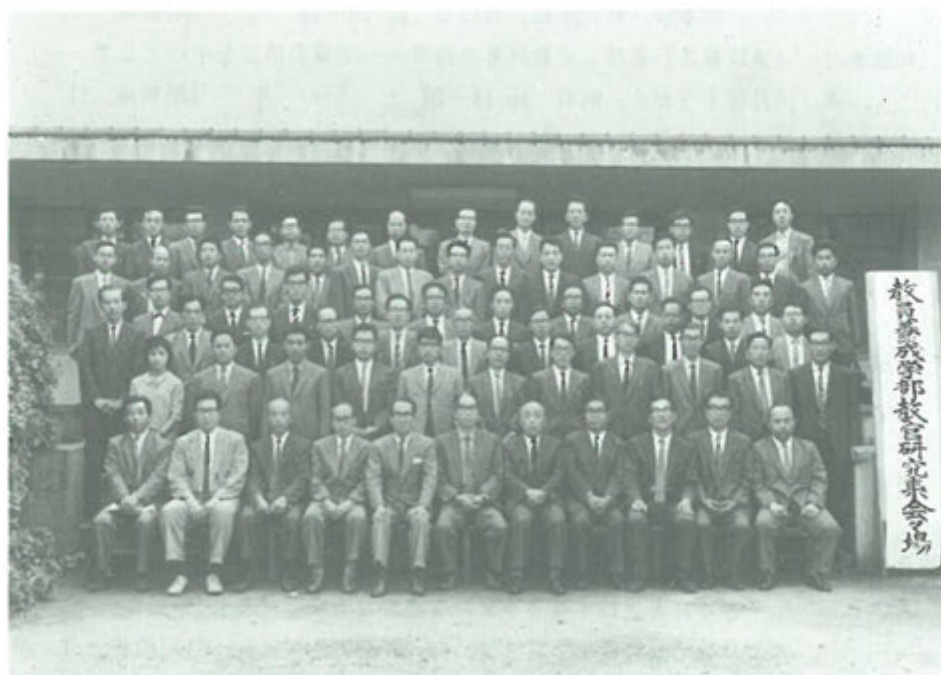


- ⑤ 阪倉清太郎・佐崎良雄・福原公雄「数学科教育活動における道德教育」 本校『研究紀要』第4集 pp.129~131 (昭和26. 10. 31)
- ⑥ 佐崎良雄「数学科学習指導において考慮されつつある問題」 本校『研究紀要』第5集第3分冊 pp.3~7 (昭和27. 7. )
- ⑦ 福原公雄「数学科指導上の問題に関する実験的考察」 本校『研究紀要』第5集第3分冊 pp.7~12 (昭和27. 7. )
- ⑧ 川野太喜男「調査の上から見た単元学習の問題」 本校『研究紀要』第5集第3分冊 pp.12~26 (昭和27. 7. )
- ⑨ 福原公雄「数学科における個人の指導」 本校『研究紀要』第6集 pp.115~127 (昭和28. 11. 10)
- ⑩ 川野太喜男「数学科における家庭学習状態調査」 本校『研究紀要』第7集 pp.120~126 (昭和30. 10. 26)
- ⑪ 川野太喜男「数学科学習指導上の問題に関する実験的考察」 本校『研究集録』第1集 pp.37~43 (昭和33. 1. )
- ⑫ 福原公雄「パラドックスとパズル」 本校『研究集録』第2集 pp.29~40 (昭和35. 3. )
- ⑬ 福原公雄「図形の指導体系」 『大阪学芸大学紀要』C教育科学第1号 pp.95~100 (昭和35. 3. 20)
- ⑭ 笹田昭三「中学校における関数指導の一考察——高校新入生の学力実態調査を中心として——」 本校『研究集録』第3集 pp.27~34 (昭和36. 6. )
- ⑮ 岡森博和「中学校・高等学校六か年一貫の数学教育——代数的教材について——」 本校『研究集録』第3集 pp.35~39 (昭和36. 6. )
- ⑯ 福原公雄「中学校における論証の限界についての一考察」 本校『研究集録』第4集 pp.33~43 (昭和37. 6. )
- ⑰ 岡田義郎「高校新指導要領における新教材についての一実験——『複素数平面』について——」 本校『研究集録』第4集 pp.44~48 (昭和37. 6. )
- ⑱ 岡森博和「高校における論理指導について」 明治図書『教育科学・数学教育』No.22 pp.66~74 (昭和37. 12. )
- ⑲ 岡田義郎・笹田昭三「ベクトル指導についての実験報告」 本校『研究集録』第5集 pp.66~72 (昭和38. 6. )
- ⑳ 松宮哲夫「数学教育の問題点」 数学教育学会『研究紀要』V-1 pp.4~5 (昭和38. 8. )
- ㉑ 松宮哲夫「図形の論証における発展的指導」 『算数と数学』No.143 pp.64~67 (昭和38. 12. )
- ㉒ 的場克嘉「関数の探究」 (昭和39. 2. )
- ㉓ 福原公雄「優れたプログラムを作ろう」 『プログラマー』第14号 (昭和39. 5. 1)
- ㉔ 福原公雄「図形教材のプログラミングについての一私見」 『プログラマー』第15号 (昭和39. 6. 1)

- ②⑤ 福原公雄「プログラム学習の良い形態についての一実験」 本校『研究集録』第6集  
pp.8~15 (昭和39. 7. )
- ②⑥ 松宮哲夫「方程式指導における同値関係のおさえ方」 『算数と数学』No. 150  
pp.50~53 (昭和39. 7. 1)
- ②⑦ 福原公雄「約数・倍数の指導」ほか(指導の焦点に連載) 大阪書籍『中学数学』  
No.32~52 (昭和40. 4. 1~42. 1. 15)
- ②⑧ 松宮哲夫「『数学教育の現代化』に関するアンケートについての意見」 数学教育学会『研究紀要』VI-4 pp.10~12 (昭和40. 5. 20)
- ②⑨ 松宮哲夫「文字式や方程式における用語とその指導」 『算数と数学』No. 161  
pp.51~53 (昭和40. 6. 1)
- ③⑩ 松宮哲夫(共著)『二次関数』 岩崎書店 (昭和40. 10. 5)
- ③⑪ 松宮哲夫「中学校における集合指導の問題点」『月刊すうがく』Vol. 1.2-No.3  
pp.29~34 (昭和40. 12. )
- ③⑫ 松宮哲夫「集合指導について」 『算数と数学』No.168 pp.52~54  
(昭和41. 1. 1)
- ③⑬ 福原公雄(共著)『中学数学』(1年・2年・3年用教科書) 大阪書籍  
(昭和41. 1. 30)
- ③⑭ 岡森博和「高校における集合代数と論理の指導について」 金子書房『算数・数学教育の研究』 pp.55~58 (昭和41. 3. 21)
- ③⑮ 松宮哲夫「中学校における集合指導の問題点」 金子書房『算数・数学教育の研究』  
pp.49~55 (昭和41. 3. 21)
- ③⑯ 福原公雄「プログラム学習の良い指導形態についての一実験」 金子書房『算数・数学教育の研究』 pp.219~222 (昭和41. 3. 21)
- ③⑰ 松宮哲夫「中学校における確率指導——その実践報告——」 本校『研究集録』第8集  
pp.33~53 (昭和41. 6. )
- ③⑱ 松宮哲夫「中学校における確率の導入」 数学教育学会『研究紀要』VII-4  
pp.19~30 (昭和41. 8. )
- ③⑲ 松宮哲夫「中学校における確率指導の展開と問題点」 『月刊すうがく』Vol. 3-No.2  
pp.12~18 (昭和41. 10. )
- ④⑩ 松宮哲夫「一般化・特殊化・類推の段階指導」 『算数と数学』No. 178  
pp.27~28 (昭和41. 11. 1)
- ④⑪ 松宮哲夫「中学校における確率指導の実際」 『算数と数学』No. 180  
pp.52~55 (昭和42. 1. 1)
- ④⑫ 本間俊宏「私たちの高校数学教育テキスト研究・ミクシンスキー演算子法による微分方程式の指導」 明治図書『教育科学・数学教育』  
No.78 (昭和42. 2. )  
No.80~83 (昭和42. 4~7)
- ④⑬ 岡森博和『集合代数』 岩崎書店 (昭和42. 3. 10)
- ④⑭ 松宮哲夫「中学校における集合指導について——集合指導の展開および中学生の集合に対する認識の実践研究——」 本校『研究集録』第9集 pp.40~78  
(昭和42. 6. )

- ④5 松宮哲夫ほか(学数研)「数学教育の現代化に関する実践的研究Ⅰ——中学生の集合理解に関する実践研究——」『数学教育学論究』XIV  
pp.10~25 (昭和42. 7. 15)
- ④6 福原公雄「教材の分析について(その1)——良い数学の授業のための——」本校『研究集録』第10集 pp.37~46 (昭和43. 6. )
- ④7 福原公雄(共著)『中学数学』(1年・2年・3年用教科書) 大阪書籍  
(昭和44. 1. 30)
- ④8 松宮哲夫「数概念の指導について——数概念に対する中・高校生の理解と認識——」本校『研究集録』第11集 pp.17~53 (昭和44. 7. )
- ④9 平林宏朗「高等学校に於ける代数系の指導について——従来の教材を基礎にして——」『大阪教育大学紀要』第18巻V教科教育 pp.141~153 (昭和45. 3. 30)
- ⑤0 三輪辰郎・松宮哲夫「関数の特性をとらえる試み」秋月委員会『特定研究——数学教育の現代化——』(第1班報告) pp.100~103 (昭和46. 2. )
- ⑤1 松宮哲夫(共著)『算数・数学授業の事典』岩崎書店 (昭和46. 3. 25)
- ⑤2 松宮哲夫「中学校における確率・統計の指導についての実験的研究——とくに統計的仮説検定の指導について——」本校『研究集録』第13集 pp.12~19  
(昭和46. 7. )
- ⑤3 平林宏朗「高等学校における行列の指導について——2次・3次の行列を中心として——」本校『研究集録』第13集 pp.20~43 (昭和46. 7. )
- ⑤4 本間俊宏「〈実践報告〉高校 対数計算の指導——演算の構造を中心として——」『月刊すうがく』No.47 pp.14~20 (昭和46. 11. )
- ⑤5 松宮哲夫(共著)『数学』(中1年・2年・3年用教科書) 啓林館  
(昭和46. 12. 10)
- ⑤6 松宮哲夫・中田孟邦ほか(学数研)「システム・アナリシスに関する実践的研究(2)——システム・アナリシスに関する指導実験——」『日本数学教育学会誌』Vol.54-No.5 pp.2~8, 14 (昭和47. 5. 1)
- ⑤7 福原公雄「中学校における計算機の指導の記録——タイガー計算機およびセイコーS-301を使用して——」本校『研究集録』第14集 pp.70~79  
(昭和47. 6. )
- ⑤8 松宮哲夫「中学校における確率についての実験的研究——とくに確率概念の認識について——」本校『研究集録』第14集 pp.80~99 (昭和47. 6. )
- ⑤9 松宮哲夫「大正時代における中学校数学科教授要目改正中止の事情についての覚え書——とくに大正13年発表予定の改正要目の場合——」本学『数学教育研究』第2号 pp.32~50 (昭和48. 3. 20)
- ⑥0 中田孟邦・松宮哲夫「数学教育におけるシステム・アナリシスに関する実践研究」本校『研究集録』第15集 pp.1~29 (昭和48. 6. )
- ⑥1 平林宏朗「高等学校新指導要領による代数的構造の取り扱いについて——中学校との関連において——」本校『研究集録』第15集 pp.30~35  
(昭和48. 6. )

- ⑥2 岡森博和・本間俊宏『関数と解析』 国土社 (昭和48. 9. 30)
- ⑥3 本間俊宏「〈提案〉高等学校 行列の指導——実践の方向について——」 『月刊すうがく』 No.62 pp. 34~38 (昭和49. 5. )
- ⑥4 本間俊宏「問題提起に対する意見 構造の指導は必要か」 明治図書『教育科学・数学教育』 No.167 pp. 50~57 (昭和49. 5. )
- ⑥5 松宮哲夫「中学校における確率指導についての考察——中学生の確率概念に対する認識に基づいて——」 本校『研究集録』第16集 pp. 1~8 (昭和49. 6. 30)
- ⑥6 松宮哲夫(共著)『改訂数学』(中1年・2年・3年用教科書) 啓林館 (昭和49. 12. 10)
- ⑥7 松宮哲夫・中田孟邦「中学校における関数指導についての考察——関数の具体的指導例とその考察——」 本学『数学教育研究』第4号 pp. 89~96 (昭和50. 3. 20)
- ⑥8 松宮哲夫・中田孟邦ほか編著「大阪教育大学数学会五十年のあゆみ」 本学『数学教育研究』第4号 pp. 115~252 (昭和50. 3. 20)
- ⑥9 岡森博和・松宮哲夫・中田孟邦ほか「中学校における関数教育」 本学『数学教育研究』第5号 pp. 156~191 (昭和51. 3. 20)



教員養成学部教員 (昭和40年9月)

### § 3. 数学科教育研究のあゆみと今後の方向

以上の目録だけでは、我々が、何を志向し、どんな理念のもとに、数学教育を行ない、研究をしてきたかについて分かりにくいので、ここでは、その概説を試みたいと思う。

#### 1. 昭和20年代

この時期は、本校の草創期にあたる。その前半は占領下にあった。数学科を担当したものは、阪倉、横山、佐崎、斉藤、安井、そして、福原、川野である。数学教育界は、前半が単元学習への道行きにあり、後半が単元学習から系統学習への移行期に該当する。

さて、昭和22年7月、本校初の数学科専任教諭として阪倉が赴任した。阪倉はそれまで大阪第一師範学校男子部において予科生の数学第一類を担当していた関係で、アメリカ文化センターから師範に送られてくる教科書や教育書の原書を読む機会があり、アメリカにおける教育や数学教育の事情に通じていた。

昭和23年9月には、「算数・数学科指導内容一覧表」(文部省)が発行されて、翌24年4月から単元学習が実施される運びとなった。そこで、文部省は、23年の夏季休暇中に、各府県の代表者を集めて単元学習指導者養成講習会を開催したが、その折、阪倉と佐崎とが助手のような仕事を勤め、また、単元構成の一例「住宅」を作成し資料として提示した。本校において、単元学習の実験授業を初めて行なったのは、23年9月6日から同年10月31日の期間である。このような経過のうちに、本校主催第1回教育研究発表会(23. 12. 10)が行なわれ、数学科では、「単元学習の指導」というテーマのもとに、アメリカにおける数学科単元学習、単元学習の理想と実際について発表した。

昭和24年度の第2回教育研究発表会の時点では、本校において単元学習を実施して以来1年4か月が経過しており、「単元学習の展開例」をテーマとして発表した。 「単元学習によって動機づけられ習得されようとするすべての技能は、ある時期に於いて数学の体系に還元され位置づけられ修練される必要を、痛切に最近感ずる」と、阪倉は述べて、単元学習の反省を行なって



昭和24年の検定教科書

いる。実は、その教育研究発表会より少し前の24年7月には、大阪学芸大学において、第31回日数教(大阪)大会が開催され、阪倉は、「数科学習指導の反省」というテーマで報告し、単元学習に対して、すでに反対していたのである。この24年より、学力低下の問題が起り、本校も含めた大阪アチーブメントテスト研究会では、その面の調査を行なっている。本校では、もともと単元学習には反対であったが、ある期間正直に実践研究を行ない、その結果、やはりよくないことを主張したのである。そこで、昭和25年度の第3回教育研究発表会では、「単元学習の反省」について報告した。その年より、単元学習は生活単元学習とよばれるようになり、ようやく盛んになってきた頃でもあった。

昭和26年9月には、サンフランシスコで対日平和条約が結ばれた。その頃から民間教育運動は盛んになり、26年には日教組第1回教研集会在、28年には数教協第1回全国大会が開催されるなど、基礎学力の低下の実態と対策をどうするかの問題が起り、また、単元

学習に対する批判が活発化してきた。27年からは日教組や国立教育研究所（31年からは文部省も）によって学力調査が行なわれ、また、28年の第35回日数教（富山）大会では、学習指導要領に関する建議を文部省に提出している。

このような動向の中で、本校でも、佐崎、福原、川野らは、27、8年頃から、図形における論証指導を試みて、30年度の第7回教育研究発表会では、論証の可能性をテーマに発表した。他方、26年度より、数学科学習指導において考慮されつつある問題として、能力別指導を取り上げ、その年度は実験段階として、中3を主要教科の成績の基準によって能力別編成し主要教科の指導を実施したが、その反省に立って、27年度は、能力別編成を廃し、自然学級で生徒の能力の程度に応じたグループ編成の方法に変更している。このような能力別編成は、本校においては、後年の39～40年度（附高8期生）のコース制採用のときとの2回だけであった。28年から30年度にかけては個人を育てる教育をテーマとして取り上げ、優秀児・遅進児の指導、誤答の研究、答案の返却方法など、個人指導の方法について研究したが、生徒のひとりひとりをたいせつにして指導する精神は、現在もなお、本校の数学科の伝統として受け継がれている。

## 2. 昭和30年代の前半

昭和31年4月、本校に附属高等学校が設置されて、中学校単独時代に終りを告げ、中高六か年一貫教育の体制に入った。この時期に数学科を担当したものは、福原、川野、辻江、笹田、岡森、岡田である。

本校では、中高六か年一貫教育の体制を実現していくため、いろいろと実践研究した。一貫教育としてのカリキュラムの作成、生徒の生活指導計画、連絡進学の実施と合理化などについてである。

数学科では、中・高等学校指導要領の、特に中3と高1の教材の重複をつとめてさけて一貫したカリキュラムを作成することに努力した。その結果、昭和35年度の第8回教育研究発表会では、「中高通しての学習指導の問題」というテーマについて発表している。また、36年に岡森は、「中学校・高等学校六か年一貫の数学教育——代数教材について——」の案をまとめた。

なお、後年のことについて触れるが、本校において、中高六か年一貫の教育体制が整備された昭和30年代の末期から昭和50年3月まで、中3の3学期に、高1の数学Ⅰの内容の1～2章分を指導した。そのため、高1に外部から進学してくるものを対象として、新年度の始まるまでの春休み中に、3日間約10時間分の補講を行なったものである。

昭和34年度には、近附連の研究集会分科会と全附連の全国高等学校研究大会の第1回がそれぞれ開催され、研究発表したり情報交換したりして、現在（第17回）に及んでいる。

## 3. 昭和30年代の後半から昭和40年代の前半

この時期は、数学教育現代化の走りから盛んになるまでの期間にあたる。この期の後半は人事異動の激しいときであったが、数学科の担当者は、福原、松宮、笹田、岡森、岡田、的場、横田、本間、越智、平林、網である。

昭和33年10月に官報として告示された小中学校学習指導要領（37年完全実施）につづいて、35年10月には、高等学校指導要領が告示された（38年実施）。これには、数学ⅠとⅡBの指導上の留意事項に、集合の考えがはいっていて、いわゆる数学教育現代化の走りとなった。同時に、コース制も強化された。

その頃、欧米においては、1957（昭32）年10月のソ連のスプートニク打上げのショックから、科学技術教育の遅れていることのあせりからくる要請や、数学教育と現代数学の背理現象などの問題に対処するために、大きく揺れ動いた。1958（昭33）年にはアメリカでSMSGを組織して教科書づくりを始め、1962（昭37）年にはICMIのストックホルム会議において数学教育現代化についてのケメニー報告と討論が行なわれるなど、数学教育現代化の問題は、世界的な大きな問題となってきた。日本においても、昭和34年頃に数学教育現代化の用語が生まれ、35年には第8回教数協大会で数学教育現代化の方針が明確にされ、37年には、水道方式やプログラム学習がブームとなり、さらに、39年にはモイズとリッチモンドが来日してSMSG研究セミナー（日本数学会主催、日本数学教育会後援）が東京、京都で開催され、40年にはケメニーが来日して講演会が行なわれた。

このようなあわただしい動向の中に、本校でも、現代化にとり組むことになった。36年から、新教材の複素数平面、ベクトルなどの実験授業を開始した。37年の第10回教育研究発表会では、「新指導要領について」をテーマとして実践報告を行なったり、また、「新指導要領と数学教育の現代化」(岡森)を発表したりしたものである。



38年（9月）からは3か年にわたり、文部省と大阪学芸大学の共催で、教員養成学部教官研究集会数学部会が行なわれ、本学の数学教室および附属の算数・数学科担当者が全員参加したが、その集会のテーマが、「数学教育の現代化」であったので、いわゆる、現代化ムードに浸ることになったのである。この集会以前の5月より、岡森、

教員養成学部教官研究集会集録（昭和38～40）的場、松宮らは、現代化についてのゼミナールを定期的にもって研究した。欧米での現代化は、上位の4分の1を対象にして現代数学を分かり易く教えているが、日本ではそうであってはならない、数学教育は子どもの質をどのように変えていくかが問題である。したがって、授業のつまづきや生徒の認識を調べ、それをどのように打開していくかを実践研究すること、そしてその打開のために集合や論理が必要であれば指導するとよいという方針のもとに、関数教育について実践するために、中・高とも、38年から集合指導に踏み切り、その結果を、上の集会で発表したのである。また、福原は、主として、指導方法、とくに、プログラム学習について実践研究を行ない同集会に報告している。

この研究集会は40年度（9月）に終わったが、翌41年度からは、大阪学芸大学数学会においても、「数学教育の現代化」をテーマとして研究していくことになり、全学的に現代化研究への姿勢がととのっていった。

このような動向の中で、43年には、「中学校の教育課程の改善について」の答申（教課審）が出され、文部省の手によって現代化が進められていくことになる。同年より、文部省、都道府県教委の主催により、中・高等学校の数学科教員を対象として、数学教育現代化講座が開始された。44年には中学校学習指導要領が告示され（47年度より実施）、45年には高等学校学習指導要領が告示された（48年度より実施）。これらは、現代化と集約・精選を旗印としたものであったが、その現代化は欧米流のもので、日本の教育に根ざしたもの

ではなかった。例えば、中学校の「数の集合と構造」などの数学的すぎる教材は、先輩の先生などは学生時代にならなかつたこともなく、現代化講座を受講したとはいうものの、とまどうばかりであり、多くの問題が湧き起こってきた。このようなこともあって、中学校学習指導要領完全実施の年・47年の10月には、文部省から、学習指導要領の弾力的運用が通達されたほどであった。

なお、本校は、43年の第16回教育研究発表会において、「教材分析について」というテーマで、福原、松宮が発表を行なったが、そのうち松宮は、数概念に対する中・高校生の理解と認識についての調査結果と、それにもとづいて当時の数学教育が上すべりしていることを反省し、現代化が子ども不在になっていることを指摘している。



昭和42年 数学科・マラソン大会参加記念

#### 4. 昭和40年の半ばより現在まで

昭和40年代の半ばの本校数学科の陣容は、福原（48年8月転出）、松宮、平林、越智、網、横田、本間の7人で、47年には中田が、50年には乾が加わって、50年度現在では8名になっている。50年4月に中高とも各学年4学級が完成し、本校創立以来始めて外来講師に頼らなくてよい年となったわけである。この時期は、現代化のゆきづまりから教材精選ともいべき時代への道行きでもあった。

さて、本校数学科では、附高が設置されて以来、中高数学科の合同科会を毎週1回定期的にもち、数学科運営上の問題や数学科教育の問題点について話し合ってきた。43年度までは主として、中高六か年のカリキュラムの問題であったが、44年度からは数学教育の現代化が数学教育の「現代禍」になっている現状を見つめて、我々は数学教育はどうあるべきかを考えなおそうとした。

問題点の第1は、教材過多ということであった。これでは、学ぶ側も教える側もゆとりがなく、創造的に教育することはできない。そこで、何とかもつと教材と内容を精選できないものかと考えた。さらに、精選の基準は何であるか、中高生に数学教育を行なう目標は何であるかと追求して教材の試案を考えるといるところまで発展していくのであるが、ここで、これらの研究経過について振り返ってみよう。

44年度は、数学科の各メンバーが互いに授業での悩みや問題点を出し合うことによって数学教育についての相互理解を深め合い、その基盤の上に立って、45年度はカリキュラム編成の科学的根拠について論じたり、高等学校の学習指導要領の問題点について研究し、その結果を、45年の第18回教育研究発表会において報告した。これが、現在の我々の研究の第1期である。



昭和47年 第20回教育研究発表会

研究の第2期は、46～47年度で、新指導要領のもとで作成された数学Ⅰの各社教科書を比較して読み、教材の意図、内容、相互関連、教材の軽重、中高の関連等について



て分析し検討した。このことについては、47年の第20回教育研究発表会で報告したが、この期に得た大まかな結論は、各教材ともそれぞれに必要性をもっていて削除するのに非常な抵抗を感ずること、および、新教材はもっと発展的に取扱いたいという矛盾したこともあったことは否めない。

研究の第3期は、48～49年度で、従来どおり毎月1回中高合同科会を開いた上に、夏休みには合宿までして議論を行なうほど熱のこもるものであった。テーマは教材の精選で、その対象は主として数学Iであった。各教材は決して悪くはないが、何といっても分量の多いことが種々の問題を起こしている。そこで、その分量を半分位にしたいが、その場合、数学教育の目標に矛盾しないか、精選の基準は何なのか、それは数学教育史からみてどうなのか等が問題となった。そこで改めて数学教育の目標について論じあった。即ち、社会の科学技術の基礎となるべきものを教えるべきか、それより数学の魅力や真理を愛する心を教えるべきか等々。また、数学教育は現象と数学の世界との中間にあってたえず現象への認識を深めていく作用である。そこで、現象のうちから変化・不確定事象・空間を意識的に取り出し、抽象し体系づけ、次第に数学の世界へと発展させ、高い立場から現象を再認識させていくことが大切である。この場合、子供たちの発達段階に合わせてその質を高めていくには、その基本となる概念が必要である。それが集合や論理であろう。このような立場から、試案を作ろうとしたが、議論百出して容易にまとまらず、 $A \cdot B \cdot C$ の3案となった。以上のことについては、49年の第22回教育研究発表会で報告し、もう少し発展させたのを、50年の第57回日数教（大阪）大会で発表した。

他方、大阪教育大学数学会でも、49年度から、「教材の精選をめざして——内容の程度と系統——」というテーマのもとに3か年計画で研究を進め、松宮と中田は中学校における関数教育のあり方について、49年の第50回大会、50年の第51回大会に報告した。教材の精選とは教材の分量を問題にすることもあるが、さらに教材の重点化であり、取り扱いの観点を明確にすることが必要であることを指摘している。



昭和49年 第22回教育研究発表会



昭和49年 第50回大会（池田）



昭和49年 第50回大会（池田）



昭和49年 第50回大会（池田）

この大阪教育大学数学会については、49年に研究会開催が第50回に達した。そこで、それを記念して、「大阪教育大学数学会五十年のあゆみ」を天王寺が中心となって編集した。

また、昭和50年8月4～6日には、第57回日数教（大阪）大会が開催されたが、準備委員会の委員長が本学の高橋陸男、事務局長が同じく本学の阿部浩一であったので、その事務局が本校におかれ、企画係として、平林、福原、松宮、中田が参与した。

## 5. 結びと今後の方向

本校数学科教育の研究活動の昭和22年から昭和50年までのあゆみについて概説してきた。顧みて、その成果には忸怩たるものがあるが、我々は、本学数学教室の指導を仰ぎつつ、一貫して、より望ましい数学教育を行なうことを念じ、単元学習時代や現代化時代の動乱期においても、その波にのまれることなく、現状を厳しく見つめて研究を進めようと努力してきた。数学教育は、社会・数学・子どもの少なくとも3つの面から考究されねばならないが、ややもすれば、この30年間の日本の数学教育では、前二者の面が強く押し出されて子ども不在の教育に陥る傾向があった。我々は、特にこのことを留意し、子どもを大切に教育にあたってきたともいえるだろう。

さて、現在、我々数学科では、4で述べたように共同研究が続行中である。教材の精選というテーマのもとに、数学教育の目標や、教材精選の基準などについて、根本から考えなおし、試案を作成しようと試みているが、その結論は容易にまとめ難いものがある。これまでは、むしろ、明日からの数学教育の方向について模索していたともいえる。今後は、それらを土台とし、抽象的に論ずることから具体的な内容へ話題を移し、中学校の内容も考え、中・高合わせて、中高六か年一貫をはかる新しい教科課程とそれに立脚した教科書を創っていきたいと念じている。その際、我々は、特に、目の前に悩む生徒の実態に着目したい。そして、49年度の第22回教育研究発表会の協議題として掲げたように、生徒の実態に合った数学教育を進めていきたいと考えている。そのためには、理論と実践の両面からの科学研究が望まれる。

なお、51年には、日数教（大阪）大会の置土産として、「大阪数学教育会」（仮称）が設立されようとしている。我々本校数学科のものは、大阪府下の数学科担当の先生方とも協力して、数学教育の本質に根ざした地道な研究をしていきたいと念じている。（51年12月記）

（付記）大阪数学教育会設立準備委員会の第1回は、昭和51年1月17日（土）（大阪教育大学会議室にて開催され、本校から、平林、松宮、中田が参加した。その後、1月26日、2月28日の2回の小委員会（主として、会則の検討）を経て、3月6日に第2回の準備委員会が開催される予定であり、この秋には総会をもって発足することになるだろう。

（51年2月28日）



大阪数学教育会（仮称）設立準備委員会  
——本学会議室にて（昭和51. 1. 17）

第57回日数教（大阪）大会



準備委員会事務局（本校）



準備委員会事務局（本校）



大阪府青少年会館



「大会要項」積み出し(事務局)



本校数学科（昭和51年2月24日）

（前列左から、松宮、横田、中田 後列左から、越智、本間、網、平林、乾）



数学科科会記録

# 理 科

## § 1. 沿革史

昭22	附属中学校開校 横山隆吉着任	
昭23	元寄宿舎2棟を改修移転  佐崎良雄着任	『研究紀要』第1集発行 第1回教育研究発表会「ガイダンスと単元学習」 研究授業「火をどのように使ったらよいか」 中1A 指導者 横山隆吉
昭24	南棟一棟を改修、附属中学校の校舎となる 大阪学芸大学附属中学校となる 鳥井利清着任	『研究紀要』第2集発行 第2回教育研究発表会「ガイダンスの組織と実践」 研究授業1「火をどのように使ったらよいか」 中1A 指導者 横山隆吉 研究授業2「音はどのようにして伝わるか」 中3A 指導者 佐崎良雄
昭25	新堂庄二着任	『研究紀要』第3集発行「ガイダンス計画の立案と展開」 第3回教育研究発表会「ガイダンス計画の立案と展開」 研究授業1「都市と農村」 中1D 指導者 新堂庄二 研究授業2「からだはどのように働いているか」 中2B 指導者 横山隆吉
昭26		『研究紀要』第4集発行 第4回教育研究発表会「教育の全体計画と実践」 研究授業「太陽や月や星は生活にどんな関係があるか」 中3C 指導者 横山隆吉
昭27	横山隆吉離任	『研究紀要』第5集発行「学習指導の実際」 理科 生活学習を主とする理科単元学習指導上の問題点 理科学習指導の方法と単元の展開例 生物素材のとり方と生物暦について 第5回教育研究発表会「独立後の教育のあり方と実践」 研究授業「水は生活とどのようなつながりをもっているか」 中1C・D組女子 指導者 新堂庄二
昭28		『研究紀要』第6集発行「個人を育てる教育」 理科研究をどのようにして伸ばしていくか 第6回教育研究発表会「個人を育てる教育活動」

昭30		研究授業「食物と衣料」 中2 B 指導者 新堂庄二 『研究要紀』第7集発行 第7回教育研究発表会「指導のための調査」 研究授業「食物と衣料」 中2 C 指導者 新堂庄二
昭31	附属高等学校開校	
昭32	旧理科室完成	『研究集録』第1集発行
昭33	鳥井利清離任 武田和生着任	「本校における理科施設の拡充について」
昭34		近附連理科部会「改訂指導要領の内容と問題点」
昭35	武田久男着任	『研究集録』第2集発行 近附連理科部会「移行措置について」 第8回教育研究発表会「中高6ヶ年一貫教育」 研究授業1「栄養」 高1 B 指導者 新堂庄二 研究授業2「電子と原子」 高3 B 指導者 武田和生
昭36	中・高等学校学級増	近附連理科部会「授業を中心とした理科学習指導」 『研究集録』第3集発行 「6ヶ年一貫教育における物理教材の指導について」 「6ヶ年一貫教育における化学教材の指導について」 第9回教育研究発表会 研究授業1「化学工業」“中和” 中3 A 指導者 武田久男 研究授業2「酸・塩基・塩」“中和滴定” 高1 B 指導者 武田和生
昭37	濱谷巖着任	近附連理科部会「理科学習における授業展開法」
昭38	武田久男、新堂庄二離任 桜井寛、芳賀和夫着任	近附連理科部会「中学におけるイオンの指導」 「中学における光合成の指導」 第5回全附連高校部会教育研究発表会 「エネルギー交代」発表者 芳賀和夫
昭39	物理、化学、生物の現講義 室、実験室、研究室完成、 移転 林寿夫着任	近附連理科部会「中1第2分野細胞の取り扱いについて」 第12回教育研究発表会「学習内容の検討」 研究授業「呼吸」“エネルギーの発生と利用” 高1 B 指導者 濱谷巖 『研究集録』第7集発行 「エネルギー交代の指導」 第6回全附連高校部会教育研究大会(広島) 「物理・化学、学習指導の問題点」 発表者 桜井寛、武田和生

昭40	高等学校学級増 浅野浅春着任	近附連理科部会「学習内容の検討」 第13回教育研究発表会 研究授業1「光の屈折」 中3 A 指導者 佐崎良雄 研究授業2「光の回折と干渉」 高2 B 指導者 武田和生 『研究集録』第7集発行 「物理生徒実験指導の一考察」(中間発表)
昭41	辻退一着任	近附連理科部会「能率的な理科学習授業の有り方」 大阪府高等学校理化研究会(会場校) 研究授業1「音」中2 C 指導者 辻退一 研究授業2「電流の熱作用」高3 A 武田和生 研究授業3「酸とアルカリ」中2 A 林 寿夫 研究授業4「気体の性質」高1 D 桜井 寛 『研究集録』第8集発行 「物理生徒実験指導の一考察、光の回折像」
昭42	学名変更大阪教育大学	近附連理科部会「物理的概念の指導について」他 第15回教育研究発表会「物質の化学構造の指導」 研究授業1「酸化と還元」 中3 C 指導者 林 寿夫 研究授業2「分子量の求め方」 高2 C 指導者 桜井 寛 『研究集録』第9集発行 「理科学習指導案の作成」
昭43	地学研究室・実験室完成	近附連理科部会
昭44	佐崎良雄離任	近附連理科部会「高校理科内容の研究」他 第17回教育研究発表会「探究の過程を重視するには」 研究授業1「地かくの変動と地表の歴史」 中1 C 指導者 武田和生 研究授業2「地殻の構成物と地殻の変遷」 高1 B 指導者 浅野浅春 第11回全附連高校部会教育研究大会(福山) 「探究の過程を重視するには」 —地学下層分野において— 発表者 浅野浅春 『研究集録』第11集発行 「物質の化学構造の指導について」 「物理生徒実験の指導(3)波動の指導について」
昭45		近附連理科部会「高校新指導要領案について」他 第12回全付連高校部会教育研究大会 「探究の過程を重視するには」 —地学上層、気象において— 発表者 浅野浅春 『研究集録』第12集

昭46	林寿夫離任 井野口弘治着任	「物質の化学構造の指導について(Ⅱ)」 「中学校理科学習についての考察」 「物理生徒実験の指導(4)電磁気」 「探究の過程を重視するには—地学下層分野—」 近附連理科部会 第19回教育研究発表会「学習内容の検討」 「生態系の研究指導」 研究発表「森林の土壌生物の取扱い」 芳賀和夫 研究発表「潮間帯生物の取扱い」 濱谷 巖 『研究集録』第13集 発行 「大阪周辺で得られる土壌性総翅類」 「探究の過程を重視するには—地学上層」
昭47		近附連理科部会 『研究集録』第14集発行 「枯れ葉・枯れ枝に生息する総翅類」
昭48	大仲政憲着任 中学校学級増	近附連理科部会「地学野外実習について」 第21回教育研究発表会「力学の指導について」 研究授業「力のつりあい」 中1 D 指導者 辻 退一 研究授業「運動のいろいろ(単振動)」 高1 C 指導者 武田和生 大阪府高等学校理化教育研究会 研究授業「力と運動」 高1 A 指導者 武田和生
昭49	芳賀和夫離任	近附連理科部会 『研究集録』第16集 発行 「生徒の自主活動を中心とした実験の指導」
昭50	柴山元彦着任	第17回全附連高校部会教育研究大会(お茶の水) 「中学校理科物理分野と高等学校物理の取扱いについて—力学教材について—」 発表者 辻 退一、武田 和生 「中学理科第一分野(化学関連教材)と高校化学の取扱いについて」 発表者 井野口弘治、桜井 寛 第23回教育研究発表会「理学的論理のくみだてについて」 研究授業「化学変化の量的関係」 中2 B 指導者 井野口 弘治 研究授業「酸化還元」 高2 A 指導者 桜井 寛

## § 2. 教育研究活動

### 1. 昭和22年～30年(中学校時代)

#### (1) 昭和22年～25年



中学校発足当初は、大学の西南隅4教室に寄寓し、理科教官は横山隆吉唯一人であった。翌年師範学校の旧寄宿舎を改修移転し、佐崎良雄、鳥井利清が相次いで着任、さらに昭和25年には新堂庄二が着任して、教官の陣容も一応ととのい、理科室もできた。この間、終戦後の世情騒然とした、しかも占領下、乏しい設備、器具の中で、教育、研究がすすめられたのである。この時代は、ガイダンスこそ新教育の中核であるという考えのもとに、学校総力をあげてガイダンスの研究にのぞんだ。

理科は、ガイダンス全体計画の中の基礎課程の1教科として、生活単元により、他教科との関連をはかりながら、教育、研究を行なった。生徒1人1人の個性、能力を十二分に発揮できるように、即ち、個性教育の立場を十分に考慮したカリキュラムが構成されたのである。そして、教育研究発表会を通じて、その成果を問うてきた。

## (2) 昭和26～30年

ガイダンス計画とカリキュラム計画の両面に立脚して、学校生活のすべてを日常課程、中心課程、基礎課程のもとに編成、それぞれ連関をもって展開され、整然とした学校生活が運営されるようになった。おりから学習指導要領が改訂になり、それともなあって、生活学習を主とする理科単元学習について、学校と地域社会の関係、学習の社会機能に対する価値と自然科学の関係を生徒の興味、生活経験の領域、学習能力の点から考察した。そして、単元のあり方、展開のしかた、評価の方法について検討が進められた。28年には「個人を育てる教育」という学校目標の中で、生徒実験指導のあり方、評価の方法を検討しつつ、クラブ活動における理科研究をどのように伸ばしていくかについて研究がすすめられた。ついで、「個人を育てる教育」を推進するため、生徒の興味と欲求を的確に把握するための調査研究が行なわれた。この期間は、戦後アメリカによって進められた生活単元にかたよりすぎた理科教育を、復興して来た日本の中で、カリキュラム、指導法等の立場から検討していった時代といえるだろう。

## 2. 昭和31年～38年（旧理科室時代）

### (1) 昭和31年～35年

昭和31年4月高等学校が創設されるに伴い、中・高6ケ年を一貫した教育課程を目指して研究が進められることになった。昭和32年に待望の理科実験室（主として化学実験を行なう）、理科実験室（主として講義と講義実験を行なう）、理科準備室ができあがり、ついで理科講義実験室も完成し、当時の学校規模（1学年高2クラス、中2クラス）としては、十分な広さをもつものであった。昭和31年に高校指導要領が改訂になり、それまでの理科4科目中1科目以上選択が、2科目以上の選択にかわり、生徒の能力、適性、進路に応じて教育を行なうため各科目とも3単位・5単位が設けられた。ついで、昭和33年中学校学習指導要領が全面改訂され、2分野制にわかれ、生活単元学習から系統学習へと変わり、各学年とも週4時間の授業となった。20年度後半より、生活単元学習の中における、学習的系統性、発達段階における系統性を重視し検討して来た我々は、「中・高6ケ年を通して発達段階に応じた系統的な理科学習指導」を研究テーマに掲げて、研究活動をはじめた。平素の学習成果をもとにして、学習指導要領に示された指導内容、生徒の学習の心理および発達段階などについて調査分析しながら、中・高教材をどのように考慮し、取扱うべきかを検討し、実践していった

のである。特に理科教育における実験・観察の重要性に鑑み、学校実験についての検討を十分に加えていった。昭和34年には、近附連理科部会を本校で開き、中学校2分野制、教材内容、実施上の諸問題について研究討論がなされた。同年、「中・高6ヶ年一貫教育」のテーマで教育研究会がなされ、理科では、「新学習指導要領に準拠した理科教育の発達段階に対する配慮」という観点から、能田、杉野、小田、中右（大阪学芸大学）を指導講師に依頼して研究授業、研究協議会がもたれた。昭和35年には、「理科学習における発達段階に応ずる指導について」というテーマで、松村、杉野、能田、勝守（大阪学芸大学）三宅（大阪府教委）を指導講師に依頼して、研究授業、研究協議を行なった。この年は、参観の先生方に、本校の研究意図がよく理解できるように中・高同一教材とした。化学教材で「中和」について、生徒の発達段階に応じる中・高の配慮がどのようになされているか、生徒実験における基礎操作がどのように指導され定着していくのか、知識の系統的理解が学年を追ってどのように進んでいくのか、といったことを見ていただき検討していただいたのである。

## (2) 昭和36年～38年

昭和35年度には、高等学校学習指導要領が改訂され、理科では、1.教養のかたよりを少なくするため、物理・化学・生物・地学の4科目が必修となり、2.生徒の能力・適性・進路に応じて教育を行うために物理・化学についてA、Bが設けられ、3.科学技術の進展に即応して、基本的事項の学習に重点をおくとともに、実験・実習を重んじ、学力の充実が図られることになった。本校では、中・高ともに1学級ずつ増となり、いままでの理科室では、十分な実験が行なわれなくなり、新しい理科室の建設計画がたてられた。昭和32年頃からアメリカで始まった高校教育の改革運動は、世界中に拡がり、各国でも盛んに研究されるようになって来た。我国でも、昭和36年に開催されたPSSC物理セミナーを契機として、CBA化学、CHEMS化学、BSCS生物、ESCP地学等が紹介され、理科教育の目標等が再検討されるようになって来た。おりから、37年フルブライト委員会で渡米中の新堂が帰校し、アメリカにおける教育改革運動の実態が紹介され、我々も、コピーされた原書を読んで研究し、検討し、昭和38年度高1から実施される新しい理科のカリキュラム、内容の検討、実験指導の方法等について研究をすすめていった。一方、教官の陣容も充実し、昭和38年度には、5名になった。この期間は、新しい理科室の設計と諸外国の理科教育研究と検討の時代といえるだろう。

## 3. 昭和39年～現在（新理科室時代）

### (1) 物 理

昭和39年、新しい理科室が完成した。物理では、物理講義室（階段教室）、物理実験室物理研究室（いずれも10(m)×10(m)）ができ、いままでの理科雑居時代に別れを告げたのである。学校当局の尽力により理科施設充実費が計上され、中・高の学習内容が幾度も理科教官の会議で十二分に検討され、実験器具、設備が充実されていった。いままで研究されて来た「中・高6ヶ年を通じての物理教育」の内容を再検討し、設備が不十分なためにやや遅れていた「学校実験」のあり方から重点的に進めていった。昭和39年度第6回全附連高校部会教育研究会広島大会では、「物理学習指

導の問題点」というテーマで、特に学校実験のあり方について発表した。昭和40年高等学校学級増となり、1学年4クラスとなった。同年の教育研究発表会では、「発達段階に応ずる理科の学習指導」というテーマで、主題に「波動」を選び、中では「光の屈折」高では「光の回折と干渉」の研究授業を行ない「小・中・高物理教材の関連性と系統性」について、綾井、小林、志茂山(大阪学芸大学)に指導講師を依頼して研究協議を行なった。また、笹田義夫(大阪大学)に「X線構造解析」について講演をいただいた。翌41年要請されながら、理科室の建設で延び延びになっていた大阪府高等学校理科教育研究会が本校を会場として開かれ研究授業、研究協議、パネルディスカッションが行なわれた。高等学校の先生方にとっては、中学校の授業を参観する機会は少ないこともあり、指導助言者として、小田、阪田、松村(大阪学芸大学)、竹林(大阪大学)をお願いして開かれた研究授業の批評と討論の会は、非常に活発で有意義なものであった。そのあとパネルディスカッション「理科学習についての中・高の連繋の立場から学習指導要領の改訂に希望すること」では、中学校・高等学校・大学の各立場から活発な意見がだされた。その席で本学の綾井から世界の教育改善運動、日本物理教育学会のカリキュラム改善運動等について紹介があった。物理教育の改善運動は、いよいよ盛んになり、昭和40年度日本理化学協会岡山大会で、「新しい物理教育の内容とその指導法」が全国統一研究課題として提起され、茨城大会をへて昭和43年度の松山大会で骨子がまとめられた。その間、武田和生は大阪府の高等学校理化教育研究会「新しい物理教育研究委員会」「実験書委員会」に参加して共に研究をすすめた。また、辻退一は、大阪府中学校理科研究会、IPS委員会に参加研究し、それらの全国大会や研究会の意見を参考にして、小・中・高一貫教育を柱に、いままで歩んで来た道をふりかえり、反省し、中・高理科教育の目標を次のように定めた。

1. 自然の事象への関心を深め、すすんでこれらを科学的に探究しようとする態度を養う。
2. 自然の事象を実験観察を通じて、科学的に考察し処理する過程を大切にするとともに、創造的な能力を養う。
3. 基本的科学概念を理解させ、自然のしくみやはたらきを総合的に把握しようとする能力・態度を養うとともに、それらを通して科学的自然観を育てる。

昭和45年度に中学校、昭和48年度に高等学校の指導要領が改訂された。現代における自然科学の発展や科学教育の趨勢を考慮して、自然の探究の過程を通して科学の方法や自然科学における基本的な概念の理解を深め、科学的見方、考え方が一層育成されるようにする……という改訂の趣旨は非常に結構であるが、高等学校の物理がⅠ、ⅡにわけられたためⅠだけで終わる生徒に対する配慮等の問題が生じ、以後、中学校理科第1分野と、物理Ⅰの内容の検討、探究の過程を大切にするための指導法の研究へと進むことになった。授業の流れの中で科学の方法の1つのパターンを指導していくことが大切であることはいうまでもないが、生徒1人1人には各自の探究の過程があるはずである。ひとつの実験を十分に時間をかけて、いろいろ考えながら、実験をくりかえすうちに現象の理解、知識の定着、総合的理解が育まれていくのである。このような観点から、昭和45年より、力学分野で「運動量保存の法則」の検証実験をとりあげ、3週間程の時間をかけ、放課後等を利用して生徒自身で実験を計画・実行し、

その結果を授業時間に発表、討論するようにしている。この結果は、昭和48年の大阪府高等学校理化研究会で発表した。また、同年の教育研究発表会では、「力学教材の指導について」のテーマで、中学校では、「斜面上の物体に働く力」高校では「単振動」を題材として、実験・考察を通しての科学的態度・能力の育成をねらった研究授業を行なった。研究協議には、本学の綾井、島田を指導講師に依頼し、伏見康治（名古屋大学）に「核融合反応を求めて」の演題で講演していただいた。多くの参会者で活発に意見の交換が行なわれた。



昨年、新指導要領で始まった生徒が高3へ進級して完成年度でもあるので、これを機会にあらためて中・高の指導内容、指導法を検討しようということになり力学からとりかかった。初年度は、力学の基本概念が学習以前にどのようにとらえられており、学習後にどのように定着しているかを調査・検討し、全附属高等学校部会研究発表会（お茶の水）で中間発表を行なった。

本年度は、引きつづき、力学について検討し、電磁気分野について研究を進めていくつもりである。また、2年間続けている物理Ⅰにおける自由実験についても研究を進めていきたいと考えている。一方、大阪府中学校理科指導資料作成委員会では、大阪府教育委員会が中心になって、中学理科の指導内容を再検討し、精選と重点化をはかり、現場の指導に役立つような資料を作成する研究をしている。また、大阪府理化教育研究会物理委員会では、実験評価の方法の検討をすすめており、いずれにも本校の理科は参加して情報の交換と検討を重ねている。

## (2) 化 学

わが国の化学教育は基礎学力を養うことをめざして系統学習を強調して来たが、昭和40年にはようやく現代化の基盤が確立した。昭和43年中学校学習指導要領にI P Sの流れをみる現代化の成果がかなり強くあらわれ、探究の過程を重視したカリキュラムおよび指導法の現代化が昭和45年からの移行措置を経て、昭和47年全面実施に移った。一方高校化学は、現代化学の基本的概念である化学結合を中核として化学の学習を論理的にしたC B A、またろうそくの炎の観察から始まる実験に基づき帰納的の学問としての化学の伝統が生かされている学習方法をとるC H E M Sの影響をうけた現代化運動が進み、続いてナフィールド化学などそれぞれの国情に応じた化学教育改革の機運をもたらしたが、日本でははじめは模倣や内容のレベルアップをもって現代化の方向づけをするようなところがあった。昭和46年C B A、C H E M Sの影響をうけた教科書が出版され始め、昭和48年よりの現行学習指導要領による新カリキュラムの実施で化学Ⅰ、Ⅱを履修することになった。

学校の化学教育では基本概念の設定によって知的内容を配列展開していくカリキュラムに構造化し、従来の学問体系に基づく配列と趣を異にして行なってきたが、ともすると学校化学が現代化学の成果、研究の方法を反映していないことが、化学の教科書、授業が次第に生徒から見放される原因の有力な1つになっているのではないかと思う。

このような化学教育改革の大きな流れの時期に本校では実験室・講義室・研究室の新築とそれとともなう施設・設備の充実が各方面の理解援助のもとに実現した。整備されていく環境の中で、実験を土台におき、中・高6ケ年の一貫した指導方針をもって、探究の過程に「直観的思考」と「分析的思考」を主なねらいとして、教える化学より行なう化学さらに役に立つ何かを行なう化学にする努力をしてきた。以下にその時期に応じて本校の現状をふまえて問題とし、機会あって多くの方々のご意見ご指導をいただいたものをあげる。

a、昭和39年11月13日、第6回高等学校教育研究大会（広島大学）発表

理科学習指導の問題点—物理・化学実験指導の一考察—

発表者 桜井 寛、武田和生

〈主旨〉新指導要領の実施に伴い、より効果的な、より能率的な、発達段階に応じた教育の系統化をねらいとして研究を進めていた。理科の学習において、実験・観察がきわめて重要であることより、現状をふりかえり、問題点であった基礎実験操作の不徹底、実験態度の不十分さを解決するため、生徒実験の内容検討、生徒実験の適切な指導を研究した。

b、昭和41年5月18日、大阪府高等学校理化教育研究会研究集会

○研究授業 中2 「酸とアルカリ」 授業者 林 寿夫

〈目標〉酸・アルカリ・塩の化学的性質および、これらの間の化学的関係を、それぞれの代表物質について調べ、その性質および関係を理解させるとともに基本的な化学実験技能を身につけさせる過程として、濃硫酸をとりあげ、脱水性、発熱性を知らせ正しい硫酸のうすめ方を身につけさせることと、濃硫酸と希硫酸のはたらきのちがいを考えさせることを目的として授業した。

○研究授業 高1 「気体・液体および固体の性質」 授業者 桜井 寛

〈目標〉物質の化学現象についての関心を深め原理、法則、概念などの抽象事項を理解させるとともに、事象の考察処理の態度、能力を養うことと、物質の構造についての基礎概念を養うために、ボイル・シャルルの法則、気体の状態方程式を題材として、化学クラブ員作成のグラフ及び発表を利用して授業した。

○研究授業批評と討論

指導助言者 綾井誠昌（大阪学芸大学）、小田孜（大阪学芸大学） 阪田巻蔵  
（大阪学芸大学）、竹林松二（大阪大学）、松村栄三（大阪学芸大学）

○パネルディスカッション

テーマ「理科教育について中高の連繋の立場から学習指導要領の改訂に希望すること」

パネルマン 竹林松二（大阪大学）、綾井誠昌（大阪学芸大学）、三宅孝明（大阪府教委）、佐崎良雄、林寿夫 他

c、昭和42年10月19日、教育研究発表会

○研究授業 中3 「酸化と還元」 授業者 林 寿夫

〈目標〉基本的な化学変化として、燃焼、中和、電気分解、気体発生、沈殿反応、金属の酸化・還元反応の化学変化などについて実験を行ない物質の化学変

化を理解させるとともに、実験技術を養い、さらに定量的な取扱いによって化学変化の法則性を推察させる過程として、銅の酸化と還元を題材として、生徒実験を中心とした授業をした。

○研究授業 高2 「有機化学の基礎」 授業者 桜井 寛

〈目標〉有機化合物と無機化合物の特徴を比べ把握させる。炭素化合物の構造結合の特性を理解させる。有機化学反応の特徴を有機化合物の構造とその性質に結びつけて考えさせる。化学史上の発展過程を知り、化学の研究過程の進め方を理解させる。過程として、分子量の求め方を題材として、凝固点降下測定装置(簡易型)を用いての生徒実験を中心とした授業をした。

○研究協議「物質の化学構造の指導について」

指導講師 小田切岩男(大阪府教委)、中野文雄(大阪府教委)、小田 孜(大阪教育大学)、松村栄三(大阪教育大学)、菜嶋健夫(大阪教育大学)

指導要領改訂を前に、化学的物質観を育てるための要素が考えられているが、その1つとして化学の基本概念をとらえるために物質の化学構造を認識させることが重要である。現状の化学教育ではこの点が不十分であり、また中高を通じての一貫指導体系に欠けることが多いので問題提起した。

○講演 「物質構造と化学的教育」 仁田 勇 (関西学院大学)

d、昭和46年8月25日、全国理化教育大会(広島大会)化学部会発表

探究の過程を生かして指導するためのプログラムの研究

中塚五郎(府立大手前高校)等とともに、桜井 寛が研究し発表した。

e、昭和48年度中学校教育課程大阪府研究集会理科部会自由研究発表

電気分解での物質生成量と電気量——その実験方法——発表者 井野口弘治

f、昭和50年10月24日、第17回高等学校教育研究大会(お茶の水女子大)発表

中学理科第1分野(化学関連教材)と高校化学の取扱いについて——生徒の実態と学習指導計画の一考察—— 発表者 井野口弘治 桜井 寛

g、昭和50年11月12日 第23回教育研究発表会

テーマ「理科的論理のくみ立てについて—中・高化学分野から見て—」

○研究授業 中2 「化学変化の量的関係」 授業者 井野口弘治

〈目標〉一酸化鉛と二酸化鉛との都市ガスによる還元より、倍数比例の成立することに気づかせ、原子・分子のモデルによる説明をおこなわせ、化学式の決定の仕方について学ばせる。

○研究授業 高1 「酸化還元反応」 授業者 桜井 寛

〈目標〉酸化還元反応について、実験・観察により電子の移動を実感として理解させ、中学校段階での酸化還元概念をもとに電子の授受の考えに発展させるように推論を拡張する。

○講演と協議

講演「化学基礎理論の進歩と有機化学」 松村栄三 (大阪教育大学)

講演「化学変化の過程について」 菜嶋健夫 (大阪教育大学)

発表「生徒の実態と学習指導について」 発表者 井野口弘治 桜井 寛



〈主旨〉新教育課程による学習をしてきた初年度の生徒が、中学・高校6カ年の課程をほぼ終わる時期にあたり、生徒の現状を見つめ、今後の学習指導のあり方について考えた。教材の選び方として、生徒の興味や関心のあるものも考慮し、転移性の高い基本的学力を定着させることをねらった、中・高6カ年教育を有効に生かす指導計画の作製を試み発表した。

化学教育の改善をはかることに昭和42年度以降文部省の科学研究助成金が出され、特定研究として近藤精一（大阪教育大学）とともに井野口弘治、林寿夫等は「定量的実験及び考察を中心とする科学教育の研究」に精力的に取り組む、その成果を『大阪教育大学紀要』に『理科教育の革新』第2報（昭44）～第7報（昭49）、および大阪教育大学理科教育研究室『理科教育年報』No. 2（昭46）、No. 3（昭48）に発表した。

### (3) 生 物

昭和37年度の途中で、新堂庄二がフルブライト制度によるアメリカでの留学研修を終えて帰国したが、その際に当時アメリカで試行中のBSCS教科書の数冊を持ち帰った。その頃以降の本邦の高校生物教育界に、BSCSに関する情報が続々と入ってきた。その頃の高校生物の教育界には、BSCS旋風が国内の津々浦々にまで吹き渡った。当時本校の科学クラブ員の有志を中心に、高校2年（第7期生）の若干名が集まって、BSCS教科書の輪読会と、そこに出てくる実験の追試が行なわれたが、余り長くは続かなかった。昭和38年度から、高校生物も指導要領の改訂に伴って、従来の静的な取扱いが動的な取扱いに変わる側向を見せた。これには、物理のPSSCや化学のCHEMSなどによる影響も大きいと思われる。そして、わが国の生物教育の有り方を根本的に検討する良い刺激になったことは確かである。ちょうどこのような時（昭和38年度）に、本校の教育研究発表会に生物科が次のようなプログラムと内容で参加した。

主題：「エネルギーの交代」

#### 1. 研究授業「エネルギー転換」高1（50分） 指導者 濱谷 巖

単元の目標：1呼吸は“生物が生活エネルギーを得るための物質交代の一面である”という本質的な概念を理解させる。2呼吸は“生命現象が物理的・化学的法則で説明されるところに生命現象の特質がある”ことを認識させて、新しい動的生物学の基本的概念を理解させる。3エネルギー転換におけるATPの存在の意義を理解させる。

授業の内容と目標：1ATPによるカエルのグリセリン処理筋の収縮実験を行ない、筋収縮とATPの関係を理解させる。2エネルギーの中継物質としてのATPの存在意義を理解させ、認識を深めさせる。

#### 2. 研究協議「物質とエネルギーの交代」の指導上の問題点

指導講師・（大阪学芸大学）中村治（同）藤本克己（同）川合浩一（同）上林久雄

司 会・(大阪府立三国ヶ丘高等学校) 小野雄三

問題提起Ⅰ 研究授業の内容を中心とする諸問題 濱谷 巖

同 Ⅱ 生徒の「エネルギーの概念」の指導について 芳賀 和夫

3. 特別講演 講師(大阪大学) 吉川秀男

上記の指導要領の改訂と研究会を機会に、中高の一貫した生物教材の動的な取り扱いの有り方に関する検討が具体的に示されるようになった。その一つの項目に「生態」があつて、「生態系の構造と機能」を中心に、「生態系内におけるエネルギーの代謝」を軸とする取り扱いが、本校の中高6ヶ年における生物教材の一本の柱として取り扱われるようになった。そこで昭和46年度の教育研究発表会では、「生態系」の指導に關係した内容で、おおむね次の要領で生物科が研究会に参加した。

主題:「生態系の研究指導」の有り方

1. 研究発表Ⅰ.「森林の土壌生物の取り扱い」 発表者 芳賀和夫

新しい中学校理科第2分野に森林生物のグループとして、落葉や土壌中の生物が取り上げられている。また高校生物Ⅱには、自由研究の課題としての1例にすぎないが、「土壌中の生物群集」が指導要領に示されている。

研究発表Ⅱ.「潮間帯生物の取り扱い」 発表者 濱谷 巖

1 生態の教材が小学校・中学校・高等学校で、それぞれどのように取り扱われているかを比較する。2 「生態系の概念」の取り扱いの要点と、「生態系の1例としての潮間帯」の意義を考える。3 小学校・中学校・高等学校における「生態系としての潮間帯」の指導の有り方を考える。4 評価にも若干触れて、関連する資料の一部を紹介した。

2. 特別講演Ⅰ.「溜池の生態系を調べる」(大阪教育大学) 水野寿彦

特別講演Ⅱ.「森林生態系の研究方法」-志賀高原亜寒帯針葉樹林調査を例にして-

(京都大学) 渡辺弘之

3. 研究協議「生態系の研究方法と指導上の問題」

指導講師・(大阪教育大学) 水野寿彦

(京都大学) 渡辺弘之

司 会・(大阪府立泉北高等学校) 南 敬

次の高校の指導要領の改訂は昭和48年度に実施されたわけであるが、それまでの約10年間はその初期に現在の新理科校舎が完成し、その後施設・備品の充実が着々と進んだ。現在は中学生の実習用顕微鏡50台・高校生実習用顕微鏡50台を始め生徒の実験実習や教材研究のための諸設備がある程度整った。目下現行指導要領の内容に関して、小学校・中学校・高等学校の12年間にわたり生物教材の有り方と、その指導目標や指導内容を総括的に再検討している。本校の中高一貫教育の場で、一方では全員が大学への進学を志している本校の実態と、他方では大学の受験に左右されない全人的教育を行なおうとする本校の大方針がある。そのためにも、具体的に教材を精選して、整理しなければならない。同時に、他の科目や教科との関連性をも十分に配慮せねばならない。現在本校の限られた授業時間数の中で、既にその一部は実施しているが、まだ多分に暗中模索の感がある。近い将来に、具体的に教材の学年別配分とそれに伴う実験項目とその取り扱いが示されることであろう。



#### (4) 地 学

昭和38年の高等学校学習指導要領全面実施以来、2単位で行ない、昭和48年の新指導要領（現行）の地学Ⅰ（3単位）を全員に、地学Ⅱ（3単位）を希望者に行なっている。この間、中学・高校における日本の地学教育の趨勢はアメリカのESCP（THE EARTH SCIENCE CURRICULUM PROJECT）のINVESTIGATING THE EARTHの影響を受けた形になった。このESCPによると、地学の教材の中に取り入れられているテーマは、態度・概念・表現の3つのタイプがあり、態度は生徒が身につける科学的な心構えと能力、概念は科学の基礎をなすおもな原理に関するもので、生徒は地学を通じて理解し習得しなければならないもの。表現は地学の歴史的発達過程を強調したものである。これらのテーマでもって、地球とその構成物質、その変化の過程、その歴史、その空間における環境などについて考慮し、しつては、物質・エネルギー・力・運動・空間・時間の概念と、これにつながる原理、さらにこの原理から総括されて結論を出さそうとするのである。以上のことを実施するために1967年（昭和42年）に教科書が完成版として出された。日本のものに比べると、統一された体系（水文学的輪廻と岩石学的輪廻）が見られ、学問的な新知識と情報を多く取り入れている。

さて我校では、ESCPの考え方を参考にしながらも我校独自のカリキュラムと指導法を必要としたし、又、できた。以下にカリキュラムの特徴と大要を示す。

##### イ. 野外実習（詳細は§3を参照のこと）

中学校・高等学校とも、まず「自然を見る」ことから探究を始める。

中学校では1969年（昭和44年）から、高校では1965年（昭和40年）から始めている。野外実習を通じて「探究の過程」を大切にす教育に重点をおいた。

##### ロ. 自由研究

地学の全分野から研究テーマを見つけ、グループ（一人でも可）研究を行なう。毎年1学期の間に、どのような仲間とどんな分野をどんなテーマで研究するかを決定させ、1年の終わりまでにそのレポートを提出させる。参考までに昭和44年度について分野別に生徒の選択者数を次に記す。

天文—男子48名・女子17名。 気象—男子31名 女子21名。

地質—男子43名 女子22名。 海洋—男子7名 女子1名。

##### ハ. 授業と地学クラブ員の活動

ロの生徒の自由研究のレポートを授業に生かすことも行なってきたが、地学クラブ員の活動によって授業内容が生きてくることもある。それは、天体望遠鏡による太陽・月・惑星の観測を地学部員の手で、昼休みの時間と日没後に1回に約10名ずつを指導していくのである。このことは、彼らの中で共通の体験を得ることによる親近感を増すことは確かである。

ニ. 気象分野の中高一貫の指導計画（『研究集録』第13集及び別刷＝昭和46年7月発行）と地質分野の中高一貫指導計画（『研究集録』第12集及び別刷＝昭和44年全附属高校部会発表）はほぼ完成をみている。

### § 3. 野外学習

地学分野においては、高校は1965年（昭和40年）から、中学は1969年（昭和44年）から理科全教官と地学部の卒業生・在校生の手で行われてきた。

1. 中学校……1969年は当時の1年生に対して行ない、以後は3年生を対象に行なってきた。ここに第1回の要項を掲載する。

#### ◎地学野外実習要項 69.9.4

〔目的〕自然に対する地学的な見方を学び、みずから考える力を養う。

- 1) 郷土の地形・地質を観察する。
- 2) 観察した現象の相互の関係やそれを貫く法則性を考える。
- 3) この地域のなりたちを歴史的に記述する。
- 4) このような活動を通して、広く自然の姿を歴史的にながめる態度を養う。

〔実習地〕高槻市 摂津峡

〔日時〕昭和44年9月13日

午前8時30分 校庭集合完了、出発

10時30分 摂津峡着

午後4時 実習完了

〔引率教官〕理科担当教官、1年生担任教官。

〔費用〕360円（バス賃）

〔持ち物・服装〕筆記用具（簡単な画板・ノート・鉛筆・色鉛筆・マジックインキ）  
地図（ $\frac{1}{2.5万}$ ・高槻、拡大地図）・ハンマー・磁石・弁当・水筒・新聞紙または小さいポリ袋・手ぬぐい・軍手。

制服・制帽・運動ぐつ・サブリュック（調査具以外は全部リュックに入れる。）

〔実習の形態〕

引率者——理科担当教官5名、第1学年担任の教官3名、教育実習生1名。

指導形態——教官5名で3クラスを分担、1クラスを2班に分ける。

第2回目以後は3年生を対象にしたので、実習地の摂津峡へは、まず大阪駅で集合して高槻まで引率ののち、高槻市営バス賃切でいくという方法をとった。また実習日は学校行事等の関係から12月の日曜日や、12月23日頃という悪条件の伴う日になった。

2. 高等学校……1965年以来1年生を対象に行なってきた。実習場所は、次のようになっている。

1965年一和泉山脈（蕎原～登山口周辺）（高10期生）

1966年一二上山（〃11〃）

1967年一貝塚市、蕎原（〃12〃）

1968年～1969年一高槻市、摂津峡（〃13～14期生）

1970年～1975年一貝塚市、蕎原（〃15期生～20期生）

実習要項については、その目的は中学校の場合と変わらない。

指導形態については、理科担当教官全員（昭和50年の場合は8名）と卒業生、上級生

が指導に当り、約180名の生徒に対して、1班約15名という小人数で実習できる。

次に実習を行なった1年生のある生徒の感想をあげる。(昭和44年度1年生女子)

私達は、雲を見、夕焼けを見、そして野の花を見る。その美に感嘆し、そして、喜びを感じる。自然を見て美しいと感じ、人生との結びつきを思い、時々自分の心に合うように考えの中にその存在を加える。自然を見て、心を休め、自然の偉大さを思う。

地図 $\frac{1}{25000}$ の中のたったの3cm四方ぐらいの所を何日もかかって調べあげる。自分では、一生けん命でやったつもりでも、はなはだ心もとなく、そして、大きな大地の中のほんの一部での人間の行為である。

地学実習をして、自然に親しむことはそう難しいことではない。歩いていて断層を見る。不思議だなと思い、その時は、そのまま見流す。それが何回かして、その後の時には断層のでき方を自分で考えようとする。わからなくて、又時がたつ。そのうち、相互関係を知り、その断層と関係のあるものを調べようとする。

ただぼんやりと見ていたものの中に自分が、関連性を見つけ、そして、ただぼんやりと見ていたものの中に昔日のおもかげを自分で勝手に想像する。私はそこに地学実習の意味があると思う。人間である限り、自然の美は、人の心に訴えられるものである。しかし、その美の後ろに何があるか、その存在をつきとめることは容易でない。

自分の心に美を訴えられ、自分の心も又それを受けとる。しかし人間である限り、一考える者であるかぎり、その美の中だけにとどまっていられよう筈がない。美を感じ、その中の神秘性・不思議さを知ろうとする。しかし機会がないと、その態度もつぶれてしまい、“美”というものの中だけ、人間自身が存在してしまう。

“美”を感じることは必要なことであり、かつ非常に重要だと思う。しかし、その間から生まれてきた“なぜ”が伸ばされる必要性も大である。

“なぜ”一追求する心が人には大切だと思う。

自然にふれ、ひとつの“なぜ”は満たされても、又次々と、“なぜ”が生まれでる。いつまでいっても、どこまでいっても、“なぜ”と思考のおにごっこであり、そして、又“なぜ”は無数に存在する。

ひとつの地層を見ても、自分のことに反映し、ひとつの石を見ても自分のことと比較する。そしてついには自己の卑小さを知り人間の不完全さを思う。そのあとで、人間性の向上を自然の中に見つけることもあろう。

自然の美を見て、美しいと感じ、喜び、そしてその裏を考え苦しむ。しかしそれが自然と人間だと思う。

“なぜ”——それが日常生活で満たされることは多くない。自然を見て“なぜ”と思い、結局そのままとなる。地学実習は、その“なぜ”の前方をさす指針だと思う。

“なぜ”と考えた末の行為を知らせるものだと思う。地学実習をただの地質調査のレポート提出の前提と思うと何とも味けない。しかし、その中で、何を感じるかは個人の問題である。だから私達生徒の全領域を考えると、地学実習の価値

は非常に大きいと思う。

### 3. 指導者の実習についての感想と留意点 (昭和44年)

#### 中学校

○本校としては、中1に対して始めての実習であるので事前に十分調査し、検討したのであるが、生徒にとっては体力の面からは十分こなせると思うが、内容的には少し欲ばり過ぎた。この段階では欲ばらず、やさしく、楽しくするように心掛けなければならない。

○1クラス(45名)に教官1名が半数ずつに分けて指導したのであるが、これでやって行ける見通しがついた。欲を言えば、人数の少ない方が指導も徹底し、把握しやすいが平日に実施するとなると教官の人員構成の問題もあり困難である。

#### 高校

○とにかく遊山気分になりやすい。実習の目的を理解させ、以後の授業の骨子となることを充分理解させておく。

○暑い夏に行なっているので現地での長話しはさける。先生の話より生徒同士の討論を大切にする。

○生徒にとっては、はじめての地質実習であるから欲ばらないで理解しやすいところをおさえる。

○結論を急いで教えるはいけませんが、どんどんと観察事項が増えてくるとき、すでに見た露頭の疑問が蓄積しないように注意する。

○生徒の素朴な疑問を大切にする。

○ハンマーをもつとやたらに石をたたく生徒がいる。よく注意する。

### 4. 実習と授業について

授業において、実習地の概論をしていく中で、地学教材に対して必然的に関心がむくようになるし、実習の経験とそこでの観察事象を徹底的に教室に持ちこむことによって生徒が主体的に授業に参加できる。また自由研究により、彼らの研究の発表をも含めて全員が伝達によって経験の拡大をはかることができる。

以上のことは次のようなことからの理解を容易にすることができる。

○探突は、まず詳細な観察からはじまることを知る。

○観察の方法を考え、身につけることができる。

○地質構造に因果律の存在を知って、自然のもつ因果律を考えること。

○自分の観察した事象に基づいて、他の事象を簡単に判断してはならない。つまり、普遍化するには多くの時間と考え方を必要とする。

## § 4. その他

### 1. クラブ活動

#### a. 中学校

鳥井利清指導のもとにはじまった電気工作部を母体として、昭和28年より科学部が誕生した。その後、必ず1つのクラブに入るべき時代、中高合同の時代(昭和33年～昭和38年)、運動部に入った上で文化部に入る時代(昭和37年～39年)、そして必ず1つのクラブに入るべき時代と経て現在に至っている。昭和30年には71名、31年には96名

のクラブ員を擁したこともあるが、20～50名の範囲で活動している。

昭和30年頃の活動としては、「物理化学班と生物班に分け活動、ときには実験し、ときには講義をうけ、ときには書物を読み自由研究に研さんが続いている。毎週木曜または土曜に会合してるが、有志は毎日、実験その他を行っている。」（昭和30年度『学校要覧』）。

昭和44年より、生徒の興味の対象、施設設備、指導者を考えた上で現在の化学班、生物班、地学班の三班が設けられ活動している。1人の部長と各班の班長のもと、各班毎に週2日以上活動を進め、月1回全体で各班の活動内容を報告しあい、文化クラブ発表会展示会で1年間の成果を発表する。

化学班は、化学実験室で活動し、テーマとして、ナフィールド化学の研究、食品色素の分析、電気分解と電流、人造繊維、鏡づくり、金属と酸の反応の速さ、イオン反応の量的関係、青写真、学校周辺の水質検査などを取り上げてきている。

生物班は、生物実験室で主として活動し、読書会を持ったり、観察採集のため休暇中や日曜祭日に加太、箕面、側川溪、葛城山に出かけたりもする。テーマとしては潮間帯の生物、ダニ、蚤、ニワトリの正常発生、校内の植物分布、クモの分類、ミミズの再生などを取り上げてきている。

地学班は、地学教室で活動し、休暇中及び土曜日の夕刻から午後10時までの天体観察を15cm望遠鏡でしたり、休暇中や日曜祭日に、加太、滝の池、摂津峡に地学実習に出かけたりもする。テーマとしては滝の池周辺の地質、月面図づくり、気象観測と天気図、天体写真の撮影などを取り上げてきている。

生徒会から1.5万円～2万円の部費をもらい活動するが、理科各科の設備・施設に負うところが多い。

## b. 高等学校

昭和31年、高校開設の年に生徒会もつくられ、その規約の第5章にクラブの項目があり目的その他が記されている。理科に関するクラブもその年から存続している。

### イ. 存在しているクラブ

○昭和31年～昭和39年：科学クラブ

○昭和40年～昭和50年（現在）：化学クラブ、物理クラブ、生物クラブ、地学クラブ。（物理クラブは、昭和48年より同好会になった。）

### ロ. 予算

自治会予算の中からクラブに配分される。初期の自治会費は1人500円、昭和50年度は1500円。初期に比較して現在はクラブ数も増している関係で、各クラブともに配分金は約2万～4万のうちにある。しかしいつも理科系のクラブは学校の機器に依存する度合いが強い。

### ハ. 活動状況と内容（自治会祭・附高祭・ニュートン祭については次項参照）

本校においては、活動は活発である。以下に概観する。

#### 〈物理クラブ〉

毎年、部員は多くないが地道に活動してきた。しかし、この1、2年、部員が少なく、同好会になった。

○主な活動内容

昭和40年 76の特性曲線・エネルギー保存則の実験考察・ストロボ撮影を利用  
した物体の運動の解明・反発係数の測定・電磁音叉による弦の振動・  
昭和48年 光の回折像の分析)・白黒回転板の色の研究・音の撮影等

〈生物クラブ〉

毎年、部員は多く、生物の性質上調査合宿が盛んで対外的にも多くの成果を収めている。

○主な活動内容

昭和41年：淡輪アマモ帯動物相と生態・信太山付近動植物相と生態（44年まで）

＊42年：加太・大川海産物相の調査

＊43年：尾瀬方面生物相見学調査

＊44年：大台ヶ原動植物相の調査

＊45年：和歌山県日高郡小浦付近海岸動物相の調査

＊46年 和歌山県田辺市元島の海岸動物相の調査（48年まで）

＊49年～50年 串本大島にて海岸動物相の調査（現在継続中）

この間における特記すべき研究

1. 海辺性間隙動物の数年間にわたる生態研究。

2. アワビの受精から殻の長径約10mmまでの人工飼育に成功。

3. タバコの動植物の発生・発育にあたる影響。（昭和50年度学生科学賞で優秀賞を受賞）

○研究内容は大阪府高等学校生物研究会で発表もしている。（昭和48年度優秀賞受賞）

〈地学クラブ〉

部員数は2年生以後も実質的に活動する数は、10名くらいである。

○主な活動内容

昭和40年～昭和45年：白山総合調査（43年に読売科学賞で最優秀大阪府知事賞を受賞）

昭和46年～ ＊47年：四国剣山から祖谷にかけての三波川変成帯調査

＊48年～ ＊50年：和歌山県周参見町上戸川周辺の調査

その他、日常的に気象観測・太陽黒点観測・大阪周辺の地質調査・読書会・視程観測・小気候調査。休暇中、流星観測・読書会など。



○研究内容は、大阪府高等学校地学教育研究会で発表している。

#### 〈化学クラブ〉

部員数は10～15名で実際の活動規模としては適当な人員で、大きな消長なく現在に到っている。活動内容は各自が自発的に見つけてテーマとしているが、1年生では基礎的な訓練を、2・3年生で研究的なものとし、現有の器材や工夫した自作の装置によっているが、クラブ予算でまかなえない専門的機器は逐年充実してきた研究室のものを利用して活動している。内容では大別して生活科学的なもの、化学理論的のものになる。

○主な活動内容：昭和40年～50年の主なテーマは次のようなものである。

食品中のビタミン・食品添加物（色素）・大気汚染度・染料・エレクトログラフイー・有機合成・リーゼン現象・電解着色・溶球反応・単分子膜・発光スペクトル・時計反応・電極電位・無機錯塩のd-l分割・化学平衡など。

#### 二、クラブ活動内容の発表の機会

○校内における自治会祭（昭和39年まで）・附高祭（昭和40年度以降）

文化クラブの中では、物理・化学・生物・地学の発表は常にエネルギーと時間をかけている。発表の内容は主に前項ハにあるものが主になる。

○ニュートン祭（昭和40年～昭和44年まで）

内容は1）研究発表（クラブ員と教官）（『集録』別刷としてあり）

2）講演 昭和40年 能田忠亮「ニュートンについて」

＊ 41年 桜井帰一「結晶の話」

＊ 42年 加藤磐雄 「自然と人」

＊ 43年 清永嘉一「訪ソ報告（日食観測）」

＊ 44年 伊藤隆男「バタゴニアの自然と人」

3）科学映画鑑賞—「南極大陸」・「宇宙」など

4）茶話会

5）天体観測



このニュートン祭は、12月23日頃にその年の研究成果を発表し批判しあい、クラブ員相互とクラブ顧問の親睦をはかり、クラブ員以外の生徒の参加を呼びかけ、日没後は日頃望遠鏡で星を見る機会に恵まれぬ人に対してその機会をもたせてあげようというものであった。（毎回30～50人の出席があった。）

○物理・地学研究発表会（昭和47年）（『集録』は別刷としてあり）

上のニュートン祭が44年を最後に途絶えていたのを復活したものである。

#### 2. 理科における生徒の自由研究への取り組み

本校の理科では、「自然の事物や現象の中から問題を見い出し、それを探究する過程を大切に、科学的な見方や考え方を養うとともに、創造的な能力と、生命を尊重す

る態度を養う」ことを目標にし、具体的には、「常に、自分の納得できないことには疑いを持ち、その不明な点を、いろいろな資料を集めて明確にしていく努力を大切にする生徒」、「共同して思考し、活動するなかで、他人の意見から学び、自分の考えを明確にし、ふくらませていき、真の協力のできる生徒」、「事物を常識的にとらえるのではなく、事実によって証明されることを真実としてとらえる生徒」、「自然の不思議さ、すばらしさを知ることにより、自然を愛し、人間を愛する心をもつ生徒」に育てることをねらいとしている。そして、ひとりひとりを大切に、伸ばしていくための一つとして、生徒の自由研究を位置づけている。また、生徒の自主的・主体的な取り組みを通して、基本的な科学概念を生きた形で、じかに体で理解させ、自然のしくみや、はたらきを総合的、統一的に考察していく能力と、創造的な能力を養い、科学的な自然観を育成するのに、大層重要な機会と考えている。

中学生が夏休みの自由研究で自然科学関係のテーマを選ぶ者の推移を見ると、次の表の通りであるが、約4割の生徒が選んでいることの重みを感じ、現在は中学2年生を中心に中・高8人の教官が、生徒ひとりひとりの事前指導、実験指導、実験用具の貸し出し、実験室の使用の保証、事後指導にあっている。

中学校自由研究の自然科学関係テーマの分野別調査結果

(各学年全生徒に対する割合%)

年度	学 年	物 理	化 学	生 物	地 学	合 計
41	1 年	10	3	14	13	40
	2 年	6	14	21	9	50
	3 年	0	1	11	3	15
44	1 年	4	4	23	9	40
	2 年	1	6	23	11	41
	3 年	3	4	7	3	17
47	1 年	3	7	21	3	36
	2 年	3	8	12	2	25
	3 年	2	5	10	1	18
50	1 年	3	9	20	9	41
	2 年	2	5	26	3	36
	3 年	2	5	23	3	33

最近のテーマでは、公害関係のものが増している。また、その内容では、「授業の追試で終わるもの」、「本を調べるだけのもの」、「何冊かの本を比較検討したり、その本に書いてある実験を行なってみるもの」、「地味なテーマであるが長期にわたって継続研究を行なっているもの」、「創意工夫したユニークな研究をしているもの」などさまざまである。

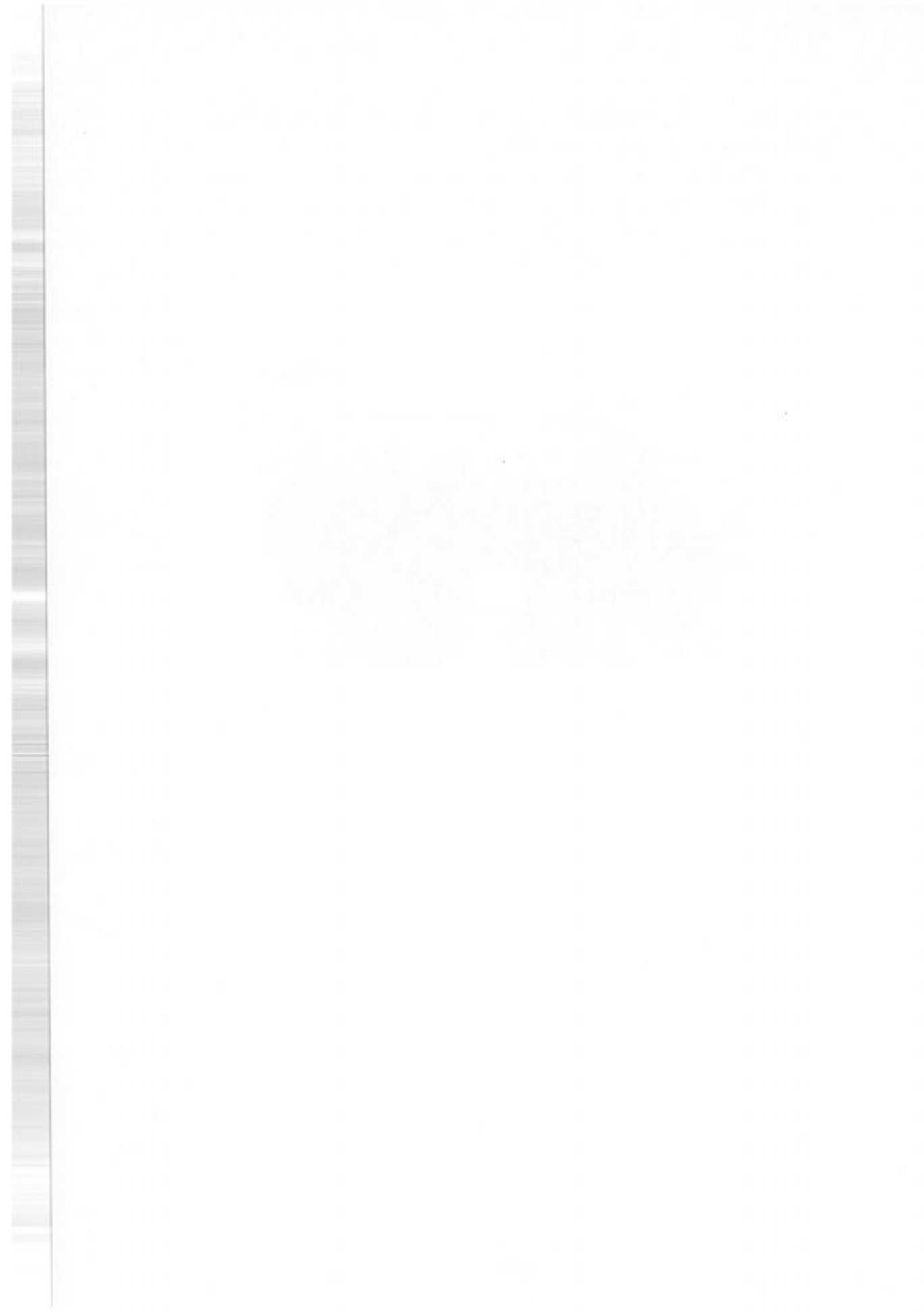
たとえば、3年間「かまきりの研究」ひと筋に打ち込み、その食べ物、分類、形態などを研究した生徒の感想によれば、本に書いていないことがわかったり、本に書いてあることと異なる事実を確認したり、学者を尋ねて教えてもらったり、博物館で教えても



らったりしたことがとても印象に残っているとのことであった。また、6年間「安威川の水質検査」に取り組み頑張った者などもある。

次に、高等学校では、物理Ⅰの授業でその目的を指導し、自主的にグループを作り、テーマを決定し、実験に取り組ませている。放課後に実験に来るので指導も大変ではあるが、自由研究のねらいの大切さ、生徒の実験における生き生きとした姿、発表に聞きいるまなざしを見るとき、その重要さが痛感されるのである。





# 保 健 体 育

## § 1. 体育科教官の動静

昭和22年、中学校創立当初より1年6ヶ月間は専任教官はなく、講師が担当していた。  
昭和23年9月、初代体育教官として星野義行（昭23.9～昭24.3）が着任した。当時は1名の定員であった。  
昭和24年、星野義行の転出による後任と、全体で3学年の完成年度による定員増によって、田中敏隆（昭24.4～昭25.3）、庄司正一（昭24.4～昭28.3）の2名が着任した。  
昭和25年、田中敏隆が転出し、1ケ年間は空席であった。  
昭和26年、森勝治（昭26.4～昭27.3）が着任した。  
昭和27年、森勝治、転出にともない、辻江正夫（昭27.4～昭38.3）が着任した。  
昭和28年、庄司正一、転出にともない、保田喬（昭28.3～昭46.4）が着任した。  
以後数年間は移動もなく、2名の陣容であった。  
昭和31年、高等学校併設により、辻江正夫、保田喬、両名が併任した。  
昭和37年、保田喬が初代高等学校専任となる。  
昭和38年、高等学校学級数増加による定員増により、矢田節彦（昭38.4～ ）が着任した。  
昭和38年、辻江正夫の転出により、中谷宗弘（昭38.4～昭46.3）が着任した。  
以後、数年間にわたり、中学校1名・高等学校校2名の陣容であった。  
昭和41年、中学校学級数増加による定員増により、風間健夫（昭41.4～ ）が着任した。  
以後、中学校2名・高等学校2名、計4名の陣容となる。  
昭和46年、中谷宗弘の転出により、西浜士朗（昭46.4～ ）が着任した。  
昭和46年、保田喬が転出し、1ケ年間は空席であった。  
昭和47年、浦久保寿彦（昭47.4～ ）が着任した。  
以後、移動なく、昭和51年3月現在、中学校2名、高等学校2名、計4名の陣容である。  
なお、養護教諭の定員は創立以来、昭和51年3月現在までなかったことを付記しておく。

## § 2. 体育科研究活動のあゆみ

本校、体育科の研究活動は、その時代の動向・思潮・要請と相携わり、あるいは先行して行われてきた。具体的な研究の主題は次項に示してあるが、こゝでは大きく5期にかけて、そのあゆみを概観する。

### 1. 草創期（昭和20年代前半：カリキュラムの研究）

終戦により戦時体制は崩壊し、民主化の方針から武道は中止させられ、体操は補助教材となり、教材のスポーツ中心化、レクリエーション種目の重視、班別指導など、従来とはかなり異った方向づけがなされていた。折しも昭和22年学校体育指導要項が出され、カリキュラムの編成は現場教師に委ねられ、各学校独自で作成、計画することになった。

ここに新体育の建設が始まったといえる。本校に於てもかゝる状況の下、コア・カリキュラムに対する関心が必然的に高まり、体育はコア・カリキュラムでいかに扱われるか、などカリキュラムの研究が行なわれた。この研究が本校体育科の研究活動の最初であり、これを契機にして以後の研究が継続して行なわれているのである。

## 2. 第2期（昭和20年代後半：ガイダンスの研究）

この頃になって体育科教育に対する関心の重点はカリキュラムからガイダンスへと移ったのである。このガイダンスは生活指導として重視されるようになり、教科内容の中にいろいろなものがとりいれられ、教科の学習が教科外の活動につながるようにするとか、校内競技を教科指導との関連において生活指導に役立てようとするなど、体育科の役割が学校生活における大きな柱となり、関心がむけられるようになっていた。かかる趨勢のもと、本校では球技（ボートボール、バスケットボール、バレーボール）や柔道などの教材を重点的にとりあげ、授業の中で好ましい人間関係の向上をはかるには如何なる内容で、如何なる方法で指導すべきか。また、自由時における体育指導のありかたや、当時としては関心の薄かった「道德教育」との関連について、などかなり幅広い領域にわたってのガイダンスの研究が進められたのである。このような総合的先行的な研究の帰結として大きな成果を収め、府下の一般校からも注目されたものであった。

## 3. 第3期（昭和30年代：グループ学習・系統学習の研究）

指導法については種々検討が加えられ従来とはかなり変容し、改善されていたようであるが、なお教師中心の一斉指導が一般的であり、全く放任された状況もあったのである。本校では指導要領の改訂にともない、団体的種目の指導については経験学習の立場に立って、組織的集団活動を重んじるグループ学習を強調した。即ち子どもの学習意欲や、自主性を重んじ、教師の計画的指導のもとで具体的目標をもたせ、異質グループによる話し合いによって学習が行なわれる授業についてなどの実践的研究を行った。その後、技術の獲得と伝達を合理的に、また、効果的に行なわしめるにはいかにすべきかという観点から、それぞれの教材について典型的に系統化し、段階的指導によって技能学習の効果を高めるための実験的な研究を継続した。

## 4. 第4期（昭和40年代前半：体力養成と学習指導の研究）

体育のスポーツ化現象が促進され、学校体育のみならず社会体育の啓蒙が活発になって、トレーニング論、根性論が唱えられるようになった。

ちょうど東京オリンピックを契機にして体力問題が重視されるようになったこととあいまって、学習論とトレーニング論という2つの思潮が共存している中で、学習指導の方法についての研究が行なわれるようになった。

本校においても体力は体系化されたスポーツおよび運動技能を習得する過程において基礎が養成され、増進されるものであるため、技能と体力づくりとは分離しては考えられないという観念に立った。そこで技能習得過程をとおしての体力づくりはいかにあるべきかについて、体操、陸上運動、球技、柔道の各領域にわたって各々の構造を分析し、各領域のもっている特性を失なわしめることなく、体力づくりに効果的な指導法を探究した。

## 5. 第5期（昭和40年代後半：効果的な学習指導—意欲的にとりくませるための—）

人間疎外といわれる現代社会において、人は社会の多様化、複雑化に適応していかな

ければならぬし、人は自らの生命を守り、高め、より望ましい社会建設のための行動力の充実、拡張という面をも考えなくてはならなくなってきた。かかる状況と、従来の反省から、個人の尊重という思潮が高まってきたのである。また、視聴覚機器の発達と普及によることや教材の精選ということから学習の効率化が唱えられた。

本校では授業時を中心とする場面において、教師と生徒との人間的なつながりに基づき、「生徒達の欲求は何か」「生徒達がやりたがり、知りたがっていることは何か」また「生徒達に何を教えてやればよいか」を研究の動機としながら、生徒達自身に変化していくスプリングボード（きっかけと推進力）としての教材はいかにあるべきか、また、実際にどのような場면을授業時に展開すべきなのか、などの課題について志向しながら、研究をすすめており、最終的にはひとりひとりのこどもの可能性を伸ばしていく「意味のある体育」となるように、ひとり、ひとりのこどもが意欲をもってとりくみ、向上することを念願として探求しているのである。

以上が本校体育科としての研究の動向であるが、小学校・中学校・高等学校の一貫した研究体制として、天王寺分校においては、昭和44年より小学校・中学校、高等学校が各々、年に1回ずつ研究授業を行ない、授業分析、意見交換などの研究協議を実施している。

また昭和47年頃から全学的な研究の組織づくりの機運が高まり、昭和47年11月、全学の小学校・中学校・高等学校、大学が相寄り、第1回大学付属研究会準備委員会が開催された。以後数回に互り討議、検討され昭和49年4月学内体育研究協議会が発足した。爾来、学期ごとに1回ずつ、研究授業ならびに研究協議を継続して実施している。発足当初より現在（昭和51年3月）までは授業分析を主なテーマとして「体育指導時のつまずきとその対処の方法」「つまずきを発見するまでの授業分析の方法」などについてそれぞれの立場から研究が進められている。

昭和23年12月10日

「ガイダンス並に単元学習指導」

研究授業 「バレーボール」 1年男・女

星野 義行

昭和25年2月3日～4日

研究授業 「ボートボール」 1年男

庄司 正一

昭和25年12月1日

「ガイダンス計画の立案と展開」

研究授業 「ボートボール」 1年男

庄司 正一

研究発表 ボートボールについて

庄司 正一

森口 肇

昭和26年10月31日

「中学校教育の全体計画と実践」 ——カリキュラムガイダンスと道徳教育——

指導講師 大阪市教育委員会

東野 兵次

研究授業 「ボートボール」 1年男

森 勝治

昭和27年7月3日

「独立後の教育のあり方」——各教科の指導実践——

指導講師	大阪学芸大学 大阪市教育委員会	重田 為司 東野 兵司
研究発表	「自由における体育指導（I）」	庄司 正一 辻江 正夫
研究授業	「柔道」 2年男	辻江 正夫

昭和28年11月13日

「個人を育てる教育活動」

指導講師	大阪学芸大学 大阪市教育委員会	重田 為司 東野 兵次
研究授業	「柔道」 3年男 「バスケットボール」 1年女	辻江 正夫 保田 喬

昭和30年10月26日

「個人を育てる教育活動」——中高6カ年一貫教育——

指導講師	大阪学芸大学 大阪市教育委員会	重田 為司 木南 道孝
研究発表	「調査にもとづく体育指導」	保田 喬 辻江 正夫
研究授業	「陸上競技」 3年男、女	保田 喬

昭和36年6月29日（木）

「柔道の学習内容をどのように指導するか」

付 審判の実際

付 骨折、脱臼、捻挫などに対する指導者の心得

昭和37年度から改訂される指導要領では、格技の取り扱いが選択から必ず実施しなければならなくなった。指導者にとっては格技の指導は、クラブ活動で専門的に技術を身につけたものか、有段者でなければならぬという雰囲気が多い。そのとまどいの中でこのテーマが取り上げられた。

ひとつひとつの技能（立技、寝技）の成り立ち、系統的な指導法を図とともに示しながら、体育の指導者に提言している。特に施設用具については傷害との関連からも充実を計るよう強調された。

また、大阪府教育委員会の館野氏により、柔道審判法の実際について指導を頂き、研究協議でも活発な討議となり格技の取り扱いに対する現場指導者の関心の高さを示した。

指導講師	大阪学芸大学 大阪府教育委員会 大阪市教育委員会	重田 為司 館野 進 森口 肇
司 会		保田 喬
問題提起		辻江 正夫
	大阪市立菅南中学校	寺尾嘉平史
研究授業	「柔道」	辻江 正夫
柔道審判法の実際指導		

昭和41年10月 日(金)

## 「走力と練習効果」

一週2～3時間に限られた授業時数の中で、走力をつけることは大変にむづかしい。しかも文部省で示された指導内容は大変に多い。単に走力をつけるだけならば陸上競技クラブのように時間をかけ、練習方法を合理的にし、練習量を増せばよいわけであるが学校教育という中で考えると問題がある。その中で走力を高めることは全現場的な課題であるが、それらをどう解決するかということで問題提起をしようとした。

具体的には普通一般の生徒に一般的な方法で指導をし、放課後特別に残らせて練習をさせるということもしないとするならば、授業時をいかに工夫をし、日常生活にどう取り入れるかということで、

- (1) 走力を100 mの記録とし、
  - (2) 40 mの折り返しリレーを2回、40 mのスタートダッシュを3回実施し走るグループ
  - (3) 補強運動として、基礎体力養成運動、脚力養成運動、瞬発力養成運動を実施したグループ
  - (4) 特にノルマを課さずに短距離走の授業をしたグループ
- として、それぞれの走力の伸びを資料にして比較研究を行なった。

特に夏休み中を通じての指導、休暇後の記録の変化等がユニークな資料であり、現場の指導者が短距離走の指導をする場合の、教材のとらえ方に大きな示唆を与えた。

指導講師	大阪学芸大学	重田 為司
	大阪府教育委員会	長野 元泰
	大阪市教育委員会	森口 肇
司 会	大阪府立大手前高等学校	八倉 広道
問題提起		保田 喬
研究授業	「陸上競技」	保田 喬
講 演	スポーツ振興と学校体育のあり方について	

大阪府教育委員会

木南 道孝

昭和43年10月17日(金)

## 「体力養成と学習指導」(I)

学校体育の中で体力づくりを提唱されて久しいが、数少ない授業時数の中でいかに養成すべきかは現場の指導者にとって大きな課題であった。その流れの中で、まず一般社会の中で役立つ体力、要求される体力は一体どんなものであるだろうかということ进行调查した。大阪府、大阪市の中学、高校および所属天王寺小学校、高校の父兄1059人を対象にアンケートをとり分析をした中で我々の方向を見出そうとしたものである。

そこで得たものは、社会生活をするための適応のみにとどめず、行動力の充実、拡張を高めることこそ将来における望ましい体力であるということであった。

本校ではそれをまとめて、子供達に「からだ」が本来持つべき能力、人間の諸能力の必要性を自覚させ、調和のとれた状態でより積極的に高めていくことが必要であると定義し

た。また、それを達成するためには体系化されたスポーツ、運動技能を習得する過程において基礎が養成され、増進がなされると考えている。そのために、技能と体力づくりは切り離して考えることはできない。

また、改訂された小学校の指導要領で取り上げられた「体操」領域から考えて、中学校でやがて取り入れられるであろう「体操」領域について、展開の工夫をも提案することができた。

(例)

- ① 技能教材に関係なく、年間を通じて継続的に基礎体力を養成する。
- ② 技能を習得させるために、その技能の基礎となる体力を養成する。
- ③ 技能教材に関係のない基礎体力を継続的に養うとともに、計画の中で予定される技能教材の基礎となる体力を養成する
- ④ 本校の体力面で劣る体力を計画的に養成する。
- ⑤ その授業の展開の中で欠ける体力を、かたよりなく補う目的で養成する。

アンケートの結果もまた、全体討議の資料として提示された。

指導講師	大阪府教育委員会	長野 元泰
	大阪市教育委員会	辻江 正夫
司 会		保田 喬
問題提起		風間 健夫
研究授業	「柔道」	中谷 宗弘
	「器械運動」	矢田 節彦
講 演	学校体育における体力づくり	
	大阪教育大学	辻野 昭

昭和45年10月22日(金)

#### 「体力養成と学習指導」(Ⅱ)

前回に引きつづき体力養成について取り上げた。人間疎外の社会の中で行動力の充実、拡張という二面から考えた場合、子供達に「からだ」が本来持つべき能力、人間の諸機能の必要性を自覚させていくにはどうすればよいのだろうか。前回では技能修得過程において体力の基礎をつくり、増進させるという仮定で行ったが、今回はその仮定による授業実践の中で得た資料をもとに発表した。特に指導要領で体力づくりのための教材として、「体操」がクローズアップされてきた時期でもあり、その取り扱いにも提案をした。

そして、本校のその基本的な展開の方法としては次のようなことである。

- (1) 学校体育の目標をすべて達成できるべく、現在のスポーツを中心とした運動種目を教材をしてとり入れ、同時に一層の体力養成の活動(練習)をも組み入れていく。
- (2) 体力養成に必要な教材としては、特別な体力トレーニングを別に取り上げて行なうのではなく、それぞれのスポーツの技能の向上との関連において実施し、さらに工夫をこらしてその技術の要領に似たトレーニング方法(技術の練習の過程で一層体力を養い得るような)を工夫をすることも必要と考える。
- (3) また、体力養成には質的な工夫だけでなく、量的にも運動量を増すように練習の方法、用具の量や配置、班の編成なども考える必要があると考える。

指導講師 大阪府教育委員会 尾崎 弘明



	大阪市教育委員会	辻江 正夫
	大阪教育大学	青谷 基夫
司 会		中谷 宗弘
問題提起		保田 喬
研究授業	「陸上競技」	風間 健夫
	「ラグビー」	矢田 節彦
講 演	キネシオロジーからみた「体操」領域の指導	
	大阪教育大学	辻野 昭

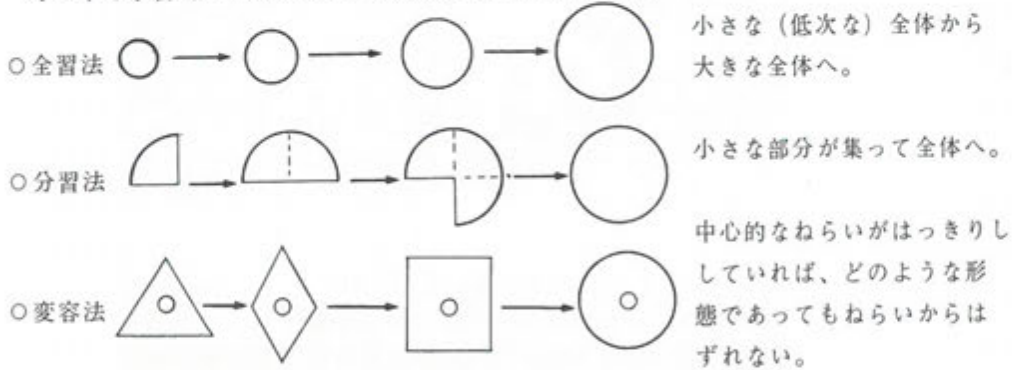
昭和48年10月19日（金）

「効果的な学習指導」 ——意欲的にとりくませるために——

現代の社会においての「体育」を考えてみた場合、子供達には「からだ」が社会とのかかわりあいにおいて生活の基礎となっていることを自覚させ、調和のとれた状態で高めていくことと同時に、新しい事態に対応できる能力もまた高めていかねばならないと考えられる。しかしながら、我々の授業は余りにも今日的であり、教材に追われているのが現状である。これらの流れの中で効果的な学習指導を考えねばならないという考えに立ち、上記の課題にとりくんだ。

以上のような「意味のある体育」とするために、体育の目標を達成するための手段である教材と、学習指導場面について考えた。特に授業を中心とする場面において「子供達の欲求は何か」「子供達がやりたがり、知りたがっていることは何か」「子供達に何を教えてやればよいのだろうか」といったことにまず目を向け、その中で子供達自身に変化をしていくための教材はどうあるべきかといったことから展開をした。

その中で学習場面の例として、次のようなことを示した。



更には将来に移しやすい体育とするために、「何のために」あるいは「どうすればよいか」といった意識のプロセスを通らせる学習場面等についての工夫なども提案をした。

指導講師	大阪教育大学	青谷 基夫
	大阪教育大学	辻野 昭
	大阪府立西野田工業高校	久保 瑞祥
司 会	大阪市立昭和中学校	小池 宗保
問題提起		風間 建夫
研究授業	「陸上競技」	風間 建夫
	「バレーボール」	浦久保寿彦

講 演 「ラグビー」 矢田 節彦  
体育指導の科学化をめざして

大阪教育大学

辻野 昭



ラグビー研究授業



ラグビー研究授業



マット運動研究授業



講 演



研究発表



陸上競技研究授業



陸上競技研究授業



ビデオを使っでの研究授業



研究発表参会者風景



## 音 楽

### 昭和22年～24年

昭和23年4月教諭 中西清隆着任。附属中学校創立以来十年間を通じての、研究題目「個人を育てる教育」の実践に関して、音楽科としての実践の準備とその基礎を確立。昭和24年をもって離任。

### 昭和25年～26年

昭和25年5月、教諭 大浦（久米）てる子着任。資料収集の限りでは、音楽科としての最初の研究発表が、久米てる子、高井節により行なわれている。それらは、音楽での単元学習を展開したものであり、生徒が今まで習って来た音楽を歴史的段階に分け、系統だてて研究し、その時代の作曲家の作品を歌ったり、鑑賞する中で、各時代の音楽の特徴や作曲家の様式を系統的に学習させる方向をとり上げている。また大阪市やその周辺の各学校より取り寄せたアンケートを基に、その実態を発表しており、そのアンケート項目は、音楽教室とその設備・音楽会・理想的な音楽教育・教科書・クラブ活動・授業人数と男女差・歌唱・器楽・鑑賞の問題点などであるが、これらをもとに27年には、本校での実態調査とともに、研究紀要でその分析が行なわれるのである。あわせて昭和24年から学校行事としての音楽会が行なわれていたのであるが、合唱や器楽合奏、ピアノ独奏とバラエティーに富んだ催しであり、音楽活動の活発さがうかがわれ、26年には、安西冬衛氏の作詞、加藤直四郎氏の作曲により、附属中学校校歌が出来上がり発表会を持っている。

#### ○研究発表（校内教育研究発表会）

発表者 大浦てる子

「音楽の歴史的研究 18世紀」 ベートーベン 「旅人の歌」

発表者 高井 節

「音楽的表現の工夫」 合唱 「希望のささやき」

### 昭和27年～昭和29年

ここでは25年より着手した実態調査と合わせて、本校の生徒の各学年についての調査を行ない、単元学習における実践の跡・解決すべき諸問題・実態調査の結果の四項目について研究が行なわれ、特に単元学習については、一単元で一目標が達せられるというよりも、一単元によって音楽の各領域（表現、創作・鑑賞など）の各部門が有機的、総合的に含まれるようなものと言う考え方から出発しての単元組みが行なわれ、非常な苦心の跡がうかがわれる。また解決すべき諸問題の中で、生徒の自主活動の促進があげられているが、自主性、主体性から導き出される創造性という事と解釈され、今後それらを考えたいという意見があり、今後の音楽活動の重要な一方向をここで、もうすでに暗示されているのである。さらに実際の授業では、音楽に関する基礎的能力となる読譜力を重視した指導を、主に歌唱を通して行な

い。視唱力を高めるためのあらゆる角度からの指導を試みているが、それらは創作の領域まで発展させられるよう、各領域が前述の有機的・総合的に学習されるような配慮が試みられ、音楽教育における創造性開発の基礎となるべき音楽的能力の育成が行なわれている。この研究は昭和50年再び取り上げられる事になるのであるが、まことに興味深い事例である。

○研究発表（校内教育研究発表会）

発表者 大浦てる子

「楽譜の正しい見方と歌い方」 「ドイツ民謡」「友」

「研究紀要 音楽科教育の諸問題」

昭和30年

音楽教育界では「音楽の生活化」が強調され、本校の授業でもその意図を配慮し、混声合唱などの形態を通じて、特に合唱の調和という事。皆が一緒になって一つの、曲を作り上げて行く過程を大切にし、それらを通して生活を楽しめる明るい人間性を養う、なおその上に音楽の技能やハーモニーの美しさを感じ取る鋭敏な感覚を養い、最終的には生徒自身で曲を作り上げるという自主性も含めての授業が展開された。また30年からは、31日4月1日を持って設置される附属高等学校との、中高一貫教育のもと、音楽科でもその指導計画の準備がなされ、カリキュラムの再編成とともに、今まで行なってきた。音楽教育の諸問題を中高一体となって、より深く追求する事になるのである。

○研究発表（校内教育研究発表会）

発表者 久米てる子

「混声合唱をしよう」 モーツアルト 「魔法の笛」

昭和31年～32年

昭和31年4月1日をもって高等学校が設立され、久米てる子の他に非常勤講師として符坂（木本）治子着任、両名によって中・高音楽科が運営されることになり、附中創立以来過去10年間の研究題目の上にさらに中高一貫としての研究が展開されることになる。

昭和33年～35年

中・高一貫教育の実施に伴い、また個人を育てる教育の実践から、歌唱の面で非常に問題となる変声期というものを考え、それらについての教師の悩みや実際に変声期の各々の生徒についての毎日の指導、助言を通して、問題のある生徒をどのような方向で指導すれば良いのか、また実際の効果はどうであったかなど、個人個人を温く導く、指導が展開されている。またこの間、各学年の実態調査、日頃の授業の実践過程を通して中・高6ヶ年のカリキュラムの成立が行なわれた。昭和34年には、附高自治会の手により附高応援歌が出来上がっており、現在でもなお盛んに歌いつがれている。

○研究発表（『研究集録』第1集）

発表者 久米てる子

「変声期の中学生の音楽教育の一端」（『指導記録』より）

昭和36年～37年

この年は、33年～35年の歌唱面からと視点が異なり、鑑賞の指導がポイントになっており、授業の他にどのような音楽発表あるいは鑑賞の場が設けられていたのかが、『研究集録』の発表によって理解される。校内音楽会・クラス音楽会・クラブ発表会、レコード鑑賞会や朝日学音への参加など、あらゆる機会を通して生徒達が積極的に、音楽への参加ができる場を作り出そうと試みられている。実際の授業に関しては、生徒と指導者とのギャップをうずめるための努力や調査が行なわれ、鑑賞教材の興味調査・楽曲の感想文の分析、鑑賞日記など、具体的な資料によって実際の授業での鑑賞指導の方向を指示している。生徒のグループ学習をも取り入れ、ただ聞くだけの受身的な鑑賞指導におち入らない配慮のもとに指導が展開されている。また木本治子は昭和36年をもって離任、昭和37年4月、浜井三重子着任。

○研究発表（『研究集録』第3集）

発表者 久米てる子

「変声期における音楽教育の一端」（鑑賞指導）

昭和38年～39年

歌唱・鑑賞の各領域の研究が続けられて来たのであるが、今回は創作の領域において研究、実践が行なわれている。創作活動というものが、生徒自身が心に感じたメロディーを素直に歌い、音符にして記録する事が出来るものであると言う事、ただ単に作曲だけではなく、各領域（歌唱・鑑賞・器楽）などの学習によって身につけている感覚や表現力、創作意欲、読譜力や記譜力、自主的な学習の姿勢などの基礎的なものがあって、初めて創作活動が可能になる。そのような総合的な要素を持つ領域を、今までの研究成果をもとに、どのように系統だてて指導していくのかという問題に取り組んでいる。実際の授業においては、生徒のグループ活動を通しての発表が行なわれ、ソルフェージュ能力（リズム感、音程感覚、即興能力など）や他の表現活動（歌唱、鑑賞・器楽）とのつながり、グループ内の協調性、助け合い、個性の伸長など、非常に幅広い面から充実した授業が展開され、作る事によって音楽を深く考え、味わう基礎となるように、作る事によってより音楽の美しさに触れ、感動する学習の雰囲気作りを配慮しながら授業が行なわれている。

昭和38年に浜井三重子離任、以後、久米てる子により、中・高の音楽科が運営される事になる。また高等学校芸術が昭和35年より昭和37年まで高1より高3までであったものが、昭和38年より昭和47まで高1のみとなり、音楽は実質的には、中1より高1までの4年間となる。

○研究発表

校内教育研究発表会 発表者 久米てる子

「合唱や合奏の基礎を作ろう」

講演 山県茂太郎（大阪学芸大学）

「モーツァルトのメロディー構成について」

『研究集録』（第5集）発表者 久米てる子・浜井三重子

「中学校における創作学習について」

「音楽科カリキュラム」

なおこの時期に生徒によって作曲された作品を上記、『研究集録』の中よ

より1曲を掲載することにする。

## 河口湖

あ お く す - み - た - る み づ - う - み - の  
み づ - も - わ - た - る か - ゼ - お - ギ - し  
ふ じ の や - ま - を - ば さ か さ に う つ し  
し ず か - に - ゆ ら ぐ か わ - ぐ - ち - こ

一、青く澄みたる湖の  
水面を渡る風涼し  
富士の山をば  
さかさに写し  
静かにゆらぐ河口湖

三、胸にいだきて  
青きまりもを  
身につけて  
風に緑の髪  
ゆらがせる

三、静かな湖 河口湖  
夏には夏の富士ありて  
春には桜 秋もみじ  
冬には雪の富士写る  
青く静かな河口湖

河口湖

### 昭和40年～43年

昭和36年～37年の間に研究された鑑賞の問題点を、再度実際の授業の展開を軸に、主に必修鑑賞教材をどのような形で展開するのが妥当であるのか。生徒の感想文、興味調査を通して、鑑賞教育の意義と重要性を考えている。また鑑賞指導の環境設定に関しても、前回と同じく幅広い機会を通して生徒が音楽と接する事ができるよう配慮されており、日々の音楽的雰囲気作りがはっきりと読みとれる。なお創作活動も引続き活発に行なわれ、生徒の素直で親しみやすい作品が数多く作られている。



研究発表（『大阪教育大学紀要』）

発表者 久米てる子

「中学校音楽科における鑑賞を中心とした授業実践」

（鑑賞教育の意義と重要性）

#### 昭和44年～45年

昭和44年度をもって、久米てる子離任、45年度石見周而着任までの間、非常勤講師として大和邦子、石見周而両名により中・高音楽科が運営される。

#### 昭和46年～47年

今まで、各領域にわたり、研究、授業の実践に多大の努力が払われてきたのであるが、この年には器楽教育、特に小アンサンブルを通しての創造性への試みが行なわれている。「新指導要領」において、基礎指導の重視と、主体的な学習過程から導き出される創造性が歌われるとともに、日本音楽の指導や、小アンサンブルが重視されている。小アンサンブルにおいては従来からも日頃の授業の中で盛んにグループ発表という形で行なわれているのであるが、それらの意義・目標・生徒と教師の感覚の違い、指導上の問題点（グループ編成・選曲・楽器・編成・楽曲の理解度・練習の過程・リーダー・設備・評価）などを理論と実際の授業を通してもう一度分析して見ると言う事で行なわれた。

また基礎と日本音楽についての指導の体系を計るため、その疑問点の整理も行なわれた。

研究発表（校内教育研究会）

発表者 石見周而

「音楽科教育における創造性への試み」メンデルスゾーン「銀色の雨」

（主に小アンサンブルを通して）

「講演 創造性を考えた和声と旋律との関連性」

（大阪教育大学）山県茂太郎

研究発表（全国国立大学附属学校連盟高校部会）

発表者 石見周而

「本校音楽科の現状と主体的学習から創造性への過程」

「新指導要領との関連における単位数・基礎と日本音楽についての疑問点」

#### 昭和48年～49年

『新指導要領改訂』に伴い、昭和38年以来高1で終了であった音楽科は、高2まで延長され、前回の研究テーマ「音楽科における創造性への試み」をより深く実践する事になり、再度のカリキュラム編成に取り組む事になる。小中高との関連（一貫性）を図るという意図のもとに、特に基礎領域と日本音楽の指導が『新指導要領』では強調されたのであるが、創造性の開発のためには基礎領域の指導の強化が必要であるという事が、実際の授業を通しての問題点であり、昭和27年より29年の間に実践された問題が再度浮び上がって来たのである。

研究発表（大阪府高等学校研究集会）

発表者 石見周而

「音楽的技能・感性を高めるための基礎の体系」

（主体的学習の確立と本校における中・高との関連からの一考察）

この間昭和49年9月海野優子非常勤講師として着任

### 昭和50年

昭和45年度よりの研究テーマの根本となるべき、生徒達の主体的な姿勢にもとずいた創造性開発の目標が達せられるよう、その原点にたちもどり、音楽能力を高める。あるいは音楽活動を高め、音楽経験を深めるもの。「読譜力」「記譜力」「リズムの感得・理解」「音楽的感受性」「音楽の表現技能」などの事柄を、歌唱を通して実践し、基礎に重点を置いた授業が展開された。

研究発表（校内教育研究会）

発表者 石見周而

「基礎領域における一考察とその発展性」（歌唱）

中Ⅰ 「サイクリング・リンリン」

高Ⅱ 「ウクライナ民謡より」

「講演 中学生・高校生における歌唱領域の指導について」

講師 松村直行（大阪教育大学）

以上、本校の附中・附高を一括しての音楽科教育の授業実践や、研究の内容を概略的に書いて来たのであるが、まだまだ未解決の分野が多く、より良い効果を目指して努力をしてゆかなければならない。かつその裏には「音楽は答えを出さずに人間を教育する」とい考え方も成り立ち、幾多の研究によっても答えは無限であり、限界を知らないとも言えるのであるが、現代の社会における科学技術や、情報伝達の飛躍的な革新など、社会環境の急激な変化は、永久に修理中の建物のようにであり、不安定な動的発展である。教育の目的が望ましい人間形成を目ざす以上、そのような変化の激しい社会と、その中に無気力に、ただ一つの物体のように埋もれつつある人間、その人間性を回復し、本来の姿勢をもたらすためには、人間の主体的な意志に基づき、個性を発揮し、創造的に適応して行く人間の育成を、音楽科教育の立場として実践して行かねばならない。このような基本的な考えの基に各領域の面において問題点を少しずつでも是正し、生徒各個人が持つ可能性を最大限にひきだすべき事を目標に、研究や実践を進めて行きたいと願っている。



昭和50年 中学の音楽授業風景（校内研究発表会） 昭和50年 高校の音楽授業風景（校内研究発表会）

また、研究活動や授業実践の他にも、音楽会や音楽クラブの運営など、山積みされた課題が、なお多く蓄積されているのである。今後、本校の音楽教育の充実を計るためにも、なおより良い、音楽活動の環境の設定にも努力を払って行きたいと思うのである。

# 美術科

## § 1. 創立以来の教官

昭和23年～昭和33年	木村 茂
昭和34年大学転出後も引き続いて昭和47年まで附属高校非常勤講師	
昭和25年～昭和38年	中谷 亨
大学勤務の傍、非常勤講師として、本校図画工作の中、特に工作面を担当	
昭和34年～昭和38年	萩原 直
昭和39年～昭和45年	岡田 博
昭和46年大学転出後、昭和49年より昭和50年現在まで附属高校非常勤講師	
昭和46年～昭和50年現在	河村 徳治
昭和49年～昭和50年現在	藤原 昇一 附属高校非常勤講師
昭和49年～昭和50年現在	山口 良子 附属中学校非常勤講師

## § 2. 教育研究の活動

### 昭和25年

府下80校を対象に図画工作実態調査を行なう。

図画工作の中、工作に的をしぼり、時間配当、教材、設備、目標、実践面での各種の問題点等について調査

### 昭和26年

教育研究発表会で「秋の花、果物等」を主題に研究授業

構図、表現による自主的、創造的精神の涵養などを目標において行なわれた。

### 昭和27年

府下104校を対象に図画工作実態調査を行なう。

図・工の取り扱い、図画的教科・工作的教科の内容、鑑賞、評価、教科書・参考書、諸設備等について調査

教育研究発表会で「都会風景」を主題に研究授業

色と形に対する理解と感覚を深め、画面構成を行なう「考えてつくる絵」をテーマにして行なわれた。

『研究紀要』第5集「学習指導上の諸問題」に「考えてつくる絵」(図画)

「図工科の工作面について」(工作)を記載

### 昭和28年

教育研究発表会で「美しさを見つけよう」を主題にした研究授業では非具象形をとり上げて行ない、工作では「製図の知識」を主題に授業

『研究紀要』第6集「中学校における個人を育てる教育」に「図画教育における個人の

育て方」を記載

#### 昭和30年

教育研究発表会で「野菜を描こう」を主題に研究授業

偶然的・抽象的傾向の流行する中で、「図画科の基本は写生にある」ことを真向から取り上げ行なった。

『研究紀要』第7集「個人を育てる教育」に「写生画における型と指導法についての考察」を記載

#### 昭和33年

『研究集録』第1集に「中学生の写生における線描について」を記載

#### 昭和35年

教育研究発表会で「デザイン」を主題に研究授業

意図的・計画的に学習し、思考力と感性を働かせるよう行なった。

府下131校を対象に図画工作実態調査を行なう。

美術科と技術科の二分について、時間数に関連して、描画、デザイン、彫塑、鑑賞等について行なわれた。

#### 昭和36年

『研究集録』第3集に「描画不振時代（思春期の美術）をいかに指導するか」を記載

#### 昭和38年

教育研究発表会で「幻想による表現」を主題に研究授業

「構想画導入の実際」を研究発表

「構想画指導のあり方」についての研究協議を行なった。

#### 昭和40年

教育研究発表会で「木版画」を主題に研究授業

「単色木版画の効果的な指導」を研究発表

「版画指導のあり方について」の研究協議を行なった。

『研究集録』第7集に「版画指導の問題点——単色木版画製作における版造形のあり方について」を記載。

#### 昭和41年

チェコにおける第18回INSEA国際会議で「単色刷り板目木版画の教育的意義 THE SIGNIFICANCE OF GRAIN WOOD-BLOCK PRINTING WITH MONO COLOR IN ART EDUCATION」について発表。

#### 昭和42年

『研究集録』第9集に「単色木版画の教材としての特色と望ましい指導のあり方」を記載

教育研究発表会で「化石を作る」「極地方を描く」を主題に研究授業

「表現教材開発の意義と可能性」について研究協議

資料として各種教科書が取り上げている教材、民間団体研究会にとりあげられた教材、附属天王寺小学校・中学校の教材開発例など様々の教材を分類し提示した。

#### 昭和43年

全国国立大学附属連盟第10回高校教育研究大会（於・京都）で

「高1の段階における描画指導上の興味づけについて」を發表。

#### 昭和44年

『研究集録』第11集に「美術科の教材の開発について」を記載

全国国立大学附属連盟第11回高校教育研究大会（於東京）で

「教材開発への提案」を發表

教育研究発表会で「自己紹介」を主題に研究授業

「中学校・高等学校における表現教材（描画・デザイン・色彩）の系譜」について研究発表

「HOTな教材をめぐる」をテーマに協議を行なった。

#### 昭和45年

『研究集録』第12集に「美術科における教材の開発について——その2」を記載

教員養成大学部及び附属教育研究集会（京都）で

「美術科における教材の開発（デザイン教材について）」を發表

#### 昭和49年

教育研究発表会で「枯れ花を描く」を主題に研究授業

「中学生の美意識と造形性について」を研究主題として、「中学生にとって興味ある題材とは何か」について研究発表と協議を行なった。

#### 昭和50年

『研究集録』第17集に「美意識の基底をさぐる」を記載

フランス、第22回INSEA国際美術会議に「美的感覚についての考察……（子どもの絵の構造と指導）AN INSIGHT INTO THE DEPTH OF ESTHETIC SENSE」を文書発表

### § 3. 附中高美術教育の問題

昭和23年～昭和33年（木村 茂・記）

#### 木造美術教室時代

昭和22年、附中が開校し、体育館前の教室を使っていたことは知っていたが、美術教育がどのように行なわれているかについては全く知らなかった。

昭和23年に師範の3階写生室で高妻巳子雄（現大阪教育大学名誉教授）先生から附中の美術を指導するよう話があったとき、今までは高妻先生が指導しておられたのかと推察した。その後少しして榊原三寿郎主事先生から正式の話があって、非常勤講師となった。

昭和26年、師範が廃止され附中専任の教諭となった。当時の新制中学校はカリキュラムに問題が多くガイダンスの問題が盛んに論じられているときで、附中の研究会の特別講演も26年まではガイダンス問題の連続であった。勿論美術の文部省指導要領は出されていたが日本の国情には合わず、生活に美術を役立てる点に重点があつて創造的活動は軽視されていた。そのためデザイン的な仕事とその基礎練習として抽象表現が重んぜられ、写実表現は軽んぜられていた。写実が敬遠された理由はそのほかに、写実は一応似させる必要があるが客観的視野の発達するにつけ、自分の作品に自信を失いからだ全体で自然に打ち当たる迫力がなくなり、よい作品が生まれにくいことが多い。進歩的指導者はこれらを理由に抽象表現に走った。しかしその反面美術専門家養成教育を固守する保守的指導者も決して、少なく

なかった。自分としては中学校美術の方針を立てる必要があったが、幸なことに当時高妻先生を中心に大阪児童美術研究会が協力して小学校美術教科書の文部省検定本を作りつ、あった。そして会員の実践を踏まえて美術教育の目的、内容、表現方法、指導技術の研究、その討論、またそれを生かす指導のもとにできた作品の検討を重ねている時であった。このため、美術専門家養成の美術教育と、人間養成のための中学校美術が目的から違っていることや、内容も一方は分化した末端の技術指導に対し、片方は展開すれば美術全般に伸びる基本の修得である。特に発達段階に応じた内容と指導技術が必要であるということは小学校図工教育の延長上に在らねばならないといったことは解っていた。その基本となるものは美に対する素直な感覚の育成にある。とすれば自然に対決する写実に没入する態度の養成が中心となる。抽象的表現やデザイン学習は生活環境が良好な上、頭脳明晰な生徒が多いので決して難題ではないと考えていた。この写実態度を体得するため、週2回のクラブ活動、夏季休暇中の希望者への写生の指導、もらえる時間があれば載いて一時間でも多く絵を描かせるようにした。幸い生徒は積極的に喜んで作業に当たってくれた。デザイン的作品も新鮮味のあるものを作ってくれた。

昭和28年の研究会で「個人を育てる教育」(金森徳次郎氏)の特別講演があり、その為か、各教科担任に個人を育てるための教科のあり方を書かされた(附中紀要6)。昭和30年の研究会の特別講演は私の附小時代の教生の先生であった白井勇先生の「指導のための調査—個人を育てる教育」であった。中学校教育方針がいさゝか生徒の方へ帰って来た感じである。白井先生の講演に応じたわけでないが附中生の写生画を分類して、分類別の指導法を考えて附中研究紀要7に掲載してもらった。その大要は最も表現力が低いと思われる段階に拙劣型を置き、その中には装飾性のあるものを含めて1つの塊とみ、次の段階に羅列型と稚拙型をおき拙劣型から分化するとし、第3の段階に再現型、関係型、主写型、全体型を置いて前段階から個人に応じた型に進ますように指導する。次に第4の段階に第2関係型と第2全体型があって、再現型は関係型を通過して第2関係型へ、関係型は再現型を通過して第2関係型へ、主写型は関係型を通過して第2全体型へ、全体型は再現型を経て第2全体型へ進み、この2つの型は装飾化を通過して理想の写生画へ進むという道順に沿って指導するのが得策であるとした。

またこの頃「一本線描法」と呼ばれ、美術教育上大きい反響を生じた描法があった。昭和16年に東京から休暇で帰阪した折、櫻商会の石原正徳氏(元大阪児童美術研究所長)と会って聞かされたのが始めであった。高妻先生が教育的価値の高いことを認められて氏と共に西日本を遊説啓蒙に務められ昭和30年頃には、一本線、およびこの描法態度の彩画も含め「大阪画図」と呼べる作品が各地に出現してくる盛況振りであった。そこで若し線描を無指導で描がせればどのような線を中学生は使用するか。そして人間養成に最も適当な線は果して一本線描法だといった結果がでるか試したくなったが、附中生の大半は附小で、乾一雄先生や西元保先生の指導で立派な一本線描法をするので、豊崎中学にお願いして指導を受けていない中学1年生の作品200校余りを得て分類した結果、無変化線と集合線に大別し、無変化線を分けて軽線、重線、幼児、概念の4種とし、集合線は反復、運動、遅疑、留滞、面傾向、混合の6種とし、その中から自信と責任のある線形は重線だけであり、反復、遅疑、留滞は自信欠除であり運動線は無責任である。面傾向と混合は線から離脱する。結局、観察と精神集中には重く、長く、速度の遅い「一本線描法」が浮かび上っ

てきた。この発表は昭和32年でまだ木造校舎にいた時であった。この一本線描法は附中生の美術教育の基本として有力な働きをしてくれたものであった。

### 鉄筋美術教室時代

附属高校発足は昭和31年であった。附中生の一部は鉄筋校舎にはいていたが特別教室はまだ木造校舎を使用していた。そのため附高生の1、2期生は木造校舎で教えた。成田教頭先生の頃からゆくゆく附高が併設されることを予想し、美術大学受験希望生に間に合うようにと大型の石膏像も少しは買い溜めていたので、附高の授業にさしつかえはなかった。やはり高校美術ともなれば中学の線だけで押し進めるのは不十分で、いくらか専門的な美術指導と美術系大学へ進学する生徒のことも考え、木炭素描や油絵の指導も加へて行った。選択制度も手伝って指導は附中よりも楽であった。ただもの足りなく感じたのは絵が安定し過ぎていることで、これは不足のない生活、心配のない精神状態から出ているのであろうか。

附中生の作品は毎年「全国教育美術展」に出品し、20点程度は入選、入賞者を出していたが学校賞は得られなかった。附高は毎年大阪府下の高校展に出品していたが観者の胸を突き刺す作品は生れなかった。学校の方針、性格も去ることながら優秀な生徒を預りながら出色の効果を挙げられなかったのは、力の足りなかった私の罪と贖を噛んでいる次第である。

昭和34年1月に朝日新聞厚生文化事業団主催・大阪児童美術研究会企画で「創造性を伸ばす 思春期の美術展」を心斎橋大丸で開催した。作品は府下の中・高等学校から集め、主となって働いてもらったのは当時市教育研究所の藤井正威先生、下福島中の岡田博先生、桜の宮中の山添克己先生、平野附小の花篤実先生、旭東中の河村徳治先生であった。この展覧会は啓蒙的な意味をもって中学校美術の実態と理想と指導を示したものであった。第1部は幼児から高校卒までの描画の発達段階を作例と解説で示し、第2部では描画傾向の実体を示した。即ち再現的、装飾的、造型的、情意表出的、興味本意的の5部門に分ち、再現的傾向を細分して、模倣、概念、説明、写生とし、装飾的傾向を持続、装飾の2表現に、情意表出傾向を文学的、少女趣味的、怪奇的、衝動的の4表現に、興味本位的表現は科学空想的と漫画的の2表現として作品と解説とを示した。第3部はそれらの指導によって作られた生徒作品と解説であった。この展覧会には、附中・高の作品も使用された。この時の岡田、花篤、河村の3先生は附中で教育実習をされ現在、岡田、花篤両先生は教育大学に、河村先生は附中教官をしておられる。尚この展覧会は熊本、神戸、静岡などでも開催された。

昭和33年に大学の講師となり、附中教諭を解かれ後を萩原直先生に継いでもらうことになった。

このときの美術教室は鉄筋2階の西端にあった。しかしこの校舎を東へ伸ばしその3階東端に美術教室を作ることになり田中教頭から設計をたのまれ、中2階とし写生とデザインを別々に実習するようにしてプランを提出したが屋上を高くすることができなかったとして実現しなかった。

附中・高に在学中、皆の先生方からひとかたならず御世話になり、大阪児童美術会員の援助を受け、優秀な生徒を戴き楽しく教育活動をさせて戴いたことに心から感謝している次第である。今後の発展を御祈りする。

昭和34年～昭和38年 (萩原 直・記)

在任中の美術科についての思い出の中で、最も記憶に残るものはやはり研究授業や研究発表など研究に関連することである。当時のメモを参考に記述することで回顧としたいと思います。

昭和38年7月2日 研究主題「構想表現の幅」 研究授業「幻想による表現」(中2)  
研究発表会「構想画導入の実際」

授業中での目標は、1. 心の中に育った幻想や空想を豊かに発展させ、さらに造形的な要素である、形・色の組み合わせに結びつけ、美的な構成力を養いたい。2. 年令に相応した夢を育てることにより、美術的な創造力を養いたい。3. 柔軟な心の働きをのばし、たえず内容を充実し、効果的に表現していく自主性・積極性を養いたい。4. いしゆくした生徒の心を解放し、人間本来の姿にかえし、もって生まれた素直な気持をとりもどしたい。5. 自然物の色に制約されることなく、純粋な態度で色に対する感覚を養いたい。

などでありましたが、当然のことかも知れませんが、これらは私が附中で行なった美術教育についての重要な課題であり、ねらいであったとも言えます。また、研究主題の「構想画の幅」とあるのは、私自身、構想画というものはどのあたりまで指導すればよいのかどのような表現が本道なのか、中学生の段階としてどのあたりまで要求したらよいのか、といった点について、はっきりしていない面があるので、動機づけ、導入の工夫、主題のえらび方、指導の幅などから研究したいとの意図からでありました。発表の資料としては、想像画の「手」からの発想、導入の例、「童話・童謡・詩」からの導入例、「天国と地獄」の導入例、幻想画の「音楽を聞いて」(チャイコフスキーの“胡桃割り人形”)の導入例などをあげたのですが、これ等を通じてわかったことは、

- 概念的な見方や考え方をする生徒は想像画でもおおむね概念的である。
- 表現過程や速度も写生的表現と比例する。
- 「音楽を聞いて」では、全般的に表現活動の低い者もみんなと同じ調子で表現した。好きなように表現することが許される。このタイプの課題に対しては、どの生徒も困難を見出さないように思える。表現活動に行きづまりを感じる生徒にはよい方法だと思ふ。
- 描こうとするものを、はっきりと頭の中に浮かべさせ、その形を定着し明確にするために多くのスケッチをさせよく吟味させることは大切だと思ふ。そして描きながらより発展させていく心構えがいる。
- 指導する側の問題として、表現内容を豊富にさせるためのいろいろな工夫がいるが特に、この年令に相応した夢を十分に研究する必要がある。

等ですが、全般を通じて、生徒の豊かな夢を伸ばし、美術的な創造力を養う意味でも、構想画の必要性を改めて考えさせられたことでありました。

昭和36年6月の『研究集録』で「描画不振時代(思春期の美術)をいかに指導するか」を書きましたが、これは、中学新入生の中から同一または各種(個性的)の表現をする生徒を50名前後抽出し、各自の先天的素質・生活環境・家庭環境・性格・心身の発達段階・他教科の成績・性別・各領域についての作品制作時の態度・状態・興味の度合い・制作後の反省・自己評価・小学校時代の活動状況などの項目をカードにして、あらゆる角度から掘り下げ、1・2・3学期別に、あるいは学年別に吟味し、中学校1年生から高等学校卒



業までの6ケ年計画で、何かの共通点・方向を見つけようと意図したものでありましたが途中で転動することになり、最終的な成果を見出すところまでゆきませんでした。「集録」にはそのはじめの段階のことや、思春期の美術全般・描画不振の原因について記しました。

以下その中から抜き書きしてみます。

中学生は自分の姿を自分からはなれてふりかえる態度が強くなる。このために自己批判を行ない、それがもとで羞恥心や自己嫌悪の感情が生じてくる。技術上の進歩がないまま子ども自身の従来どおりのやり方にまかされていると、失望と興味の欠如が生徒を行きづまらせることになる。そのことが、自分の力量がすぐに動作や作品の上に表われる学課をきらうことにつながってくる。従って生徒自身が努力の必要性を自覚することは何より重要であろう。健全なスポーツや造形表現が精神的な安定を得させる一つの方法となるが、この場合、絵がうまく描ける、ということは何ら問題にならない。幼児期と同じく、表現活動を活発にしてコンプレックスを解消するのも人間が価値実現に進むための一つの役割であり、情緒安定の手段でもある。

子どもたちは成長していくにつれて自分の表現能力がその想像に追いつけないために、自分の無能さを一そう意識するようになる。たしかに子どもたちは、自分自身の心象を描き、色に表したいのであろう。表出したいものをありのまま描き出すのに十分な技術を持ちたいと望んでいる。生徒たちが思春期になると自分がそれに不適であると特に意識し、更に自分自身のほんとうのアイデアを表現することができないことに気づくようになる。

この年齢段階の子どもの世界観には大きな変化が起る。だから彼らの表現形式に変容がはじまるのは避けがたい。創造の意欲が衰え去ったのではなく、多くの場合、この段階が経験する内的な感情の動揺に圧倒されてしまうのであろう。そのような時期に、教師の正しい配慮と理解ある指導があるなら、彼らは創造の意欲を喜んで充たしつつ自分の感情の困惑にうちかつ手段を獲得できるだろう。実際、この肉体が大人になってゆく時期は、創造の能力が芽生えはじめている時期なのだ。

昭和39年～昭和45年 (岡田 博・記)

昭和39年4月より昭和46年3月まで満7年間、美術科担当教諭として在職中に行なった研究は、木版画の教材研究と新教材の開発と実用主義による教材史の編纂である。それらのうち新教材の開発は学習内容の検討の結果、教育の現代化のために必要として行なった教材研究であったし、教材史の編纂は新教材開発の必要と開発を要する教材の性格を、美術教育の歴史をもって明かにするためであったから、研究のすべては美術教育の革新をはかることを目標にしたものであった。

研究のそれぞれの概要を発表年次順に列挙し、思い出のくさぐさを付記する。

昭和40年6月

論文「版画指導の問題点——単色木版画制作における版造形のあり方について」

『研究集録』第7集

版画教材は大正時代に実用版画としての取扱いから創作版画へと移行していたが、指導の大勢は結果主義すなわち作品主義に傾き、版画制作の過程と人間形成との関係や教材としての特長などについて検討されたことはほとんどなかった。そこで、それらについて研究し、木版画制作の彫りの段階で集中性や決断力を強くし、印刷の段階で面造形

の意識や構図についての関心を高めるなどが予期できることと、それらの教材としての特長をいかすためには浮世絵版画時代以降踏襲してきた下絵を用いる版造形の方法を下絵なしの直彫（じかばり）に改めることが効果的であることを示唆した。

木版画を特に選んだのは、大阪の木版画指導の水準を高山や佐渡や鳥取などの水準に速く、しかも少い指導回数で引き上げるのに役立てばという考えもあった。

昭和40年11月

研究発表「木版画の効果的な指導」

第13回教育研究発表会

前掲の研究を更に進め、生徒たちに創造のよろこびを味わわせると共に版造形の過程を人間形成に役立てるにはどう指導するのが望ましいかを公開授業で示し、研究内容の発表も行なった。

公開授業では直彫りでも、興味深く感じたところから彫る、量を面積で表わす、前後関係を表わすなどの留意事項を明かにし理解させれば、生徒たちは目標を見失うことなく創意工夫しながら表現し、しかも質の高い作品を生み出すことを実証した。

研究発表では単色木版画の造形上の特性と予期できる教育効果について、版造形でマイナスの造作を必要とするために集中性を養うことが予期でき、印刷では左右反転してうつるために視覚上の概念を新しくしたり構図について関心を高めることが予期でき、面表現の性格が強いことは空間意識を発展させたりヴァールールについての関心を高めることが予期できるなどのことを生徒の体験報告や生徒を対象にした意識調査を用いて明かにした。

すでに試みた実験指導での生徒作品、それも1年生のものばかり50点ほどを中毎新聞の図画作品コンクールに応募しておいたのが第1席から第3席まで独占したためか、大阪市立中学校教育研究会専門委員会と強いつながりをはかってきたからか、研究発表会美術科への参加者数は飛躍的な増加をみた。

研究は好評で、大阪市立中学校教育研究部会美術科の要請により同年12月天王寺美術館講堂で、市立中学校勤務の美術科担当教諭を対象に講演形式で再び発表した。

木版画の教材としての特長を明かにするため、ドライポイントやエッチングやシルクスクリーンやリトグラフなどの指導も行ない比較しなければならなかったが、それらのすべてを行なうことができたのは美術科予算の大幅増額を認めて下さった諸先生方やご父兄の方々のおかげであった。

昭和41年8月

論文「THE SIGNIFICANCE OF GRANIN WOOD—BLOCK PRINTING WITH MONO COLOR IN ART EDUCATION」

国際美術教育学会委員であった高妻巳子雄大阪学芸大学教授と河野太郎徳島大学教授によってチェコスロバキヤのプラハで発表された。

内容は前出の「木版画の効果的な指導」の研究をさらに進め、翌42年6月に発表した「単色木版画の教材としての特色と望ましい指導のあり方」に近いものであった。

国際会議での発表という性格上、浮世絵の継承のために指導しているのではなく、木版画制作に教育的意義を認めたからであり、描画や彫塑などの指導においても教育的意義を明かにし、それをふまえて指導することが創造性豊かな、そして美を愛し平和を愛する人間性を涵養することになり、人間の機械化的傾向を阻止することにもなるだろう

との考えを原稿に盛り込んだ。

ブラハでの発表には生徒作品を多数携行して前記両先生と同行したが、それらの作品のすべてが高く評価され各国代表から所望された。作品には校名や作者名や指導者名を書いたラベルを貼っておいたので、附属天王寺中学校の名は各国代表にかなり知られた。

昭和42年6月

論 文「単色木版画の教材としての特色と望ましい指導のあり方」

『研究集録』第9集

単色木版画の教材としての特色については、下の表のように造形上の特性と予期できる教育効果との関係を明らかにした。

制作過程	特 色	予期できる教育効果
版 造 形	マイナスの造作を必要とする	計画的に表現する能力を養う 決断力を養う 集中性を養う 抵抗をのりこえる態度を養う
印 刷	左右反転してうつる	視覚上の概念を打破する 構図について関心を高める
	面表現の性格が強い	面表現について関心を高める 空間意識を発展させる ヴァルール(Valeur)について関心を高める

教材のこれらの特色を指導にいかすには従来の制作過程の指導のうち版造形を直彫りに改め、事前指導を木版画制作に向けて系統化することや主題の設定と指導の留意点などを直彫りに適したものに改めることが必要なことを説き、それらについての指導例を示した。

昭和42年10月

研究発表「表現教材開発の意義と可能性」

第15回教育研究発表会

生徒を未来に向けて準備する仕事に美術科も積極的に参加するには、既存の教材にある、おとなの美術の真似ごと、表現の型を押しつける危険性、現代美術への誤まった接近のさせ方、教材配当の混乱などを解消しなければならないこと、ここに表現教材開発が当面の課題として急がれる理由のあることを説き、表現教材開発の可能性を附属天王寺小学校が開発した教材例と本校で昭和39年以後開発してきた教材50例をもって示した。

また新教材による指導として中学1年の題材「化石を作る」と中学3年の題材「極地方を描く」の2つの授業を公開した。

開発した教材のなかには下記のようなものがあった。

「べんとうを描く」「魚の粗をかく」「骨をかく」「石をかく」「人相書」「私が発見した世界最初の地図」「私が発見した世界最初の免許状や許可証」「なまけ者が考えた機械——ペンリーダー」「はてしなき連鎖反応」「怪物の解剖図」「拝啓モグラ殿」「未来の私の名刺」「未来のコイン」「私を守るであろう神」「かゆいかゆい」

「化石を作る」では古い感じを出すために作品に醬油を塗ってあおのりをかけ、それをローソクの火であぶるなど、まるで好み焼を焼くような操作をおおまじめにする者や、床に四つばいになって作品をこすりつけて汗を流す者などがあって、一心になれば何でもやるものだと思わせられた。

「べんとうを描く」のは午前中に授業のあるクラスであったが、3、4時間目のクラスからは「見るだけやなんて殺生や」という苦情をしばしば聞かされた。

いつも生徒の意表に出る題材を準備したが、ときにはどうしても構想がまとまらないことがあって、生徒と始業の挨拶をかわしてからやむをえず決断を下したこともあった。

その一つに「拝啓モグラ殿」があるが、モグラとは附中18期生が1年生のとき私に奉ってくれたニックネームであった。

表現内容を充実させるには生徒の意表に出る題材名だけでなく、心をひきつけ興味をさらに深めさせ、表現したいなあと思わせ、具体的に構想を練らせるなどが必要であった。このためにガマの油売りや街頭で宣伝販売する人の所作を研究して役立てたこともあった。

昭和43年10月

研究発表「高1の段階における描画指導上の興味づけについて」

第19回高等学校教育研究会 於京都教育大附高

創造性の育成と造形能力の向上をはかるための描画教材の条件と、その条件を満たすよう考えた新しい教材が興味づけに果たした役割を、生徒作品を添えて明かにした。

展示作品の主題の奇抜さと内容の充実さは評判となったが、なかでも主題「いたいいたい」や「かゆいかゆい」などの表現の指導はどうしてするのかと美術科教諭からだけでなく体育科のダンス担当の教諭たちからも教えを乞われた。

昭和44年7月

論文「美術科の教材の開発について」その1

「研究集録」第11集

美術教育を人間形成のため、そして生徒を未来に向けて準備するためのものに改革し、生徒作品をもって思春期の美術を確立するには生徒が強い主体性を発揮してとり組める教材が必要であり、そうした教材は開発しなければならないことを説いても多くの教師は、生徒の心理を考慮に入れずに設定された旧来の教材を捨てることはできなかった。

そこで、それらの教師の保守性にゆきぶりをかけるため、彼等が固執する旧来の教材がいかなる時代背景のもとに生れ、いかなる役割を果たすことを期待されていたかを明かにする必要を感じ、教材史の研究と編纂にかかっていた。

教材史の研究は教材開発をさらに進めるためにも必要であった。また教材史の編纂を完了した時点で、今までの研究と合わせて下記のようなまとまりのあるものにする事ができると考えた。

第1章 教材の系譜、第2章 既存の教材の問題点、第3章 開発を要する新教材、第4章 新教材による指導例。

そこで、表記のテーマで表現教材のなかの実用主義による教材、そのなかでも絵画やデザインや色彩の領域にあたるものの歴史を明かにし、表示練習やデザインの教材が昭和初期までの国家的要請によって誕生したまゝであり、どれひとつとして生徒の心理から汲み上げたものでないことを示唆した。

昭和44年10月

研究発表「中学校・高等学校における表現教材（描画・デザイン・色彩）の系譜」

第17回教育研究発表会

前出の論文「美術科の教材の開発 その1」の要旨を発表し教材、それもHOTなど呼

べるような教材の開発が必要なことを訴えた。なお、最も開発を要するデザイン領域の教材のあるべき性格を知らせるために、新教材主題「自己紹介」の実験授業を公開し、「HOTな教材」をテーマにした研究協議会を持った。

研究協議会では表現活動において生徒を三昧の境地または遊びの境地に導くような教材の開発が必要であることが認められた。

42年9月に竣工した南館1階の美術室と美術研究室をはじめ研究発表会場として使用したが、床面積がや、狭く、天井が普通教室並みの高さのため彩光にや、難点があるほかは絵画制作やデザイン制作や鑑賞などの多目的に使用できる機能的で設備の充実した部屋として注目を浴びた。そして翌年1月、大阪市立中学校美術科担当教諭研修会のおり、施設設備研究に値する唯一の教室として選ばれ多数の参観者を迎えた。後年、部落解放教育運動の一環として、未解放部落を校下に持つ同和推進校が施設設備を充実するようになったとき、美術室と研究室のモデルとして選ばれ、見学や照会が大阪府下の教職員から相次いだ。

昭和44年10月

発表「教材開発への提案」 第11回高等学校教育研究大会 於東大附属高校  
創造性の育成と造形能力の向上をはかるための高校生に適した絵画とデザイン領域の教材開発の必要性和開発のための留意事項について述べ、開発例20をスライドを使用して発表した。

発表内容は前年12月に日本美術教育連合主催の美術教育研究会に発表したものや、同年2月、『日本美術教育研究紀要』第2号に「中・高における表現教材の開発について」と題して発表した論文などを骨子に要点を取捨し、新しく開発した教材を追加したものである。

中学3年の美術の授業時数が指導要領が最低基準として示していた週当たり1時間であったため実験指導の回数が1年や2年より少くなり、したがって開発した教材数が他学年に比べて少いため、研究発表のたびになぜ3年では開発例が少いかをよく問われた。

(選択時間のうちの1時間を美術にあて、週当たり2時間としていた学校が大阪市や東京都など美術科指導を専門とする教諭を十分に保有している地域では約半数あった。)

昭和45年7月

論文「美術科における教材の開発について」その2 「研究集録」第12集

前出のその1に引き続き実用主義による教材のうち工作の領域にあたるものの歴史をとりあげ、国策に沿ったことが教科の存在そのものまで危うくしたと、法規で保護を受けただけでは教育は盛んにならなかったことなども明かにし、デザイン指導が大量生産大量消費や輸出振興などの国策に沿っていることの危険さや3年の授業時間2時間確保を政治的運動のみに傾いているだけでなく、何かにつけ法的保護要求運動を展開する美術科教諭の姿勢を指導内容充実にもっと傾ける必要のあることなどを示唆した。

昭和45年11月

発表「美術科における教材の開発」

45年度教員養成大学学部及び附属学校教官研究集会

デザイン教材の系譜を明かにし、児童画に対して子どもデザインが確立していない理由を指摘すると共に、子どものためのデザイン教材を開発する必要とその教材は遊びそ

のものといえる性格を持ち、現実の生活に役立つデザイン制作に拘束されてはならないことなどを説き、開発の可能性を実験指導例をあげて示した。

#### 昭和46年～現在 (河村 徳治・記)

私が着任した昭和46年には、44年に出された中学校教育課程改訂に関連して、他にも問題点はあったが、特に(2・1・1)の授業時数をめぐって、美術教育関係者の必要最少限時数確保のための運動が活発に行なわれていた事を思い出す。大阪市では中学校美術教師の全員集合や教委への交渉などがあり、教委では標準時数の運用のための各種資料を示し、翌年2月には各市立中学校に市中学校教育課程編成要領を伝達して、この年の調査ではほとんどの学校が2・2・2又は2・2・1.5になっている。附属天王寺中学校はこれ等の動きとは特に関連は持っていないが、従来の2・2・1を、昭和47年度から2・2・1.5に増加している。こんなことがあって、今また文部省では次期の再編成に取り組んで、中間答申を発表した。こゝでもまた美術科にとってはその内容に重大な問題を含んでいると考えられ、今後の成り行きが注目される。美術科にとっては改訂ごとに根底からのゆさぶりに等しい改変が行なわれること他教科の比ではないように思われる。無論これは日本の社会一般の教育に対する考えのあらわれでもあろうが、美術教育にたずさわる我々自身にもその責任の一端があるようにも思える。とにかく指導要領に示される時間数が教科としての存在を保護保障しているのは事実である。指導要領などない欧米諸国に比して一体劣っているのか進んでいるのか一概には言えないが、当然のこと知的教科は偏重と言われるほどに理解されている反面、美術科は単に色と形を美的に操作するだけの教科で趣味的程度の必要性しか考えられていないことが多い。そしてそれがむしろ一般的でさえあるが、実はそれは手段であって目的ではないこと、そのことによって人間の感覚をみがき、豊かな感情と開かれた心をつくりあげる、心の教育であることはあまり知られていない、危くすると美術教育関係者すらこのことを忘れていることがある。その結果が改訂ごとの大振動につながっているのかもしれない。このような中であって、附中高の美術教育の中では、子どもの真の成長のために行なう教育を深く追求し実践してきたことは前任諸教官の記録からも理解いただけると思う。それは前任教官各個人の大きな力によることは勿論だが全人教育をモットーとした、中高6ヶ年一貫教育の中にあってはじめて一そう完璧な形となって発展して来たのだと私は思う。

#### 昭和49年11月 研究発表「中学生にとって興味のある題材とは何か」

美術教育で、大人のやり方、を与えたり、にひっぱりこむ、ことは大人の世界を渴望している年令段階では比較的容易なことであるが、子どもが本来的に持っているものを、それぞれの方向に伸ばしてやることは、口では言えても行うことはむづかしい。美術では殊に中・高の時代を危機的にとらえ、萎縮・低迷・停滞など否定的な言葉で言うことがしばしばである。しかし成長発展の過程である以上、内面はそれ以前より、遙かに充実していることは確実であるのだから、この時機にこそ、生徒の心にびったり沿うやり方を見つけて行えば停滞どころか、それ以前より遙かに充実した表現活動が行なわれるに違いない。そのためにはまず子どもの実態を知らなければならない。これまでわかっていると思っていたことが、実は思いこみに過ぎないことが多い。自然に子どもの心をひっぱり

こんでしまうにはどうすればよいのか。そんな考えをもって行なったのがこの研究会であった。

表現活動に不可欠な集中、そしてこれを生むための諸要因中の一つ“興味”について、分類し提示した。

また、これと関連する題材についてはすべて生徒作品によって提示したが、中でも、デパートの地階を歩いてできるだけ食欲をそゝる生菓子をあれこれらんで買いととのえ、モチーフとしたこと。食べられない、見るだけ、描くだけの生徒諸君の怨念がこもったのか迫力ある表現となったこと。

粘土で上のような表現をするにはどんなものがよいかと思案しながら市場の中を一軒一軒のぞいて歩いたこと。にんにく、めざし、玉子、輪切りのれんこん、など、わずかな土の動きでうんと感じが違ってしまうこと。でき上がった作品の間に本物をまぜこんでだまして喜んだこと。

バベルの塔の建設の空想画を描いたら全員違った独創的な塔を描いたこと。描画材料に細書きサインペンを与えたために、大人なら馬鹿らしくてできないような超細密な表現をあきれるほど飽きもせず描きつづけたこと。

音が出るしくみを組みこんで粘土で笛を作ったら、音が出たということで大感激してくれたこと。はにわ、猿、帽子、靴、にわとり、まごの手……各人各様に焼き上げた作品の中で一番最初の見本の鳩笛が何と貧弱に見えたことか。

などなど、制作の過程が思い出深い。

昭和50年6月『研究集録』第17集「美意識の基底をさぐる」

指導のあり方に役立てるべく、比較的長い時間的経過（1～11年）の中で、表現された個人の数々の作品が、どのような点で変化し、あるいは変化しないのかを調査したものであった。

その中で、個人の形に対する感覚は、その間の指導や、表現内容、時間的経過にかわりなく、きわめて変化しにくいものであることを資料をもとに提示した。

昭和50年7月「AN INSIGHT INTO THE DEPTH OF ESTHETIC SENCE」

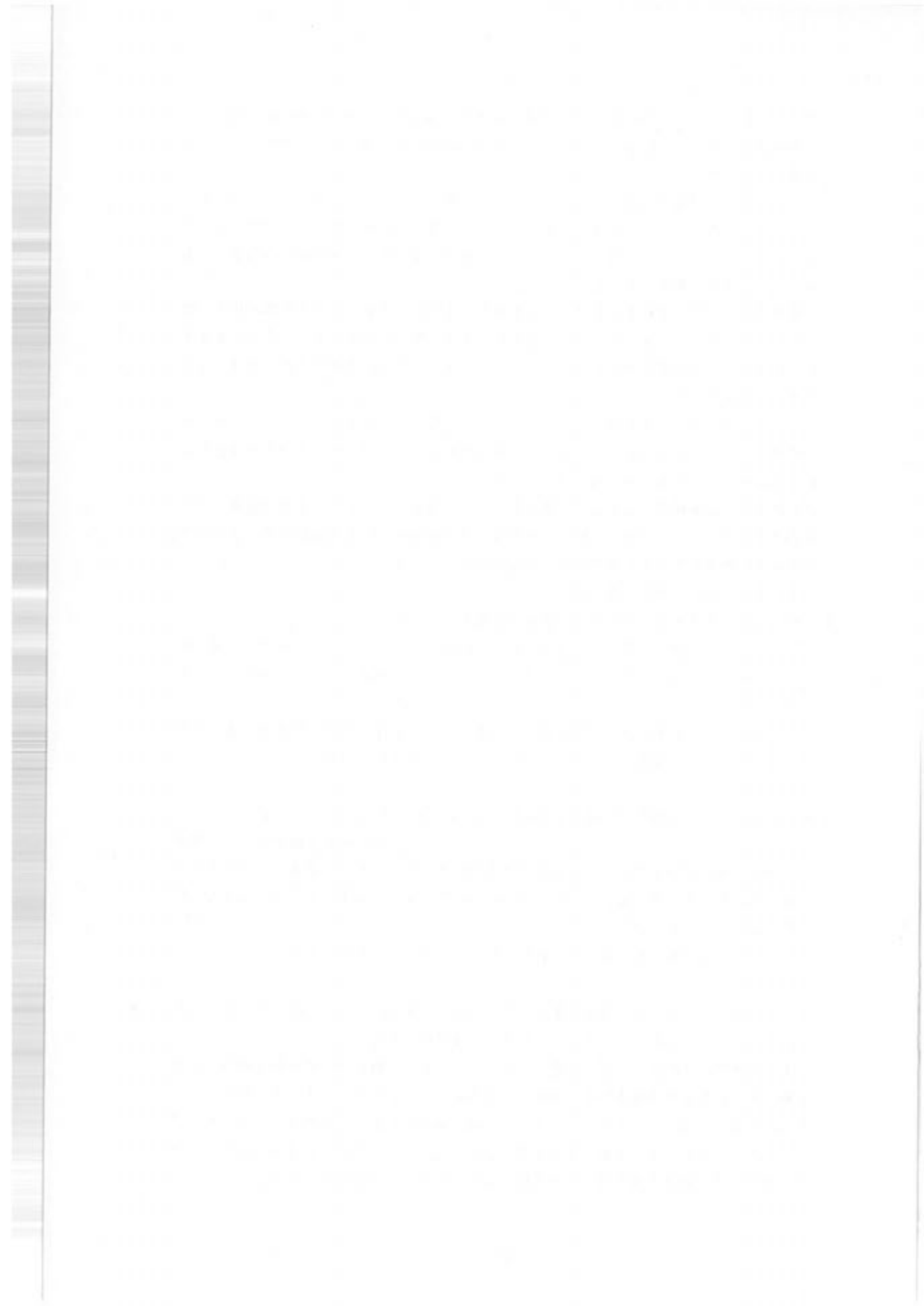
パリ INSEA 国際美術会議・誌上発表

学校行事等の関係もあって、自身では参加できなかったため、出席された高妻巳子雄（大阪教育大学名誉教授）岡田 博（同助教授）に冊誌を持参いただき、誌上発表の形で発表していただいた。

内容は『集録』第17集を基として資料・解説を整備し直したものであった。

たとえ小さくても事実を数多く集積してはじめて生徒の全体像は明瞭となるはずである。このように生徒の実態を知った上で真の指導は成立する。

美術の世界には時として流行が往き来することがある。教育の中の美術も例外とは言い難い。また、様々な指導者好みの表現が行なわれることもある。いずれも生徒自身の心から出たものではない、それは大人のおしつけであり創造などとは無縁どころかむしろ逆のものときえ言える。主義や主張でない、真実生徒の成長のための美術教育を求めて、諸先輩が歩んで道を今後もひきつづき確実に歩みつづけなければならない。





## 書道・書写

はじめに、書写・書道のおかれている位置と本校の事情について述べておきたい。現行の指導要領によれば、中学校における書写は国語科の一分野であり、高校における書道は芸術科に属している。本校では、中学校の書写は創立以来、国語科の教官が国語科の一分野として、担当することをたてまえとし、可能なかぎり、国語科の専任教官が担当してきた。一方、高等学校の書道は、昭和31年創立以来、現在に至るまで、教官定員の事情等から専任教官がなく、その間、昭和47年度までは、狩田義次・井上直弘（大阪教育大学）に非常勤講師として、担当してもらっていた。昭和48年度だけは中学1年生から高等学校1年生までを専任だけで担当することができたが、中学校の学級増や高等学校の芸術科の履修が2年生までになったことなどによる国語科および芸術科書道の授業時間の増加によって、昭和49年度よりは、また非常勤講師に担当を委ねている。

このような事情から、中学校においては、国語教育の一部としての研究に過ぎず、高等学校においては日々の実践活動以外には、特に研究のまとめとしては残っていない。そこで、中学校創立当初から現在までを、およそ10年刻みに、3期に分けて、その間に行ってきた活動のあとを振り返ってみる。

### 1 第1期（昭和22年～昭和31年）

この期の附属中学校は、年ごとに中心となるテーマを決めて、全教科歩調をあわせて研究をすすめ、時には教科のわくをはずしての研究も行なわれていた。また、毎年研究発表会を開いて、公開授業も行なわれていた。当時の『研究発表会便覧』をひもといてみると、書写（当時は習字）関係の学習指導案も残されていた。

その1は、成田重明（昭和28年3月大阪市へ転出、昭和47年3月大阪市立清水丘小学校を最後に勇退）が昭和25年2月3日・4日と2日間行なわれた教育研究発表会に、2年生を対象に、和歌のちらし書きの指導を公開している。指導過程をみると、色紙の書き方についての説明→臨書→グループ内での相互批評→示範・説明→臨書→背臨→反省鑑賞という順に、豊かな内容が手際よく指導されていることがうかがえる。また、背臨（手本をふせて、思い出しながら書く）による清書もすばらしい試みで、後進の指導者へのすばらしい示唆となったと考えられる。

その2は、やはり成田重明による指導で、昭和25年12月1日（金）に、中学校1年生を対象に、年賀状の書き方というテーマで授業を公開した。この授業では、年賀状の意義→年賀状の書式（用具や内容）→相手によることばや字体の選択→文字の大きさと配置などが指導されている。相手によりことばをかえ、字体をかえるなど、心をたいせつにした細かい配慮がなされている。

その3は、中邑元子（現・大阪市立天王寺中学）による「自分の好きな詩を書く」授業である。これは、昭和28年11月13日（金）に、中学校2年生を対象に行なわれたもので

ある。

この単元全体の目標としては、

- (1) 毛筆行書とひらがなの調和体の文字に習熟させる。
- (2) ひらがなの連綿と配字の要領を会得させる。
- (3) 好きな詩を毛筆で、1字1字書くことによって、心の糧となる詩の精神を更に深くみとらせる。
- (4) 手本の文字をうつし書くだけでなく、手本によって習得した文字を自己のものとして再表現させる。
- (5) 常に身近において親しむ詩集を自らの手で美しく作り上げる喜びを味わわせ、書道趣味の高揚と情操の純化をはかりたい。

と記されている。(3)において、詩の鑑賞指導とのむすびつきが考えられ、しかも、(4)において、本当の力をもった生徒を育てようとしてされている。さらに(5)において高校書道へのつながりも考えられている。

なお研究授業の指導案以外に当時の模様をうかがえるものとして、卒業アルバムの中に収められている夏休み作品展の作品写真や会場風景の写真などがある。当時の生徒の様子を知るエピソードとして次のようなものがある。当時、アメリカから、日本の文化を研究するために来日し、本校の英語の講師であったコブス女史が書の作品展をみて、ワンドフルを連発し、しばらく展示会場にくぎづけのようになったということである。その後1年して帰国する際、生徒から作品をもらい、アメリカでも附中生の書の作品展をされたそうである。

以上のように、この期においては、毛筆による美的な表現に重点をおいた指導が行なわれ、かなりその成果があったことがうかがえる。

## 2 第2期（昭和32年～41年）

第2期も校内において、夏休みの作品展と3学期の書きぞめ展を続けていたが、そのほかに、関西習字教育研究会主催の夏の硬筆展や冬の書きぞめ展にも出品するようになった。

昭和34年夏の硬筆展で今井徳博（附中13期）が文部大臣賞、昭和36年1月の書きぞめ展で柏木玲子（附中13期）が文部大臣賞など多数の入賞者を出した。

けれども、ちょうど、当時東京オリンピックにむかって選手強化に力が入られたように、展覧会作品に力を入れれば文字を書くことの得意な生徒は入賞をめざしてがんばるが、一方文字を書くことの不得手な生徒はますます文字を書くことを好まないようになった。

そこで、毛筆以外の用具を使って書く授業を多くした。当時、学芸会の脚本作りや学級文集作りなどで、生徒が謄写版印刷することが多かったこともあり、謄写版原紙の切り方と印刷を指導した。次ページの写真はひとり3行ずつ練習したものである。これには、必要性との関係か能力差の小さい関係か、かなり多数の生徒が熱心にとり組んだ。その他、フェルトペンによる掲示なども行なっ



柏木玲子（附中13期生）

た。

### 3 第3期（昭和42年～昭和50年）

昭和40年代には、「いかにして、書写に興味・関心をもたせるか」について、苦心した。アンケートの結果からは、書写の好きな生徒は各クラス5～6名で、嫌いと答えた生徒が約半数、あとはどちらでもないと答えた。嫌いと答えた理由には、(1)道具が多く重い。(2)字がへたである。(→はずかしい。→腹が立つ。)(3)現在の世の中にあまり役立たない。(4)墨をするのが面倒。などがあげられた。

これでは、いい字の書けるはずがないと考え、解決できるところから、解決しようと、書写・書道の教室に道具を設置することからとりかかった。硯・ぞうきん・筆おき（糸巻きを半分にしたもの）文鎮・下敷・紙ばさみとそろえていった。しかし、これはほとんど効果がなかった。

考えてみれば、生徒は小学校以来「谷川の音」「汽車の旅」「風の方向」などと4字～6字くらい、手本のとおり書くことに苦心しつづけているわけである。

その上、小学校の書き方の教科書から、中学校の書写の教科書まで、内容を見ると、同じような用筆の指導などの何と多いことか。教科書も変化に富んだものであってほしいけれど、教師もその扱い方を検討することが大切である。

書写は嫌いだが、美術は好きだという生徒が多い。いろいろと内容に変化もあり、また独自の創造性を発揮できる喜びのあることがわかる。

昭和46年度から、手本なしで書く授業を多く取り入れ、手本の字のような字だけがいい字でない、他にもいい字がたくさんあるということを示せたいと考えた。これによって、手本どおり書けなくても、気にしなくてもいいし、各自の創意工夫が生かされるようになった。夏休みには「字集め」といって、新聞や週刊誌・和菓子のつみみ紙などから、毛筆で書いたかわった字・すきな字があったら集めてくる宿題を出した。（参照写真中）また、2学期には、1年生は全員生徒会の役員に立候補するという仮定のもとにポスター作りをさせた。書写の得意な生徒は文字の形・配置・大きさなどにも気をくばり、何度も書きなおした。また、文字のまづさをユーモアでうめ合わ



硬筆練習の写真



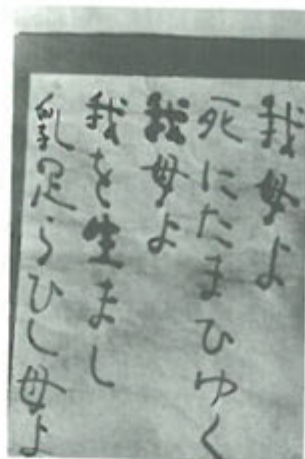
好きな字集めの写真



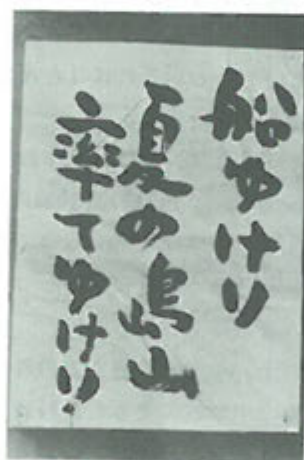
選挙のポスター

す生徒もあり、全員楽しい中に文字意識を高めることができた。

中学2年生でも、国語の授業で短歌と俳句というところを学習した。その時この歌がすきだとかこの句は気に入ったということがあっても、今まで、それを書写の時間に書くことはなかった。書写の教科書には全然別の歌が出ていて、生徒は、手本どおり書こうと努力したわけである。今度は、自分の書きたい俳句か短歌を、手本なしで、自分なりに工夫して書くのである夏休みの「字集め」を参考にして、書いた生徒もあった。力強い感じの句だから、力づよさを出すのだと苦勞している生徒もあった。当時の生徒の感想を紹介する。



いつもの書写の時間とちがって非常に楽しかったと思う。私の場合きれいに書くということは、苦手なので、せめてこんな時ぐらいはがんばろうと思いちえをしぼって書いた。しかし、手本も何もないので最初のうちはとまどった。先生がみんなの作品を紹介してくださったのを見ているうちに要領がわかってきた。「自分の持っている特徴を字に出せばいいんだ」と思いながら書いた。だから、「親鳥の来てみつけよと羽のびぬひな鳥を置く大き岩の上」と書いた時は、何となく私の感じが出ているなどと思った。とにかく、人それぞれ工夫して書くというところがおもしろかった。これからも、こういう時間をふやしてほしい。



そのころ気づいたことで、鉛筆ではとても美しい字が書ける生徒でも、小筆を使うことがへたな子が多いということであった。そこで、夏休み中に、何でもいい、詩集でも、小説でも自分で書きたいものを小筆を使って書いてみようという生徒に言った。漱石の「坊っちゃん」を国語の教科書からうつして来た生徒や手筆で日記をつけた生徒、百人一首を1冊の本にして来た生徒などたくさんいた。はじめの部分は1字1字墨をついでいるのに、うしろになると1回墨をつけて5～6字書けるようになっているなど、進歩のあとがうかがえた。また、小筆を使っていろいろなことを書くのを苦にしなくなったと話していた生徒もあった。

昭和46年10月14日(木)には本校の教育研究発表会において、「書写に興味・関心をもって学習させるには」というテーマで研究会を開いた。右の



ージの写真はその日の授業風景である。その日は「いろいろな表紙」という題で、生徒に、文集や研究のまとめの表紙を考えさせた。写真(中)はその日の生徒作品である。

翌昭和47年からはO・H・Pを使った書写指導をテーマにトラペンを作製し、効果的な利用法を検討している。

また本年はじめての試みであるが、中学生への古典鑑賞の指導はどうすればよいかについて考えてみた。

結論から言うと、目だけでなく、手も使って鑑賞するということである。じっと見ているだけで気づかないことでも、書いてみると、意外と気がつくことが多い。生徒には歐陽詢の書風はどうかのとか王羲之はどうかのと説明しなくても、かなりの確などらえ方をするということがわかった。下の二つの作品は、王羲之の蘭亭叙の一節の中から、好きな字を1字選んで、書いてみよう、そして、下あるいは横の余白に、臨書しながら思ったことを何でもよいかから書くように指示した。中には王羲之の字は形はいいが、何か弱々しいなど手きびしいものもあったし、また、巨人の王選手と同姓ということで、野球と書と関連づけて王羲之に話しかけているほほえましいものもあった。

以上、中学校における書写指導の実践のあとをふりかえってみたが、国語科の中の書写として、まだまだ検討しなければならないことが多い。また、本校においては、中学高校6カ年一貫教育を実施していることを活かして、書写から書道へのひきつぎをいかにするか等も考えていきたい。



教科 教育研修会風景



表紙作品



(付) 生徒篆刻作品 (高校2年生)



# 技 術

昭和22年、新制中学校の発足に伴い、必修教科として「職業科」が設けられた。

昭和24年、職業と家庭と職業指導が1つにまとめられ「職業・家庭科」と改められた。

昭和33年、「科学技術教育の向上を図る」という基本方針に基づいて必修教科として、「技術・家庭科」として新設されることになった。

## § 1. 技術科の人事異動

鳥井利清 昭和24年4月～昭和33年3月

渡辺 優 昭和38年4月～昭和47年3月

中村 潔 昭和47年4月～現在

講師としては、

□中谷 享 昭和26年4月～昭和38年1月

○萩原 直 昭和34年4月～昭和38年4月

池上隆雄 昭和33年4月～昭和44年3月

浅野安吉 昭和37年4月～昭和38年3月

加部文彦 昭和40年4月～昭和41年3月

岡本義春 昭和43年4月～昭和45年3月

藤川益男 昭和45年4月～現在

## § 2. 本校主催教育研究発表会

技術科は、本校創立以来、教育研究発表会として、下記のように取り組んだ。

第2回教育研究発表会（昭和25年2月3日—4日）

主題 ガイダンスの組織と実践

授業 鳥井利清「電気器具と交通機関との関係」（中1）

第3回教育研究発表会（昭和25年12月1日）

主題 ガイダンス計画の立案と展開

授業 鳥井利清「商業の仕事」（中1）

職業・家庭科実態調査

第4回教育研究発表会（昭和26年10月31日）

主題 中学校教育の全体計画と実践

授業 鳥井利清「受信機の製作」（中2）

第5回教育研究発表会（昭和27年7月3日）

主題 独立後の教育の在り方とその実践

授業 鳥井利清「家庭用具をつくろう（十五ならべ）」（中1）

職業・家庭科実態調査

なお、第6回から第11回までの技術科としての発表は不明である。この間は専任教官がいないこともあった。なお、昭和38年度以後は毎年発表するのではなく、4年毎に発表するように研究内容をまとめている。

第16回教育研究発表会（昭和43年10月17日）

主題 学習内容の検討

授業 渡辺 優「3球ラジオ受信機」（中3）

提案 渡辺 優「交流理論の取り上げ方についての実践」

——電気教材の定着をはかる指導について——

研究協議 「交流理論の取り上げ方について」

講師 八丈 次良（大阪府教委）

礎部喜代三（大阪市教委・産業教育実習所）

浅野 安吉（大阪教育大学）

直原 宏明（大阪教育大学附属池田中学校）

第20回教育研究発表会（昭和47年11月16日）

主題 学習内容の検討

授業 中村 潔「木材加工——塗装工程」

研究発表 中村 潔「木材加工を定着させる1試案」

（VTRの利用と個別化）

研究協議「木材加工を定着させる1試案」

（VTRの利用と個別化）

指導講師 八丈次良（大阪府科学教育センター技術・家庭科室）

本間一男（大阪教育大学）

斉藤 洋（大阪教育大学）

直原宏明（大阪教育大学附属池田中学校）

講演「木材加工における新教材への取り組み（塑性加工について）」

本間一男（大阪教育大学）

### § 3. 「研究集録」への取り組み

第10集 渡辺 優「ラジオ教材についての1考察」（昭和43年7月15日）

第15集 中村 潔「視聴覚教材を利用した学習の個別化——第1報

——技術・家庭科への導入——」

（昭和48年6月30日）

### § 4. 技術科研究主題の流れ

昭和43年 ラジオ教材についての1考察

昭和44年 機械教材の系統性について

昭和45年 \*

昭和46年 \*

昭和47年 機械教材についての1考察

昭和48年 木材加工を定着させる1試案



昭和49年 電気教材を定着させる1試案

昭和50年

以上判明の分のみかかげる。

## § 5. 教材の変遷 (研究活動を含む)

### (1). 電気教材における設定のねらいと変遷

電気教材といっても相当分野が広く、いろいろなことが考えられるが、ここでは増幅器またはラジオ受信機に焦点をしばりまとめる。

昭和38年前後にはST管による「3球ラジオの製作」が中心であった。回路別ユニット型が出まわり、3階建の作品が教材として多く利用されていた頃であった。徐々にMT管も入手しやすくなり、MT管へと移行してきた。この頃から市販のキット教材では物足りず、日本橋にて物品を購入し、総合実習へとねらいを拡げていった。シャーシパンチ、ボール盤等による板金加工、スピーカボックス製作の木材加工などを加味したのである。1つの題材に対する配当時間が長くなる欠点はあったが、最終学年にあたり、1連の実習内容のもとに、生徒は非常に意欲的であった。たとえば、すでに位置決めされた穴に真空管をセットするのと、無地のシャーシの上にパンチにより穴を決め、セットするのとでは非常に大きな違いがあり、この体験が、生徒にとって次の機会への「転移できる力」となった。

無制限ではなく、次のような条件を付加してやり、より実習の効果をたかめた。

#### 部品の配置

S 42. 10. 19

電線が混みいることのないように部品の配置を考える。配置が悪いと配線がしにくいだけでなく受信機としての性能が悪くなる。

#### 電源回路

- 電解コンデンサーはPTに近く配置する。しかし5MK9・6AR5のように動作中温度が高くなる真空管からは離す。
- ヒューズホルダー、PLは、PT近くに配置する。

#### 検波回路

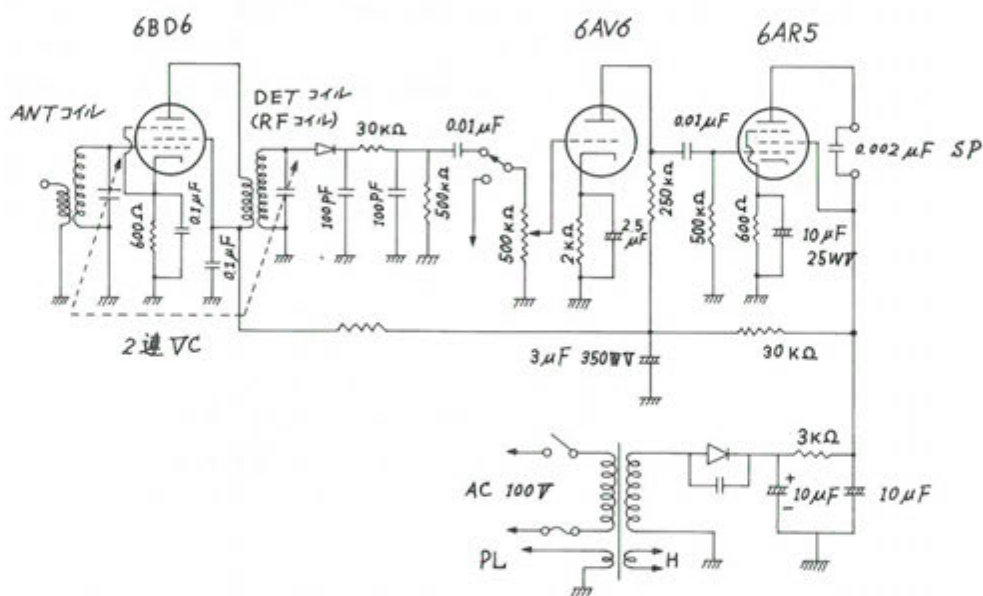
- Lは他から影響を受けやすいので、Lのまわりはなるべく空間をとる。特にPTとは近づけない。
- しかし、L、VC、6BD6はそれぞれ離しすぎぬこと。
- VC、再生VC、VRのツマミは軸をまわしやすい位置で、しかも同じ側になるように配置する。
- 3Pのターミナル(端子)は、A、Eをとる端子である。Lに近く配置する。シャーシの裏面が望ましい。

#### 増幅回路

- 2PターミナルはSPと接続する端子である。6AR5近くに配置するのが望ましい。

昭和44年頃まで用いられた教科書による回路の中で問題となったことは、6C6（または6BD6）における同調・検波作用の理論的指導であった。1M $\Omega$ の働きが理解しにくく、加えて、検波だけでなく増幅作用も重なっているだけにむつかしかった。そこで、それぞれの部品の働きを単純化させ、加えてダイオードの働きも指導してやりたいという見地から下図のような高一回路を設定し、上記と同じように総合実習として行なった。すべての働きを完全に理解してもらうということは難しいが、この回路であれば、同調・高周波電圧増幅・検波・低周波電圧増幅・電力増幅とその働きがそれぞれ分離され、生徒にも好評であった。

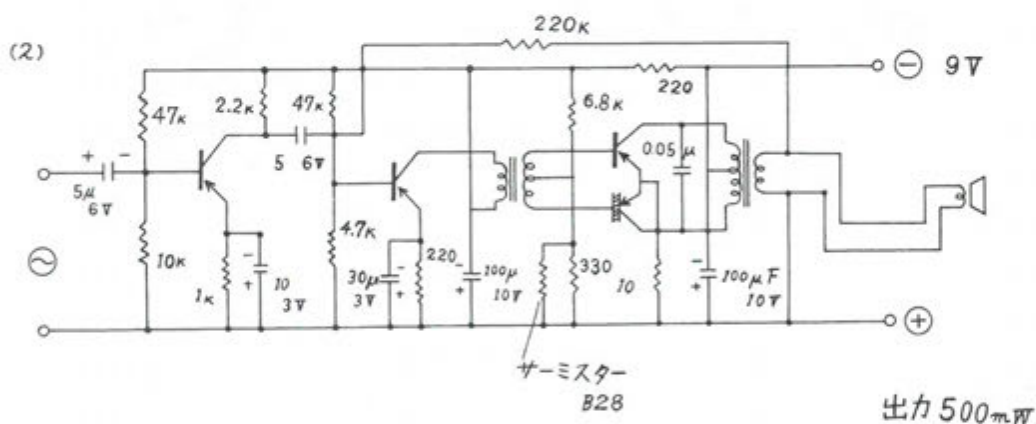
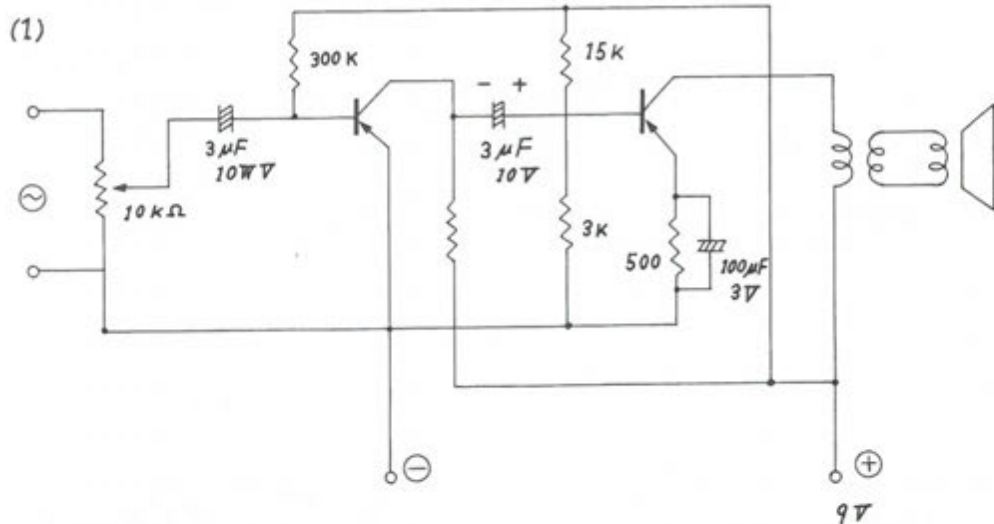
### 2石3球受信機



製作実習にあたっては、まず方眼紙に大きく回路を写図させた。部品設置の完成したところ、配線完了したところをそれぞれ色鉛筆で重ね塗りをやらせ、回路が広くなってもユニット式にさせず、1台のシャーシの上にコンパクトに間違い少なく製作が進められていった。

昭和45年度よりトランジスタを利用した実習題材を設定した。教科書を参考にし、製作完成後の利用を考え、ラジオの普及した現時点ではチューナ部は不必要と考え、少し容量の大きいアンプの製作を実施した。

低周波増幅装置

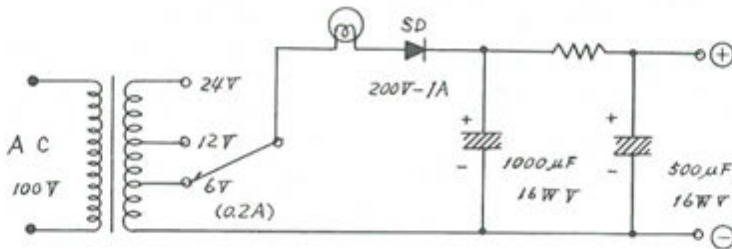


図(1)にて共同実習をし、理論構成をしっかりと覚え、図(2)に従って製作実習をおこなった。プッシュプル方式を採用したので、多少理論の定着では問題があったが、チューナ等をつなぐとよく鳴るといって生徒の興味も大きかった。

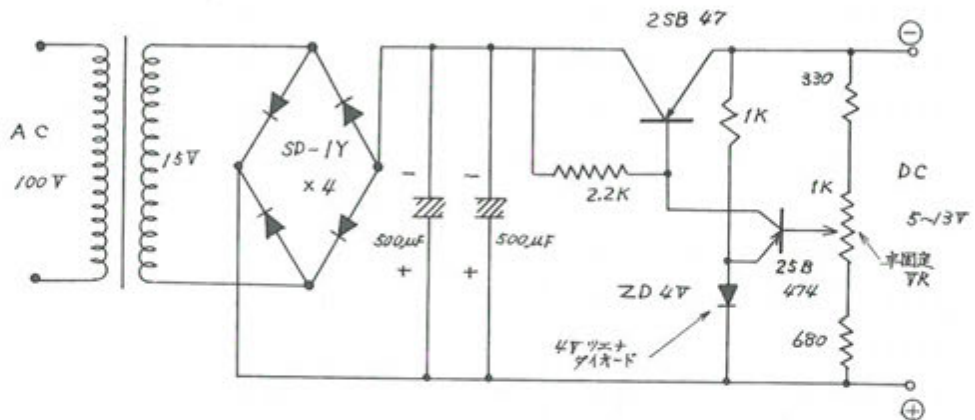
こうして総合実習的にとらえてきたわけで、製作が早い生徒には下記の図のような回路を紹介してやり、部品の購入、計画等すべて1人でやらせてみた。

定電圧電源装置

(1)

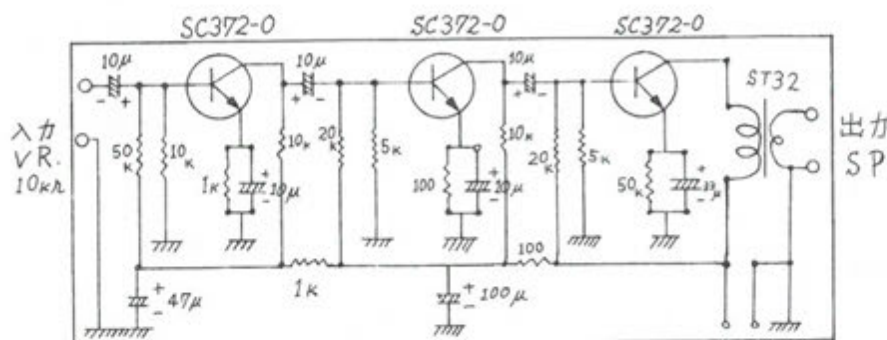


(2)



昭和47年度は「三石低周波アンプ」(ストレート型)を実習してきた。次ページの回路図です。バイアスのかけ方を追求して、もっとも良い電流帰環バイアスで行なっている。またこの年からプリント配線を全面的に取り入れている。すなわち(片面)ベーク板をエッチングして基板を作り出したのである。それは現在も続けられている。総合実習的にケース加工をベニヤで製作させている。それはこの年以後ずっと続けられている。

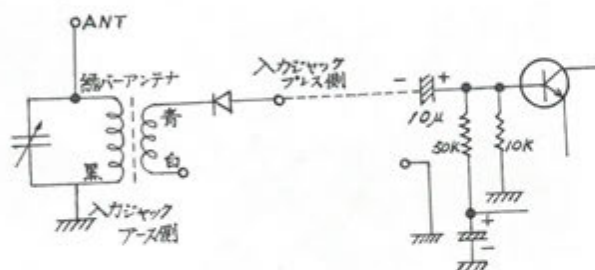
三石低周波アンプ配線図



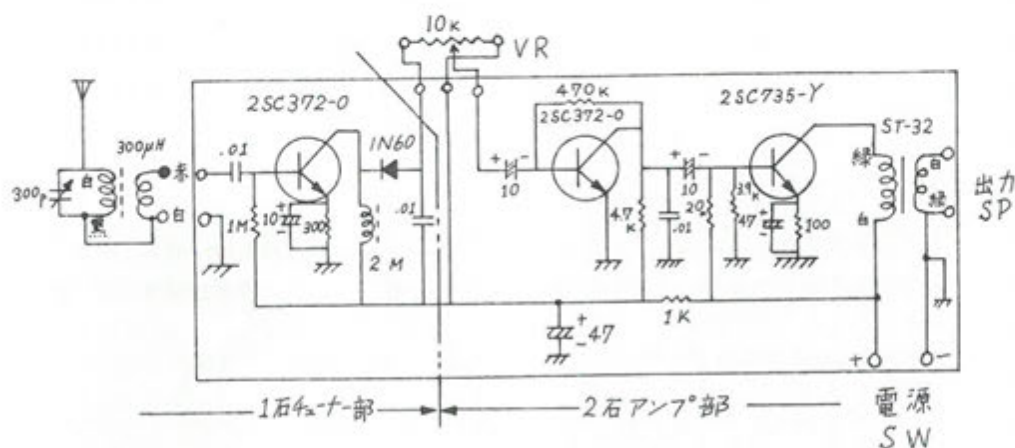
アンプの入力としてチューナ部を右の回路図のように組みこませた。

昭和48年度から「高周波一段・低周波二段ラジオ」を実習してきた。これはチューナ部に高周波増幅部をもうけラジオとしての性能をたかめたのである。配線図を下に示す。

チューナ部配線図



高周波一段・低周波二段ラジオ配線図



このようにして昭和39年から現在まで、電気教材（ラジオ受信機の製作）は移りかわってきた。写真1～12は「高周波一段・低周波二段ラジオ」である。

(2). 木材加工における設定のねらいと変遷

木材加工の技術体系の基礎的事項を満たし、日常生活を豊かにするための木材の利

用を考え、単元の設定のねらいとした。

そこで、昭和34年頃は共同で実用（実際に使える）性ある椅子を自由に作らせた。材料は各自が持って来た廃材を利用させていた。校庭の藤棚の下においたりして使用してきた。昭和38年ごろからレターケースや、マガジンラック、本立等を1年生で作らせた。昭和47年では1年生は木製ブックエンドと本箱、2年生は腰掛を製作実習させた。本箱の構造もその機能から大きな本もさしこめるように横に本立をもうけるようにしてきたのである。腰掛は、ほぞとほぞ穴によるほぞ組みをさせることをねらいとした。そこで、1年の本箱の裏板の性質をさらに発展させることをねらって、万能台を実習題材として選んでみた。こうして現在に及んでいる。写真13～24。

以上、ささやかな技術・家庭科（男子向き）のあゆみとなったが、資料収集等に協力いただきました諸先生方に深く感謝いたします。

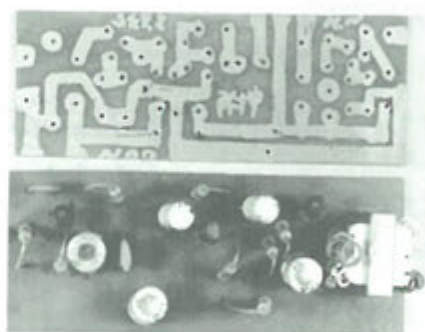


写真 1

上……エッチングされたプリント  
基板  
下……各部品を配置したもの



写真 2

上……プリント基板にハンダづけしたも  
の  
下……プリント基板に各部品をさしこん  
だところ

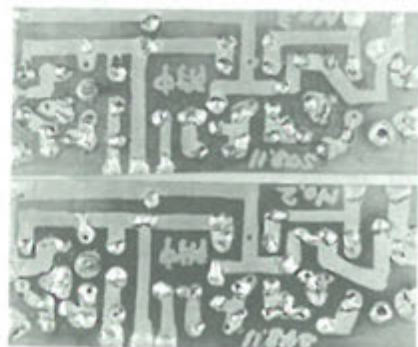


写真 3

上……プリント基板のハンダづけ完  
了したもの  
下……上と同じく完了したもの。ハ  
ンダの違いに注意させる。



写真 4

生徒がハンダの実習をやっているところ。窓ぎわのコンセントを利用。明るさを考えている。



写真 5

生徒が各部品とリード線でケースの中にセットして結びつけている。



写真 6

プリント基板と各部品とがリード線で結線されている。

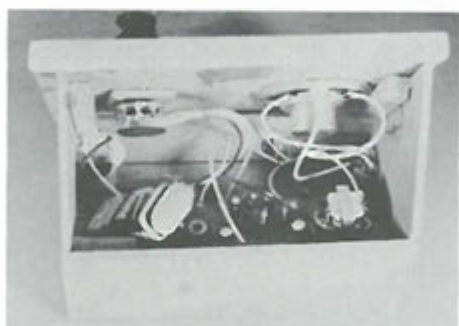


写真 7

リード線で結線されうまくケースの中におさめている。



写真 8

写真7と違った方法。プリント基板がサポートでうかされている。

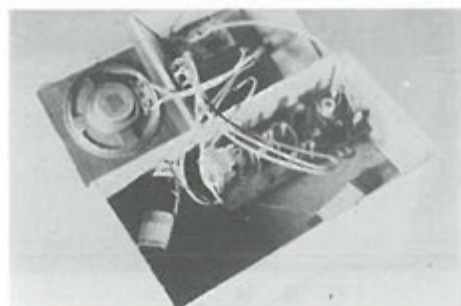


写真 9

ケースの中に各パーツを工夫されておさめようとしている。

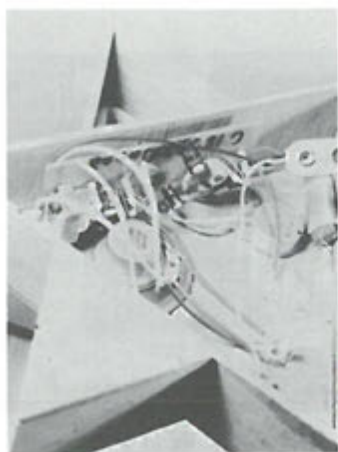


写真 10

かわった形のケースの中にうまく部品をおさめている。



写真 11

すべて完了した、かわったケース、かわった配置のツمامミ類のもの。



写真 12

すべて完了した、かわったケース、かわった配置のツمامミ類のもの。

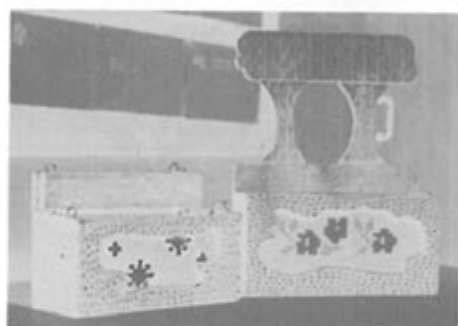


写真 13

レターケースの完成品。  
前面はいろいろ工夫をこらしている。

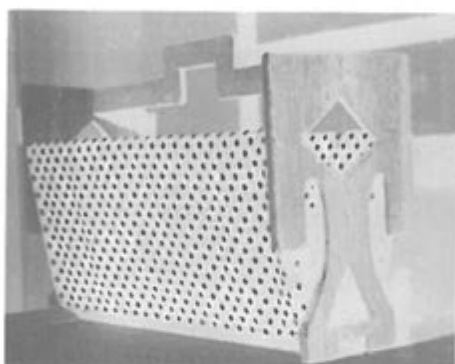


写真 14

マガジンラック。  
入るところが布で作られている。  
側面にも工夫がある。

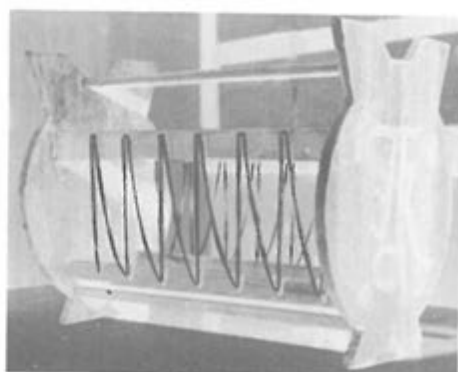


写真 15

マガジンラック  
入るところを糸で作られている。  
側面にも工夫がある。

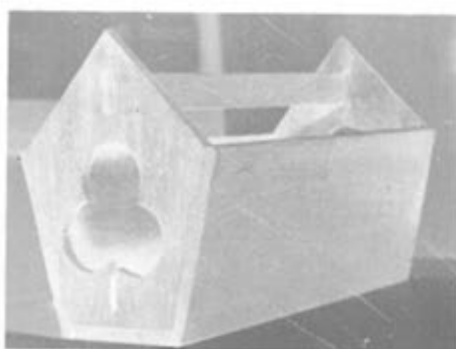


写真 16

マガジンラック  
すべて木材で作られている。写真14  
写真15と違う。





写真 17

両側が本立という形になっている。  
背板があいているのは材料を少なく  
するため。



写真 18

本立と本箱を共用している。  
スライドして、本立が自由に大きくな  
る。本箱の中では中仕切りがそれにつれ  
て動くように工夫されている。



写真 19

上・下2段において、下は本箱、上  
は本立と工夫されている。



写真 20

本立として下段には棚をもうけている。  
小冊子用である。

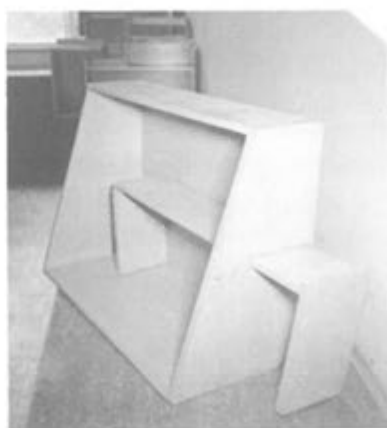


写真 21

本立として上を利用し、本箱として  
下を利用するように考えられている。



写真 22

本箱の中の棚がスライドして、側面に  
出てくる。内側は本立として利用し、上  
は小物置きとして利用するように考えら  
れている。



写 真 23

大きな本は右はしのところに立てられるように工夫されている。上は小物置きとしている。



写 真 24

3つの箱を組み合わせたような本箱である。大中小、巾のある本もそれぞれさせるように工夫されている。

# 家 庭

教科名としては昭和35年を境として職業・家庭科から技術・家庭科（女子向き）というように変わってきて、男女別学が明示されてきた。が、日常の呼び名は家庭科で通じているようなのでそのまま用いることとした。

## § 1. 家庭科の人事

佐崎(萩原)喜代子 (23.4~25.3)	大阪市在住
上村 佐智子 (25.4~39.5)	大阪府教育委員会
世良(野坂)靖子 (39.9~41.3)	広島市在住
土居 蓉子 (41.4~42.3)	
杉原 三枝子 (42.4~43.3)	
森川 美枝子 (43.4~45.3)	大阪府立高槻南高等学校
藤村 克子 (45.4~ )	
〈非常勤講師〉	
大江 隆子 (41.4~ )	
山本 圭子 (45.4~46.3)	門真市立門真第3中学校
大木戸香代 (46.4~ )	

## § 2. 研究発表会

- 昭和25. 12. 1. 第3回府下教育研究発表会「ガイダンス計画の立案と展開」  
授業 これからの食生活をどうするか  
客ゼんの手引 上村 佐智子
- 昭和26. 10. 31. 第4回府下教育研究発表会「教育の全体計画と実践」  
授業 我が家の食生活  
食事の作法 上村 佐智子
- 昭和27. 7. 3. 第5回教育研究会「独立後の教育の在り方と実践」  
授業 私たちの被服  
私たちにふさわしい服装 上村 佐智子
- 昭和28. 11. 13. 第6回教育研究会「個人を育てる活動」  
授業 食生活の改善  
日常食をどう改善すればよいか 上村 佐智子
- 昭和30. 10. 26. 第7回教育研究会「指導のための調査（個人を育てる活動）」  
授業 わたくしたちの衣生活  
下着の製作 上村 佐智子
- 昭和35. 6. 29. 第8回教育研究会「中高6カ年一貫教育

昭和47. 11. 16. 第20回教育研究会「学習内容の研究」

授業 すまいの計画

食事と調理のためのへや

藤村 克子

講演 消費者問題と技術・家庭科教育

大阪市消費者センター

猫西 一也

### § 3. 家庭科教育のとりくみ

『研究紀要』第6集(昭和27. 11. 10)より、

「男女共学による職業・家庭科の指導」と題しての「(Ⅱ)男女共学による職業・家庭科の指導」から抜粋すると、

職業指導の主流がクラスホームルームを単位とし、ホーム教師によって行なわれるのであるが、これと表裏一体となって指導するのが教科としての職業・家庭科である。

その職業家庭科には2つの面が考えられる。1つは職業生活及び家庭生活についての一般教養であり、他は職業人として世に出た場合、すぐ役立つ職業技術教育とである。従来はこの一般教養で埋める必修の時間を、男子コース、女子コース、更に都市向、農村向等種々のコースを設けて指導していた。ところが職業家庭科の一般教養としての目的、即ち、①生徒に職業生活及び家庭生活について理解させる。②職業の尊さと重要さを知らせる。③働く態度を養う等から考えると、個性を活かしているように見えて、かえって片手落の指導であったのではないかと考えられる。その理由として――

① 職業生活及び家庭生活は男女同様に理解すべきものであって、男女それぞれに適したという名のもとに、男子コース、女子コースを設け、更に教授者側の理由で工業コース、商業コースと分けてしまうと、実質的には昔の家庭科・実業科教育と変りないものになってしまう。

② 職業に就くことの重要性、働く態度を修得理解させるには、実社会にある仕事を広範囲にわたって取り入れなければならない。従来の仕事、女子の仕事と限定してしまうと余りにも視野がせま過ぎて、この目的を達成することは困難である。

③ 女子が男子にいつまでも隷属しているというのは経済的な理由によることが多い。女子においても職業生活ということについて真剣に考え、職業人としての自覚を新たにさせる。

④ 家庭生活の民主化は女子の重労働からの解放にある。このことを男女共通して真剣に考えさせるため、互に相手の仕事を理解させる必要がある。

⑤ 男女共学の新学制下の教育にあつて男女助け合つて生活する習慣をつけることは必要である。特に、職業・家庭生活における最も望ましい協力の態度は共学によって養われる。

⑥ 職業指導に際して、生徒に授ける職業の知識は、仕事を通じてあるいは仕事に関連させて指導するのであるが、共学にして進度題材を揃えておかぬとこの指導は困難である。

以上のごとくであるが指導の実際にあつて、特に考慮をはらっている点は、④男女の

性の差を如何に調整するか、㊸男女の興味の違いをどう調和するかである。

ということで、この年度（昭和27年）より1、2年は男女共学、3年は1時間は男女共学、2時間は男女別学の授業が組まれていて、男女共学での衣生活の指導にあたって

現在の衣生活を考えてみると、だんだんと既製品が利用されるようになり、ほとんど家庭で縫わなくても間に合うようになりつつある。ただ、各自に適した服装をするということと、衣服の手入れ保存は現在もまた将来も必要なことである。もちろん、裁縫が好きで時間的にも余裕があれば、趣味として自分の衣服や家族の衣服を縫うという人があってもよい。そこで、男女共学で学習する場合には、衣生活に必要な最低限度の仕事をとりあげたらよいと思う。即ち、つくろいやボタン付け、かんたんせんたくやしみ抜きぐらいは身につけておきたいものである。

ということで多岐にわたる調査の後、ミシン縫いによる作業前かけの製作という実習をおこない、次年度（昭和28年度）からは各学年とも男女共学の3時間の中で1年生はミシン縫い練習、前かけの製作、2年生は男女の夏服製作、3年生は特に製作はなく和服の25分の1の大ききの単衣を紙で作り衣服に対する関心を深めるというような題材にとりこんでいる。

『研究集録』第1集（昭和33. 1）より

「家庭教育における男女共学の成果」の“1 わが校の家庭教育”

わが校の家庭科は、すでに、昭和29年度から、各学年とも男女共学で学習している。しかし、家庭教育の内容は、非常に広範囲であり、またその上に、他の教科と異なり、男女各々の興味差、及び能力差をとくに考慮して指導しなければならないなど、非常に困難とするところが多い。

そもそも、家庭教育において、もっともたいせつなことは、民主的な楽しい家庭とはどのような家庭であり、そのような望ましい家庭をつくりあげるには、家族の各々が、どのような態度でのぞむべきかを教えることにある。そのため、家庭生活においては、どのような仕事があり、その仕事をどのような方法で処理していくのかを知らなければならない。その場合、男子と女子がいっしょに学ぶことによって、お互に啓発しあい、より合理的な方法を見つけだすことができるとともに、お互の性格や能力の差があるためにかえってお互を深く理解し、協力することができるのではなかろうか。また、本校の生徒の家庭環境は、ほとんど都会であり、非常に機械化されているので、家庭における仕事は、一段と単純化されつつある。そこで、いままでのような衣食住に関する高度の技術を必要としなくなったので、男女共学で学習しても、男女の能力差による学習指導の困難点は、さほど認められない。

しかし、時間の余裕があれば、女子には、もっと深く衣食住その他について学習させたいが、わずかの家庭科の時間に、男女別々に学習して得たものよりも、男女共学で学習して得たものの方が、より大きいのではないかと考える。

33年生がいっしょのグループで、カレーライスをつくったときの感想を1、2拾ってみると、

○ 何よりも強く感じたことは、どんなことでも、実際にやってみて、はじめてその方法がわかるということである。（男子）

- 必修科目であるにもかかわらず、家庭科は、どうしてもなじめなかった。職業科にくっついてやってはいるものの、女のことなど勉強するなんて、と思っていた。しかし、卒業式も間近いこのごろになって、この常識的な、なんでもない当りまえのことを勉強して、実生活に直接結びつけるものこそ、ほんとうの勉強ではないかと考えるようになった。習ったことはすぐに役に立つ。これほど生活に関連の深い学習を軽視し、いたずらに、高等教育を求めていた自分を哀れに思うようになった。(男子)
- 台所の仕事というものは、やはり女子の仕事である。それだけに、男子は、台所の仕事というと、どうしてもひっこみがちになる。だから、こんな場合、女子が男子にさそいかけて、仕事をいっしょにしようという気分を持たせることがたいせつだと思った。これから、男女が共同で仕事をする場合、男子に向く仕事であれば、男子は女子をリードし、女子に向く仕事であれば、女子は男子をリードして、はじめてうまくいくものだなあとしみじみ考えた。(女子)
- 私たちは、小学生時代は、家庭科というものは、女子のみがするものであるときめてしまっていました。けれども、中学校に入ってから、家庭科は、女子だけのものではないということを実感するようになりました。しかし、私は、男子に調理とか、つくろいものをして欲しいというのではなく、もっと、男子の家庭の主婦の仕事に対する関心が欲しいのです。どれだけ女子が、毎日、家庭の仕事に追われているかということを実感して欲しいと思います。そして、台所改善へも関心を向け協力して欲しいと思います。(女子)
- というように指導者の意図が生徒の方にも浸透しつつある様子がうかがえる。さらに、昭和30年10月の研究会の授業は、男女共学が地に足をつけて歩みはじめたあらわれとみてもよいのではないかと同時に今日的な問題となっていることへの示唆を与えてくれるものであると思われるので指導案をあげておく。

## 職業・家庭科学習指導案

指導者 上村 佐智子

日時 昭和30年10月26日(水) 第1時限(9.00~9.50)

場所 家庭科室

学級 第1学年B組(男子34名・女子19名)

1. 単元 わたくしたちの衣生活
2. 単元認定の理由

わたくしたちの日常生活には衣食住その他いろいろな仕事がある。そのなかでも衣生活に関する簡単な衣服の手入れや、前かけ、下着の製作ぐらひは、自分たちでつくられるようにしたい。そのことによって衣服を大切に、自分のことは自分でする習慣を養うとともに、自分の着る衣服をつくるよろこびを味わわせたい。男女ともに、前かけや下着を縫うことについてはいろいろ意見もあろうが、お互に衣生活に関する理解を深め、また共学で実習することによってお互の特徴を理解し、協力する態度を身につけていくようにしたい。

### 3. 目標

- (1) 衣生活に関する身のまわりのことが、自分でできる習慣を養う。
- (2) 男女協力して仕事をする態度と習慣を養う。

- (3) 日常の衣服の手入れ法を会得する。  
 (4) 作業着や下着類についての知識を深める。  
 (5) 簡単な日常着に含まれている裁縫の基礎技術を習得させる。

#### 4. 単元指導計画

指導過程	学 習 内 容	時 間
第 1 次	日常の衣服の手入れ	1
第 2 次	せんたくとアイロンがけ	5
第 3 次	ミシン縫い及び基礎縫い練習	7
第 4 次	前かけの製作	7
	下着について	1
第 5 次	下着の製作 型紙と裁断	2
	縫う (本時分は第 1 時限)	4

#### 5. 本時の指導

- (1) 題 材 下着の製作
- (2) 目標標
- 男女協力して仕事をする態度と習慣を養う。
  - 自分の衣服を縫うよろこびを味わわせる
  - ミシンでパンツを縫いながら裁縫の基礎技術を習得させる。
- (3) 留意点
- 個人差を考慮して、能力に応じた実習をする。
  - お互いに協力して学習できるように、グループ学習の形態をとっている。
- (4) 準 備
- 教師 パンツの見本
- 生徒 パンツの用布 裁縫用具
- (5) 指導過程

段 階	学 習 事 項	生 徒 の 活 動	指 導 者 の 活 動 並 に 評 価
導入 (5分)	1. 本時の学習事項設定	項学習事項を確認する。	○学習事項について説明し、学習準備はできているかたしかめる。
展開 (40分)	2. パンツの縫い方 3. パンツを縫う。	2. パンツはどんな縫い方がよい方がよいかを話し合う。 3. ○パンツを縫う下準備をする。 3. ○ミシンでパンツを縫う。	○学習に対する興味はどうか観察する。 ○生徒の発表をききながら、縫い方が会得できたかどうかたしかめる。 ○机間巡視により、個人指導をしながら、縫う能力を観察する。 ○各グループとも、お互によく協力して実習しているかどうか観察する。
整理 (5分)	4. 次時の予告 5. 後始末	4. 次時の学習事項を確認する。 5. 後始末をする。	○次時の予告をする。 ○後始末がよくできているかたしかめる。

## 6. 指導のための調査資料

### (1) 生徒の実態

- この実習の前に、男女とも全員、ミシンで前かけを縫っている。
- 詳細は、研究紀要第7の職業・家庭科の裁縫に関する調査と参照。

### (2) 学習形態

10班編成にし、各班とも男女3名、女子2名を基準にしたグループ学習を行なっている。各メンバーは、それぞれ興味や能力の具ったものであるよう留意して編成した。

昭和35年の指導要領改訂では職業、家庭科から技術・家庭科へ。近代技術の発展は家庭生活にも多大の影響を及ぼしたので、それらに対処できるのでなければならないという意図であったらしい。そしてコースも男女別が明示されてきた。そのときの移行措置の指導計画表を示しておく。



職業・家庭科指導計画(2・3学年)

大阪学芸大学附属天王寺中学校

第2学年 (共学)	家庭整理5	食生活7	調理(男)14・被服製作(女)14	住生活4	住生活(男)14・調理(女)14	機械の整備修理8	電気用具の取扱い6	家庭看護4	家庭機械(男)8 被服製作(女)8	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○材料と洗剤</li> <li>○しみぬき</li> <li>○保管</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○献立</li> <li>○調理材料</li> <li>○調理法</li> <li>○食物と生活</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○献立</li> <li>○調理材料</li> <li>○調理法</li> <li>○食物と生活</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○献立</li> <li>○調理材料</li> <li>○調理法</li> <li>○食物と生活</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○各室の機能と配置</li> <li>○わが国の住宅事情</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○機械と機構</li> <li>○故障の点検</li> <li>○分解・組立・調整</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○電気計器の取扱法</li> <li>○配線器具の点検・修理</li> <li>○照明器具・電熱器具の点検・修理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○病人の観察・記録</li> <li>○病室・病床</li> <li>○病衣</li> <li>○病気の手当</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○機械と機構</li> <li>○故障の点検</li> <li>○分解・組立・調整</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○機械と機構</li> <li>○故障の点検</li> <li>○分解・組立・調整</li> </ul>
第3学年 (男子)	機械製図20			機械15	経営簿記13	産業と職業13		職業生活9		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○機械要素の略面図(小ネジ、ボルト、ナットなど)</li> <li>○工作図(工作方法の表示法、組立図と部分図)</li> <li>○断面図</li> <li>○複写図・見取図</li> <li>○製図用具の使用法</li> <li>○図面と生産との関係</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>○機械材料</li> <li>○機械要素</li> <li>○故障の点検</li> <li>○分解・組立・調整</li> <li>○洗浄・給油</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○金融と経営</li> <li>○複式簿記</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○産業分類</li> <li>○農業</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○職業と生活</li> <li>○職業と生活</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○職業分類</li> <li>○職業と生活</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○職業と生活</li> <li>○職業と生活</li> </ul>	
第3学年 (女子)	被服製作13			調理13	調理13		調理13		調理13	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○せらい・布地</li> <li>○被服の付属品</li> <li>○被服製作</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>○献立(幼児・老人・病人などの食事、行事食、客ぜん食など)</li> <li>○調理用具・食器</li> <li>○調理法</li> <li>○食物と生活</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○献立(幼児・老人・病人などの食事、行事食、客ぜん食など)</li> <li>○調理用具・食器</li> <li>○調理法</li> <li>○食物と生活</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○調理用具・食器</li> <li>○調理法</li> <li>○食物と生活</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○調理用具・食器</li> <li>○調理法</li> <li>○食物と生活</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○調理用具・食器</li> <li>○調理法</li> <li>○食物と生活</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○調理用具・食器</li> <li>○調理法</li> <li>○食物と生活</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○調理用具・食器</li> <li>○調理法</li> <li>○食物と生活</li> </ul>

(備考) 木材加工・製図の基礎・染色は、工作の時間に共学で指導する。

技術・家庭科指導計画 (女子向)

大阪学芸大付属天王寺中学校

項目	栽培 10	家庭機械 10	被服製作 16	製図 10	調理 16	被服製作 8
第 1 学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>栽培の計画</li> <li>気温、水分、風、日照などの諸条件と作物の栽培</li> <li>土や肥料などと作物の栽培</li> <li>作物の病気や害虫とそれの対策</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ミシンの構造と部分の名称</li> <li>ミシンの機能</li> <li>ミシンの操作法</li> <li>使用中の留意事項</li> <li>日常の手入れ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>せいの・布地と編物用紙</li> <li>被服製作・被服整理の用具、機械、施設</li> <li>被服製作 (実習) ブラウス</li> <li>被服と衣生活</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>絵と図面との相異</li> <li>家庭機械・家庭工作と図面</li> <li>製図用具とその使用法</li> <li>文字と線の使用法</li> <li>平面図法</li> <li>展開図</li> <li>投影法</li> <li>寸法の記入法</li> <li>工作図</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>献立 (青少年向き)</li> <li>調理材料</li> <li>調理用具、食器</li> <li>調理用熱源</li> <li>調理法</li> <li>食物と生活 (実習) 日常食の調理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>編物</li> <li>かぎ針、棒針の基礎編</li> <li>簡単な模様編</li> <li>ゲージの決めかた (実習) ソックス</li> </ul>
第 2 学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>布地</li> <li>被服製作</li> <li>(実習) パジャマ</li> <li>被服用理用具</li> <li>被服整理 (洗たく、しみぬき、保管)</li> <li>被服と生活</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>家庭製作 29</li> <li>家具用木材</li> <li>接合材料と塗料</li> <li>木工具の使用法と工作法 (実習) 花びん敷</li> <li>家具の取扱法と簡単な修理</li> <li>刃物のとぎかたと手入れ (実習) 家具類の修理 刃物の手入れ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>家庭工作 20</li> <li>献立 (家族の献立)</li> <li>調理材料 (乾物、かんづめなど)</li> <li>台所の施設設備</li> <li>調理用熱源</li> <li>調理法</li> <li>食物と生活 (実習) 日常食の調理、常備食の調理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>調理 29</li> <li>家庭機械 18</li> <li>家庭機械の材料</li> <li>機械要素</li> <li>家庭機械の整備 (実習) 裁縫ミシン</li> <li>機械と生活</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>被服製作 9</li> <li>ししゅう</li> <li>基礎的なししゅうのしかた (実習) 手きげ袋、チーブルクロスなど</li> </ul>	<p>昭和 36 年度より実施予定</p>
第 3 学年	<ul style="list-style-type: none"> <li>せいの・布地 (幕・絹およびそれらの交織物など)</li> <li>被服の付属品</li> <li>被服整理 (絹や毛の洗たく法)</li> <li>被服製作 (実習) ワンピースドレス</li> <li>被服と生活</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>家庭機械 16</li> <li>問取図と屋内配線図</li> <li>電気計器の取扱法</li> <li>配線器具の点検・修理</li> <li>照明器具・電熱器具の点検・修理</li> <li>電動機をつけた家庭用機器の取扱法・点検</li> <li>電気と生活</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>調理 30</li> <li>献立 (幼児・老人・病人などの食事、行事) (食、客せん食など)</li> <li>調理用具・食器</li> <li>調理法</li> <li>食物と生活 (実習) 特別食の調理</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>調理 30</li> <li>家庭工作 7</li> <li>すまいのくふう (実習) 間取りの設計</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>家庭工作 10</li> <li>染色</li> <li>ろうけつ染めや絞り染めの基礎</li> </ul>	<p>昭和 37 年度より実施予定</p>

技術・家庭科年間教材配当

大阪学芸大学付属天王寺中学校

1年

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3																									
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35		
男子	裁縫製図 8		栽培図 8		製図 5		家庭機械 5		栽培 5		裁縫製図 17																									
女子	家庭機械 10		被服製作 6		栽培 10		製図 10		被服製図 10		裁縫製図 16		調理 16		編物 8																					

2年

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3																							
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
男子	設計製図 29		木材加工 5		家庭機械 5		木材加工 5		家庭機械 5		木材加工・金属加工 46		機械 10																					
女子	被服製図 29		家庭製作 29		家庭製作 10		家庭製作 10		調理 29		家庭機械 18		しゅうりゅう 9																					

3年

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3																							
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
男子	機械 25		電気 45		電気 45		電気 45		電気 45		電気 45		電気 45		電気 45		電気 45		電気 45		電気 45		電気 45		電気 45		電気 45		電気 45		電気 45		電気 45	
女子	被服製作 30		家庭機械 18		家庭機械 18		家庭機械 18		家庭機械 18		家庭機械 18		家庭機械 18		家庭機械 18		家庭機械 18		家庭機械 18		家庭機械 18		家庭機械 18		家庭機械 18		家庭機械 18		家庭機械 18		家庭機械 18		家庭機械 18	

職業家庭科教材配当

2年

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3																							
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
男子	被服製図 5		食生活 7		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14	
女子	被服製図 5		食生活 7		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14		調理 14	

3年

月	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3																							
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
男子	経営簿記 13		機械製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20	
女子	経営簿記 13		機械製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20		製図 20	

(備考) □ の教材は指導者が交性して指導する。

昭和48年度より、1学年のみ4クラスとなり、単学級指導が時間的にむづかしく、2クラス合併を余儀なくされ、生徒数が15、6名から34名になり、被服実習では布裁断が2時間でほぼ終わっていったものが4～5時間かかるようになり、ミシンも1台当たり1.5人～2人、個別指導もなかなかゆきとどかなくなってきた。調理実習でも1班の人数も3～4人から5～6人と増し、試食も移動テーブルを用いて、教室の数ヶ所に分散しなければならなくなった。男子向では46～48人の生徒をかかえ能率の低下ははなはだしいものとなり、単学級指導しか考えられないということから、昭和49年度より1、2年生は時間数を2時間とし、密度の濃い授業を目指して、研究の主力はしぜん①題材の精選と②教材・教具の整備にしぼられてきた。特に時間数を多く必要とする被服製作（手芸内容を省く）をみると、下の表のように製作するものを単純な形のものや1部省いて他のもので補う方法であるが、中学校の段階として何を残さねばならないかということのを他領域も含めて、平行して研究し実践に移されなければならない段階に来ていて、これからの研究の1歩には家庭科教育を左右する重み加わってくるのである。

	1 年 生	2 年 生	3 年 生
48年度	○1週3時間 ○2クラス合併 ○ブラウスの製作 （えりつき、そでなし）	○1週3時間 ○単学級 ○パジャマの製作 （ラ克蘭そで、ふつうそでのいずれか。えりつき可）	○1週3時間 ○単学級 ○ワンピースの製作 （各自のデザインにより、えり、そでつき可）
49年度	○1週2時間 ○単学級 ○ブラウスの製作 （えりなし—フリルは可） そでなし	○1週2時間 ○単学級 ○パジャマの製作 （ラグランそでのみ） えりなし—フリル可	同 上
50年度	○1週2時間 ○単学級 ○ブラウスの構成を発展して パジャマの構成と型紙 ○部分縫い標本製作	同 上  （51年度は布の裁断からを） 2年生の学習とする	○1週2時間 ○単学級 ○サンドレス風のワンピースの製作 （サロンベットスカートも可）

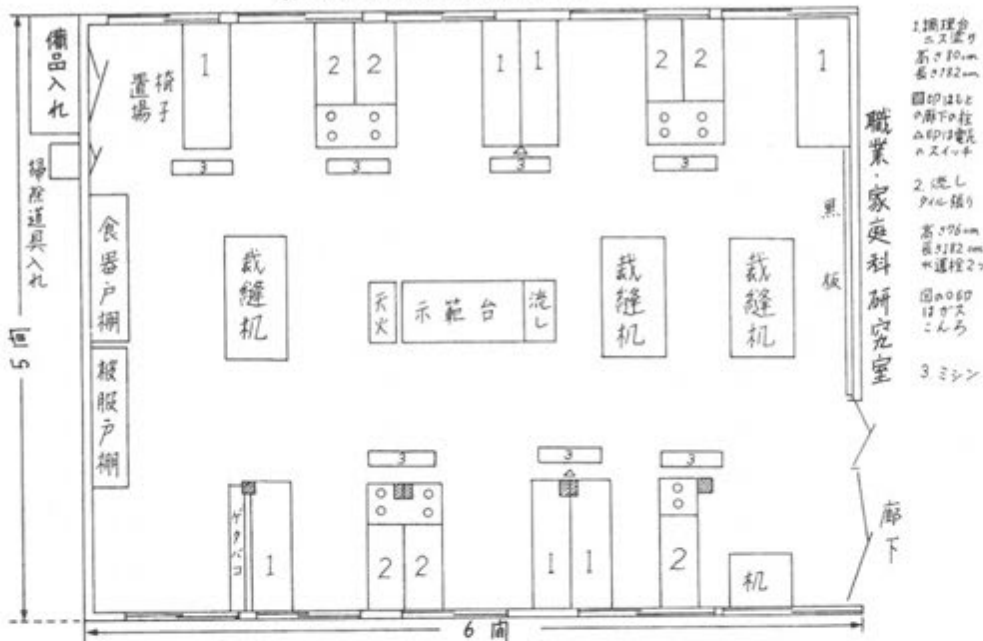
#### § 4. 施 設

この教科は仕事を中心として学習する教科であるだけに、施設・設備の整備が学習効果を左右するので指導者はつねに気にとめて努力せねばならない。

昭和26年、普通教室を改造し、主に調理室としての家庭科室ができる。東西に建つ、木造2階建の東端の階下で、廊下をとりこみ30坪の広さであった。

昭和31年の第2期工事によって現在の調理室の方が完成した。調理台は右側に3台、左側にはミシンが置かれた。被服実習のとき、ミシンの出し入れにかなりの時間が費される上に、ミシンの故障につながるので、機会あるごとに被服室の新設を願い出ている。

## 家庭科教室設計図



昭和46年6月、家庭科の改造計画が許可され、調理台を新しくし、さらに2台増設し、計5台とする。ミシンの移動先として、集会室（北館4階）の後方に、折りたたみ式の机、いすを入れ、仮の被服室を設ける。

昭和47年9月、家庭科の改造終る（写真次ページ）新規の調理台5台には給湯できるよう、ガスの給湯ボイラーを設ける。

昭和49年3月、中学校学級増のため集会室を普通教室に改造するため、北館4階の普通教室（現中3D）へ被服室を移す。



昭和50年3月、被服室として、旧男子ロッカー室の改造工事始まる。

昭和50年4月、家庭科として調理室・被服室がそろったが被服室はまだミシンを置いてあるといった段階で今後整備してゆきたい。





# 英 語 科

## § 1. はじめに

中・高英語科は、英語科の「歩み」作成に際して、まず資料を中心に記していく方針を取った。それは資料保存と同時に、これまで英語科が実際に歩いて来た道を、具体的に振り返ることにより、現在の我々の姿勢・考え方、更に進んで授業の内容・方法の参考にしようという意図からである。その手段としては、2年に1度行なわれている校内研究会の記録に基づき、ただし、研究会の記録の多少により、研究集録その他を利用し、また、研究会の記録のない36年までは、一括して、当時を振り返ることにした。

## § 2. 中学校英語科30年の歩み

### 1. 昭和22年からの初期の附中英語科

1. 昭和22年4月、大阪第1師範学校に附属天王寺中学校が併置され、英語科が発足した。発足当初は専任教諭不在のため、当時の師範学校英語科教官を講師として授業が行われた。

昭和24年田村啓、25年野村英太郎が専任教諭として着任した。使用教科書としては昭和35年頃までは New Jack and Betty, Standard Jack and Betty, The Gate to the World, The Globe Readers などが主として採用された。本校における英語科の研究活動の詳細をのべることは紙幅の許さないことであるので、発足当初から昭和37年度までの研究発表を中心に目録を綴るにとどめ今後の資料にしたい。

#### 本校主催教育研究発表会

(注) 第1回教育研究発表会は専任教諭不在のため不参加

昭和24年度 (昭和25年2月3日)

#### 第2回教育研究会

主題 ガイダンスの組織と実践

授業	Mr. and Mrs. Smith	(中1)	田村 啓
	The Wonderful Cradle	(中2)	久合田 幸
	Bacteria	(中3)	加島 秀夫

協議 単元学習の展開例

昭和25年度 (昭和25年12月1日)

#### 第3回教育研究会

主題 ガイダンス計画の立案と展開

授業	Tomorrow	(中3)	野村 英太郎
----	----------	------	--------

協議 Evaluation、英語科実態調査

昭和26年度 (昭和26年10月31日)

#### 第4回教育研究会

主題 中学校教育の全体計画と実践  
 授業 Why an Apple Falls (中3) 野村 英太郎  
 協議 講師 (大阪府教委) 東 善作  
 昭和2年度 (昭和27年7月3日)

第5回教育研究会

主題 独立後の教育の在り方とその実践  
 授業 Unit 2. Parlor Games 2. Riddles (中3) 田村 啓  
 協議 講師 (大阪府教委) 東 善作

昭和28年度 (昭和28年11月13日)

第6回教育研究会

主題 個人を育てる教育活動  
 授業 感謝祭とクリスマス (中3) 田村 啓  
 協議 講師 (大阪府教委) 東 善作

昭和29年度 (昭和30年10月26日)

第7回教育研究会

主題 個人を育てる教育活動  
 授業 At Home (中1) 田村 啓  
 協議 家庭学習と教室学習の関係

昭和35年度 (昭和35年6月27日)

第8回教育研究会

主題 中高通しての学習指導の問題について  
 授業 William Tell (中2) 田村 啓  
 発表 暗記文筆記テスト結果百分率分布表 動詞の活用テスト結果百分率分布表  
 協議 Non-Finite の取り扱い 講師 (大阪学芸大学) 池内 光太郎  
 (吹田第一中学) 水鳥 喜平  
 講演 Verbals について (大阪学芸大学) 池内 光太郎

昭和37年度 (昭和37年6月28日)

第9回教育研究会

主題 学習内容の検討  
 授業 Morning, Afternoon, And Evening (中2) 野村 英太郎  
 (大阪学芸大学) 藤田 賢治  
 (大阪府教委) 小村 幹夫

2. 昭和39年～42年 (Oral Approach の実践)

Fries, C. C. が『Teaching and Learning English as a Foreign Language』において、英語教育のあるべき姿として、「学習者の練習は、口頭練習でなければならない。最終目標が単に外国語を読むことだけであっても、言葉の基本——限られた語彙範囲での文法構造及び音組織——の習得は、話すことによらねばならない。」と主張しているが、本校においても、そのような立場から、昭和39年以降の数年間にはOral Approachの実践と、それをより有効な指導法として確立するために創意工夫が試みられた。例えば、我が国にお



いて、Oral Approach の教室への紹介と普及に中心的な役割を果たしてきたELEC（英語教育協議会）が提唱する授業過程のモデルに対して、さまざまな試行錯誤を経て、次のような本校独自のモデルが確立された。

——E L E C 方式——

(A) Review (15-20minutes)

1. Choral reading
2. Pattern practice
  - a. Variation exercises
  - b. Selection exercises
3. Pupil - pupil dialogs
4. Written test

(B) Presentation of the new material (30-35minutes)

1. Oral introduction
2. Mimicry - memorization practice
3. Check of understanding

(C) Reading of the text of the day

1. Reading
2. Check of understanding through teacher - questions and pupil - answers
3. Writing (if necessary)

(D) Consolidation

——本校の方式——

(A) Programmed Pronunciation Practice 注①

(B) Review

1. Choral recitation and Individual recitation
2. Pattern practice
  - a. Variation exercises
  - b. Selection exercises
3. Pupil - pupil dialogs
4. Written test

(C) Presentation of the new material

1. Oral introduction
2. Mimicry - memorization practice
3. Check of understanding
4. Oral introduction of the reading material
5. Check of understanding  
(True - false test , etc .)

(D) Reading of the text of the day

1. Reading
2. Check of understanding through teacher - questions and pupil - answers
3. Writing

(E) Consolidation

また、Oral Approach という授業形態によって一貫して授業を行なう場合、しばしば問題点として指摘されたいくつかの問題——例えば、生徒の綴字習得に関する指導、家庭学習の指導、遅進生徒に対する指導——に関しても研究が積み重ねられたが、Oral Approach を有効なものにするためにそれぞれ意義深いものであったと言えよう。

昭和41年度（教育研究発表会）田村「ミス・スペリングについて」

生徒のミス・スペリングの一般的な傾向を分析し、その原因と対策（指導上の留意事項）を明らかにしようとした。

昭和42年度（研究集録）瀬川・樋口「望ましい家庭学習のあり方」注②

Oral Approach という授業形態による場合、何を、どのような方法で家庭で学習することが必要であることを示し、それを学習心理学的に裏付けよう

とした。

昭和43年度（研究集録）樋口「遅進生徒の問題点」注③

日常の小テスト、中間期末テストを分析し、生徒（特に遅進生徒）の学習上のtrouble spotsを示し、その原因を分析することによって指導上の留意事項を明らかにしようとした。

ところで、数年間にわたるOral Approachの実践のまとめは、昭和44年度研究収録、瀬川・樋口「Oral Approach 再考」注④において発表されている。Oral Approachは、それ以前の各種の教授法と比較して効果的なものであり、大きな成果をもたらしたが、同時に、それは、英語教育上重要ないくつかの問題点も有していた。それらは、換言すれば、次のような今日の英語教育の課題でもある。

(1) 生徒に英語を正しく理解させ、文の生成能力を養うためには、変形文法理論や日・英両語の比較といった幅広い観点からの教材研究を行ない、句型や文法事項を指導する必要がある。

(2) 生徒にコミュニケーションの能力を養うためには、文単位のコマギレな練習が中心であるPattern Practiceを総合的な場面での言語運用を志向するCommunication Practiceへ発展させる必要がある。

(3) 生徒にHearing, Speaking, Reading, Writingの能力を養うためには、それぞれに関して、長期的な展望にたった組織的なカリキュラムを検討し、指導する必要がある。

③ これらの研究・実践の結果は、それぞれ下記の刊行物において発表されている。

① 樋口忠彦「発音の指導」の章『英語教育の研究』（文部省・教員養成大学・学部英語科教育研究集会、大修館書店、1975）

② 樋口忠彦・瀬川俊一「家庭学習のあり方——Oral Approachによる授業形態の場合」『英語の窓』（中教出版、1971年11月号）

③ 樋口忠彦「英語科における遅進生徒の問題点」『英語教育』（三省堂、1970年5月号）

④ 樋口忠彦・瀬川俊一「Oral Approachの現状」『英語の窓』（中教出版、1971年12月号）

### 3. 昭和43年～45年（言語活動の研究と実践）

Oral Approachの実践の反省から、昭和43年以降、「習得しつつある言語知識を、自分自身の意志で総合的な場面で実際に運用することによって、その言語知識は真に定着し、また、そうすることによってのみ言語運用の能力を養うことが可能である。」という仮説を設定し、まとまりのあるものを聞いたり、読んだり、自分の心の中にあることを話したり、書いたりすることを体系的に指導しようとする「言語活動の指導」に重点を置いた研究と実践が試みられた。また、それらは、便宜上Reading, Writing, Hearing・Speakingの順でなされている。

言語活動としての「Readingの指導」というテーマで実践された内容は次のような機会に発表されている。

昭和43年度（教育研究発表会）瀬川・樋口「Readingの指導——その1」

昭和45年度（教育研究発表会）樋口・今倉・田村「Readingの指導——その2」

昭和46年度（研究集録）樋口・今倉・田村「読解指導についての——試論」

ところで、これらの実践では、内外のReading指導に関する書物や論文から貴重な示唆

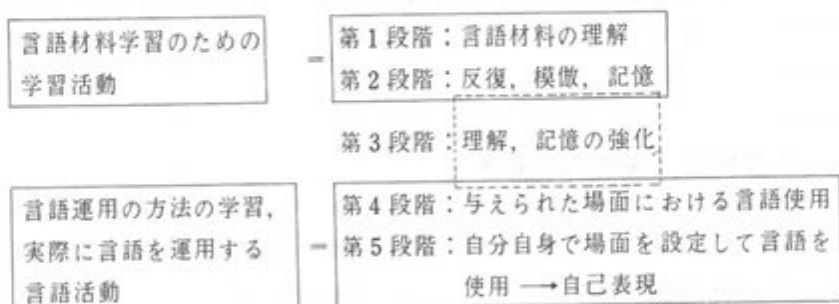
を得ながら、数多くの調査や実践に基づいて精読、速読指導に関する一つの方向を探ろうとしている。例えば、口頭作業を中心とした平常の授業で、単調になりがちな音読の練習を興味を持って行なわせる方法や、正しく、速く読みとる能力を身につけさせるための効果的な発問の方法などが示されている。また、副教材を利用した授業における、教材の選択の方法、予習のさせ方、教材による授業の進め方なども示されている。

これらの研究・実践の結果は次のような機会にも発表されている。

- a 樋口忠彦「中学校段階における読解指導についての一試論」(1970年、日本英語教育学会)
- b 五島忠久・今倉大・樋口忠彦「Readingの指導」『現代英語教育』(研究社、1973年1月号)
- c 今倉大・樋口忠彦「英文読解能力論考」(『大阪教育大学紀要』1970)

#### 4. 昭和46～47年 (Writing)

Readingの研究に引きつづいて、昭和46～47年に、writing指導に取り組んだ。テーマの設定にあたって私達は3つの観点から、研究にあたることとした。その第1は、英語教育の目的に再びもどって考えること、第2点は、英語を実際の場面において使用すること、第3点は、writingを文単位から、paragraph単位まで拡大して生徒に書かせるということ、であった。W. M. Riversの考えをもとに、具体的には、copying, reproduction, recombination, guided writing compositionの手順を踏んで指導を研究した。writing指導の実践には、次のような図式を考えた。



外国語学習の過程を上のように考えるなら、言語活動の指導は、第4段階、第5段階の指導のことである。writing指導もこの2つの段階を中心におこなわれた。この実践中もとも中心となったのはguided writingについてであり、今少し詳しく述べれば、guided writingには、次のようなものがある。

(1) substitution, expansion replacement completion exercises

(2) 新しく学習した語、熟語、句型その他の文法事項を使用した文、会話文を作らせる。

たとえば、一文作文、expansion、多文作文(二文、三文etc)、paragraph writing、situationを与えて、それに合った文を作らせる。

このようなexercisesは、年間のカリキュラムによって実践された。たとえば2年生の例をあげると、下のようなものがある。

3年生の夏休み自由英作文の文例集(31ページ)は、Mrs. Sakamotoの指導を受け、別刷として出版された。今後の問題点として、①長期的な展望にたったカリキュラム、②日本語と英語の表現力の関係、③授業中でのwritingの位置づけ、④評価について、そして

次のspeakingへと引きつがれていった。

	課 題	備 考
5 月	助動詞 (may, must etc) を使った skit	場面：自由
6 月	Birthday party に友人を招待するところを skit にしなさい。	
7 月	私の一日	昨日のこと (過去形を使って)
夏休み	① クラブ紹介 ② 英文日記	① 100~200語 ② 行事を中心として一週間分
10 月	私のみた夢	100~200語
11 月	私の趣味	100~200語
12 月	笑い話の創作	Model の paragraph を 2~3 示してやる
冬休み	① New Year Resolutions ② 英文日記	② 一週間分
1 月	外国のペンパルへの私の最初の手紙	
2 月	My Best Friend in the World	
春休み	① 劇づくり ② 英文日記	題：自由 一週間分

(注) これらの研究実践の結果は次のような場所でも発表されている。

- a 五島忠久、樋口忠彦「Writing の指導」『現代英語教育』(研究社、1972年12月号)
- b 樋口忠彦「自由英作文の指導について」(日本英語教育学会関西支部研究発表会、1975年4月)

### 5. 昭和49~(Speaking の指導)

昭和49年度の『研究集録』において「わたしたちの英語教育研究の方向」と題して、今倉・樋口が書いている。最近、学習活動から言語活動へと指導要領の変更がなされて必然的にSpeakingの指導が、クローズアップされていた。日本でもあまり研究業績のないこの分野に立ち向かうにあたって、その方向づけをしようとしている。その中でSpeaking指導の問題点として、評価のむずかしさ、一斉指導のむずかしさ、英語の文法とコミュニケーションとの関係、内容そのものの問題、状況設定と動機の問題、教授者の主観による問題、Speakingの態度、等が指摘されている。そして49年の教育研究発表会ではSpeakingの指導を日常の授業の中にくり込めばどのようなものになるかということで授業(樋口、渡辺)が行なわれ、話し方の指導という題のもとに発表(今倉)がなされた、授業過程は次のようなものである。

- A. 現実の場面(自分自身で設定した場面)における言語運用
  - 1. Conversation (Teacher (pupil) - questions and Pupil - answers)
  - 2. Speech (Skit, Drama)
- B. 復習
  - 1. Reading and recitation    2. Writing practice
  - 3. Practice II (与えられた場面における言語運用)

### C. 新教材の導入

1. Introduction of the new material
2. Explanation
3. Mim-mem
4. Practice I (理解、記憶の強化のための練習)
5. Reading
6. Check of understanding

この中でもAの2のSpeechの指導をとりあげて、やろうとした。これは夏休みに英作文の宿題を出したり、授業中に英作文を課したものの中から順番に発表させ、その後、質疑応答に入るというもので、発表者は覚えてくるのが原則であった。なお、樋口の場合は従来のOral Method, Oral ApproachをこえてTransformational Generative Approachと称して主として新教材の導入の際に構造を変形文法的に処理し、段階的に提示し、より鮮明に理解させようとした。今後の課題としてはCommunication Practiceの中にはSpeech以外にも、Skit, Drama, Discussion, Picture-Telling, Oral summarizationなどがありこれらも試していきたい。Speaking指導の問題点としては、先にあげた以外に、事前のチェックの問題、Q&Aがスムーズにいかない場合どうするか。個別化指導がいられているが、個人の事例研究の必要性もあろう。評価を具体的に細分化して、例えば声の大きさ、流暢さ、発音、内容、暗唱の程度等といったようにできるだけ科学的に研究を進めていきたい。Speakingという活動は、心理的なものに大きく作用されるので、Classroom Englishを適当に使ったり、導入の際Picture cardを英語で説明したり、雰囲気作りが大切である。最後に今までやってきたReadingやWritingの指導とも密接につながっているのも、これらも継続してやる必要がある。忘れてならないのはHearingの指導で、これはSpeakingと対になっている。一方通行ではコミュニケーションにはならないからである。

## § 3. 高校英語科20年の歩み

### 1. 昭和30年代—初期の附高「英語科」

昭和33年4月、附高3期生が入学、その5月から、英語科専任は、重松卓末・山口格郎の2教官となり、1期生を高3として、各学年2学級編成で、実質的に、附高英語科の歩みが始まったと言えよう。それまでは、専任は重松1名で、附中、大学の先生方から多くの援助を仰いだ。なにしろ、教官がわずか2名なので、それに伴う不便も大きかったが、一面、毎日が、教科のあり方についての打合せでもあったわけで、改まって教科会議などを持つまでもなかった。当時を振り返って、次のような点に重点を置いていたと思う。それは、その後の附高英語科の気風に多少の影響を及ぼしたと考えられる。

(1) 教科書を中心に、じっくり腰を据えて授業を進める。これは、当り前の話しなのであるが、草創期にとかくありがちな「力み」がなかった。これは当時の高校教官全体の雰囲気も反映していたとも言える。他の高校では、もっと、補習や、受験問題集を扱っているが、大丈夫なのかと、兄・姉を、別の高校で卒業させたり、進学させた経験のある父兄から、激励や注文やらを頂戴したことも、しばしばであったが、「本校の方が、本物の英語の教授をしていますので」と、詳しく説明したり、手紙で返事することもあった。

(2) 授業の中心を「読む」ことに置こうということで、しかも、多読指導の工夫は、比較的、始めの頃から取りあげた。多読のためのグループ別学習を試みたり、多読用の教材を紹介したり、希望者のためには注文したりもした。現在ほどに、適当な多読教材が豊富でないで、2年生(2期生)に、ハイネ版のモームの短篇集を丸善で見つけて渡した

こともあったし、3年生が、G. ギッシングの「ヘンリー・ライクロフトの手記」を勝手に読んで、不明の個処を質問に来たりしていた。4期の卒業生に、本箱を整理していたら、40冊以上も、多読用のテキストがでてきて、我ながら驚きましたと、手紙を寄越した生徒もいた。これには教官の方が、もっと驚いた事であった。そんなこともあって、教官室への生徒の出入りが賑かだった。多種多様な生徒の出入りで賑かなのも、附高教官室の特徴の一つであろう。

(3) 『研究集録』について。平生の授業を整理して検討してみる、実質的にimproveする上で益がある、ということを基調にして発表することとし、「高校リーダーにおける語法の研究」から初めて、「Contextによる文意の正しい理解」へと進んだ。後者については、金沢での教育研究発表会で報告を行ない、参加者との間に、活発な討議があって、英語科としての方向に自信を強めたこともあった。研究であるからには、その方向が一律である必要はないが、その内容が、教室授業の実際に根を下していることと、新奇さや、思い付きでない、また、流行に左右されない、本質的なものでありたい。全附連や、その他の研究会での発表・討議に参加する毎に、その思いを深くすることが多かった。

外見は平凡であっても、実質的であること。草創期の、附高英語科が目指していたものと言えば、こんな簡単なことに落着いてしまうのかも知れない。しかし、目前のことに焦ることもなく、英語科として、それなりに我が道を歩めたのも、重ねて言えば、全教科の教官が作り出していた、若々しいエネルギーと、柔軟性のお蔭であった。

## 2. 昭和37～38年

研究発表会の記録は現在、37年度分から保存されており、英語科では宮畑一郎が公開授業を行なっている。高2の「仮定法」の授業である。`mood`と`modality`、`Indicative mood`と`Subjunctive mood`の違いの理解、仮定法の過去と過去完了の習熟などを目標とした教案である。この発表会の資料はあまりないが、同じ宮畑が37年度研究集録に「イエスペンセン『格論』」を掲載している。又、重松・山口が共同で「誤答調査に見る指導の問題点」を、38年度研究集録にはやはり共同で「Contextによる文章の正しい理解」という内容的に非常に関連のある研究を続けて載せている。

37年の調査は「英語の学力とは何か？」—読解力・文法力・直観力—という根底的な発想から行なわれ、その調査結果として、発音・綴りは教室での指導が大きく関係し、「読解力というものは直接教室で指導を加えない場合でも進歩するものである」としている。そして発音は教室での練習を重視したいとし、一方英文理解の困難点が「contextの中で語義をつかむ点にあることを考え方のprinciple」として更に調査してゆきたいと記している。

そして38年度の「——正しい理解」では、生徒の中によく見られるconcrete imageの欠如とgrammar (word) consciousの関連は、結局word-for-word translation「内容の理解」だと取り違えている、としている。

尚、参考までに37年以前の『研究集録』中、高校英語科に関するものは、  
「高校リーダーに於ける`前置詞、の用法」(重松・山口 35年第2巻)  
「高校リーダーに見られる語法」(同・同 36年第3巻)である。

## 3. 昭和39年～40年

「中学3年・高校1年の関連」をテーマにして、中学校の教科書と高校1年生入門期の教材の語法を中心とした研究を中学校高校共同で行い、昭和39年11月に研究発表をした。

「英語は、高校に入ると急にむつかしくなる」とは、いかなる要因によるものかの検討がなされた。一般には、高校の教材は中学校のそれと比べて、語法的に急にむつかしくなり、それが生徒に大きな負担をかけているように考えられているが、高校1年の教科書を調べてみると、高校において重点を置いて教えたいと思う大切な語法の大半は、すでに中学3年において既習の語法であることが判明した。それにもかかわらず、実際には「英語は、高校に入ると急にむつかしくなる」という印象を生徒に与えているので、その原因の究明をし、次のような問題点を指摘した。

- 授業形態の変化、中学校：予習を必要としない、いわば「受動的な授業形態」  
高 校：予習を必要とする、いわば「生徒が自主的にやらねばならない授業形態」
- Pattern Practice の限界：Situation から遊離した文型の「こまぎれ」的な口答練習で、はたして生きた英語の文脈の中で用いられる表現がどの程度に理解できるようになるだろうか。

このような問題指摘をし（問題提起者、宮畑）、研究授業（授業者、山口）で sense - group をつかんで読んでゆく能力の涵養・教材内容と生徒の知的教養的成長との関連を考慮した多読指導が行なわれた。

#### 4. 昭和41～42年

研究発表会は主題「学習内容の検討」のもとで行なわれた。研究授業は「英作文」山口「精読指導」野村が指導した。山口は授業の内容を model sentence の暗誦と生徒自身の既習の英語を活用して英作文をできるだけ効果的に表現させるよう意図しながら授業を展開し、一方野村は Text : New English Readings Standard III Lesson 4 Ancient History (2) Exercise IV を教材として主として構文を中心とした復習とまとめに重点をしばり授業を進めた。

研究協議では「表現指導上の問題点」で山口は授業内容の説明と反省を行い、つぎの事項について提案をし活発な質疑応答がかわされた。a) 英語科指導の中での「作文」の位置づけ b) 模範文の暗誦（短文から story へ） c) 易しい英文の使用 (1) 使用テキスト (2) 英和辞典、英英辞典の利用。つづいて田村 啓はミス・スベリングについて最近5ケ年にわたる生徒の答案から具体例を傾向別に分類し、その対策をのべた。指導講師には（大阪市教育委員会）小村幹夫、（大阪学芸大学）藤田賢治が、それぞれの専門的な立場から指導助言をした。

講演では「翻訳と解釈」の演題で（甲南大学）寿岳文章が講演を行ない、多数の参会者に深い感銘を与えた。

『研究集録』では周藤康生が、「Rain におけるモームの創作態度とその効果的表現」山口、伊達寿曠が、「高校英語における多読指導」を掲載している。

#### 5. 昭和43～44年

前年度から引きつづき「精読指導」をテーマにして研究を行った。

昭和43年度には、grammar を 'context' 'a stream of thought' を明らかにするために活用し、'more English, less grammar' を指導方針の基本とし、「読書」としての reading はいかにあるべきかを求めて授業研究がなされた。聞き手が理解できるように oral reading ができるように指導することや、英々辞書の活用を指導することが有効な手段である。

ことが、同年11月の研究大会で「高校における精読指導の実際——Readerの扱いを中心にして——」のタイトルで、山口が発表し、田村・伊達が精読の研究授業をした。

同年10月には、全付速高校部会で、下長利一が「精読指導の問題点——特に予習指導の面から——」を発表した。精読指導は、あくまでも書かれていることの理解ないし鑑賞、すなわち内容の把握がその主たる目標であり、文法的分析や語法の解説は内容の把握という目的達成のための手段であるという態度を基本姿勢にして、予習の問題を取りあげている。生徒が教材を読むためにもっとも頭を使うのは予習の段階であることを指摘して、予習の手助けとなる「予習プリント」を継続作成し、その効果と問題点を発表した。

なお、『研究集録』には、43年度に伊達・山口が「多読との関連における精読指導」、44年度に千種基弘が「高一教科書における分詞の用法」、下長が「高校における英語精読指導の問題点」を掲げている。

## 6. 45年～46年

45年度の研究発表会においては、多読指導として山口が、精読指導として奥啓一が、それぞれ授業を行なった。山口は『A Tale of Two Cities』(Retold)を教材とし、速読の立場から語法上の説明よりも、筋の展開の把握に重点をおいた指導であった。奥は『My Father's Wedding Day』(Mary Lamb)を教材とし、従属節において生じるthatのくり返し、be to doのもつ意味の習得に焦点をあわせた。研究協議では千種基弘が「速読指導について」と題して発表した。訓練をつみ重ねることによって、能力のある生徒は勿論のこと、比較的低いレベルの生徒でも、短い時間内にかなりの量の英文を正確に理解し得るようになるということ、資料を用いて立証した。

協議会のあと、国弘正雄(お茶の水女子大学)が「なぜ英語を学ぶか」と題して講演し、参会の英語教員に多大の示唆を与えた。

45年の『研究集録』には、山口の「授業の実際——高校英詩教材、etc——」と題する発表がある。英詩を積極的にとりあげようという意図から、現代詩のなかから授業に用いたものに注解をほどこしている。とりあげられている詩人は、Frost, Sasson, Reevesなど、広い範囲にわたっている。

46年度の『研究集録』では、千種が「日・英語の表現比較——‘ピルマの竖琴’とその英語から——」と題して、実際に授業で多読指導した竹山道夫の作品から、高校の英訳文の指導に役立つようなものを、表現・複合語・分詞の3項に分類して整理し、日本文と英文とを対照して示した。また山口と下長が共同で「英語を‘読む’ということ——高校英語教室の実際——」と題して、まず生徒にとって理解があいまいとなる語句、表現を文脈のなかでどのように捉えるか、を具体的な例をあげて説明し、さらに『My Dungeon Sh-ock』(James Baldwin)を教材として注解を与えた。

## 7. 47年～48年

47年度の研究発表会は作文が主題となった。授業は山口と奥によって行なわれ、山口は高2で、as……、so……、the +比較級のような表現とか、no more……than～のような日本人にとって理解しにくいような形式による作文をとりあげ、材料の日本語の理解と検討に十分な時間をかけ、それによって日本語と英語の違いを意識させるという指導をした。高1の授業を受持った奥は、不定詞の副詞的用法の基本と、‘too ~to’、‘enough to’といった単純そうに見えるが、正確に用いることが生徒には困難である表現を主題とした。



研究協議では田村が「英作文の力をどのようにつけるか」と題して、生徒の実際の解答例を資料とし、表現力の基礎となるものと表現力を高めるための指導について問題提起した。

協議会のあと、毛利可信（大阪大学）が「英語を書くということ」と題して講演し、英語と日本語の感覚の違いによる困難と、英和辞典編纂の苦心について語った。

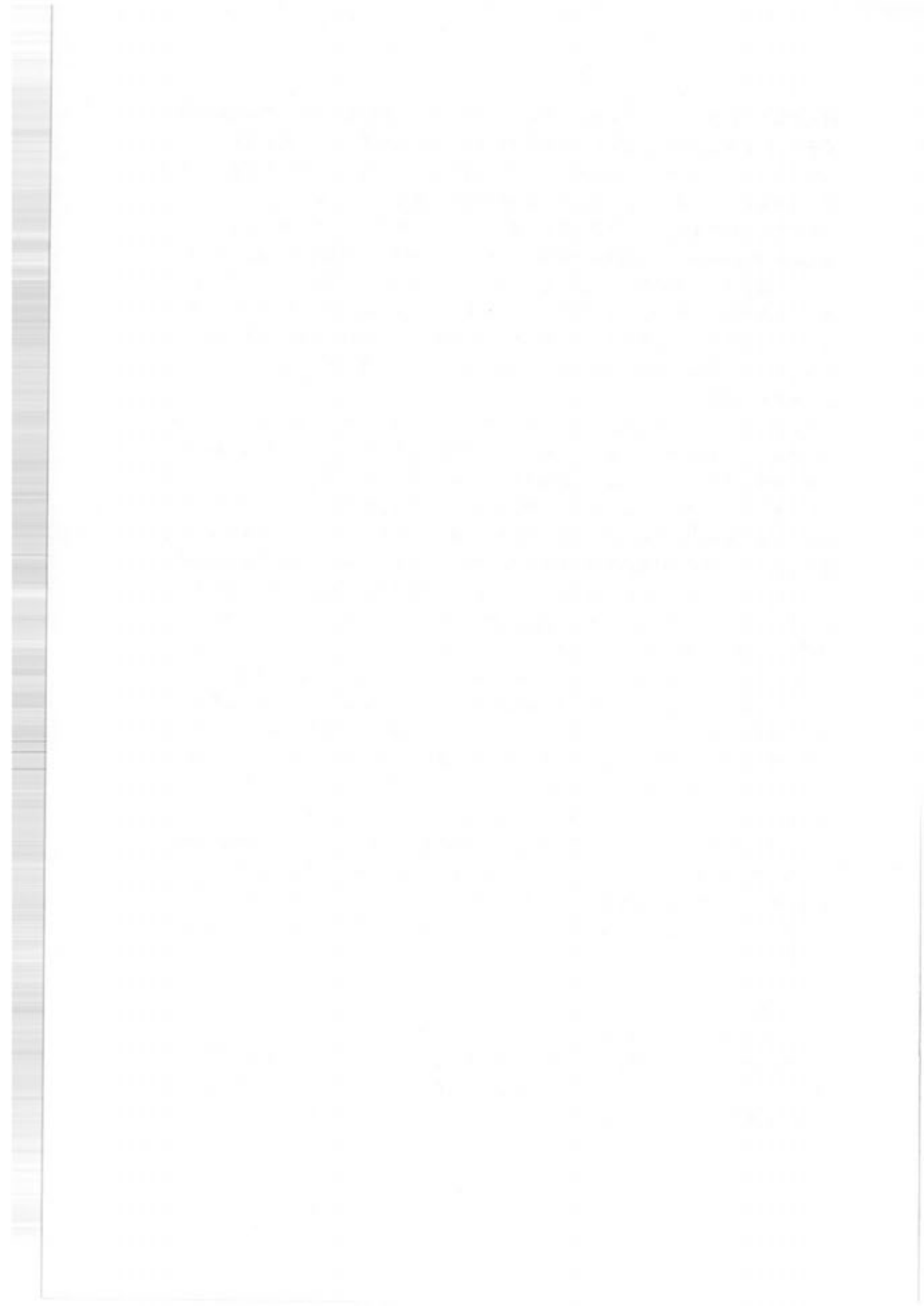
47年度の『研究集録』には発表はなく、48年には田村と奥が「高一教科書にあらわれた Idiomatic Expressions の指導上の問題点」と題して、教科書より採録した idioms のなかから、生徒にとって理解があいまいになるものをとりあげ、説明を加えた。千種は「日・英語の表現比較—日本文学とその英訳から—」と題して、Seidensticker などによって英訳された川端康成、三島由紀夫などの作品を原文と比較し、日常的な表現で英訳しにくいものとか、和英辞典に載っていないような表現をとりあげ、整理・研究した。

## 8. 昭和49～50年

昭和49年の第22回教育研究会の研究主題は「教室におけるリーダーの扱い方について」で、東元邦夫が高Ⅰの研究授業を、千種が高Ⅲの研究授業を行ない、下長が研究主題と同じ題の研究発表を行なった。高Ⅰの研究授業は教材の内容の把握に重点がおかれた。したがって単語のニュアンスを知るために一緒に辞書を引いたり、「何故こういう気持ちになったのか」とか、「sense of loss とあるが、何を失った感じなのか」というような質問の多い授業であった。高Ⅲの研究授業は、程度の高い内容にもかかわらず、できるだけ英語を使って行なわれた。特に、前時の復習として行なわれた英問英答は、英語そのものを覚えていなければ答えられないものが多く、既習の箇所を暗記してしまうくらい何回も音読する習慣をつけさせるのによい方法であることがよく分った。研究発表は、下長、千種、東元の共同研究を下長が代表して発表したもので、Ⅰ、はじめに、Ⅱ、Speaking と Hearing について、Ⅲ、Reading について、Ⅳ、授業の実際、Ⅴ、資料に分かれている。Ⅱでは、単なる単語の発音ばかりでなく、stress や intonation その他の重要性を指摘した。Ⅲでは、生徒の知的水準にふさわしい内容の教材の必要性を説き、英英辞典を使用させる際の留意点をあげ、生徒の理解しにくい英語らしい表現や語法の説明を工夫することが教師の主要な仕事の一つであるとしてその実例がいくつか示された。Ⅴには、一課が終る毎に生徒に配られている例文のプリントと、熊本謙二郎・喜安礎太郎共篇「ナショナル第四読本研究」（研究社辞典部発行）の一部が収められている。尚、この研究発表は、この研究会のあった前の月に奈良女子大学附属高等学校で行なわれた全国国立大学附属学校連盟高等学校部会の教育研究発表会において同じ3名が発表した研究と同じもので、本校の『研究集録』第17集に収録されている。

## § 4 む す び

校内研究会の記録を資料の中心として、英語科のこれまでの歩みを振り返ってみて、我々が再確認したことは「着実さ」である。言い換えると、「読解力を、教科書を大事にしながらかつて行く」ということである。そしてこの「着実さ」が風化せぬよう、これからの歩みも進めて行こうと考えている。





『附中新聞』創刊号（昭和23年1月30日）  
 黨半紙・孔版印刷・三色刷り・2ページ

# 第3部 回顧と展望

〔創刊号の記事から—祝祭日〕

祝祭日の改変が考えられているがそれは別として第1軍団司令部から発せられた覚書によって国旗を掲げることが出来るのは次の通りである。

- 1月1日 新年祝日
- 1月3日 天皇新年祭
- 2月11日 神武天皇即位記念祭
- 3月6日 皇后御誕生日
- 3月21日 春分祭
- 4月3日 神武天皇祭
- 4月29日 天長節
- 9月24日 秋季皇霊祭
- 10月17日 收穫感謝祭
- 11月3日 明治天皇御誕生日
- 11月23日 收穫の祝日
- 12月25日 大正天皇祭

『附高新聞』創刊号（昭和31年7月17日）  
 タブロイド・送版印刷・4ページ

〔創刊号の記事から—クラブ予算〕

支出	
新聞代	5,000円
予備費	2,052円
行事事務費	
体育部	14,705円
文化部	8,021円
総計	29,778円
文化部決定額	
総務費	7000円
音楽部	1,000円
新聞部	9200円
放送部	7140円
文芸部	7000円
造形部	6520円
社務部	6500円
英弁論部	6350円
弁論部	6000円
科学部	6000円
演劇部	5700円
家庭部	2800円
文化総計	8,021円
体育部決定額	
共通費	2,000円
共進球部	2,110円
蹴球部	1,960円
野球部	1,350円
庭球部	1,320円
橋部	1,250円
バドミントン部	1,250円
排球部	1,1250円
陸上部	1,0900円
卓球部	7500円
柔道部	5000円
体育総計	14,7050円

夏休みを前にして

夏休みの生活

鳥井敬宜

陸上部大活躍

中野記雄

三十万円の配分

学生部クラブ予算案



## 草創期の回顧

阪倉 清太郎

創立当初の5年間の教育活動や、研究活動についての思い出を、思いつくままに記します。

### (1) 教育理念について

わが国の教育理念は、言うまでもなく民主主義の精神によって支えられ、具体的には、憲法、教育基本法、や学校教育法に条文として示されていますが、草創当時、特に本校では、世界平和につながる正しい愛国心、民族意識を、折に触れ生徒に認識させ、啓培しなければならないと、切に考えるようになり、先生間の話題にあがるようになっていた。やがて、それが、大きくクローズアップされて来て本校の教育方針の総括的前文に取り入れられたのでした。しかも生徒を主体とした信条としての表現にされ、日々の学習も、将来の人生設計もこの信条が活かされることを願った祈りの文でもあります。国家の繁栄、民族の繁栄と世界の人類の福祉に貢献するために将来、職業を通じて自分の特性と能力を最大限に発揮しよう、そこに日々の中学生生活が、学習活動があるのだ、という自覚を持つとうというのがねらいでありました。

さらに、便宜上、個人生活、家庭生活、社会生活、職業生活に分け、指導上強調したい願いを重点的にあげられたことを記憶しています。個人生活、乃至は個人的発達では、知的発達に偏せず、豊かな情操の持主であり、強固な実践力を身につけるよう願ったものでした。

家庭生活にあつては特に祖先崇拝、教養を意図し、「長上を敬愛すること」と勢いっぱいの表現がとられたものでした。教育方針については以上のようなことがらが思い起こされます。

### (2) 課外教育について

文化祭と呼んでいたか学芸会と呼んでいたかは記憶に定かでないが、多彩なプログラムが生まれ、生徒諸君と一緒にあって、若い情熱を共に燃やしたことが思い出される。体育行事では、綿密な計画のもとに、休日を利用し、郊外の小学校の校舎を拜借して、大挙してマラソンのコースに健脚を競ったことが、今もその壮観さが、眼に浮んで来ます。マラソンの準備の鍛錬に、数日間大学校舎の周囲を早朝から寒気をついで何周かしたことを記憶しています。何周かするうちに、全員真赤に頬をほてらしながら馳けたものでした。

修学旅行については、少し派手ではないかと思われたが、若い日の思い出となるようになりかなり豪華なスケジュールが生まれ、修学の趣旨も十分に活かされるように実施されたものです。生徒諸君の楽しそうな雰意気に、引率の私も若き日の学生気分に戻ったような思いでした。卒業生諸君も、今も折に触れ思い出しているでしょう。

水泳訓練では、日本海の美しい海、天の橋立や、淡路島に出掛けたことが思い出される。修学旅行や水泳訓練には、いつもP、T、Aの役員の方皆さんにお世話になりました。

た。特に水泳訓練には、P.T.Aの方々にお世話になり、交代で泊りがけでお出かけいただき、看護に医療に当たってくださったものである。体育クラブの合宿練習も、他校に魁けて、本校では実施したかに記憶しています。

生徒会活動も活発でありました。役員選挙の立候補演説、候補者推薦演説も堂に入っていたことを覚えています。生徒会の規定も、全員でその改正条文を討議したものでした。運営は自主的にというのが、スローガンで早くから軌道に乗っていました。購買部、新聞部、放送部の奉仕活動には、見るべきものがあり、その労をねぎらいたい気持ちがいっつも一杯であったことが思い出される。

クラブ活動も熱心で、他校試合に遠征して、帰途ジュースで乾杯したことも記憶に新たです。このクラブ活動は今も盛で、かつての伝統が継がれているように聞いています。

- (3) 教育実習については、当時の実習生の熱心であったことを思い出します。よく指導案を練り、指導に新鮮味のある創意工夫を凝らして展開に努めたことを思い出します。授業の批評会はお互に先生たちにとってはひとつの楽しみでもあり、使命感に溢れていたようでした。実習成績の評価も、先生たちで、その項目をあれこれと工夫したものでした。当初、付属中以外に、大阪市内と市外に各校ずつ教育実習指定校が設けられ、市内では、大阪市立天王寺中学校、府下では町立高鷲中学校が指定されました。

高鷲中学校には事前に、北川学長以下の関係者が高鷲中学を訪問、折衝し私も随行させてもらったことを記憶しています。今はその指定校制度も廃せられていることでしょう。

- (4) 教育研究活動については本校の使命上絶えず継続しなければならず、創立第二年に第一回の発表会を開催したように記憶しています。確か理論篇と実際篇に分けて研究発表雑誌を編集したように思う。その一冊を今も私は本箱に保存しています。

新教育指針に基づいてあらゆる教育の管理と運営のために組織作りを行い、その実践に励んだ毎日でした。当時、生徒の自主活動が特に強調され、個性尊重、特性の伸長を目指して、教育指導が行われようとする思潮が教育界を風靡していました。その流れの中で、新教育指針を大綱にして、ガイダンス理論、新、旧教育原理、青年心理、教育統計等々の粋を集めて、本校独自の教育システムを作ろうと意図していたようです。

単元学習からコアカリキュラムとカリキュラム理論が一時脚光を浴びたことがありました。しかし、奇をてらわず、普遍性のある中庸なものをと志し、創意を凝らしたものでした。P.T.Aの組織と運営、ホーム・ルームの運営、行動観察、カリキュラムの編成等もそうでした。

定例の研究発表会以外に、近畿の新教育研究大会の他の研究大会があると、よく本校に発表を依頼されたりしたものです。小生も一度近畿の研究大会に発表者として参加したことがあった。「アメリカに於ける数学科単元学習について」と題して要項を印刷して発表をしたものです。大学の図書室にアメリカに於ける単元学習についての原書があり、第一頁から辞書を片手に訳して要約したものでした。その後、生活に即した単元を構成して、実際の学習に当たっていたが、やがて数学科については、疑問を持ち始め、系統学習の必要性を痛感するようになっていた。アメリカの単元学習につい

ては、その由来について、上記の書物には次のように書かれていた。それは、アメリカの軍部の要求もあつたことだという。新しい兵士が入隊して、必要な数学を駆使しなければならないような必要が生じた場合、青年は何の数学の能力も身につけていないことが分かり、学校教育の在り方を批判し、代数、幾何、三角と分野別の束ねた学習「Banded Learning」をさせるからだと結論づけて、生活単元学習を要求したそうです。アメリカの数学教育界では、以前から系統学習派と、生活単元学習派と長い間争っていたようですが、この軍部の要求から生活単元学習に軍配が上ったようです。なお、生活単元学習を理論づけて、その長所を次のようにあげていました。

①「全体と部分のセオリ」(Whole and part theory)

物の認識には全貌を知ってから部分を観察するとき理解が容易である、例えば自動車の部品を列べて見ても自動車の全体が頭に浮ばないのと同じだと書かれていました。数学の学習に限らず、生活単元の長所でもあるでしょう。

②「間隔をおいた学習のセオリ」(Spaced Learnig theory)

在来の束ねた学習でなく、時間をおいて何度も何度も繰り返してこそ身につくというのである。技能定着の練習曲線のグラフがこれをよく物語っている。

③「必要感のセオリ」(Need theory) とでもいうのでしょうか、今定かには記憶していませんが、そのような意味でした。たしかに生活上必要感を起しての学習は、学習意欲も旺盛で身につつきやすいでしょう。文部省も、各府県代表の受講生を集めて、各教科の単元学習の在り方の講習会を開き、各府県で伝達講習をした程でした。当分の間文部省の方針でもあり、実践したものです。

以上、主な理論づけであったように覚えていますが、時間の不足もあり、数学的能力は伸び悩みました。二倍の時間をかけて、単元学習の後、十分な時間をかけて、系統的な学習を併行させればよかったですでしょうが。

たまたま、日本数学教育会の全国大会が、近畿ブロックで開催され、私が何かのテーマで発表しなければならなくなり、大阪教育大学の講堂で、「数学科単元学習の反省」という題で、系統学習の必要性をデーターを示して発表しました。

要約して言いますと、生徒の I、Q と数学の学習成績との相関係数を求めて、係数の値の小さいのを示し、単元学習の結果は、生徒の知能がフルに単元学習では発揮され難いと結論づけたわけです。今から思うと、断定するには、あまりにも、端的な決論づけで早計であったと反省していますが、若さに委せて、発表したものでした。しかし当時、国語、理科の成績と I、Q との相関係数は書物にでていましたが、数学については、私の調べた範囲では資料が無く、国語、理科のそれと比較したのでした。

その後、私が教育委員会に勤めた年でしたか、文部省から、系統学習を重んじるよう、指示文が出ました。

単元学習ならずとも、系統的学習をするに当って、教材を生活化して必要性を感じさせ、「全体と部分のセオリ」や「間隔をおいた学習のセオリ」の趣旨も、活かして指導するよう、工夫をすればよいのではないかと考えていました。

実は、この単元学習の大阪府の伝達講習で、単元構成を私が、実際授業を佐崎教官が行い、伝達講習のお手伝いをしたことがありました。遠い昔の話です。

25年前になりますかな。兎に角、在職の五年間は楽しい楽しい明け暮れの連続でした。

(初代 中学校教頭)

## 草創のころの思い出

成田重明

創立以来30年にもなろうとする附属中学校で、私が在職したのは、最初のわずか5年間であった。現在の厳然たる存在に比して、そんな時期もあったのかと思われるだろうが私が最も強く印象に残している草創のころの苦しみを書くことにする。

昭和22年4月から新しい学制によって新制中学が設けられることになり、わが第一師範学校にも附属中学校が誕生することとなった。それに先だち、毎日のように設立委員会が開かれ、校舎の問題、職員組織、生徒募集のことなど協議が重ねられた。その結果、附属小学校の6年卒業者と当時高等1年に在学するものを主体として、他校から20名余りの優秀生を迎えること。校舎の新設は間にあわないので附属小学校の3階3教室を借りること。専任教官として、佐野敏夫氏、横山隆吉氏と私の3人で発足することになり、主事(校長)は辨原附属小学校主事が兼任された。1学期おくれて阪倉清太郎氏が教頭として来任された。

開校の準備も遅れて、4月の20日過ぎてから漸く開校式をかねて入学式が行なわれたように記憶している。終戦後の混乱からまだ日も浅い上に、なにしろ新しい制度だけに教育内容も全く確立されておらず、もちろん教科書とてもない。旧制中学になぞらえたような日々の教育活動も暗中摸索、混沌としていた。それでも4人の教官が主軸となり、師範学校や他校から多くの時間講師の援助を受けつつ、次々と出される法令や通達をたどりながら、いわゆる新しい教育へ向かって懸命に努力して行った。思えば第1回生の諸君にはまことに迷惑せんばんなことであつたかと思う。何よりも困ったことは、物資不足とインフレの折だけに、新しい学校には鉛筆1本紙1枚の事務用品から、教材教具のたぐいにいたるまで何ひとつない状態では、たちまち明日の授業をどうするかということがいつも当時の私たちをなやませていた。

こうしてとにかく無我夢中の1年間は過ぎて行つたが、次の年には新1年3学級を迎えるための収容対策をどうするかということである。資金はなし。新校舎を建てるにも、土地を求めるにも、すべてが資金の問題に尽きる。またしても新しい苦悩の道である。PTAを交えて連日連夜会議が持たれた。あげくのはて、旧師範学校を改造することに話が落ちつき、それを改修する資金として、保護者から金を借りる。それでもなお追いつかない。そこで、中之島中央公会堂を借りて歌謡曲大会を催し、その収益を校舎改装の資金に充てることになった。大会は2日間にわたって当時としては大入満員、かなりの入場料があつて成功したかにみえたが、たちまち横槍がはいつて折角の骨折しも水の泡と帰ってしまったのである。しかし、みんなのひたむきな一念は、漸く実り、曲りなりにも第2年目からは現在位置のほとりに附属天王寺中学校の看板を掲げることができた。その時はほんとうにうれしかった。専任教官も増員され、時間講師も多くなって職員室にもぎやかになった。引き続いて校舎の拡張工事も行なわれていった。そうして生徒の活動も活気をおびてきた



のである。

苦しかった5年間の附属中学校勤務も、私が姿を消すころには、9学級350人の優秀な生徒を有し、大阪ではもちろん、近府県にも有名な中学校に成長し、年々入学志願者の激増するりっぱな附属中学校となっていた。4半世紀を過ぎた今では、すべてが美しい思い出となってしまった。ただ私が最後に付け加えておきたいことは、わけてもこの創設に献身的な努力を注いでくださった方々の功績に深い敬意と感謝を捧げ、今後末長く附属天王寺中学校のご発展を念願してやみません。

(第二代 中学校教頭)

## 創立30年に寄せて

佐野敏夫

### はじめに

私の附中生活は、昭和22年4月附中創立の当初から、30年12月大阪市へ転出するまでの約9ケ年ですが、この期間は、私の約40年に近い教員生活を通じて、同一校での勤務年数としては最も長いばかりでなく、年令的には29～37才で血氣盛んなれば、いわゆる産みの悩みや育ちの苦勞といったものは眼中に無く、新生の意気に燃え、教育ひと筋に全力投球ができ、少しの悔いもなく、最も充実した正に古きよき時代でした。従って附中を去って20余年になる現在でも、なつかしの古巣といった感懐は依然変わらず、思い出のつきることのない私なのです。

このたび附中創立30年の記念誌に寄稿を求められましたので、在職当時の印象や、教育実践の一端などをとりまぜて回想記を綴り、責めを果たさせて頂くことにします。

### 学校づくり

1. 人づくり 戦後の学制改革により、いわゆる6・3・3・4制の一環として、新しく3年制の中学校(当時は略して新制と呼ばれていました)が誕生したのは、昭和22年4月でした。22年といえば戦後日なお浅く、ものの不自由は、極論すれば、<sup>1</sup>ないないづくしの時代であり、近くの学校では、人的・物的両面の条件整備がはかどらず、ために正規の授業も、スムーズには実施できず、生徒は自習を余儀なくされるままに、運動場で野球をして過ごす時間が多くなり、<sup>2</sup>新制中、野球ばかりがうまくなり、<sup>3</sup>といった狂句が、当時多くの人の口にのぼったことでした。

しかし附中の場合は、生徒は1年生だけの3学級で、専任教官は僅か3人だけでしたが、本校から多くの講師の応援を得、おかげで<sup>4</sup>人づくりの方は、最初から、ほとんど支障なく、正常ダイヤどおり行われました。そしてこのことが、保護者に安心感と信頼感を与えた理由の最たるものであったと信じています。

2. 物づくり 附中は附小で呱呱の声をあげ、しばらくは附小で間借生活をし、やがて、本校が寄宿舎として使っていた古い木造校舎を改修し専用校舎ができるに及んで、本家か

ら独立したわけですが、改修費や内部整備費はもちろん、学生に対し新しい寄宿舍（現在の青松寮）を購入して提供するための経費負担等で、保護者に多大の犠牲を払って頂き、資金調達の一助にと、中央公会堂を3日間も借り切って、<sup>2</sup>歌と音楽のグレートショウ<sup>3</sup>を催し（当時としては文字どおり破天荒の事業であったというも過言ではないと思います）が行われたことなどは、特筆大書に値するものといえましょう。

それでも分家であるわが附中の状況は、本家の附小に比べると、全てがお粗末でした。そこで私どもは、生徒に対しては「いれものよりも中味が大切」と強調し、同僚の間では「教育は人なり」と自らに鞭あて、不利な条件を克服してベストをつくしたつもりです。

やがて本校の東隣接地を買収し、1期工事として現在の北館ができました。今はかなりくすけていますが、古色蒼然とした木造校舎のイメージからすれば、スマートなホテルといった感じで、特に便所は教室などに比べ、坪あたりの建築費が一ばん高かったというだけに<sup>4</sup>W. C.とか<sup>5</sup>TOILET<sup>6</sup>というよりは、<sup>7</sup>COMFORTABLE STATION<sup>8</sup>の呼称がぴったりするほどデラックスでした。

その後も増築工事が長年にわたり続けられ、今日みられるような姿にまで整備充実されるわけですが、いわば<sup>9</sup>無から有を、産み出すといった創立当初の<sup>10</sup>物づくり<sup>11</sup>は並大抵ではありませんでした。

3. 校風づくり 新しく誕生した学校にとり、望ましい校風の形式ということも、重要な課題でありました。そして附中の場合、集約すれば<sup>12</sup>質実剛健<sup>13</sup>ということと、<sup>14</sup>家庭的な学校<sup>15</sup>、というのが、2つの大きな柱になっていたようですが、これは次のような事情にもよるのです。

すなわち、戦前の附小に対して「温室育ち」とか「はでだ」とかの批判の声があり、公立学校と比べ、特別視された向きがありましたので、まず<sup>16</sup>質実剛健<sup>17</sup>；でいこうということになり、髪は丸刈り、カバンは肩からの地味なもの、防寒具の使用は認めない、そして鍛錬的な行事も多く実施しました。

いまひとつの<sup>18</sup>家庭的な学校<sup>19</sup>、というのは、教官・生徒の数が少なく、家庭的なムードをかもし出すに適しており、そればかりでなく、古い学校にありがちなきたりや、むずかしい伝統に制約されることもなく、全て新しいものを創造していくのに、都合がよかったことも事実でした。

しかもこうした校風はまず職員室からということで、誇張的な表現が許されるならば、そのかみ英本国を逃れてアメリカ大陸へ渡り、自由と平等の立場で苦楽をともにしつつ、新天地を開拓したメイフラワー号の人々の心もて、教官相互のよき人間関係の成立保持に努め、それが教師と生徒、教師と保護者、生徒相互の間に及び、学校即家庭（SCHOOL HOME ROOM）学級即家庭（CLASS HOME ROOM）といった姿がみられるようにまでなったものと私は自負しています。

## H. R.（ホーム・ルーム）と誕生会

1. H. R. 戦後の教育改革は、占領政策の一環として、事前にじゅうぶんの検討とする余裕もないままに強行されましたので、かなりアメリカナイズし、日本の実情に適合しない部分があったことは否定できない事実でした。H. R. もそのひとつですが、アメリカの中学校では、教科は多く選択別で、生徒は毎時バラバラに分かれて教室を移動するので、

教科以外のいろいろな問題についてクラスとしてまとまって学習する「場」が必要となつて生まれたシステムがH. R. にほかなりません。

しかしわが国の場合は、ほとんどが学級単位でまとまった学習をしていますので、特にH. R. の名称を使わなくてもという反省から、昭和33年の学習指導要領改正を機に、H. R. の名称が消え、学級会というものにかわつたようです。

さて戦後、余暇の善用ということが、これまたアメリカの影響を受け、クローズアップされ、初期の社会科にも独立した単元として、その内容にふくまれていましたが、H. R. でも、いわゆるレクリエーションとしてとりあげられて、最も安易な方法として、多くはスポーツ（球技など）が行われていたようです。

2. 誕生会 幼稚園や小学校でもよく行われていますが私の場合は、単なるお楽しみ番組としてでなく、下記のような趣旨で中学生にふさわしいものを考えました。

#### 誕生会の次第

- ① 自己を見つめ、自己の過去・現在を理解し、さらに将来を考えるチャンスとする。
- ② 自己の今日あるのは、両親をはじめ、師友その他多くの人のおかげであることを考えさせ、特に孝心涵養の一助とする。
- ③ 交歓を通じて友情をあたため、よりよき人間関係の形成により、学級づくりの一助とする。
- ④ みんなで共に楽しむテクニックと社交的な態度を習得させる。

- 1 開会のことば（係）
- 2 誕生者の紹介（学級委員長）
- 3 学級担任のお祝いのことば
- 4 誕生会へのプレゼント
- 5 誕生者代表のお礼のことば
- 6 誕生者のテーブルスピーチ
- 7 歓談
- 8 余興（歌やクイズなど）
- 9 閉会のことば（係）

さて、その方法は右のとおりですが、

- ① 担任の祝辞には前記②をふくめて強調しました。
- ② 誕生者へのプレゼントは買ったものでなく、自作のものを主にしましたが、時には福引などの趣向も加味しました。
- ③ 誕生者のテーブルスピーチは「語る自叙伝」を原則にしました。
- ④ 歓談は、スピーチに応じて、誕生者にそれぞれ質問（趣味、性格の長短、名前の意味、将来の希望など）や註文を率直に浴びせかけるといった具合に。

さて、こうした誕生会は生徒たちに大いにうけ、当時はまだテレビの備付はありませんでしたので、ラジオによる実況放送を他学級へも流したこともありました。

#### ペーパー・テストに対する配慮と試み

1. ペーパー・テストと生徒 ペーパー・テスト（以下略してテストとします）は生徒につきものながら、これほどゆううつなものはなく、もしテストがなければ、学校生活はどんなに楽しいことかと思うのが、一般生徒の本音といえるでしょう。

ところで、テストに対する生徒の反応としては、① 強い者と弱い者あるいは恐れる者、② 熱心な者と不熱心な者あるいは無関心な者、③ 周到な準備をする者といわゆる一夜漬けで臨む者、④ やまをかける者、⑤ カンニングを考える者等さまざまであります。また答案用紙について考えてみますと、① 早合点をしてミスをする者、② 時間の配分を考えず、またはスローで時間切れとなり、全然手のつけられない問題が残る者、③ 書

いた後点検をしない者、④ 名前などを書き忘れる者、⑤ 空らんや裏面に落書きをはでにしている者（時には上手なものもある）等これまたいろいろです。

さて、テストの教育的意義とか目的はさておき、テストによって学力が確かなものになり、また充実伸長することも事実なので、私は生徒に対し、① テストはいわば力試しだから、点取虫になってはいけませんが、実力がじゅうぶん発揮できるように。② そのためには事前の準備をしっかりと。③ 一夜漬けややまかけは禁物。④ カニングは生徒にとり最大の罪悪であり、自殺行為と同じである。⑤ テストは恐れず、あなどらず、ベストをつくして切り抜けよ。⑥ そしてテストは平気、テストが待たれる、テストは楽しいということになれば最高（ここでおことわりしておきますが、私は決してテスト礼讃者、テスト第一主義者ではありません）と説きました。

2. テストの予告 私はテストは必ずしも苦手ではありませんでしたが、中学時代不意試験をされていやな思いをした体験から、必ず予告をすることにしていました。これにより生徒は余裕のある事前準備ができ、安定した気分でテストに臨める利点があると思います。またテストの日の予告だけでなく、範囲はもちろん、重点箇所を、時には問題そのものをも一部予告しました。これは生徒の効率的学習を考慮しての故です。

3. 問題作成上の留意点 ① 難易の程度を適当に配分し、成績の低い生徒でも幾らかは正解ができるように、従って0点をとる者がないように、② 出題形式を多様化し、③ 特に論文形式のものは少くとも1問は用意する。④ ○×式については、まぐれあたりを排し、また答を機械的に導き出せることのないように、⑤ 各問ごとの配点を明示（問題用紙に印刷）する等がその主なものです。

4. 採点 テストは生徒にとりゆううつなものであると同様に、その採点はどの教師にとってもゆううつな仕事であることには変わりないと思われます。しかし答案は生徒の努力の結晶であり、魂のこもった作品でもあります。また採点の結果が悪ければ、その責任の半分は教師にもあるわけですから、1枚でもいい加減には扱えない貴重品でもあります。従って私はいつも答案に祈る思いで採点にあたりました。

さて採点の実施について列举しますと、① 採点はできるだけ早く、正確に、② 各問ごとの得点を記入し誤った箇所を明示する。③ 答案用紙には、合計記入欄と生徒の予想点記入欄の数字を印刷しておき、両者の数字が一致した場合、予め生徒との約束に従って、おまけをつける。これは答案をしたための後の点検を確実にさせたいためです。④ 論文形式の問題では、特にまとめ方がすぐれた場合、その程度に応じて○・◎・◎の丸をつけ、それぞれ1点・2点・3点をおまけする。⑤ おまけとは逆に、答案を反対に提出したり、氏名・学年組・番号等の記入もれの場合は減点をする。⑥ 生徒のそれぞれに応じて、激励称讃・忠告等の寸評を記入する。

5. 答案の返戻と事後指導 答案の返戻はできるだけ早くし、その際は、問題用紙に正解を記入したものを用意して解説講評するわけですが、時によっては間違った箇所を訂正して提出させる。その節、保護者の捺印を受けるという扱いをしたこともありました。あるいは同一テストで再度実施する試みもしました。

以上がテストについて私の配慮した点や試みであります。苦い薬も飲ませ方、あるいは嫌いなたべものも調理の工夫次第ということもあり、それと同じく、テストもあの手この手と工夫をすれば、生徒はより関心を持ち、より、誠意を示すようになるのではないで

しょうか、そして実際、私にとり今もって忘れられない印象は、附中2年生の生徒の中で、たったひとりだけですが、ある女生徒から「テストが楽しく待たれる思いがするようになった」と告白された時のことです。

## おわりに

附中は私にとり文字どおりマイ・ホームでした。教師・生徒・保護者の三位一体の姿が具現し、よき人間関係に支えられてのあけくれは、正に「日々是好日」でした。

さて私は「出合を大切に、縁をいかす」ということを生活信条にしていますが、附中で結ばれた同僚・生徒・保護者との縁は現在も続き、去る者は日にうとしとは逆に、附中を離れてからの方が縁が深くなったケースもあり、個人としてだけでなく家庭同志のおつきあいにまで発展したケースや、月下氷人の大役をつとめさせた頂いたことも幾組かあります。年賀状だけでなく、折にふれての消息や心温まる思いのする時候あいさつ状などで私の文箱はふくれるばかりで、本当にうれしいことです。

当時の教え児たちは今はすでに32・3才～41・2才のパパ、ママになり、その子弟の入学相談に預るようにもなりましたが、社会人、職業人として、出藍のほまれも高く、各方面で健在ぶりを発揮されていることどもを見聞するにつけても頼母しい限りであります。

私も今年は年男ながら6月には逐に還暦を迎え、来年3月には後進に道を譲って勇退をすることになります。幸い元気ですので終わりを全うしてと思っておりますので、今後ともよろしくご交誼のほどお願い申し上げる次第であります。

最後に、母校のますますのご発展と、教官各位の不断のご研鑽を期待し、また卒業生の方々には中学時代に築かれた美しい友垣を、いついつまでも温存され、ご活躍されんことをお祈りしベンをおきます。

(第三代 中学校教頭 現大阪市立住吉第一中学校長)



## 回 想

田 中 義 真

附属学校は、教育の実証的研究校として、あるいは教育実習校としての使命をもってありますが、しかし、あずかっている生徒たちにより充実した教育をし、生涯の基礎となる心身の調和的発展をはかることをおろそかにできません。附属天王寺中学校では、ありがたいことに、中高6か年一貫教育のよさを発揮して、クラブ活動を活発にすることができましたし、さまざまな宿泊を伴った行事をもつことができました。今から思い起こすとなつかしく、また、たとえようもなくうらやましく感じられます。

### ◇臨海学舎

いまは、どうなっているか知りませんが、私の在任していたころは、毎年全校生徒が臨海学習に出かけました。はじめのころは、臨海の宿舎を、毎年同じ場所に設営するよりも、3年間にいろいろの土地を知り、見聞を広めることも意義があらうと、洲本・二見・天の橋立などを順繰りにしていました。去年は洲本、今年は伊勢、そして来年は若狭と交代して出かけて行きました。生徒たちには有難いことでしたが、三年に一度だと旅館の都合で日程がうまくあわずやむを得ず、宿舎を固定するようになりました。しかしここがもつともよいという場所もなく、ずいぶんあちらこちらと出かけました。三熊山のふもとの洲本の海はよかったが、だんだんとよごれてしまいました。二見の浜は、旅館の施設はよかったが、砂浜が少なく石がごろごろしていて、海水浴場としてはあまり芳ばしくありません。天の橋立は、成相山へ登ったり、文珠さんへお参りしたり、さすがに風景はよかったが、くらげが多くて困りました。白良の浜は、遠く連なる白砂のみぎわはきれいでしたが、松が少なく日影がなくて困りました。若狭の美浜の海は、浜は少しせまかったが、海はまことに美しい。ほんとうに、あちこちと行ったものです。遠泳もにぎにぎしく行われました。参加者の数も多く、遠泳の隊列を組むのに、夜遅くまで打ち合わせが、つづけられました。宿舎での生徒たちの生活は、若さをほとばしらせる楽しいものであったに違いないと思います。友情と連帯の輪が、おのずからとひろげられて行ったことでしょう。プールはなかったけれども、3年間の臨海学舎の水泳訓練はそれを補うに余りあるものがあったと思われる。

### ◇登山行事

毎年、一年生と二年生の希望者で、夏休みに登山行事が計画されました。乗鞍から上高地方面と、富士登山とを一年おきに交互に出かけて行きました。しかし、この行事も、希望者が年々ふえて行ったので、二年生だけ、富士登山をするようになりました。飛弾の高山のお寺を借りて一泊し、みやげもの屋ひとつさえない中の湯温泉の素朴な山の気にひたり、山肌のもえるような焼岳登山——この上高地方面の登山行事も、なかなか味わいがありました。しかし、登山を一か所ということになれば、やっぱり富士登山の方が意義があるのではないかということになって、この行事が続けてもたれることになったのです。新幹線も開通していない当時は、大阪を夜たつて、富士宮で仮眠し、浅間神社に参り、バス

も二合目ぐらいの所までしか行っていなかったで、そのあたりから登りはじめました。三合目には優雅な名前の「お花島ホテル」があり、そこで泊まり、さらに、八合目の山小屋で夜を過ごしました。そして未明に山小屋を出て、頂上でご来迎を仰ぎ、砂走りを一気に御殿場口までおり、迎えるバスに乗って河口湖で汗を流すというコースをとっていました。ドラム罐の風呂に入り、シンだらけの飯を食べ、センペイトンに二人ずつ雑魚寝しても、富士の頂上まで登った満足感は、一人一人が味わったものです。「六根清浄、お山は晴天」の生徒たちの時には明るく時には疲れはてた声が、耳に残っています。毎年、この行事を中心になって企画し推進していただいた体育の保田先生に、富士登山十回記念のトロフィーを、感謝をこめてPTAから、大阪駅頭で渡されたことも思い出されます。

こんなことを書き綴っておれば、きりがありません。修学旅行のことも書かねばならないでしょうし、冬の耐寒訓練の思い出も、数々あります。先生と生徒、そしてまた生徒同志が、励ましあい、語りあう機会が多ければ多いほど、人間としての成長が高められると信じています。教育とは希望を永遠に語りあうことであるとは、ある詩人のことばですが、語りあうためには、語りあう場が、自然な形で設定されなければならないと思います。ところが、ちかごろは、そうした場がだんだんとせばめられていく傾向にあります。まことに、さびしいことです。いろいろな原因はあろうかと思いますが、それには二つの理由が考えられます。

一つは費用がかさむということです。宿泊を伴ったさまざまな行事は、それだけ費用がかかることは、しごくあたりまえのことです。義務教育である以上、すべての生徒が参加し易い条件をつくっていかねばならないのも、当然のことです。しかし、ここで突き当たって、結局はやめてしまうことになってしまうのです。できるだけ経費をきりつめた形で、どのようにして、このような行事を計画するか——これがさしあたっての大事な課題ではないかと思っています。

いま一つの理由は、先生方の労働条件の問題がからんでいると思います。夏期休業中は自己研修するのが当然であるという考えの人もあります。どの学校でも、やらなければならないことではないのに、休み中に、しんどい行事はごめんだと考える人もあります。この考え方が支配的になると、いわゆるクラブ活動（正確には部活動）でさえも、敬遠されてしまい勝ちになります。なにをやるのが生徒たちの向上に役立つか、それをどのようにやっていけば、より効果をあげることができるか——これが専門職としての私どもの常に頭においておくべきことであろうと思います。教育の荒廃ということばが聞かれて久しくなりますが、教育の荒廃を救う道は、先生と生徒との触れあいの場、語りあう機会をひろげて行くことにあるのではないかと思っています。附属学校の教育精神のより充実することを期待し、さらに与えられた使命の達成に、継続的な研究と努力とを積み重ねられていくことを願ってやみません。

（第五代 中学校教頭 現大阪市立北稜中学校長）

## 附中誕生の思い出

佐崎良雄

附中30周年、附高20周年おめでとうございます。

記念事業の一環として記念誌を作成されること、まことに意義深いものがあると思う。旧職員の一人として、在職当時の思い出を寄稿するよう依頼されたが、ふり返ってみると創設当時の苦心談から現在のめざましい発展飛躍にいたるまで、萬感胸に迫るものがあり、今さらながらに、30年の歴史の重さがひしひしと感じられてならない。

現在の附中生諸君には、君たちの母校「大阪教育大学附属天王寺中学校」がどのようにして誕生し、どのようにして今日の実況に至ったのか、知らない人も多いことと思う。この記念すべき創立30周年にあたり、「附中誕生の思い出」を記録に残すことはきわめて意義あるものと思ひ、あえて筆をとった次第である。この記事が、附中生諸君に「母校の生い立ちの歴史」を紹介するものであるとともに、誇り高きわが附中の伝統の由来を物語り、輝かしい将来の発展への情熱の泉にもならんことを願うものである。

(1) 附中誕生 昭和22年4月、わが国の義務教育制度は大きく改変され、従来の小学校6か年の義務年限の上に新制度の中学校3か年を加え、さらに義務制度ではないが3か年の高校教育をのせて、いわゆる6・3・3制を実施することになった。それにともない旧制度の中学校、高等女学校などの中等学校はなくなり、新しく中学校、高等学校が誕生する運びとなったのである。

当時、現在の大阪教育大学天王寺分校は大阪第一師範学校と称していたが、教育実験実習学校として小学校を附属していった。これが現在の附属天王寺小学校である。6・3制の実施によって附小の卒業生も新制中学校へ進学することになったが、このころは敗戦直後の物資不足の時代であり、経済不安定の混乱期でもあったため、一般の新制中学校建設は容易なことではなかった。付近の小学校の教室を間借りするか、老朽の公共施設を改造するか、せいぜいバラック教室を急造するのが精いっぱいであった。もちろん、教材や教具もそろわず、ときには机やイスも、また教科書さえも手に入らないといったような有様で、安心して進学させることができなかつたのである。しかし、当時の混乱と人心の動揺のさ中であつて、附小の卒業生たちの進学問題を真剣に考える人は意外に少なく、まことに前途暗たんたるものがあつた。このとき、この重大なる事態に真向から取り組まれたのが、元学長の北川久五郎先生ならびに附中初代校長の榊原先生、附中教頭阪倉先生、附小教頭安井先生をはじめとする附小の先生方、保護者の皆さん方であつた。これらの方がたはいかにして新しい附属中学校をつくりあげようかと、資金問題、校舎、教室、教官確保の問題で、日夜涙ぐましい努力を続けられたのである。

伝え聞くところによると、当時の師範学校に附属中学校を設置するという事は難問題で、附属学校の教育は特権階級の教育であるとの見方から、附属学校廃止論さえもうぬんされたということで、文部省もきわめて否定的な態度を示したようである。その後、附属中学校設置の要望はしだいに全国的な運動となり、教員養成機関の設置基準の立場、ま



た教育実験実習学校の必要性から、陳情につぐ陳情の結果、ついに文部省の承認を得るに至った。しかし、文部省が承認したとはいえ、国家財政窮乏のことであり、予算措置の伴わない黙認程度の認め方であったため、校舎建設はおろか、学校創設に要する最小限の予算もなく、すべて地元負担ということになり、とりあえず附属小学校の教室を借用することによってやっと開校の運びとなったのである。

学級定員2学級、附小の卒業生に他の小学校からの応募者若干名を加えて生徒数わずかに80名余り、教官3名（成田、佐野、横山先生）、「大阪第一師範学校天王寺附属中学校」と墨書された木の香も新しく、昭和22年4月22日、ようやくにして晴れの開校式兼第1回入学式がささやかに挙行された。

(2) 附中揺籃期 敗戦直後の虚脱状態のさ中、難産のあげくようやくしてわが附中は誕生したのであるが、産みの苦しみが大きかっただけに、先生も生徒も、また保護者の皆さんもともに将来の発展に夢を託して、たがいに苦勞を分かちあい、助けあい、そのなごやかなふん囲気は実にうるわしいものであった。なにしろ、戦後の人心混乱の時代であっただけに、わが附中の温かい教育的環境は世の人びとの注目の的になった。

夏休みがすんで第2学期を迎えるころ、次年度の生徒収容対策が検討されるようになったが、附小に間借り生活をしたのはいうまでもなく急場の間に合わせのことで、当然附中の独立校舎の建設が問題になってきた。しかし、当時の社会情勢からして、新営工事の要望などおよびもつかないことであった。そこで目をつけたのが師範学校の寄宿舎であるが、これとても簡単に承認の得られようはずがなく、その折衝には筆舌につくし難い多大の苦心が払われたのである。しかも、ようやくにしてその許可を得たものの、こんどは改築工事資金捻出の方針はまったく見当がつかず、その具体的な対策を講ずるために、連日連夜教官会議や保護者会の委員会がもたれたが、ここに今日の常識ではとても考えられないような妙案が編み出されるにいたった。

「歌と音楽のグレートショー」、今でこそこのような催しは珍しくないが、当時の一流芸能人130名余りを中央公会堂に集めて、堂々3日間のロングランを企画したことは、まさに奇抜、当時の世相をしのばせる快挙ともいうべきであるが、その入場料を校舎建設の資金に充てようとした奇策もまた愉快である。このような努力の結晶ともいうべき浄財が附中建設費の一部にあてられたのであるが、その陰には当時の保護者の皆さんの並々ならぬご協力があったことを決して忘れてはならない。

昭和23年2月、第2期生の一般公募が行われたが、募集人員100名に対して、大阪府下はいうに及ばず、兵庫、奈良、和歌山からの志願もあり、応募者何と500有余名、まさに天下の難関というべきで、近隣の英才こそぞって一堂に会した観があった。これも焦土と化した国土の中で、これほど教育的情熱の高い中学校が他になかったからであるが、このような社会情勢にもかかわらず附中生としての誇りを高く掲げながら、附中で学び得る喜びを味わい、ひたすら学業に専念した当時の附中生諸君の精神的な強靱さは、今日の伝統的な「附中阿倍野が原精神」の根幹をなしているのではないだろうか。

(3) 附中充実期 4月になって新入の2期生を迎え、寄宿舎改造のボロ校舎とはいえ誰はばかりの事のない自分たちの校舎をもった生徒たちは、自信と希望に満ち溢れていた。明るい元気な生徒たちの声は窓々にあふれ、いかにも新生日本の未来を象徴するかのようで、まことにたのもしき限りであった。

学級数も1・2年と6学級に増加して賑やかになり、教官も新たに3名（沢田、佐崎、萩原）増となり、阪倉教頭のもと家族的な学校ができ上がったが、ここにもう一つどうしても解決しなければならない問題が残されていた。それは、多くの発育盛りの生徒たちが心身を鍛えるべき運動場を何とかつくってやりたいということであった。当時、大学の東の端から国鉄寺田町駅に至る区域は、戦時中の空爆により荒廃したまま放置されていたが、このあたり一帯に校舎に隣接した運動場をつくれば生徒たちのためにどんなにすばらしいことだろうかと考えられた。しかし、まとまったかなりの広い土地のことであり、資金の問題はいうに及ばず、地主さんとの交渉は大変なことであった。しかも、荒れはてた空地とはいえ、大学との境界線に水道管やガス管を敷設した市道が通っており、これを廃道にしない限り地続きにならないという悪条件があった。また、地所の一部には大阪府の土地があり、府や市に対する政治的な折衝は実にやっかいな問題であったが、これも多くの皆さんのご理解とご支援のおかげで解決し、ついに待望の運動場が造成されることになったのである。新しくできあがった運動場のまわりにしゃれた感じの金網が張りめぐらされ、整備された赤土の上を元気に走りまわる生徒たちの姿が見られるようになったのはそれから間もなくのことであった。

また、この新しい地所の登記、管理の面、校舎に転用した大学寄宿舎に代って購入した学生寮の所有権等のために、現在の附中・高の青松同窓会の母体、財団法人「青松会」が結成されたのもこのときのことである。

このようにして、附中は着々とその基礎を固め、昭和24年には第3期生が入学し、生徒総数450名余を数え、また増改築ながらも当時としては他に類のないデラックスな理科教室や家庭科教室、美術教室、工作教室、図書室なども完成し、その教育活動はいよいよ活発になったのである。また、教官陣容もさらに充実し、田村、安井のほか数名の教官が増員された。このころの学習活動は現在とは相当に異った形態のもので「中心学習」とよばれる新方式を採用していた。これは教科のわくをはずした、生活経験を中心とする単元学習である。教科書も参考書もなかった当時のことであるから、生徒にとっては教室における学習活動が学習のすべてであって、予習や復習がやりにくかった反面、実にのびのびと楽しい学習活動が展開されたのである。附中ではこのような新しい考え方による研究を早くからとりあげ、全国的にも先鞭をつけたのであるが、その年の教育研究発表会には数百名の参会者が集まり、「天王寺プランここにあり」とその名を天下にとどろかせたのである。

昭和25年3月20日、晴れの第1期生124名は多くの期待を背にうけてこの懐しの学び舎を巣立って行った。今にして思えば、幾多の辛苦を共になめ、また喜びを分けあった彼等には、底知れない粘り強さと何ものにも負けない不撓不屈の力強さがあったように思われるが、それにもまして何時までもつきることのない美しく深い友愛の情は、今日の附中精神の一つである「友情」を育んだのではなからうか。

(4) 附中発展期 昭和25年、この年はいろいろな意味で附中発展史上忘れることのできない思い出深い年であるが、中でも生徒定員の確定の件についてふれておかねばならない。この年、文部省は正式に1学年3学級150名と認めてくれた。実はそれまでの定員は2学級100名で、当時のことばでいう「やみ学級」によって内密に3学級編成をしていたわけであるが、これが天下晴れて公式の学校規模が承認されたのである。今にして思えば、まことに奇妙な話であるが、当時の社会情勢からすれば止むを得なかったことで、いかに戦

後の国家財政が窮迫していたかうかがい知ることができる。これにともなう秘話として、3期生、4期生の入学試験の際、入学適格者150名の中から抽選によって100名を正式に合格させ、抽選にもれた50名余の保護者が熱心に学長にお願いした上でやっと入学を許可されたという面倒な手順をふんだ裏話さえ思い出されるのである。

しかし、正式の学級増が認められたおかげで、それまで大学からの講師でやっとなぎあわされていた教官陣容が一举に立て直され、経済的にも大きな余裕ができてきたことも事実であった。野村、上村、新堂先生ほか数名の教職員が増員され、附中の教育指導の内容も一段と向上したことはいうまでもない。

このような事情のもとに、教育環境は着々と整備され、教育施設や備品の充実が意欲的に計画されるに至ったのだが、それにもまして、生徒たちの生活態度はすばらしいものであった。学習活動はもちろんのこと、生徒会活動、クラブ活動はめざましいもので、全校一丸となって「附中発展」を心に誓いあつたものである。狭い運動場をたがいにゆずりあいながら、クラブの練習に励む生徒の姿はたのもしく、将来の日本を背負って立とうとする若人の意気が満ち溢れていた。完成して間もなかった日生球場のグラウンドで、府下中学校野球大会の優勝戦に、全校生徒が声をからして「白熱の力」を歌って応援し、不運の敗戦に涙を流したのはこの年であった。また、サッカーの試合に、バスケットボール、バレーボールの試合に、「阿倍野が原に地をしめて、こまれる健児の数五百、…」と母校を声援し、ともに感激の涙を流しながら、附中に学び得る喜びをしみじみ味わいあつた。

しかし、当時の附中生の生活力もまことに旺盛なもので、その腕白振りも相当なものであつた。ボロ校舎の床をふみぬき、壁に穴をあけ、二階のひさしから花壇に飛びおりて腰をぬかし、向かいの家の窓ガラスをこわしてどなられ、数えあげてみるとまあいろいろの傑作な武勇伝が思い出される。今にして思えば、何とたくましかつた附中生どもよとあきれはてる次第である。このようなたくましき伝統も何らかの形で現在の附中、附高生に継承され、今日の附中、附高の発展にも寄与しているのではないだろうか。

(5) 鉄筋校舎の建設 新制度の中学校として発足した附中も、ボロ校舎とはいえ、当時としては近代的な立派な校舎をもつたものの、いわば一時しのぎの間に合わせのもので、新しい教育理念の立場から見ると、新教育実践に相応しい新校舎の必要が感じられるようになってきた。当時の社会情勢からして教育施設の充実は思うにまかせず、校舎の建設にしてもせいぜいお粗末な木造校舎がふつうであつたが、本校では新教育の理想的実現のため、また将来の遠大なる構想のためにも、このころとしては不可能に近い近代的鉄筋校舎建設の計画を立てたのである。

しかし、いざ具体的な建築計画を進める段階になると、建設資金の問題はもちろんのこと、建設用地の問題、文部省の認可など、意外に困難が多く、馬場校長、佐野教頭をはじめ、PTA、拡充委員会の方がたのご苦労、ご尽力は大変なものであつた。何度も上京しては陳情し、時には、文部省の廊下で夜遅くまで審議の結果を待ったこともあると聞いている。また、いよいよ天王寺では無理だということで他に用地を求め、大和川付近信太山方面、森の宮付近と、あちらこちらの候補地にも当たりをつけたこともあるようである。しかし、どうしてもこの天王寺の地に、鉄筋校舎を建設するのだという最初からの願いをつらぬき通した結果、ついに至誠天に通じ、文部省に認可を得ることができたのである。昭和29年のことである。

昭和30年、第1期工事竣工。戦後の附属中学校としては初めての鉄筋校舎であった。その後、特別教室の増築、附属高校併設のために、13期にわたる鉄筋増改築工事が続けられて今日に至ったのであるが、その間実に20有余年、まさに大事業であった。中でも私にとって忘れることのできないのは、第10期工事の理科棟の建設である。附高生の物理、化学、生物、地学の学習活動を効果的に指導できるよう、この当時としてはまことに思いきったぜいたくな計画をたてたのであるが、よくもあの時思いきって造っておいたものよと、今でも訪問のたびににつかしい思いがしてならない。

(6) 附高誕生 附中6期までの卒業生は、卒業後それぞれ高等学校へ進学したのであるが、いかに楽しく有意義な中学校生活であったとはいえ、僅か3年間の在学だけで学校に別れをつけて去って行くということは、いかにもさびしいつらいことである。教官の側からいっても、せつかく苦勞して育てあげた可愛い生徒たちを、たった3年で手ばなすということは惜しいことである。何とかもうしばらく高等学校段階まで手もとで教育できないものかと思うのは、自然な人間の気持ちである。しかも、公立高校の入学試験には、中学校から送る一定比率の段階別評価が大きなウェイトをしめるようになり、いかに入試成績が優秀であろうと、内申書の総評がわるいと合格が案じられるといった、附中卒業生にとってはまことに心配な選抜方式がとられるようになったため、附中の上に附属高校をつくれないものだろうかと真剣に検討されるようになった。

当時、学芸大学で附属高校を設置するものはほとんどなく、わずかに東京学芸大学に一つあるのみであった。もし大阪に実現すれば、日本で東西に一つずつということになるわけだが、国立附属学校の設立については、国の文教政策上の方針とか、財政上の問題などがあって容易に承認されそうもなかった。しかし、大学当局の強力な支援と教育熱心な保護者の皆さんによって結成された附高設立協議会のご尽力のおかげで、至難事とされた附高創設が実現することになったのである。

昭和31年4月、幾多の苦難の道を経て、ついにわが附属高等学校天王寺校舎が創立されたのである。しかも、附中とは一つ屋根の下に兄貴分としていつもいっしょだから顔なじみだし、教官も交流できるから6年間続けて指導をうけることができる。中・高6か年の一貫教育というわけだ。これから、附中生はいたずらに高校進学を心配したり、余分な高校入試のための受験準備をしなくてもよいわけで、思う存分のびのびと中学校本来の教育活動を行うことができるようになり、いよいよ附中発展の道が大きく開かれるに至った。その後、附中から附高への連絡進学の道が制度化され、附中生全員が附高へ進学するようになったのであるが、その陰には、田辺、阪田両校長、田中附中、沢田附高両教頭の温かい教育的情熱と、それを理解し強力し支援された数多くの人びとがあったことを忘れてはならないと思う。

附中30周年にあたり、附中誕生のいきさつを記録として止めるために、かつて附中新聞に連載した「附中発展史」ならびに「附中20周年、附高10周年記念誌」の稿を整理し、筆を加えた次第である。

(第六代中学校教頭 現大阪市立中野中学校長)

# 昭和26年の新任教官と研修

福原公雄

私の一生を大きく左右した附中へ赴任した当時のこと、および教頭時代のことをのべて責任を果たしたいと考えています。

私が附中へ赴任したのは、昭和26年4月だが、それまでに大阪市内で、旭三中（旭東中学）と、城東一中（放出中）の2校で、合計3年間の経験があり、とくに城東一中では、3年を担任し、数学だけでも週24時間を持ち、毎日バレーボール部の指導を朝夕にし、何とか一人前になりかかったかなと思っていた。

ところが、赴任して驚いたことには、附中ではまったく新卒扱いでした。担任はもちろんなく、授業も週に12時間をもたせてもらっただけである。

週に4日、それも1日に3時間授業すると、あとは仕事は殆んどなく、バレーボール部も練習量は少なく弱かった。したがって、自分の時間が沢山もてるようになった。しかし暇だったかという、そうでなく、それまで以上に毎日が追われどうしだった。その理由を以下に述べてみよう。

## 1. 研究授業

当時は、研究授業がよくあった。それも、自分の教科のみでなく、すべての教科の研究授業に参加するようになっていた。そして、素晴らしい授業を数多く見せていただいた。

- ごく簡単な指示なのに、生徒達が生き生きと効果的な学習をしていた体育科の森 勝治先生の授業
- 理論のしっかりした理科の佐崎 良雄先生の授業
- 熱心な研究の結果、むずかしい内容をわかりやすく、しかし休みなく次から次へと資料の提示とともに展開された社会科の安井 司先生の授業
- 早いテンポで、ユーモアたっぷりで生徒をひきつけられた社会科の佐野 敏夫先生の授業

など、今でも強く頭にやきつき、現在の仕事に役立っている。

また、その批評会が出る意見は実に厳しいものがあつた。私も、佐崎 良雄先生から「君のあの授業では、生徒はどうなるのだ。」とお叱りをうけたときは、全く参ってしまった。とにかく、専門外の教科に対しても、専門の人の気のつかない、専門の人をうならせるような意見も多く出た。

このことが、直接教生の指導に役立っただけでなく、私自身が数学特有の指導の中に閉じこもることなく、授業そのものの根底にあるものに迫る姿勢をもつようにしむけられ、それが現在堺市で、小学校における算数・幼稚園における自然の研究授業（保育）にのぞむときに、大いに役立っている。

## 2. 附中の先生

実力のある人は、自分の力を宣伝する必要がない。話をするときも、力んで話さなくても、相手を無理に説得しようとしなくても、ごく自然に行動していて、なお相手をひきつ

けるものである。

附中の先生方は、まさにそのような人物の集まりでした。何かというと、実に酒をよく飲み、気楽に雑談する中で、心臓をえぐられるような鋭い話、うならされるような程度の高い話がでて、感心の連続でした。

したがって、うかうかしておれないということで、自分なりの勉強をしたものです。

このような中で、私が附属の生活を続けられたのは、最年少（上野久男先生が35年にこられるまで）だということで、何事も大目にみていただき、暖かく保護していただいたおかげである。

### 3. 研究発表会

当時附中は毎年研究発表会を開き、教育界の先導的役割を果たしていた。テーマは、学校をあげて統一されたもので、全教科・全領域にわたり全教官によりまとめあげていた。私のような新人では、到底ついて行けるものでなく、手とり足とり教えていただきながら通っていたことを憶えている。

当時の先生方は、学校での研究発表のみならず、各教育委員会の主催する研修会や、各学校の研究会の指導講師として、また、新聞や研究誌にも、いろんな意見を発表され、教育界をリードしておられた。

とにかく、実践に裏付けられた理論には、大学の先生方も1目も2目もおいておられたようである。

### 4. 大阪学芸大学数学会

数学の指導という点で、もっとも勉強させていただいたのは、大阪学芸大学数学会（現大阪教育大学数学会）である。この会は、50年の歴史をほこる、日本でも珍しい伝統ある研究会である。

会は、府下の先生方を対象とした年1回の講習会、各分校もちまわりの毎学期1回の研究授業を開催し、普及と研究に動んでいた。

ここでも、天王寺附小の黒松貴代秀先生・斉藤敏彦先生、高鷲小の末吉義一先生、平野附中の生駒稔先生・木村晃子先生、池田附中の藤岡先生など、名人の授業を多く見せていただいた。

また、批評会における先生方の充実した御意見から数多くのものを学んだ。中でも、

- ・数学教育の本質をきびしく説いていただいた上林彌四郎先生
- ・短い言葉で、指導の急所をつかれた黒松貴代秀先生
- ・愛情のこもった毒舌で、すばっと話された末吉義一先生

方には、私の恩師として、今なお尊敬し、感謝している。

このような、立派な方々と席を同じくできたのは、附属中学に御世話になったおかげであり、人間の一生とは、運に大きく左右されるものだ痛感している。

### 5. 行 事

附中は立派な学校であると感心させられたことの一つに、その仕事振りがあつた。

まだ、正式の辞令をもらっていない昭和26年3月31日に、登校しなさいという電話で、学校へ行ってみると、教官会議の最中で、出席しろとのことだった。驚いたのは会議の進行で、先生方の発言に無駄がなく、てきぱきと議事がすすみ、あつという間に、一年間の学校行事が日まで決定してしまつたことである。

そして、行事の多いことにも驚かされた。さらに、この少ない人数の生徒で、これらの体育的行事・文化的行事を、実にあざやかにこなしていたことである。

また、行事のねらいや企画が精練されていたからだろうが、4分の1世紀をへた現在まで続いているものも数多い。

## 6. 附中の生徒

当時は、澤田義一先生も若く、その意気たるや、向うところ敵なしという感じで奮闘しておられた。その影響を受けた生徒諸君も、実に伸び伸びと活躍し、その才能をいろんな方面に伸ばしていた。そして卒業後も思わぬ方向で活躍している生徒も多い。

現在、東京都養育院付属病院の神経科医長をしている東儀英夫君（4期生）も印象に残る生徒の一人である。この君の数学的な才能は抜群だった。何度もその素晴らしいひらめきに驚かされた。したがって、授業に出て行くについては、十分な準備が要求され、また生徒達の発言や解答には細心の注意をはらう必要があった。これらのことが、私が力をつけるために大いに役立ったと、感謝している。

また、京都大教育学部の卒業を目前にし、オペラ歌手に転向し、世界を股にかけて活躍している益子務君（5期生）をはじめ、附中在学時には想像もつかぬ分野での活躍は、教師として中学生をみる目・育てる観点を變更せざるをえないようになった。

以上長々と述べてきたような、多くの理由で、暇を楽しむ余裕などなく、充実した毎日を送ったのが、私が赴任した頃の附中である。それから20年たった昭和46年4月、およそ管理職らしい性格・能力を持たない私が、安井司先生の御栄転のため、年の順ということで、2年5ヶ月間を教頭として過した。

教頭時代にもっとも強く感じたのは、学校運営は良い先生方を集めることが唯一最善の方法だということである。以来私は、附中の教頭の仕事は「人買い」と言っている。良い先生がおられれば、教頭は話を聞いておればすべてうまくいくのである。その例を一つあげてみよう。

附中の先生方の特長の一つは、仕事を信念を持って実行されることである。附中には特色ある行事が多いが、何か行事をするとき、

「それは、何のために実施するのか」

「どのようにすれば、もっとも効果的に、目的を達成できるか」

などを真剣に考え、討議し、結論がでると、精魂を傾けて実行にうつられる。

修学旅行も例外ではなく、毎年そのようにして改善を加えられてきたが、それに飛躍的な発想の転換をもたらしたのが、岡田博先生・中谷宗弘先生・辻退一先生らを中心とした問題提起であった。新しい修学旅行の目的・方法に関して構想をねり、日本各地に問合せ、現地調査を何度も繰返し、その結果、信州の乗鞍山麓の鈴蘭高原に決定した。

そして、24期生から実施された。当時、新しい修学旅行として、毎日新聞の全国版や中学生毎日に取上げられ、テレビでも放映され、高い評価をうけた。その結果、附中形式の修業旅行を真似る学校が増加しつつある。堺でも、私のこの話を聞き、修学旅行で植林をした学校がある。

とにかく、附中の先生方の素晴らしさを示す、一つの例として、歴史に残るだろう。

（第八代中学校教頭 現堺市教育委員会）

## 音楽を通じての生徒とのふれあい

久米 てる子

「あらゆる人々から理解されるすばらしい世界語である音楽は人と人とを近づけることに貢献すべき……」は、私の尊敬する巨匠カザルスの演説の中のことばです。彼は又「若い学生時代に私は野の花から落ちる露のしずくをみて心を打たれました」と言っています。音楽に説明はいりません。全校生が一堂に会して美しい音楽に耳をかたむけ、あるいは歌い、演奏を楽しむ時、たとえ一瞬でも心をつにして感動し合えることができればすばらしいことです。附属在職中いつもこのように考えて過して来ました。学校生活のあらゆる場に音楽が充ち満ちている姿を夢見て参りました。1期生から23期生の生徒たちとのふれ合いを思い起こしますと、実に長いようで夢中に過した年月でした。様々な思い出がよみがえり懐かしさでいっぱいです。はじめて附中に参りました時は若かったせいか中3だった1期生の大きく感じたこと、摂津耶馬溪の遠足で2期生の人たちとS先生も加わってコーラスを楽しんだこと、臨海学会の浜辺の朝礼で全校生が大声で歌った輪唄、7月末から8月始めにかけての暑いさかりに毎年プラスバンドの人たちと共に天王寺公園を音楽堂まで通った講習会、放送クラブと共に企画した校内レコードコンサート、フェスティバルホールでの鑑賞会に出かけたこと、大阪府音楽団やその他有名な音楽家、合奏団を招聘しての校内音楽会、府下音楽会への出演、体育大会でのマーチの練習、音楽会や学芸会のために暗くなるまで猛練習をしたこと、演劇クラブと合同でオペラ「ヘンゼルとグレーテル」の上演に苦心したこと、数えあげれば盡きぬほどです。附中7期生がはじめて拙いながらも全員の作曲集を出したこと、その後各期生ごとの歌を生徒たちの手で作曲したのも有意義でした。その7期生が附高に進み男声合奏団が誕生し、その中のメンバーがクワルテットを編成しました。彼らは受験を目前に控えながら高3の最後まで歌いつづけました。なお卒業後も各大学で指揮にソロにそれぞれ活躍している便りを耳にしたいへん嬉しく思っています。また私は常に生徒たちに感じる心を持ってほしいと希って来ました。まだ設備も十分整わないころ、ハイファイというものが出かけたころ附中11期生たちとベートーベンの田園シンフォニーをききました。きき終ると女性徒から感動の声が洩れました。今のよう立派なステレオの音と比べると及びもつかない音でしたが、それまでにほんとお粗末な機械できいていましたので当時としては最高のものだったのでしょう。しかしたとえ立派な設備でよい音をきいても感じる心がなければ何もなりません。物質的に恵まれずとも豊かな心を持つことがいかに尊いものであるかをつくづく感じさせられました。思い出はつきませんがこの記念すべき日に静かに過去をふり返ってみて私は幸せであったとしみじみ考えます。すぐれた生徒、御父兄、先生方に接して又とない貴重な人生体験を持つことができたことを感謝いたします。附属校を美しい歌のこだまするミュージズの園とし、生徒一人々々が素直な美しい心を持ってほしいという私の夢と希いを新たに、今後益々附属が栄えますことを心から祈ってやみません。

(昭和24年～昭和44年 在職)



## 思い出あれこれ

野村 英太郎

第二次大戦が終わって日本の各方面にアメリカが進出してきた。23年24年ごろ住んでいた岡山県の山奥にもジープが走り、時々アメリカ人の講演があったりした。その話の内容はすっかり忘れてしまったが、そのときそのときに、非常に深い印象を受けはしなかった。小中学校の先生の研究会が宿泊して行なわれ、出席した先生によれば、そういう席上では英語ができるかどうかのものがものすごく影響する。たとえば「領域」ということをスコープという。調べごとをするのにも英語の本を読んでいるという。そのような傾向を、私は物悲しく思った。付中である年度の研究会の折、ショート・テストが問題になった。その頃、大学の図書館にあったアメリカ側が寄贈した多くの図書の中に、書名は忘れたがショート・テストを入門的に扱った本があって、たまたま研究会の前に読んでいたので、その内容を紹介したら、ずいぶん反響があって、研究会のあとで、この本についての質問が殺到し、私は、書名や書籍の番号を板書した。ショート・テストの形式として、たとえばmatchというのがある。A' グループにA、Bという選択肢、B' グループにa、bという選択肢があって、A' のどれとB' のどれとが組み合うことになるかという形式であるが、このときA' B' の選択肢を少なくとも1こだけは数をかえておくのがよい。たとえば

次の左らんと右らんとを適当に結べ

- |       |       |
|-------|-------|
| 1. 1月 | ア. 弥生 |
| 2. 2月 | イ. 睦月 |
| 3. 3月 | ウ. 文月 |
|       | エ. 如月 |

というふうにならば3こなら、右らは4こなり、2こなりにするとよい。

- |       |       |
|-------|-------|
| 1. 1月 | ア. 弥生 |
| 2. 2月 | イ. 睦月 |
| 3. 3月 | ウ. 如月 |

のようにすると、3こともわかっている人と2こしかわかっていない人との区別がつかない。1月=イ 2月=ウ を知っているが3月がどうなのか知らない人も、きっと、弥生というのだろうと想像して3=アと答えるだろうから、正解の数が2こという場合がなくなる。というようなことが、ていねいに書いてあった。

教務の係を何年もやったが、提案して討議して議決して実施する、というようなことをあんまりしないで、係として、このようにしますと、わがままなやりかたをすることが、特に、はじめのころは、多かった。

運動会の際の各クラス座席後方のかざりものがだんだん壮大になってきて、そのための生徒の金銭上、労力上、時間上の負担が大きくなってきたためであろうか、「運動会とはどんなものなのか、何のためにするのか」が教師のあいだで問題になり、それにつづいて学校の行事を総反省して、余分のものは中止し、二つ三つを一つにまとめられるものは一

つにまとめ、また必要なのに行なわれていない行事はあらたにつくり、各行事の目標をはっきりさせようということになって、毎週一項目ごとに検討を重ねていった。いちばんはじめには「体育大会」を手がけ、二年ぐらいかかってやっと一とおり終わった。「遠足」は、近ごろ電車やバスでどこかへ行って、そこで遊んでべんとうを食って、また電車やバスで帰ってくる人が多いが、その名のとおり、遠くまで歩いていくということが第一にあるべきであるということになって「歩くことによって」云々というにしたように思う。各行事に直接関係の深い人たとえば体育大会なら体育科の先生、身体検査なら養護の先生がそれぞれの行事の目標の原案を作って提出し、全体の会議で討議するというやりかたで、愉快に行ったことが多かった。

付中は以前から研究が使命の一つであって、はじめの10年くらいは、例年いろいろのテーマで研究物を作っていた。これは各教科ごとのものでなく全校の先生全員で、たとえば、道徳はどのように扱おうとよいかといった問題である。この研究物は「紀要」と名づけてあった。付高ができたときに、従来B6判であったこの「紀要」をB5判に大きくし、全校全員によるものでない。たとえば個人あるいは2人3人などの協力研究または教科ごとの研究物を発行することにした。これはかならずしも「紀要」のように教育に関していない純粋に学術的なものも含むというもので、「研究集録」と名づけた。その後、「紀要」はあまり発行されていないようである。「集録」の方は年を追ってますます好調なのは、よろこばしい。毎号今でも送っていただいてよろこんでいる。いずれそのうち、たとえば、同和教育はいかにあるべきか、というような問題に全員でとりくまれたら「紀要」もまた発行されることと、ひそかにお待ち申している次第である。

P.T.A.には名簿がある。はじめたて書き文書であった。P.T.A.の係をしたときに、この名簿を横長で横書きにあらためた。この世の中がよこがきが多く用いられるようになったのでそのせいであった。横長にしたのは、一人々々のスペースができるだけ長い方がよかったからである。P.T.A.名簿の終りには、年間行事一覧表がついていて、4月からはじまって3月におわる年間の行事を一枚の紙におさめたものがあるが、はじめ1日から31日まで、毎月のらんが区切ってあったが、月々の同一月が同一の曜日とは限らないので、何月かの何日は何曜日という点に不便があったので、月のらんは、曜日をきめて、月々の一日が何曜日を見て曜日によって毎月の日をそろえた。また父兄に関係のあるものは太字にして、P.T.A.名簿にふさわしいものにした。今は、どうなっているのであろうか。あとで行事一覧表だけは、名簿からはなして印刷・頒布されるようになった。名簿の表紙は年ごとに変えることにして、赤白緑というような3色を順ぐりに廻そうと考え、その後付高ができたので6色のリールを作る案であったが、6年たつと前と同じ紙があるとはかぎらなくて、これは案のみでお流れになった。

付中、付高については、一ぱい思い出がある。日記をろくすっぽつけていないが、当時の文書・写真などを見ていると、あとからあとからいろんなことが思い出される。もう一度からだか元気になって、もう一度当時の生徒諸君とともに附中、附高に通ってみたいと思う心が切である。

附中、附高よ、栄えあれ。

(昭和25年～昭和42年在職 現堺市立堺高等学校)

# 私 の 実 践

——昭和25年から昭和38年まで——

上 村 佐 智 子

私が附属中学校の家庭科の教官として就任したのは、昭和25年5月でした。昭和22年に6・3・3制が施行されてから4年め、学校の施設・設備もまだ不十分で、家庭科室もない状態でした。それから昭和39年5月までの14年間には、教育課程の改訂や、施設・設備の改善、新設など、さまざまなことがありました。そのなかからいくつかの実践をとりあげて述べてみたいと思います。

## 〈施設・設備〉

旧木造校舎の普通教室を改造して家庭科室がつくられたのは昭和25年でした。ろうかを取り入れた30坪の広さで、調理室・被服室兼用の教室です。写真Aはその教室で作品展示会をしている場面です。絶えず写真のような顔をかがけて、清潔、整頓をモットーにしていました。この教室でも男女共修の家庭科学習が行われた。



A. 旧木造校舎の家庭科室

新校舎の家庭科室は、昭和34年5月末にでき上がりました。調理室・被服室兼用ですが、当時としては新しい企画の教室でした。と申しますのは、そのころユニットキッチンが流行し、新設の家庭科室はたいていその方式がとられていました。(しかし、調理室と被服室が兼用であること、



B. 新校舎の家庭科室

また、基礎的な技術を指導する中学校の段階では、写真Bのような並列式調理台を主とし、わずかにユニット式のものを取り入れるほうが、効果的な指導ができると考えたのです。事実、ユニットキッチン方式は指導しにくいということで、一時の流行に終わったようでした。

なお、この教室の設計は私にまかされたわけですが、すみずみにいたるまで、設計どおりに作られたことに対して、関係者にいままなお深く感謝しております。

## 〈男女共修の家庭科学習〉

昭和26年に「職業・家庭科」と改められ、農・工・商・水産・家庭のわくをはずし、4類12項目の仕事に分類されました。その項目のうち、いくつかは、男女共通に学習してもよいとありました。被服と食物の男女共修については、この記念誌の「各教科の研究活動」の部で述べられていますので、ここでは特記したい2、3のことだけにとどめておきます。

まず、被服の学習については、手縫いでぞうきんの製作、ミシン縫いで前かけやパンツの製作をしました。(写真C)

ぞうきんの製作については、附中7期生のY君が、いまだに次のような話を聞かせてくれます。

「運動会の朝、前日の雨で運動場に水たまりができていました。ぼくはバケツとぞうきんを持ってきて、その水を吸い取りました。そのぞうきんはぼくが手縫いで作ったものでした。みんなと楽しく運動会ができるようにという一念で、陸上部員と協力してやりました。」

さらにY君は、「自分たちで作ったぞうきんが学校の備品となり、それが役立っていることがより学校を美しくしようとする心に通じていくのでしょうか。結婚して自分の家庭をもってからは、僕がいろいろな面で創意・工夫をするもので妻は驚いています。」と話してくれました。

家庭科を男女共修で学習するにあたっては、学年当初のPTA総会の際に、私の家庭科教育観を父兄に聞いていただきました。ある父親は、「思いきり反論しようと思っていたが、先生があまりとうとうと話されるので、もう何も言い返せませんでした。」と言われたことを記憶しています。ある年度では、PTAの役員のうち、教育委員の方に集まっていたとき、家庭科の男女共学について了解を得たこともあります。そのときの役員であられた金森アキ様に司会をしていただいたことは、感謝の念と共に、昨日のこのように思い出されます。

前かけの製作では、それぞれの生徒の創意・工夫が生かされ、いくつかのデザインが考案されました。いまでも、D図(男子の考案)のようなものはニュールックの前かけといえるのではないのでしょうか。

パンツの製作では、型紙の製作から手がけたわけですが、できあがったものを着用したある生徒は、次のようなことを話しました。「からだの動かし方は人それぞれに違うから、そのことも計算にいれて型紙を作らなければ、着用した際にきゅうくつな部分ができてしまう。」

この製作者は、いまでもこういうことを考慮して、衣類を購入しているのではないのでしょうか。

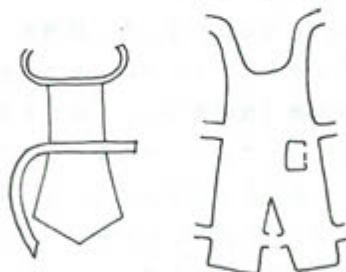
高校の男子の家庭科学習

高校の選択履習教科のなかに、音楽、美術、書道と並んで家庭科もいれられていた時期があります。ところが、昭和33・34年度は、家庭科を選択する男子が多く、女子は家庭科の選択を遠慮してしまいました。写真Eは、家庭科室でのその実習ぶりです。

卒業後、ある男生徒が家庭科室を訪れ、流し台を手でなでながら、「先生、いまの生徒はあとしまつをさぼっていますね。ごはんつぶが残っています。」と話したことを覚えていま



C. 男女共修の家庭科学習



D. 前かけのデザイン



E. 高校の男子の家庭科学習

学習内容は、主として調理実習でした。献立 材料の購入、調理、栄養価計算、費用計算など、グループごとに作業分担がなされ、生き生きとした学習ぶりでした。

現在、家庭科の男女共学の必要性が強調されています。今後、先生方のそれぞれの実践のうえにたつて家庭科の内容がうちたてられ、家庭科教育がなおいっそう振興するよう期待してやみません。

#### 〈自主的・創造的な学習〉

昭和33年の学習指導要領の改訂により、職業・家庭科は技術・家庭科と名称があらためられ、男子向きと女子向きの内容にわけられました。女子向きの内容のうち、第3学年の被服製作のワンピースの製作では、グループ学習によって、活発な学習が展開され、できあがった作品は、生徒それぞれに創意・工夫がなされていました。製作過程の仮縫いの段階では、グループごとにお互いの意見を交換し、デザインの修正がなされたりしました。指導者の私はある時間手もちぶさたになり、その結果、「先生も自分のものを一枚製作されたらどうですか。」と生徒にいわれたことを記憶しています。

#### 〈作品展示会〉

毎年、夏休み中に製作した作品を、二学期のはじめに家庭科室に展示し、作品を公開しました。写真Fのようにお母さんがたにも見ていただき好評を得ていました。



とくに、家庭科を男女共学で学習していたころの作品は多彩で、楽しい展示会風景でした。男子の作品に、ろうけつ染めのパラソルやテーブルセンターが多く、あみもののクッション、ししゅうのそえられた前かけなど、労作ぞろいでした。

家庭科の学習が、家庭にどのように生かされているかも伺えて、心あたまる行事のひとつでした。

#### 〈年中行事を大切に〉

私は家庭科の時間に、必ず季節の変化や年中行事のことなどについて話をしたように記憶しています。とくに、お正月の行事については、第1学年の3学期の最初の時間に、お正月のいわれやおせち料理のことなど、ことごとくお話しました。「お正月行事について」の宿題を出しておき、みんなで話しあいましたので、いまでも、ごまめのおいわれや鏡餅の上のにせる干し柿の数を覚えている人も多いことと思います。

最近、日本の家庭生活に、季節ごとの行事を軽んじる風潮があるようですが、昔からの行事は、科学的な意義もあり、また、生活に新鮮味を与えるとともに、生活にけじめをつけることにもなります。

家庭科の学習は、毎日の生活と密着した面で、もっと大切に取扱いしていかなければならない内容があるように思えてならないのです。

(昭和25年～昭和39年在職 現大阪府教育委員会)

## 「臨海訓練」について

辻 江 正 夫

臨海訓練は、生徒の水泳技能を高め、心身を鍛練すると共に、安全に身を処する能力を養い、集団生活を通じて、自主的生活態度を養い、社会性を身につけることをねらいとして、毎年7月20日前後の4日間、学校行事として行ない、その後、夏期休業ということになっていた、臨海訓練の場所は一定せず各所で実施された、毎年同じ場所で実施すれば、旅館との契約なども、スムーズにでき、翌年の臨海訓練の日取りなども優先的に決められ便利であるが、生徒の経験を少しでも豊かにするという観点から、天之橋立海岸、淡路島の洲本海岸、伊勢二見ヶ浦海岸の3ヶ所を3ヶ年で順に廻るように計画していた。

参加生徒数約400名であった、この約400名の生徒が、できれば一軒の大きな旅館で宿泊できることが望ましいことであるし、海浜は遠浅でよい砂浜があり、陸路でいける交通の便のよい所、ということになると、この3つの条件の整った臨海訓練の場所は、なかなか見つからないものであった。前記の、天之橋立海岸、洲本海岸、二見ヶ浦海岸なども、何か1つぐらい条件が不備で、満足できなかったのも、機会をみて、あちこちと適切な、臨海訓練場所を捜してみたが、諸条件の整った満足のいく適切な場所は、ついにみつかることはできなかったのである。昭和33年頃から、旅館の都合で毎年、洲本海岸で臨海訓練を実施することになったが、船に乗って行く所だけに、台風などで海が荒れることなどの心配があり、いつも不安であったが幸いに、大きな支障もなく毎年所期の目的を達して臨海訓練を終えることができた。

不思議なことに、附属中・高校には、プールが無いので、この三泊四日の臨海訓練が、学校として生徒に水泳指導をする唯一の機会であった。そこで、学校行事として、全校あげて参加し、力を入れて臨海訓練を実施していたものである。

臨海訓練は特に精密な計画を立て、諸準備をじゅうぶん整え、安全対策と安全指導に徹した配慮がなければ、大きな事故を伴うものであるのもので、全教官が緊張して参加し、熱心にご指導して頂いたのも、長年の間、無事故で通すことができ、体育担当者として、何より嬉しく思い、全職員のご協力に感謝している次第である。

臨海訓練中に、各級毎の泳力テストや3軒の遠泳を実施したが、多数の生徒が積極的に参加し、みんなよく頑張り、合格する者が多かった。遠泳の途中で生徒を舟に引きあげなければならぬような事態が起った時には、生徒全員が乗船できるだけの舟を用意するなど、万全の安全対策をたて、3軒の遠泳に臨んだのも、毎年小さい事故もなしに遠泳を続けることができたのである。

臨海訓練の男子生徒の服装は、現在では水泳パンツになっているが、私の勤めていたはじめの頃は「白綿布の六尺ふんどし」であった。この「六尺ふんどし」は安全と指導の立場から、何かにつけて便利であるので、生徒にとっては不満もあったが、臨海訓練には毎年「六尺ふんどし」を着用させていた、その当時、臨海訓練の時期が近づいてくると、生徒の中には「六尺ふんどし」をやめて、かっこのよい水泳パンツにしてほしいという希望

を述べる者も多かったが、私は、いつも安全と指導の立場から「白綿布の六尺ふんどし」の効用を説明していたことを思い出す。今その「白綿布の六尺ふんどし」をしめて浜辺で準備体操をしている当時の写真を見て、その頃をなつかしく思い出しているのである。

午前、午後の水泳訓練で、生徒はかなり疲労していると思われるのに、夕食後の自由時間を利用したり、レクリエーションの時間を使ったりして、学年毎、学級毎で、歌や簡単な劇などし、集団で楽しい時間を過していた、生徒にとっては三泊四日の臨海訓練は厳しい中にも楽しい行事であったと思っている。

数百人の生徒を引率して、臨海行事を行ない、事故なく所期の目的を達することは大変に骨の折れることであったが、全職員のご理解とご協力を得て、この大事な臨海訓練の行事が無事終わったときは、担当教官として喜びも一入のものがあつた。

(昭和27年～昭和38年在職 現大阪市立西天満小学校長)



## 学校行事体育大会

保 田 喬

全人教育を推進する本校にとっては、創立当初から体育行事も重要な教育活動の一つとして実施されてきた。保健体育科の先生を中心に、全先生方が共通理解のもとにそれぞれ任務を分担して指導に運営にあたってこられた。その結果として、生徒にとっては思い出に残る楽しい行事であったと同時に、教育的効果も大いにあげられたものと信じている。

〔春季体育大会〕

私が附中に奉職した昭和28年頃は、春季体育大会は南海高野線沿線にあつた中モズ総合運動場で行われていた。当時、中モズ総合運動場には、国際競技も実施される陸上競技場をはじめ、屋外バスケットボールコート(数面)、バレーボールコート(数面)、テニスコート(数面)、サッカー場等があり、500名に満たない附中生がこの全運動場を借り切って、一日中、大いに球技を中心にスポーツを楽しんだものである。

昭和30年頃、中学生は原則として全員がいずれかの体育クラブに加入しなければならないようになり、春季体育大会も内容的に球技を中心とした学級対抗からクラブ別のクラブ内の試合にかわつた。それは、球技の学級対抗の練習のため、クラブ活動が一時中断され、折角のクラブ活動が停滞することと、平素は簡単に利用できない立派な中モズ運動場をフルに使つてのクラブ活動も大きな意義があるだろうということからであつた。

昭和31年、附属高校が創立、その年から33年までの3ケ年間、高校は春季体育大会というよりも、「体育を楽しむ日」といった程度のことでバレーボール、バスケットボール、ソフトボールの学級対抗試合を校内で実施した。(学校行事として計画的に実施したのではなく、生徒の強い希望で実施されていた)

昭和34年、中高一貫の教育もいよいよ充実し、高校においても各種の行事が計画的に実施されるようになり、春季体育大会も中学校が実施している中モズ総合運動場に仲間入りし、中高合併で盛大に実施されるようになった。(高校は球技大会、中学校はクラブ別試合)

然し、昭和36年、中モズ総合運動場が閉鎖され、広々とした郊外での体育活動ができなくなり、やむを得ず、この年から附中高運動場、大学運動場と体育館を利用しての校内での大会に切りかえられた。

大会が盛大になり、生徒の活動も活ばつになるにつれ、校内の狭い会場では中高合併の大会実施が困難となり、大会の持ち方も再検討の必要ができてきた。

「6ケ年間、同じ校内で競技するよりも、高校の3ケ年間は体育的にもっと大きな経験をさせては」ということになり、昭和40年から「国際大会の競技場で真のスポーツを行なう経験をもたせると同時に、スポーツに親しめる人間を育成し、勢一ぱい体育活動をさせよう」というねらいのもとに、高校の大会を難波の府立体育会館にうつした。

以後、今日まで10年余り、高校は府立体育会館で、また、中学校は校内でますます盛大に実施されている。

#### 〔秋季体育大会〕

昭和29年までの秋季体育大会は、狭い附中の運動場で実施していた。(当時は現在のよう<sup>に</sup>に大学運動場は授業といえども簡単に使用させてもらえなかった)当時の附中の運動場は、現在の校舎の建っているところで、中庭を含めた段から下のところであった。一周150mのトラックがやっととれるかとれないか程度の広さであったが、競走を中心にダンスその他の演技が元気一杯くりひろげられていた。

昭和30年、附中・高の校舎の建築がはじまり、附中運動場での大会実施が不可能となったため、この年から無理を願って大学運動場を使用させてもらうようになった。

昭和31年、附高が創立。秋季体育大会は中高合同で大学運動場で実施した。

昭和33年には高校も1年～3年までがそろい、中学1年生から高校3年生までの6学年が全員勢ぞろいして競走競技を中心に同じような種目内容で大会を実施した。この頃から秋季体育大会を中高合同で実施することに色々と問題がでてきた。

童顔の中学生とひげぶらの高校生では色々と考え方の違うのは当然であろう。高校生は体育祭的に楽しもうと競技する。それに対し、中学生は批判的となった。入場行進をするにもその行進の方法に色々と問題がでた。高校生の中には長距離競走をぶらぶらと団体で走ってやり直しをさせられるといった場面もあった。

こんなことから、昭和37年、中高の体育大会の会場を分離すると同時に、高校では体育大会の内容について検討を加えた。高校自治会も真剣に検討してくれた。その結果、体育大会は学校主催ということで体育の授業で指導される内容にしぼり、レクリエーション種目は自治会が主催する附高祭で適宜実施することになった。中高の会場の分離については、午前中、中学校は附中高運動場及び大学体育館で球技を、高校は大学運動場で陸上競技を実施し、午後は会場を交代してそれぞれ実施した。(開会式、入場行進、閉会式は一つの大



会として合同で実施した。)

昭和40年、附高生としての体育大会のあり方が再検討され、高校の春季体育大会が府立体育会館に移されると同時に、秋季体育大会は国際競技場としての長居陸上競技場に移された。内容も全く陸上競技一本にしばられ、走高跳、走幅跳、三段跳、砲丸投も加えられた。大学運動場で実施していた当時は、応援のためのデコレーションが豪華に作られて、そのためデコレーション作りに精を出して出場する競技の練習に力を入れない生徒も沢山いた。こんなことも長居競技場に移ってからはできなくなり、競技に対する練習にも熱が入り、年を重ねるごとに大会は盛大に、活ばつになっている。

中学校については、昭和40年以降は球技を中止し、一日中、大学運動場で陸上競技を中心に大会がくりひげられている。

(昭和28年～昭和46年在職 現大阪市教育委員会)

## 附高生活の残像

### ——「自治会」・「クラブ」のことなど——

山口 格 郎

◇「自治会」のことなど。

(1) 「生徒会」から「自治会」に。3期生が、当時2年生で、生徒会の執行部であった時、規約改正が重要な公約の一つで、何回となく代表委員会や総会を開いていた。大会の議長だった2期生のT君というのが、早手廻しで、昼からの授業開始の10分前には、会場の大学講堂から、教官室(今の、医務室のところ。学年2クラスの小世帯だったから、それで間に合っていた)に走ってきて、討論が白熱しているから、しばらく授業開始を遅らせて欲しいと連絡に来る。かくして、「生徒会規約」は、現行の「自治会規約」となり、冒頭に、「完全自治を目指し…」と明記された。この語句を巡って、教官の間で、かなりの議論が交された。「完全自治」とあっては、教師の「指導の責任」「監理上の責任」はどうなるのか言々ということである。しかし、最終的に責任を持つのは教師として当然だし、自治を目指すからには、それが「完全」であることを諷いあげるのも自然だということに落着いた。大学紛争と前後して、大阪の公立高校を中心に、民主化をスローガンに、高校紛争が始まった時、自治を尊重する点では、当初から、教師も、生徒も、気持を同じくしていた附高の校風を有難く感じたことであった。

勿論、「自治」とか、「自主性」とかいっても、美辞麗句の問題ではないので、その故の悩みは尽きることがなかったが。

(2) 体育大会で、最初の「盆踊り」。

体育大会が、長居競技場を会場に移る迄は、大学の狭いグラウンドを利用して、その上、プログラムには仮装行列も入っていたりして、お祭りの要素もあった。その故か、たまには、トラック競技で、いい加減に疾走する生徒がいたりして、審判長の山崎教官が走り直しを命じたこともあった。「力一杯走らなくては、レースではない。」山崎さんの注意は、萬事、単純明快であった。その頃の体育祭で、5期の諸君が、浴衣着用、全員による「盆

踊り」を企画した。一度は実施と決ったのだが、中・高合同の教官会議で意見続出し、最終的に中止と決った。係の私から、その旨、生徒委員に伝達した。——中止の理由は、今日では考えられない程の事でしかなかったが、当時の「御時勢、だったのである。おさまらないのは、5期の諸君で、担当教官との前約が無視されての中止は不当であると、どうしても納得しない。緊急に、教官会議が招集されて、改めて、「盆踊り」の実施を決定。当日は、不器っちゃながら、見事な盆踊りが行なわれた。

どうも、あまり格好のよくない思い出を書いた訳だが、私には一つの行事を巡って、生徒も、教官も、真剣に討議したことが懐かしい。その後、相互の関係は、一層スムーズであった。どちらも、よく粘ったなあという思いであった。

### (3) 「オデン屋」開業。

思い出すことが、どれも、自分にとって、名誉ならざる事が多いのはどうした訳か。これもその一つである。文化祭(今の、附高祭)に、前夜祭が加わったのは、7期生の時だと思うが、女生徒が中心で、前夜祭に、オデン屋を開く計画をした。調理室を汚す。器物を壊されては、正規の授業に差支える、非衛生だと、尤もな理由がついて不許可。これも生徒諸君が納得しない。私は、女生徒には、フェアであるのをモットーにしていた筈なのが、この時ばかりは、黄色い声に攻めたてられ、一つずつ、反対の根拠を論破されて、立往生した。遂に、調理室を使わぬという条件で、藤棚の前で、オデン屋開業となった。あの時の、生徒諸君の嬉しそうだった顔。私も一緒にオデンを頑張った筈だが、その味に覚えはない。翌年から、模擬店が盛大になったことといったら。

### ◇ 「クラブ」のことなど。

(1) 「地歴クラブ」瀬戸内海巡検。クラブ活動について、私が名誉なことと思っているのは、ワンダー・フォーゲル部の結成に関係したことだが、それ迄は、地歴部顧問の山崎さんが、「歩くのが好きだろう。」と誘ってくれたので、毎夏、地歴部のお供をして、瀬戸内海の島を廻る幸せを持った。山崎先生についての思い出を二、三。集合時刻になると先生は、「では出発。」と合図される。「まだ数名、遅れているようですが。」と私が言うと、「それ等の諸君は、不参加ということになります。」と、こともなげな返事である。先ず遅刻する者などいかなかった。かつての、海軍士官は違うと感銘したことだった。

初めて、女性の部員が参加したことがあって、島の泊りは、寝具もない雑魚寝もあった頃のことで、お家の人にも不安があり、「女一人が混って、御迷惑ではありませんか。」との問い合せ。先生答えて曰く、「大丈夫です。女性扱いはしませんから。」勿論、彼女は参加した。もう一つ。愛媛の島に泊った時に、泊り先の民家の人々が、〈フカ〉の煮付けを山盛りに出して下さった。流石の附高生諸君も、珍しがるものの、箸の出に元気がない。山崎さんと私だけは、「米の飯なら、大阪に帰っても食える。」といって、二人で、専ら〈フカ〉の御馳走に預ったのであった。

### (2) ワンダー・フォーゲル部。

惜しくも、北大在学時、若くして北アルプスに逝った、10期生、後藤寿晴君が、高2の時に結成したのだが、このクラブとの思い出はつきない。私の附高在職中に部員であった、すべての諸君の、山での顔、笑顔、歩きつ振りを、今も鮮明に憶えている。次の三つは、このクラブの、良き伝統だと思っている。第一は、能力のあるものが、進んで、最も困難な仕事を引き受けるということで、不便も多い、山行生活に笑いが絶えないことである。

リーダーといえども軽装備という訳にはゆかない。この不文律は宜しい。第二に、山行計画にマンネリズムがないということで、小さな山行でもadventureであることが、大切にされている。第三に、山のもつ偉大さが、自ら、人間を鍛えてくれるという有難さである。最後に、今日まで、事故一つなしに、積極的な山行を続けて来た、先輩部員、顧問、現在の顧問、東元先生、部員諸君に心から感謝申し上げる。私も、O. B. の一人として、これからも、少しはお役に立てたらと願っている。

(昭和33年～昭和48年在职 現大谷短期大学)



## 読書感想文コンクール開始のころ

野 井 登

第一回校内読書感想文コンクールの結果が「附高附中新聞」に発表されたのは、昭和38年11月6日発行の第125号である。

高等学校でいえば、第7期生が2年生、中学校でいえば第15期生が3年生のときである。

今この新聞をみると、6ページのうち、1ページをこれにあて、「入選者決定！」の大見出しのもとに、高II五篇、高I五篇、中III、中II、そして中Iはそれぞれ一位から三位までを順位づけて九名の入選者名を掲げている。そして、次の四篇、「戦争と平和を読んで」「虚構の大きさ」「春宵十話」(以上は高校)そして「路傍の石を読んで」(中学校)の全文を掲載している。

そして、その紙面は、さらに読書感想文における高IIと中IIの分布(類別・教科別・書名・著者・人数)ならびに図書館だよりをのせ、私の所感を添えての1ページ編集としている。

この読書感想文は、実は今少し歴史があったのである。すなわち、全国学校図書館協議会と毎日新聞社との共催による「青少年読書感想文企画コンクール」(当時で毎年の応募総数はだいたい70万であった)は、この校内コンクール実施よりも早く、昭和36年の秋から参加を開始していたことの発展といつてよいものであった。

秀作の入選だけをねらったのものではなく、教官はもちろん、生徒諸君の熱心な学習意欲に加えての、図書館充実発展への熱情のほとばしりとして、その読書会の延長発展ともしたくといったものであった。それを、この年からは、附属中・高校全教官の積極的な理解と協力のもと、中Iから高IIまでを対象として、全教科から学習に直結した指定推薦図書が提示され、酷暑の夏休み、生徒諸君はこれにとり組んでもらうことになったのである。



## 『60年代前半の英語教育』

——故・重松卓未教授を偲びつつ——

宮 畑 一 郎

筆者が、当時の校長・校舎主任であった恩師、故・田辺清市教授のご推輓により、附属へ着任したのは、日本全国を揺るがせたあの'60年安保闘争の翌年、即ち、1961年4月のことであった。当時の英語教育学界では、GARIOA留学生たちが持ちかえったL. Bloomfield及びE. Sapirを祖とする構造言語学が隆盛の時期であった。米国の構造言語学は、人類学の研究の中から生まれて来たものであり、その方法論の厳格さが、人々を魅了していた。いいかえれば、「科学的正確さ」が、時代の風潮と一致し、学問に「科学性」を求めていた人々の心に、容易に染み込んでいったようである。Structural Linguists でなければ、人にあらずの観さえあった。なかでも、E. A. Nida が1943年に学位論文としてミシガン大学に提出した*A Synopsis of English Syntax* 中の「Criticism of Former Treatments of English Syntax」で論じられた伝統文法への鋭い批判は、非常に大きな反響を呼んだようである。それまで斯界の板滅とされていたO. Jespersen, H. Sweet, H. Poutsma, E. Kruisinga, G. O. Curme等の学者たちが、軒並みに、バツサリとやられたのであるから、それも当然のことといえるだろう。この本は、永らく、正式に公刊されず、いわば私家版の形で読まれていた。正式にprintされて公刊されたのは、1960年のことであった。ところが、日本では、早くも1957年末に、当時この方面で指導的な活躍をしていた太田朗氏の手で邦訳出版されて、日本人研究者の前に提供されたのであった。思えば、この1957年という年は、今を時めく変形成文法の祖N. Chomskyがその基礎理論をはじめて体系化したあの有名な*Syntactic Structures* が出版された年でもあった。今から回顧してみれば、実に歴史の皮肉を目のあたりに見る思いがするのである。

さて、そのE. A. Nidaの批判であるが、たとえば、O. Jespersenが表面上同じ「所有格+名詞」の構造であるように見えるものでも、*the doctor's arrival* と *the man's house* とでは違いのあることに着目して、有名な「Nexus-substantive」を発想したことに対して、彼は痛烈に批判して、「largely unwarranted since there are no paralleling formal or functional differences」と述べた。この批判のおかげで、「科学的」であることを誇りとする構造言語学の支持者たちはの間で、Pattern-practice などにおいても、一律に、「所有格+名詞」構造は、その中味の如何にかかわらず、同列に扱うということが流行していたようであった。

では、筆者自身はどうであったかといえば、大学時代、主として伝統文法を勉強し、とりわけO. Jespersenの文法理論に深く魅了されていたので、この構造言語学の隆盛の中でも、何かしら物足りないような気持をどうしても拭い去ることができなかつた。確かに、若い学徒として、構造言語学の方法論の厳密さには、魅力があった。特に、音素設定のための手順などは、実に興味をそそられた。また、phonemeとallophoneについての考え方、

distribution の概念、endocentric、exocentric など、筆者もたいへん共鳴を感じたものも多かった。しかし、Syntax の分野に入ると、急に不調和音が大きくなるように思われた。常識的な言語感覚からいって、どうしても釈然としない結論が、「科学的に厳密な」方法論から導き出されて来るのであった。上述の E. A. Nida の O. Jespersen 批判も、正にその好列である。当時の構造主義の立場からは、the doctor's arrival と the man's house の間に、相違は認められなかった。しかし、この二例を同一の構造であると取り扱うのは、どうしても常識が納得しない。少くとも、the doctor's arrival の背後には、(the doctor arrived) が存在することは、何としても否定しがたいことであるからである。この事実を説明しえない文法は、どれ程方法論において「科学的正確さ」を誇っても、少くとも日本の高校生に英語を教えるための文法としては、役立ち得ないと確信した。そこで、筆者は、構造言語学が全盛を誇る時代に、あえて構造言語学を背を向けて、主として O. Jespersen の文法理論を中心にして、文法の授業を実施したのであった。

奇しき縁というのか、筆者が高校の英語を担当するときは、不思議と故・重松卓未先生とペアを組むことが多かった。先生が甲南女子大へ栄転されるまでの3年間、たいてい筆者のコンビの相手は、重松先生であった。先生が「読本」を担当され、筆者が「文法・作文」を担当するというのが常態であった。当時、英語の単位は、「読本」と「文法・作文」の成績を合せて、総合評価して、まとめて「英語」の単位を認定していたので、3月始めには、毎年、重松先生と合議する機会をもった。英語そのものにご造詣が深く、かつ、英語教育の面でも達人の域に達しておられた重松先生の指導のうまさの故もあって、先生の指導された「読本」の方の成績は、ほとんどのものが上出来であったが、一方、筆者は若輩で指導技術も未熟であり、その上、叙想法や shall・will の用法や関係代名詞や準動詞などについては、非常によく出来る生徒も多かったので、大サービス精神を発揮して、かなり入念に高級(?)なことまで取り扱ったりしたこともあって、あまりよい成績でないものが必ず若干名は出て来たものであった。合議の席上、2～3名の生徒について、筆者が強く不合格を主張したら、先生は例の柔和な人なつこい微笑を顔一面に浮かべながら、「宮畑ちゃん、そうかたいことをいうのは、やめんさい。ええがな、ええがな」と軽いなされたものだった。特に、その不合格予定の生徒が美人の女生徒ならば、とりわけ相好をくずしながら、合格にしてやりんさいね。この子はとつてもよい子じゃけんのう」と広島弁で、窘められた。自説を曲げないことを誇りにしている筆者も、重松大人のあの人柄と広島弁でのあのユーモアたっぷりの説得力には、恥ずかしながら、歯が立たなかった。いつも重松大人の軍門に降るのが常であったことを、今も懐かしく思い出すのである。したがって、重松一宮畑コンビのクラスで、不合格になった生徒は稀であったと思うが、それでも尚、若干の不合格者が出ていたとしたならば、それは重松先生の偉大なる慈悲心も及ばなかった超大物であったということになろう。付高時代から、このように天使のような心の持主であった重松先生は、甲南女子大学教授として、専門のアメリカ文学研究のため、米国留学中、神に召されて、シスコの街からそのまゝ天国へと昇天された。正に Whom the gods love die young ということわざを立証するかのようにして……。先生のご冥福を切に祈る次第である。合掌！

さて、重松先生ご栄転後の2年間は、附高8期生を担当し、主として「読本」を中心にした“reading”能力の養成を主眼にした授業に終始した。昔風にいえば、訓読の学とでも

いおうか、とにかく英文の精読に力を注いだものであった。課外に、希望の有志十数名と一緒に読んだ*The Summing Up* の輪読会も懐しき限りである。しかし、筆者の未熟と力量不足のため、十分なことが出来なかったことが、悔まれてならないが、ただ一点、微力ではあったが手抜き授業をやらなかったことだけは、今回顧しても自慢できることではないかと思う次第である。

1966年3月、担任した附高8期生が立派に巣立つのを見届けた上で、筆者は5年間の附属生活にピリオドを打って、大阪教育大学英語英文学教室へ転出した。奇しくも、この年は、E. A. Nida が *A Synopsis of English Syntax* の改訂版を上梓し、その中で、上記のO. Jespersen への批判を、自らの手で全面的に撤回した記念すべき年でもあった。自分の常識を信じ、新しい時流に軽々しくのらなかつた筆者の慎重さが報いられた思いがして、感無量であった。

(昭和36年～昭和41年在職 現大阪教育大学)

## 昭和40年代の理科教育と今後の課題

林 寿 夫

昭和40年代の日本の理科教育界は、1つの大きな変動期であった。教育革新の時代とか教育の爆発の時代とかいわれ、学級定員の引き下げ、高等学校の新增設等量的拡充は急速に進み、文部省においても、第三の教育改革といわれた中教審答申を発表した時代であった。このような昭和40年代の前半を、教育研究学校としての附属に勤務したことは幸せなことであった。ここで、今一度、当時を振り返り、今後の理科教育を志向してみたい。

昭和43年の中学校学習指導要領改訂の前後は、まさに現代化のあらしが、日本の理科教育界を吹きまくっていたといっても過言ではなかろう。昭和37年に出版されたPSSCの日本語版教科書が、その発端であった。このPSSCが、アメリカにおける現代化の動きのきっかけであり、1957年のいわゆるスプートニクショックによって現代化運動に拍車がかかり、その後CBAやCHEMSさらにはBSSCなどのプロジェクトによって、高校理科教育の改革案が示され、教科書の邦訳も40年、41年と相次いで出版されるようになった。

化学科でも、CBAやCHEMSの内容である化学反応と化学結合におけるエネルギー的な扱いや、モデル思考を、高校化学の授業に取り入れるなど化学教育の現代化への試行を行った。このような高校化学の内容を、物質の化学構造とエネルギーを中心概念として組み立て、また、中学校の化学的領域においても、当時の指導内容にメスを入れて精選を行い、物質の粒子概念を育成するカリキュラムを作成、昭和41年の第13回全国中学校理科教育研究大会において発表した。

この大会では、諸外国の理科教育の改革運動について紹介があり、また、この大会のあと全中理の活動の一環として、IPSの実験講習会が全国各地で催された。IPSの委員長であるハーバーシャム教授自ら講師として来日され、実験キットを使って指導された。大阪でもこのセミナーが開かれ、これを契機に大阪を中心とした近畿の先生方によって、IPS研究会が発足し、伝達講習会をもつなど活発な動きがみられた。IPSのフィロソフィーである探究の科学は、出版物の発行のほかIPSの天秤などの器具が市販されるに

及んで、これまでの高校理科の現代化への動きは、非常な勢いで中学校理科のほうへも広まった。当時、生活単元学習から系統学習へ改訂された指導要領が、内容が多すぎて羅列的であり、基本概念が明確でないとの批判が高まっていた。このような状況のなかで、物質概念を基本概念として明確におさえているIPS理科に対する評価は高く、その後の日本の理科教育を変革させる原動力となった。それは43年の中学校学習指導要領の改訂に表われているといえよう。一方、昭和38年に初版の出たブルーナーの「教育の過程」の邦訳は、この頃、非常な話題をよび、教育の現代化なかでも算数、数学と理科教育の現代化の動きに拍車がかかったものである。

これら、国内外のプロゼクトの研究は、かねてから中・高一貫教育を目標として研究を進めてきた私たちにとって大きな参考となり、化学領域についての中高六か年を通じたカリキュラムの改訂の資料として活用できた。改訂したカリキュラムによる教育実践の中間報告を、昭和42年の研究発表会において行なった。この発表会では、中学校、高等学校を通じた「物質の化学構造の指導について」を研究主題として、理科教育現代化の問題点を探った。時代の背景は前述のような状況であったためか、府下のみならず広範囲の地域から多数の先生方が参会いただいた。なお、その後の研究も含めて、中学校における実践を研究集録第11集、第12集に報告した。

昭和43年6月6日には、教育課程審議会が中学校の教育課程の改善について、文部大臣に答申し、44年4月14日に文部省は、中学校学習指導要領の改正を告示している。この改訂指導要領の化学領域の内容については、我々が試行していたカリキュラムと大筋において変わりなく、先導的試行であったと意を強くし、45年の移行期を迎えた。そして46年以降、府教育委員会に転出し、科学教育の振興の必要性和理科教育のむつかしさをあらためて認識し、小・中・高校の理科教育の方向を模索している次第である。

現代化への改革運動のなかで、見逃すことのできない特徴がある。それは、PSSCをはじめとする諸研究は、第一線に活躍している科学者や現場の教師によるプロゼクトチームによって行われたことであり、さらに、教育学者や心理学者、医学者などもメンバーの一員であることである。大阪においても、自然科学、社会科学、人文科学の各領域の大学教官や小・中・高校の先生による教育改革会議が昭和40年に結成されたり、文部省科学研究費の中に、特定研究の部門が設けられ、専門を異にする学者や教師によって科学教育を研究するグループが全国に多数できた。このような多方面の専門家による研究に意味を感じ、私たちも大学の理学・心理学者と小・中学校教師による理科教育現代化研究会を結成して、発達心理学を背景にした「発達段階に応じた科学教育」の研究を進めている。このような発達段階をテーマに設定したのは、従来の理科教育の改訂並びに現代化運動にみられる改革が、ほとんどが上から下への改革であるという反省からである。

BSCSやナフィールド計画では、市民教育を目標としているものの、PSSCやCBAなどほとんどのものは上から下への改革である。よき科学者を育てる温床としての高校をまず改革し、その基礎として中学校が考えられた。日本の場合も同じく、高度な科学、技術に対応し、より発展させようとする社会的要請から改革が進められてきたと思われる。しかし、その後の社会の変化と、改訂指導要領による理科指導のなかから、児童、生徒の実態に対応する教育内容の必要性が叫ばれてきた。そして、53年を目途として進められている教育課程の改善は、まさしくこのような問題点の改善でなければならない。



現行の指導要領に示されている内容は、大英断をもって精選しなければならないといわれ、高校教育の普及から国民的教養としての科学教育ということが強調されている。前回の改訂においても、精選が大きな課題であったが十分ではなかった。今回も、従来と同じ観点に立つならば同じ轍を踏むことになる。発想をかえて、子どもの立場から精選を進めなければ実が得られない。人間尊重という最高最大の命題から、今後の理科教育を検討するとき、発達段階に即応した内容であり、人間を含めた自然の確立を図る総合科学的なアプローチが柱にならなければならない。また、実験・観察も、それによって生命の尊厳さや自然への畏敬の念を高め、深めるために有効に働くような指導となるよう工夫しなければならないであろう。さらには、分化した科学をそのまま学校教育に移行するのではなく、児童、生徒の身近に存在する素材をもとにして、探究していけるような楽しい理科授業を創造していくことも、理科教育関係者に与えられた大きな課題であると考え。

(昭和39～昭和46年在職現大阪府教育委員会)

## 在職中の思い出

芳賀和夫

附属在職中に、附中高の20周年・10周年を迎えたのが、つい先日のような気がするといふのに、それぞれ、30周年・20周年の行事の為の原稿依頼を受けた時には、時の流れの早さとともに、たゞ時に流されていた小生のふがいなさを痛切に感じた。それにも増して、年頭に届けられた青松同窓会の名簿のページを繰る程に、若々しいとは云うものの可成の重みをもった伝統が着実に築かれつつあることを知り、小生の一時代をすごした。いわば第2の母校、の天王寺中高の発展を心からうれしく感じた。

ふり返ってみると、小生の附属在職10年の間に、為し得た仕事は、とり上げるべきものが全くなく、教官として勤務しながら、逆に学んだことのみ思い出されるばかりである。附属在職中の我が師は、云うまでもなく、周囲の諸先生方であり、そして、つぎつぎと巣立って行った生徒達であった。

教科として担当した理科・生物に於いては、極めて優秀な指導者であると同時に、御自身、軟体動物の分類学の分野で海外にも名を知られたすぐれた研究者である浜谷巖氏に頼り切って寄り掛かり、たゞたゞ氏の足手纏いに終始したことがはずかしく反省されるとともに、氏の御指導に対して改めて深謝する次第である。

校務分掌の上では、数年にわたって、図書部の一員として、図書館の運営および放送・映写の係を続けたものの、この分野でも、全くの微力故、仕事らしい仕事はなし得なかった。たゞわずかに「図書館ガイド」の創刊などがなつかしく思い出されるが、これは司書の安陪弘子さんの努力によるものである。

校内放送設備に関しては、関係の諸先生方とともに、その充実について考えたことなどが思い出されるので、「あゆみ」に記録する価値のあるものかどうかは別として、その記録をたどってみることにする。

小生の赴任当時は、校舎は附高の第4期工事として、現在の東館の約半が工事中であったが、校舎の放送設備は、他の同列校に較べてみて、いささか劣っていると云わざるを得

ない状態であった。これには2つの理由が考えられた。その1つは、毎年のようにすこしずつ建増されてきた校舎に、中・高が同居していたことである。この為、毎年のように、教室のスピーカー配線が組みかえられ、それに伴って、主放送機の選択回路にも手が増えられてきた。幸か不幸か、生徒の中には電子工学に強いものが多く、多少の機器のトラブルは自分達で修理し、あるいは、手製のプリアンプや選択スイッチ類を組み立てて急場をしのぐことが普通のこととして行われていた。北館1階の放送室（現自治会室）には、その機器のことに精通した生徒達がたむろしていたものである。もう1つの理由は、教育の場としての放送設備の必要性があまりなかったことである。放送番組を生のみ、教室に流すことよりも、それを先ず教師が消化し、必要な場合には録音テープを駆使することによって、放送機—スピーカーという設備の不備が十分にカバーされたし、伝達や呼び出しなども、直接、教室に出かけて行ったり、身近かの生徒を伝令にする方が手っとり早く、また確実であるといった規模の学校であった。

しかし、次第に教室数もふえ、また、生徒数もふえるにつれて、校内放送設備の不備は時々、問題とされるようになった。例えば、放送局員のメンバーがかわるごとに、応急処置的放送機の使い方がわからなくなったり、各教室の、アッテネーター付で緊急回線を含む筈のスピーカー配線が、直結されたままになったり、ひきちぎられっ放しだったり、また、諸行事に際しての少ない機器の無理な使用がた、ってトラブルが絶えない状態になったりした。特に、当時の「能研テスト」や各種の模試に際して、放送による英語のヒアリングなどが導入された際にも、比較的音声の良い教室を臨時に使用する必要に迫られたりもした。

昭和43年になって、附高の第7期工事として、環状線側に4階建の新校舎が建築されることになった時、視聴覚教育の上で重要ないくつかの特別教室が作られることになった。その1つは3階につくられた教育分析の為の特別教室で、I T Vを備え、そこで行なわれる授業の様子は小講堂でも視聴可能という立派なもので、これに関しては、担当された桜井寛教官がくわしく記録されること、思う。また、一方で、新校舎2階の角コマを使って放送室が設計され、そこに、新しい3チャンネルの放送機を入れるとともに、校内放送の設備を一新することになった。この時の基本的な考え方はつぎのように要約される。

1. 放送室内には、機材庫、資料室、スタジオ、放送機室の4部分を必要とすること。
2. 放送室は遮音効果を良くするとともに換気に気をつける。
3. 校内放送網は3チャンネルにわけること。ただし、(1)高等学校各教室、(2)中学校各教室、(3)共通部分（廊下・校庭等）とする。
4. 放送室内に主放送機を置くとともに、リモートコントロール装置を、中・高の各教官室に置き、そこからの放送を優先にすること。
5. 将来のテレビ放送網も考慮すること。
6. 単独で使うことの多い集会用の設備は独立させること。
7. 上記特別室のV T Rとの連けいの回路を設けること

などである。くわしいダイアグラムなどは手もとに資料がないので書くことができないが、ほぼ希望通りの線で設備されたことは誠によろこばしい限りであった。

この新しい設備の運用に当っては、特に、つぎのことについて留意して、生徒を指導することにした。ア、放送機の本体の回路には一切手を加えないこと。故障の際には自分

達で修理することなく、教官にすぐ連絡の上、業者にまかせること、イ、放送機の正しい使用法を身につけ、また、その良い活用をはかること、ウ、放送室はその構造上、<sup>2</sup>密室になるので、まちがいのおこらぬよう互に注意すること。エ、教官が使用する際には、邪魔にならぬようにするとともに、すゝんで協力すること、などで、この為、毎年、高校の放送局員や、中学校の放送委員を対象に、ハード・ソフト両面の講習会をおこなったことなどがなつかしく思い出される。思い出といえば、集会用のアンプが購入されるまでの数年は、小生の手製の6CA7ppがその役を果たしていたが、素人細工の悲しさで、大事なときに接触不良をおこしたりして冷汗ものであった。

放送局員から記念にいただいたドキュメンタリー作品「万博」のテープは今でも大切に保存してある。このような作品の製作という面でも附中高生の今後に大いに期待したい。

放送教育の面でも附中高の一層の発展を願って、思い出の筆をおくことにする。

(昭和38年～昭和41年在職 現筑波大学)

## おわりに

附属中学校創立30周年、附属高等学校創立20周年を迎えるにあたって、われわれは過去の附中附高の歩んできた道を回顧し、先輩の築き上げた基礎の上に立って、将来に向かっての展望をもって、日々の教育活動・研究活動を充実させていかなければならない。

そこで、昭和22年の附中創設当時から現在までに、5年以上本校教育のために尽力してくださった先輩諸氏にお願いして、それぞれの方々の在職当時の教育活動・研究活動、さらには日々の生徒とのふれあいの中での思い出等をふり返って執筆していただいた。

昨年12月末に原稿を依頼し、新年早々に原稿を出してくださるようお願いしたことなど、担当者の不手際で、十分な時間的余裕を与えずに、お忙しい先輩諸氏にご迷惑をおかけしたことをここに詫言しなければならぬ。

お寄せいただいた原稿を読めばわかることであるが、20年、30年の伝統が、ある面では、今も脈々と受けつがれているし、またある面ではますます充実しているものもあろう。けれども、創立当時の教官・生徒の意図が十分に受けつがれず、次第に忘れ去られていたものもあるかも知れない。時代が変わり、社会的要求も変わったから、教育内容についても、多少の変化はあろうが、今後、われわれの進むべき道を考える上で、よりどころとするべきたいせつなものを与えていただけたと信ずる。

なお、20年、30年近く以前のことをふり返って原稿を執筆いただいたので、個々の細かい記事内容については、年度や順序などで多少の記憶違いがあるかも知れない。さきにも述べたように、たいへん急いで執筆していただいたため、十分調査吟味していただく余裕がなかったことにもよると思う。担当者の気づいた点については訂正させていただいたが、もし間違いを発見され、はっきりとした記録など残っていたら、ご連絡いただきたい。

最後に、「回顧と展望」という主題であるにもかかわらず、「回顧」だけしかないではないか。「展望」はないのか、とお叱りを受けそうであるが、「展望」は、この「回顧」の上になつて、全員で、今後われわれの進むべき道を話しあい、見いだしていくべきではないかと考えて、省かせていただいた。

上野久男  
武田和生

## 編集後記

◆いま本校には、中学に第30期生、高校に第20期生が在学しています。1学年は中学・高校とも4学級編成で、中・高あわせて24学級、およそ1,000余名の生徒と80有余の教職員とがこのキャンパスで学校生活を営んでいます。戦後まもなくの時に1学年3学級のわずかな生徒と、それを押し包む極く少数の、指を折って数えることのできるほどのわずかな教職員とで、その第1歩を踏み出したのでした。生徒と教職員との間の基本的な姿勢は、その第1歩と現在とで少しも変わっていませんが、学校を取り巻く教育環境は大きく変わりました。中学から高校に進学する生徒は、この大阪でも9割をはるかに越えて、高校は実質的に国民教育の場となっており、そしてまた10人のうち4人は大学に進学するという状況が生まれています。一見、教育の文運まことに盛んなように見えながら、しかし、なんのために、なにを、どのように学ぶのかという教育課程のことについても、あるいはまた過去30年間にわたって守りつづけられてきた6・3・3制を軸とする学校体系についても、学校の内と外から、深刻な見直しを求められてきているというのが今日という時点です。学校という場は、揺れています。

◆学校とは、社会の内側にありながら、しかも同時にそれを乗り越えてゆくことを自らの存在理由として目指しています。戦後30年を経過し、社会の内包する諸矛盾をそのままに承けて、学校という場がいま抱え込んでいる問題は、一通りのものでなく、いたって嚴重です。そのような時に、われわれは創立20・30周年の時を契機として、過去に対する自己点検の上に立ちつつ、あるべき将来を模索するために「自画自讃に陥ることのないよう戒めるとともに、また、自らを貶しめることなく、つとめて正確にあるがままの生の資料に基づきながら客観的に記述する」(内部資料No.16より)ことを試みました。教職員の全員が散逸している資料の収集、整理、摘録に力を傾けて当たってきましたけれども、編集を終えたいま、ねらいはともかくとして、日暮れて途遠しの感がいかにも切実というほかありません。将来に向けての模索については言うまでもなく、自己点検すらようやくその緒に就いたばかりというのが率直なところではあります。この冊子に目を触れられたすべての方々に対し批判と叱正、指摘と補正、示唆と助言をたまわるよう衷心よりお願いするしだいです。まだ若い学校の、これから創られようとする伝統が健康なものとなるために。

◆終わりに、この冊子の刊行にあたって、ご寄稿をたまわりました方々、貴重な資料を提供して下さいました方々、執筆上のデテールについてもろもろの助言を与えて下さった方々、企画から発行にいたるまでの労を、煩を厭わず取って下さった事務の方々、面倒な原稿を引き受けて下さった印刷関係の方々に対し、厚く感謝の意を表します。

昭和51年3月

編集委員	大仲 政憲	千種 基弘
	辻 退一	中田 孟邦
	峰地右太郎	矢田 節彦

研究集録 第18集

昭和51年3月20日印刷 (非売品)  
昭和51年3月31日発行

大阪教育大学教育学部附属天王寺中学校  
編集発行者 大阪教育大学教育学部附属高等学校天王寺校舎  
代表者 齊 藤 洋  
大阪市天王寺区南河堀町43  
印刷所 榊 阪 堺 出 版 印 刷